

国立国語研究所学術情報リポジトリ

戦後の国民各層の文字生活

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001240

国立国語研究所報告 29

戦後の国民各層の文字生活

永 野 賢
高 橋 太 郎
渡 辺 友 左

国立国語研究所

1966

国立国語研究所報告 29

戦後の国民各層の
文字生活

永 野 賢
高 橋 太 郎
渡 辺 友 左

国立国語研究所

1966

刊 行 の こ と ば

戦後実施された表記法上の国語政策によって、国民の実生活の上にもいろいろの影響が及んでいる。ただし、年齢、職業、学歴等によって、その国語政策の受け取り方、受け入れ方が違っているのではないかと考えられる。そこで、国民の各層について、どのような文字表記を実際に行なっているのか、どういう意識・意見を持っているのかを明らかにしたいと考えた。その結果、昭和37年に新潟県長岡市の市民の各層について「国民各層の言語生活の実態調査」を実施した。また、別に、これから社会の中堅として活躍するはずの“大学生”の意識・意見の調査を、長岡市に在住するものに限らず、広く全国の大学生について行なった。この“大学生”に関する調査結果は、「年報14」(昭和38年刊)に報告してある。

長岡市における調査の企画実施の中心になったのは第二研究部言語効果研究室であるが、長岡市の調査後、さらに別の地点で調査する必要を感じ、翌38年度に、上記の言語効果研究室は、文字表記に関することを中心に、さらに継続して調査を行なった。この37年度・38年度の調査の結果をまとめたのが本書である。

この報告書の作製は、言語効果研究室長の永野賢、室員の高橋太郎、渡辺友左が担当した。なお、資料の集計整理については、研究補助員宮地美保子、屋久茂子が当たった。

この調査研究を進めるにあたって、各方面のご協力とご援助とをいただいた。37年度の長岡市における調査の実施には、当時の同市教育長太刀川浩一郎氏、同市教育委員会指導主事田中久直氏、同教育長室長五十嵐恭夫氏ほか、市教育委員会や市民課の方がたのご厚意のもとに、同市立千手小・神田小・東中・北中・東北中・南中・宮内中・栖吉中、県立長岡二高、新潟大学長岡分校付属小・中の各学校、および北越製紙・津上製作所の各会社のご協力を得た。38年度の東京を中心とした調査には、渋谷区立神宮前小・武蔵野市立一中の各学校、伊藤忠商事・岡三証券・帝人の各会社のご協力を得た。また、戦後の国語政策の普及につれて個人の文字使用に変化が見られるのではないかと考え、そのことを探る資料を求めていたところ、たまたま佐藤滋氏のお口添えて八百板正氏から戦後十数年にわたるメモや草稿を拝借することができた。なお、国定読本の閲覧について、東書文庫および国立教育研究所付属教育図書館の方がたのお世話になった。以上、とくに記して、心から厚くお礼申し上げたい。

昭和41年 3 月

国立国語研究所長 岩 淵 悦 太 郎

目 次

刊行のことは

調査研究の概要(永野 賢)

I 目 的	1
II 課 題	2
III 計画と実施要領	5
A 国民各層の言語生活の実態調査	5
1. 計画	5
2. 調査組織と担当者	6
3. 地点の選定	6
4. 調査の実施概要	7
(1) 面接調査	7
(a) 基礎抽出調査	7
(b) 面接調査(本調査)	7
(2) 集合調査	7
(a) 母親調査	7
(b) 生徒調査	8
(3) 会社員調査	8
(4) 言語環境調査	8
B 戦後の国語施策が国民の文字生活に及ぼした影響とその経路に 関する調査研究	9
1. 計画	9
(1) 書かせた資料による調査	9
(2) 文字意識の調査	9
(3) 書かれた資料による調査	9
2. 担当者	10
3. 実施概要	10
(1) 母親調査	10
(2) 会社員調査	10

(3) 既成資料調査	11
(a) 新聞投書	11
(b) 個人の文書	11
Ⅳ 被調査者	11
Ⅴ 調査票・調査資料付調査法	16
A 基礎抽出調査	16
B 面接調査	16
C 母親調査(長岡)	17
D 母親調査(東京)	18
E 会社員調査(長岡)	19
F 会社員調査(東京)	19
G 既成資料調査	19
(調査票)	
• 基礎抽出調査	20
• 面接調査	21
• 母親調査(長岡)	33
• 母親調査(東京)	38
• 会社員調査(長岡)	43
• 会社員調査(東京)	45

調査研究の成果

Ⅰ 戦後の国語施策についての知識・関心・意見(永野 賢)

A 当用漢字についての知識	47
1. 新字体になったことを知っているか	47
2. 漢字制限について知っているか	48
3. 「当用漢字」という名称を知っているか	49
B 現代かなづかいについての知識	49
1. 現代かなづかいになったことを知っているか	49
2. 「歴史的かなづかい」「旧かなづかい」の名称を知っているか	50
3. 「現代かなづかい」「新かなづかい」の名称を知っているか	50
C 子どもとの食いちがいに対する意識と処理法	51
1. 母親の場合	51

(1) 長岡の母親の場合	51
(2) 東京の母親の場合	54
2. 会社員の場合	58
D 国語施策についての意見	60
1. 一般市民の意見	60
2. 母親の意見	61
3. 会社員の意見	62
E 名づけ漢字についての知識と意見	63
1. 子どもの名づけに使える漢字が制限されていることを知っているか	63
2. 名づけ漢字の制限についての意見	64
F 国語施策についての知識を得た経路	65
1. 漢字制限・かなづかい改定について	65
2. 人名漢字の制限について	67
G まとめ	68
Ⅱ 新旧の実態, およびその傾向と年齢・職業・学歴・性別 などとの関係	
A 長岡市における面接調査の場合(渡辺友左)	
1. 調査票	70
2. 調査結果の分析	72
(1) 年齢・学歴・男女の層の違いからみた音訓表・新字体・新かなづかいへの順応度	72
(2) 読み書く生活の違いからみた, 新字体・新かなづかいへの順応度	77
(3) 職業との関係	79
(4) 問題ごとの分析表	83
(a) 当用漢字音訓表に関する5問の場合	83
(b) 当用漢字字体表に関する18問の場合	86
(c) 現代かなづかいに関する13問の場合	90
(d) まぜ書き・かな書き等に関する4問の場合	92
B 母親の文字の使いかた(永野 賢)	
1. 新字体を使うか, 旧字体を使うか	95
(1) 新字体・旧字体の定義	95
(2) 新字体の類型	97

(3) 母親調査における字形の選択の実態	97
(a) 類型別にみた傾向	97
(b) 層別にみた傾向	105
2. 制限漢字と制限音訓の使用はどうか	106
(1) 問題に選んだ漢字と音訓の性質	106
(2) かなで書くか、漢字で書くか	107
(3) 層別にみた傾向	108
3. 書き取りにおける表記の実態	109
(1) 問題文と問題項目	109
(a) 長岡における問題文	109
(b) 東京における問題文	110
(2) 項目別にみた傾向	110
(3) 層別にみた傾向	113
4. 反省による選択と実際に書くこととの一致度	115
(1) 母親調査(長岡)の場合	115
(2) 母親調査(東京)の場合	115
(3) 面接調査の場合	117
5. 国定読本の字体と母親の文字の使いかたとの対応	117
(1) 奇妙な事実	117
(2) 年齢層の分け直し	118
(3) 問題の字	118
(4) 対 応	119
6. まとめ	121
(付録1) 国定読本の期別による字体の異同一覧	122
(付録2) たて書きとよこ書きとどちらが書きやすいか	124
C 会社員の文字の使いかた(永野 賢)	
1. 新字体を使うか、旧字体を使うか	126
(1) 類型別にみた傾向	126
(2) 層別にみた傾向	136
2. 制限漢字と制限音訓の使用はどうか	137
(1) かなで書くか、漢字で書くか	137
(2) 層別にみた傾向	140

3. まとめ	141
（付録） 簡略俗体の使用度	142
D 新聞への投書原稿の実態(高橋太郎)	
1. はじめに	143
2. 新聞投書のかなづかい	144
(1) 年齢とかなづかい	148
(2) 旧かな率の高いものと低いもの	149
(a) ハ行——ワ行	149
(b) ゐ・ゑ・を	155
(c) ち・づ	156
(d) 長音	157
(e) 字音語	158
(f) ○か月	158
(3) 新聞投書のかなづかい(まとめ)	159
3. 新聞投書の漢字字体	159
(1) 年齢と字体	160
(2) 旧字体率の高い文字と低い文字	162
(a) 新字体の類型と新旧の傾向	162
(b) 旧略字体の有無と新旧の傾向	163
(3) 旧略字体の有無と年代別旧字体率	166
(4) 新聞投書の字体(まとめ)	167
Ⅲ 個人の文字使用の変化の実態とその条件	
A Y氏の場合(渡辺友左)	
1. Y氏の略歴	169
2. Y氏の資料	169
3. 漢字の字体	171
(1) 使用された字体が全部新字体であったもの	174
(2) 使用された字体が全部旧字体であったもの	176
(3) 新字体・旧字体の画数の比較	178
(4) 新旧二つの字体が使用されたもの	180
(5) いわゆる簡略俗体とあわせて使用されたもの	182
(6) まとめ	182

4. かなづかい	183
(1) 「現代かなづかい」の細則によって整理した場合	183
(2) まとめ	193
(3) 動詞を語ごと・活用形ごとに整理した場合	194
B S氏の場合(高橋太郎)	
1. S氏の経歴と資料について	196
2. S氏のかなづかいの変化	196
(1) いつごろ、どのような契機で変わったか	196
(2) 何が変わりやすく、何が変わりにくかったか	199
(a) 歴史的かなづかいハ行→現代かなづかいワ行の場合	200
(b) 歴史的かなづかいキ・エ・ヲ→現代かなづかいイ・エ・オ	203
(c) 歴史的かなづかいヂ・ヅ→現代かなづかいジ・ズ	204
(d) 活用語尾の長音	206
(e) 副詞「こう」「そう」と、その派生語	207
(f) 伝聞と様態の「～そう」	208
(g) 漢字音	210
(3) S氏のかなづかいの変化のまとめ	211
3. S氏の漢字字体	212
(1) 字体はあまり変わらなかった	212
(2) S氏が新字体を使ったのは、どんな種類の字か	214
(3) S氏の字体のまとめ	216
(付録) 昭和21年の旧制高校生の感想文集から	217

要 約(永野・高橋・渡辺)

I どういう事項が普及しやすいか	220
1. 漢字制限について	220
2. 人名漢字について	220
3. 音訓制限について	220
4. 字体について	221
5. かなづかいについて	222
6. 送りがなについて	222
II どういう人に普及しやすいか	222
1. 年齢に関して	222

2. 長子の学年に関して	223
3. 学歴に関して	223
4. 職業に関して	224
5. 男女差に関して	224
Ⅲ どういう経路で普及しやすいか.....	224
1. 学校教育を通して	224
2. ジャーナリズムをめぐって	225
3. 仕事をめぐって	225
4. 子どもの教育をめぐって	225
5. 一般社会生活において	226
6. 読む場合と書く場合のちがい	226

調査研究の概要（永 野）

I 目 的

戦後、憲法の口語化をはじめとし、公文書の用語・文体の平易化、当用漢字・現代かなづかいの制定公布を主軸とする一連の国語施策によって、用字・用語・文体など、いろいろな面での改革が行なわれた。官公庁の公文書はもちろん、検定教科書や民間の新聞・雑誌の多くも、この施策の趣旨に沿ってきた。そのため、戦前と戦後とで、表記・用語・文体などの点において、かなりに食いちがう面が生じた。

ところで、国民の文字生活（文字を使って社会生活・人間生活を営むこと）について考えてみると、社会集団全体としてどんな文字がどのように使われるかという観点から見ることでもできるし、集団に属するひとりひとりがどんな文字をどのように使うかという観点から見ることでもできる。国語に関する施策は国民全般を対象とするものではあるが、国民の受け取り方は個人によってちがうのであり、すべての人の文字生活を画一にすることはできない。たとえば、日常生活における読み書きの量と質のちがいということもあるし、また、年齢・学歴・職業・性別・性格など、さまざまな要因がからみ合い、ひとりひとりの文字生活における国語施策の影響は、ひとりひとりちがうといってもよいのである。

いま、戦前の教育を受けた者と戦後の教育を受けた者とを比べてみよう。文字の習得は、音声言語と異なり、一般に学校教育を通じてなされる。その基礎の上に、社会生活でさらに広い文字習得が行なわれるわけであるが、戦前の教育を受けた者は戦後の変革に直面して、いろいろと戸まどいを覚えることがあるし、戦後の教育を受けた者も、実社会における旧時代の文字・表記の残存を目にして、やはり戸まどいを覚えることがある。すなわち、戦後の国語施策は、戦前の教育を受けてかなりの期間社会生活をしてきた者に対しても、戦後の新しい教育を受けた者に対しても、日常の文字生活の上に、大小さまざまな問題を投げかけたと認められるのである。

そのような実態、つまり、国語改革の行なわれた戦後社会における国民の文字生活の実態を調査することは、改革の進行の実情を認識するためにも、今後の施策の立案や普及を計るためにも、多くの示唆を与えてくれるであろう。

いったい、国民は文字生活の上で、戦後の国語施策に、どのような問題を持ち、どのような意識・関心に向け、どのように対処してきたか、また対処しているか。これらのことにつき、国民を年齢・職業・学歴・性別などに応じて分けたいろいろの層と、何人かの個人の事例とについて、その実態を明らかにするのが、ここにまとめて報告しようとする調査研究の目的である。

国民の各層と個人との両方の観点から調査を進めたのは、国語施策のうち、どういうものが普及しやすく、どういうものが普及しにくい、また、どういう人に普及しやすく、どういう人に普及しにくい、さらに、どんな条件で、どんな経路で普及していくか、といった問題点を追究することを最終的なねらいとしたからである。

戦後の国語施策の結果生じた事態を、混乱と見る人もあり、改善・民主化のための過渡期的現象と見る人もあり、また、まったく無関心な人もある。いずれにせよ、意見を述べる人はいろいろ述べるが、国民の文字生活の実態についての知識は、必ずしも充分とはいえないようである。われわれに課せられた任務は、戦後の国民各層の文字言語生活の実態を国語施策との関連において調査することである。

ただ、ここで一言しておきたいのは、われわれの調査が、地方の一都市と東京の一部という限られた地域で行なわれ、また、少数の個人の事例について行なわれたものだということである。したがって、得られた結果は、この調査に関する限りのものである。われわれは、われわれの考えた方法により、可能な範囲で可能な調査を行なってみたまでである。しかし、この問題について考察するための、価値ある資料をいくつか提供しようと信じている。さらに、学校における国語教育の重要性をあらためて認識する必要があるという結論をえたことを、とくに記しておきたい。

Ⅱ 課 題

前項に述べたことをつづめていえば、われわれの課題は、「戦後の国語施策

の国民への影響とその普及の経路」ということである。

ここで「国語施策」と呼ぶ内容は、主として当用漢字・現代かなづかいに関する諸問題であるが、関連して、送りがなの問題も含めることとする。

その細目は、次のとおりである。

(1) 当用漢字

(a) 漢字制限・書きかえ……たとえば、「頃」「挨拶」などの漢字は使わない、「颱風」は「台風」と書き、「車輛」は「車両」と書く、といったこと。

(b) 音訓制限……たとえば、「家」「魚」は「うち」「さかな」とは読まない、「きょう」「ちょっと」「タバコ」は「今日」「一寸」「煙草」とは書かない、といったこと。

(c) 新字体……たとえば「學」は「学」,「徳」は「徳」という字体が標準となったこと。

(d) 人名漢字……戸籍法第50条, および同施行規則第60条によって, 子の名に用いることのできる漢字は, 当用漢字表に掲げる 1850 字と, 人名用漢字別表92字とに制限されたこと。

(2) 現代かなづかい……たとえば「けふ」が「きょう」となり,「だらう」が「だろう」となったように, 歴史的かなづかいが新しいかなづかいに改定されたこと。

(3) 送りがな……送りがなには必ずしも社会的な統一というものはなかったといえるが, ここでは, 戦前の国語教科書と戦後の国語教科書とのちがいを問題とし, それに昭和34年の内閣告示「送りがなのつけ方」をも考え合わせることとする。

次に,「影響」というのは, 個々人の文字生活が, 施策の行なわれる以前と比べて何らかの変容を示したかどうか, または問題意識や抵抗感などを生じたかどうか, という観点からとらえられる事がらである。

このような意味での影響があったかどうか, あった場合, それはどのような面で, どのくらいの程度かということを調べようというのであるが, “読む”立場について考えてみると, 施策の結果は公文書・新聞雑誌・教科書・実務文書などに採用されているから, 国民全体がマス・コミの面ではその大きな影響

を受けているということができる。読みたくななくても読まざるをえないし、読みにくくても、読むための努力をしつつ、順応することになるわけである。また“書く”立場について考えてみると、施策に順応して新しい表記をする人、反発して戦前の表記を変えない人、あるいは無関心でどちらでもよい人など、いろいろあるわけである。新しい施策の内容を知らない人や、施策の結果戦前と戦後とで変わったことに気づかない人も多いのだが、知らないながら結果として順応している人もあるわけである。たとえば、新字体とはいっても、以前の略体・俗体・草体を採用したものもあり、新しく作ったものもあるから、自分では略字を書いているつもりで、それがたまたま新字体と一致するということもある。かなづかいについていえば、ある人が現代かなづかいで書いた場合、現代かなづかいのつもりで書いたのか、歴史的かなづかいを書き誤ったのが現代かなづかいに合致したのか、きめがたいということもある。したがって、一口に「影響」とか「順応」とかといっても、現象的な「一致」もそれに含まれているということに注意しなければならない。しかしながら、ひとりひとりの個人への直接の影響としては異なるとしても、規準として社会全般に与えた影響という観点からは、それらの諸現象をいちおう一括して扱うことは許されるであろう。

最後に、「普及」とは、施策に順応ないし同調する方向に読み書き生活が変容する傾向を意味し、また、どんな人にどんな条件で普及していったかということを経路」と考える。

このようにして、われわれは、次のような課題を立てた。

- (1) 国民は、国語施策について、どれくらいの知識・関心をもっているか。(いつ、どうして知ったか、どんなことから関心をもつようになったか、なども含む。)
- (2) 国民は、国語施策について、どんな意見をもっているか。(よいと思っているか、よくないと思っているか、なども含む。)
- (3) 国民は、国語施策の方向に、どれくらい同調しているか。換言すれば、国語施策はどの程度普及しているか。(意識的な順応も、無意識的な実践も、ともに同調と考える。)
- (4) 普及の経路・原因・条件はどうか。(施策のうち、どんな事項が普及

しやすく、どんな事項が普及しにくい。どんな人に普及しやすく、どんな人に普及しにくい。いつ、どんなきっかけで、など。)

Ⅲ 計画と実施要領

この報告書に述べようとする内容は、昭和37年度に行なった「国民各層の言語生活の実態調査」のうちの新潟県長岡市における地点調査の一部と、引き続き38年度に東京を中心に行なった「戦後の国語施策が国民の文字生活に及ぼした影響とその経路に関する調査研究」の主要部分とを、合わせてまとめたものである。そこで、この二つの調査のあらましについて説明し、本報告書に述べようとするのがらの位置づけをはっきりさせておくこととしたい。

A 国民各層の言語生活の実態調査

1. 計画

この調査は、国民各層がどのような言語生活を営んでいるか、どのような問題を持ち、どのような意識をもっているかを調べることを目的とするものである。

そのために、調査を大きく二つに分けて計画した。第1は、行政区画としての都市を単位として地方に地点を選び、その住民の中からいろいろの年齢層・職業層・学歴層および男女にわたって被調査者を抽出し、その言語生活（とくに文字生活）の実態と意識とを調査するものである。第2は、若い世代である大学生（文科系・理科系各専門学科を含む）について、その読み書き上の問題点をさぐり、同時に、ことばや文字に対してかれらがどのような意識や関心をもっているかを調査するものである。

この報告書に含まれるのは、第1の「地点調査」の主要部分の抜粋である。^(注1)
(調査は、後にも述べるように、新潟県長岡市で実施されたので、以下の記述では「長岡調査」と略称することとする。)

(注1) 第2の「大学生の調査」の結果については、『国立国語研究所年報 14』に概略が報告されている。

2. 調査組織と担当者

この調査は、国立国語研究所全体の仕事として委員会組織で進められたものである。幹事研究室は第2研究部言語効果研究室で、同研究室に属する3名の所員が企画の中心となって主たる事務処理にあたり、実施を推進し、集計整理を行なった。調査が書きことばの面を主とする建て前から、関係の各部室から委員が出た。

委員は次のとおりである。

委員長 岩淵悦太郎

副委員長 興水 実

委 員 永野 賢、高橋太郎、渡辺友左（以上、幹事研究室員）

林 大、山田 巖、松尾 拾、見坊豪紀、柴田 武、芦沢
節、斎賀秀夫、出牛清二郎(会計)

補助員 宮地美保子、屋久茂子(以上、幹事研究室員)

根本今朝男、川又瑠璃子

なお、面接調査には、調査員として、次の8名も参加した。

飯豊毅一、林 四郎、水谷静夫、西尾寅弥、南不二男、松本
昭、石綿敏雄、吉沢典男

また生徒調査には、次の2名が出張した。

村石昭三、吉沢典男

3. 地点の選定

地点を選定する条件として、

- (1) 市域・人口の点で調べやすい広さとまとまりとをもっていること
- (2) いろいろな層の被調査者が得られること
- (3) 産業構成が日本の平均に近い都市であること
- (4) 東京の経済圏外にあって、しかもあまり遠くないこと
- (5) 言語的背景として特殊でないこと
- (6) 教育施設・PTA活動その他が文化的に一応のレベルに達していること
- (7) 昼間人口と夜間人口の差が激しくない（被調査者がとらえやすい）こと

(8) 進歩的または保守的すぎない土地柄であること

(9) 協力が得やすいこと

などを考えあわせ、いくつかの中都市を候補地として検討することとした。最終的には、新潟市・長岡市・長野市・松本市・豊橋市の5都市にしぼって資料を集めた。そして、6月中～下旬に長岡・長野の2都市を実地に検分した結果、長岡市を調査地点と決定した。

4. 調査の実施概要

調査は、現地の市当局とくに教育委員会（教育長は当時太刀川浩一郎氏）および公立小・中・高等学校・国立新潟大学長岡分校付属小・中学校などの終始変わらぬ好意的な協力を得て、円滑に進行した。

(1) 面接調査 市民各個人の文字言語生活の実態、国語・国字への関心・態度・意見および知識や情報を得る経路、各個人の言語感覚（方言・類義語・外来語などについて）を調べた。

(a) 基礎抽出調査 長岡市役所市民課の作成による「選挙資格及び住民調査票」（これは資料としては「住民登録票」よりも信頼しうるとのことである）に基づき、旧市域および宮内・栖吉地区の15～69歳の市民を等間隔抽出によるランダム・サンプリングで2012人をぬき出した。抽出比は、旧市域および宮内地区 $1/20$ 、栖吉地区 $1/50$ である。

9月13～19日の間に、東・東北・南・北・宮内・栖吉の各中学の2年生に依頼して基礎調査票を配布、1663通を回収した。（回収率82.6％）

(b) 面接調査（本調査） 基礎調査票に基づき、男女、年齢（6層）、学歴（3層）あわせて36の層にわたり、310人を選んだ。10月25～30日の間に、所員11名が調査員となって、戸別訪問し、質問票に記入した。所要時間平均ひとりあたり約34分。（310人の中には、転居・入院・拒否などの理由による調査不能者が19名あったので、基礎調査票によって層ごとに差し換えし、100％面接した。）

(2) 集合調査

(a) 母親調査 小・中学生をもった母親各個人の漢字・かなづかい・送りがな等の使用の実態、自分の習った用字法と子どもの習っている用字法との食い違いについての問題意識とその処理のしかたについて調べた。

- ・ 10月23日 長岡市立千手^{せんじゆ}小学校 94名
- ・ " 26日 " 東中学校 50名
- ・ " 30日 新潟大学長岡分校付属小・中学校 99名

計243名

調査票は、書き取りおよびアンケートの形式で所要時間は約1時間。

(b) 生徒調査 中高校生について漢字習得の地域的要因・経路・方法をさぐるために教育漢字・当用漢字・表外漢字の読み書きを調べた。

- ・ 11月19～21日 県立長岡高等学校 2年生 1学級
- 県立長岡第2高等学校 2年生 1学級
- 県立長岡工業高等学校 2年生 2学級
- 新潟大学長岡分校附属中学校 2年生 2学級
- 長岡市立東中学校 2年生 2学級

なお、同一の問題で、後に、その便宜を得て、東京都新宿区立四谷第2中学校・跡見学園高等学校、県立山形西高等学校の3校で対照調査を行なった。

(3) 会社員調査 会社・工場の従業員を対象に、漢字の使用の実態、類義語についての理解度・語感・使い分けについて調べた。

- ・ 10月31日 } 津上製作所および北越製紙工場の従業員198名について、質
- ・ 11月1日 } 問紙を配布して調査。

(4) 言語環境調査 長岡市民に刺激として与えられる文字言語環境の実情を調べ、市民の文字言語生活の状況を推知するための資料を集めようとした。

- ・ 10月1～2日 街頭における文字の観察。
- ・ 10月3日 市民の消費する筆記用具についての調査。
- ・ 10月23～29日 家庭にはいる文字の記録。
- ・ 12月4～6日 長岡市の交通量・通信・読み書き関連産業などの資料の収集。

なおこの報告書には、上記の中の「面接調査」の主要部分、「母親調査」の全部、「会社員調査」の一部が含まれ、「生徒調査」「言語環境調査」は含まれない。また、この長岡における「母親調査」「会社員調査」を、以下の記述ではそれぞれ「母親調査(長岡)」「会社員調査(長岡)」と略称する。

B 戦後の国語施策が国民の文字生活に及ぼした影響とその経路に関する調査研究

1. 計 画

この調査は、戦前の文字教育を受けた一般市民が、当用漢字や現代かなづかいなどの国語施策によって、文字生活の上でどの程度影響を受けているか、あるいはいないか、それはどのような条件によってか、などの実態を調べることを目的とするものである。国語施策のがわからいえば、当用漢字（漢字制限・音訓制限・新字体）や現代かなづかいや新送りがななどの中で、どんな種類のものが普及し、どんな種類のものが普及しないか、また、どういう人に影響ないし普及し、どういう人に影響ないし普及しないか、さらに、どういう条件で普及するのか、つまり普及の経路はどうか、といったことについて調べようというわけである。

このような目的のために、次のように調査を計画した。

（１）書かせた資料による調査

長岡調査と同じように、小中学生の母親を集めて、書き取りを行ない、各個人の漢字・かなづかい・送りがなの使用の実態を調べる。

（２）文字意識の調査

(1)と同じ被調査者、および、会社・工場に勤務する人びとに、新旧字体・制限漢字・制限音訓などを含む語を配列印刷した調査用紙を配布し、現にどれを使用しているかを反省し選択させる。また、自分の習った用字法と子どもの習っている用字法についての問題意識とその処理のしかたについて調べる。これも長岡調査とほぼ同様の方法による。

（３）書かれた資料による調査

(1)と(2)とは、われわれの目的のために書き取りあるいは文字選択の行動をさせて得られる資料による調査であるが、そのような意図的な場面でないときに書かれた種々の資料を集めて、文字使用の実態をさぐろうとした。これを二つに分け、個人の時間的変化（通時態）を追跡するものと、ある集団内部の変化（共時態）を明らかにするものとした。

以上を次の３種の調査として実施した。

- a. 母親調査……………(1)および(2)
- b. 会社員調査……………(2)
- c. 既成資料調査……………(3)

調査は、後にも述べるように、だいたい東京を中心に行なわれたので、以下の記述では「東京調査」と略称する。また、「母親調査」は「母親調査(東京)」,「会社員調査」は「会社員調査(東京)」と略称することとする。

2. 担 当 者

言語効果研究室に属する次の３名の所員が共同で行なった。

永野 賢 高橋太郎 渡辺友左

なお、調査票の作成・集計整理などに、補助員屋久茂子が従事した。

3. 実 施 概 要

この調査は、原則として東京都内で行なうこととしたが、一部に地方の資料が含まれることとなった。母親調査は、都内の小学校・中学校各１校を選び、ＰＴＡの母親に学校に集まってもらって、一定の時間を限って実施した。

会社員調査は、対象を事務員と工員とに分け、前者は都内の会社、後者は地方の工場に勤める人たちに調査票を配布し、仕事の合間に各自に記入してもらったものを、後日収集した。

既成資料調査のうち、個人の通時態に関しては、高橋所員の知人である会社員Ｓ氏から高橋のもとにきた手紙、高橋の旧制高校時代の友人たちで作った感想文集、国会議員Ｙ氏の日記・選挙公報草案・演説草稿（すべて自筆のもののみ）などを資料とした。また、集団の共時態に関しては、東京と地方との新聞社各１社を選び、一般読者の投書・投稿を借用して資料とした。

以上の日時・名称・員数などは次のとおりである。

(1)母親調査

- ・昭和38年 7月16日(火) 武蔵野市立第1中学校……………32名
- ・ " " 19日(金) 渋谷区立神宮前小学校……………86名

(2)会社員調査（昭和38年 7～8月）

- ・ 事務員 { 伊藤忠商事株式会社……………46名
- { 岡三証券株式会社……………34名

- ・工 員 帝人株式会社岩国工場……………50名
- (3) 既成資料調査
 - (a) 新聞投書
 - ・東京P紙(昭和38年のもの)…………… 約170通
 - ・地方Q紙(")……………約70通
 - (この報告書には、Q紙のものだけを載せた。)
 - (b) 個人の文書
 - ・会社員S氏の手紙(昭和23～36年のもの)……………約60通
 - ・国会議員Y氏の日記・演説草稿など
(昭和26～38年のもの)……………46点
 - ・青年約20氏の文章(昭和20～21年のもの)

Ⅳ 被 調 査 者

基礎抽出調査，面接調査，母親調査（長岡・東京），会社員調査（長岡・東京）のそれぞれの被調査者を，必要に応じて学歴・年齢・性別その他に分類して示す。

○第1表は，会社員調査（東京）以外のすべての調査にわたって，年齢層の分け方を対照的に一覧できるようにしたものである。面接調査では，「当用漢字表」「現代かなづかい」の制定当時に，学齢に達していなかったか，小学生であったか，旧制の中学生・女学生であったかという規準で，年齢の低い方を三つの層に分け，年齢の高いほうは，十年きざみで三つの層に分け，全体を六つの層に分けた。このような分け方をしたのは，われわれの調査の目的が，とくに国語施策の影響を見ようとするものだからである。会社員調査と母親調査とは，面接調査に準じたが，人数の少ない層は隣接の層に合併した。そのため，会社員調査では4層に，母親調査では3層になった。

○第2表は，基礎調査における被調査者1663名の，学歴・年齢・性別一覧表である。市部というのは，旧市内と新市内の宮内地区とを合わせた地域，栖吉地区というのは，長岡市に属してはいるが農村地域であって，職業はほとんど農業で，学歴も大部分が低い。

○第3表は，面接調査における被調査者 310 名の，学歴・年齢・性別一覧表

を地域別に作ったものである。

○第4表は、母親調査（長岡）の、第5表は、母親調査（東京）の被調査者の、それぞれ学歴・年齢別一覧表である。

○第6表は、会社員調査（長岡）の、第7表は、会社員調査（東京）の被調査者の、それぞれ学歴・年齢・性別一覧表である。後者の年齢層の分け方は前者と異なり、母親調査に準じている。

○面接調査では、学歴・年齢・性別それぞれの層の人数があまりちがわないように被調査者を得ることができたが、それでも、学歴3の層（大学・高専卒以上）の女子だけは少ない。母親調査では、年齢2の層（昭3～大8生）がもっとも多く、学歴では旧制高等女学校卒がもっとも多い。会社員調査（長岡）では女子が少なく、会社員調査（東京）では、工員に学歴3の層が皆無で、事務員に学歴1の層（義務教育）がわずか1名となっている。

第1表 被調査者：生年・年齢・国語施策当時学年、対照一覧表

調 査 別 年 齢 層					国 語 施 策 と の 関 係	
母 親 調 査	会 社 員 調 査	面 調 接 査	出 生 年	調 年 査 時 齢	当用漢字現代か なづかい制定時 (昭21年)	当用漢字字体表 制定時 (昭24年)
	1	1	昭22 } 昭15	15才 } 22才	当 時 学 齢 前	当 時 学 齢 前
			昭14 } 昭9	23 } 28	当 時 小 学 生	当 時 小 学 生
	2	3	昭8 } 昭4	29 } 33	当 時 旧 中 女 生	当 時 新 高 生
			昭3 } 大8	34 } 43		
	3	5	大7 } 明42	44 } 53		
		6	明41 } 明26	54 } 69		

第2表 基礎調査：学歴・年齢・性別集計

学 歴		1 (義務教育)		2 (旧制中女, 新制高)		3 (大学・高専 以上)		小		計		小学校中退以 下・未記入		計	
年 齢		計	男 女	計	男 女	計	男 女	計	男 女	計	男 女	計	男 女	計	男 女
市	1 (昭22~昭15)	81	44 37	180	69 111	11	6 5	272	119 153			3	1 2	275	120 155
	2 (昭14~昭 9)	103	39 64	73	31 42	8	7 1	184	77 107			2	0 2	186	77 109
	3 (昭 8~昭 4)	101	49 52	96	38 58	20	16 4	217	103 114			2	1 1	219	104 115
	4 (昭 3~大 8)	212	110 102	138	53 85	44	36 8	394	199 195			14	7 7	408	206 202
	5 (大 7~明42)	173	94 79	86	39 47	17	13 4	276	146 130			12	6 6	288	152 136
	6 (明41~明26)	160	89 71	43	28 15	17	13 4	220	130 90			16	7 9	236	137 99
部	小 計	830	425 405	616	258 358	117	91 26	1563	774 789			49	22 27	1612	796 816
	不明・条件不備	3	1 2					3	1 2					3	1 2
	計	833	426 407	616	258 358	117	91 26	1566	775 791			49	22 27	1615	797 818
栖 吉 地 区	1 (昭22~昭15)	4	1 3	3	2 1			7	3 4					7	3 4
	2 (昭14~昭 9)	9	2 7	1	1 0			10	3 7					10	3 7
	3 (昭 8~昭 4)	5	3 2					5	3 2			1	1 0	6	4 2
	4 (昭 3~大 8)	10	4 6	1	0 1			11	4 7					11	4 7
	5 (大 7~明42)	5	3 2	1	0 1			6	3 3			1	1 0	7	4 3
	6 (明41~明26)	6	3 3					6	3 3			1	1 0	7	4 3
計		39	16 23	6	3 3			45	19 26			3	3 0	48	22 26
市 部、栖 吉 計		872	442 430	622	261 361	117	91 26	1611	794 817			52	25 27	1663	819 844

第3表 面接調査：学歴・年齢・性別集計（学歴欄・年齢欄の数字は第2表に準ずる）

学歴 年齢	1			2			3			計			
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	
(市 部)	1	8	4	4	34	13	21	9	5	4	51	22	29
	2	10	4	6	14	6	8	7	6	1	31	16	15
	3	10	5	5	18	7	11	16	13	3	44	25	19
	4	20	10	10	27	10	17	35	28	7	82	48	34
	5	16	9	7	17	8	9	13	11	2	46	28	18
	6	16	9	7	8	5	3	12	10	2	36	24	12
計	80	41	39	118	49	69	92	73	19	290	163	127	

学歴 年齢	1			2			3			計		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
(栖 吉 地 区)	1	2	1	1						2	1	1
	2	3	1	2						3	1	2
	3	2	1	1	1	0	1			3	1	2
	4	4	2	2	1	0	1			5	2	3
	5	3	2	1						3	2	1
	6	4	2	2						4	2	2
	計	18	9	9	2	0	2			20	9	11

第4表 母親調査(長岡)：学歴・年齢別
集計(学歴欄の数字は第2表に準ずる)

年齢	学歴				
	1	2	3	不明	計
1 (昭10～昭 4)	15	39	0	1	55
2 (昭 3～大 8)	35	102	16	1	154
3 (大 7～明40)	4	17	9	0	30
不 明	0	3	1	0	4
計	54	161	26	2	243

第5表 母親調査(東京)：学歴・年齢別集計
(学歴欄の数字は第2表に準ずる)

年齢	学歴			
	1	2	3	計
1 (昭10～昭 4)	1	38	6	45
2 (昭 3～大 8)	5	47	11	63
3 (大 7～明40)	1	5	3	9
計	7	90	20	117

第7表 会社員調査(東京)：学歴・年齢別集計
(学歴欄の数字は第2表に準ずる。また、年齢層の分け方は母親調査と同じくしてある。)

(工 員)					
年齢	学歴				計
	1	2	3	計	
男 子	1 (昭10～昭 4)	8	6	0	14
	2 (昭 3～大 8)	13	2	0	15
	3 (大 7～明40)	1	0	0	1
	計	22	8	0	30
女 子	1 (昭10～昭 4)	17	2	0	19
	2 (昭 3～大 8)	1	0	0	1
	3 (大 7～明40)	0	0	0	0
	計	18	2	0	20
全 体	1 (昭10～昭 4)	25	8	0	33
	2 (昭 3～大 8)	14	2	0	16
	3 (大 7～明40)	1	0	0	1
	計	40	10	0	50

第6表 会社員調査(長岡)：学歴・年齢別
集計(学歴欄の数字は第2表に準ずる)

		学歴			
年齢		1	2	3	計
男	1 (昭22～昭15)	2	11	1	14
	2 (昭14～昭 4)	5	21	13	39
	3 (昭 3～大 8)	20	22	11	53
	4 (大 7～明35)	38	14	4	56
	計	65	68	29	162
女	1 (昭22～昭15)	3	12	0	15
	2 (昭14～昭 4)	2	12	1	15
	3 (昭 3～大 8)	2	4	0	6
	4 (大 7～明35)	0	0	0	0
	計	7	28	1	36
全	1 (昭22～昭15)	5	23	1	29
	2 (昭14～昭 4)	7	33	14	54
	3 (昭 3～大 8)	22	26	11	59
	4 (大 7～明35)	38	14	4	56
	計	78	96	30	198
体	1 (昭22～昭15)	5	23	1	29
	2 (昭14～昭 4)	7	33	14	54
	3 (昭 3～大 8)	22	26	11	59
	4 (大 7～明35)	38	14	4	56
	計	78	96	30	198

(事 務 員)					
年齢	学歴				計
	1	2	3	計	
男 子	1 (昭10～昭 4)	0	4	22	26
	2 (昭 3～大 8)	0	2	13	15
	3 (大 7～明40)	1	3	14	18
	計	1	9	49	59
女 子	1 (昭10～昭 4)	0	6	3	9
	2 (昭 3～大 8)	0	9	0	9
	3 (大 7～明40)	0	2	1	3
	計	0	17	4	21
全 体	1 (昭10～昭 4)	0	10	25	35
	2 (昭 3～大 8)	0	11	13	24
	3 (大 7～明40)	1	5	15	21
	計	1	26	53	80

V 調査票・調査資料 付調査法

A 基礎抽出調査

20ページに掲げたのは、基礎抽出調査の調査票の表面の縮刷である。現物はA4判の厚紙。これには、氏名（ふりがな）・性別・生年・住所・生地・居住歴・学歴・職業のほか、読んでいる新聞名、新聞を読む時間の1日平均、手紙・はがきを書く通数の1か月平均、自分の職業が文字の読み書きに関係があるか否か、あるとしたら、おもにどんなものを読み、または書いているか、といったことを被調査者自身に記入してもらうようになっている。

基礎抽出調査としては、これだけたずねれば充分であるが、しかし、これだけだと、言語調査としての質問事項があまり含まれていないから、被調査者としては不審ないし不満を感じるであろうことを予想し、裏面に、新潟県地方の方言についての質問を10項目（キノコ・トウモロコシ・氷・こおる・しもやけ・まぶしい・たこ・梅雨・灰・女の10語）載せ、これに答えてもらうことによってカムフラージした。事実、何人かの被調査者から直接聞いたところによると、方言調査が目的であると思っていたらしい。表面だけでは、一般の人には単なる社会調査ないし戸籍調べぐらいの印象しか与えないようである。それはともかく、裏面の質問事項は本報告書の内容と無関係であるから、ここには掲げない。

B 面 接 調 査

21～24ページに掲げたのは、面接調査の調査票である。これは、調査員が質問しながら被調査者の答えを記入するようになっている。

1は導入、2～3は新聞・週刊誌・雑誌その他の本を読む生活についての質問、4は書く生活に関する質問である。2～4は、合わせて言語生活とくに文字言語生活の実情をさぐり、被調査者の文字への接近度を評定するための質問事項である。

5は、25～32ページに掲げたような印刷物^(注)を示しながら質問するもので、当用漢字・現代かなづかい関係の質問事項である。

6・7は、方言音・外来音・新語・類義語などに関する質問であるが、本報告書の内容に関係がないのでここには掲げなかった。

8・9は、自分の習った表記法と子どもの習っている表記法とのちがいか、名づけ漢字の問題とか、当用漢字や現代かなづかいのこととか、要するに戦後の国語施策についての知識・関心・意見をたずねるものである。

C 母 親 調 査 (長 岡)

33～37ページに掲げたのは、母親調査(長岡)の調査票である。A4判5枚とじのもので、第1面は書き取り、第2面はアンケート、第3～5面は新字体、ということになっている。

書き取りは、新表記法と旧表記法とで食いちがい(漢字制限・音訓制限・字体・かなづかい・送りがな)のある文字や語を多く含む文章を作り、調査者が読みあげて、筆記してもらったのであるが、ただ「書き取りをします」では、いやがられるだろうし、また、必要以上に意識してふだんのままの文字づかいでなくなるおそれもあるので、「イナバの白ウサギ」のようにだますことにした。すなわち、「近ごろ横書きがたいへん多くなり、教科書も国語や社会のほかは全部横です。そこで、横書きと縦書きとどちらが書きやすいかについてのご意見をうかがいたい。といっても、ふだん横書きなどあまりしたことのない方もたくさんいらっしゃると思うので、いまここで、わたしの読みあげる文章を、横書きと縦書きとで実際に書いてみていただいて、その共通の経験の上に立って、ご意見を述べていただきます。」といって、被調査者の意識を横書き・縦書き問題のほうへそらし、表記法に関してはあまり意識しない自然な態度で書き取りをしてもらい、実態に近い資料を得ようとしたのである。第1面

注 横8.5cm縦25cmのたんざく型の紙に、写真植字44級の大きさの文字で印刷したもの。下の□は、調査員が被調査者の答えを符号化して記入する欄である。以下の記述では、これを「たんざく」と称することがある。(1)～(10)は、漢字制限・音訓制限に関するもの。(11)～(30)は新字体に関するもの。(31)～(45)は、かなづかいに関するもの。なお、(39)は、知ったかぶりの旧かなをチェックするための、また(41)は、知ったかぶりの新かなをチェックするためのおとり質問である。

のケイが横書きと縦書きと両方あるのは、そのためである。（書き取りの問題は 109 ページに掲げた。）

第 2 面のアンケートは、自分の習った昔の表記法と、子どもの習っている今の表記法との食い違いに関するいくつかの質問に答えてもらうものであるが、カムフラージのための横書き・縦書き問題についての質問もいくつか加えてある。

第 3～5 面は、新字体と旧字体とを並べて印刷（1 字 1 字でなく、たとえば宝物・寶物のように必ず語として出す）し、昔習ったと思う字体はどちらか、今使っているものはどちらかを反省し、印（昔は○、今は△）をつけてもらった。“昔”というのは“小学校で”の意味に理解してほしいが、小学校では教わらない字も含まれているから、それは厳格に意識しなくてもよろしいといい、また、マークはどちらかに一つずつとは限らず、一方に○と△とがつくものもあり、○が両方についたり、△が両方についたりすることもある、と、念のためいいそえた。なお、ここには 231 字含まれているが、当用漢字新字体表に含まれていないものに関するものが 5 字（補正案の「灯」と簡略俗体「筵・卒・舛・𠂔（𠂔）」）あるので、新字体関係は、226 字になる。ただし、「広」は旧字体に 2 通りあるので、集計にはこれと他の 225 字とを別個に扱うことになる。

D 母 親 調 査（東 京）

38～42 ページに掲げたのは、母親調査（東京）の調査票である。母親調査（長岡）とはほぼ同様であるが、ちがっている部分もある。

書き取りの問題は、長岡ではその地域性を生かした文章を含んでいるので、東京でも地域的なものに変えた。（問題は 110 ページに掲げた）

第 2 面のアンケートも、長岡での結果を勘案して少し変えた。

第 3～4 面は、当用漢字の新字体のみにしぼり、154 字に減らした。第 5 面は、長岡ではやらなかった新しい問題で、「わき」「脇」のような漢字制限の問題、「なぜ」「何故」のような音訓制限の問題のものを、合わせて 56 語出し、ふつうに使っているほうに印をつけてもらった。

E 会 社 員 調 査（長 岡）

43～44ページに掲げたのは、会社員調査（長岡）の調査票である。A 4判2枚で、第1面は漢字制限・音訓制限に関するもの、第2面は漢字制限による書きかえ、言いかえと新字体・俗字体とに関するものである。

F 会 社 員 調 査（東 京）

45～46ページに掲げたのは、会社員調査（東京）の調査票の一部である。全体はA 5判5枚とじのものであるが、第3～5面は、母親調査（東京）と同じものなので、ここには割愛した。

第1面は、簡略俗体の使用の実態を問うためのものである。

第2面は、(4)の質問以降は母親調査（東京）と同じで、(1)～(3)の質問は、読み書き生活に関する質問である。

なお、このように母親調査（東京）と重なる質問が多いので、結果の比較の便宜のため、被調査者の年齢層の分け方は、15ページの表に示すように、母親調査の被調査者と同じになっているわけである。

G 既 成 資 料 調 査

必要に応じて、後に掲げる。

調 査 票

No. _____

1. ふりがな _____ お名まえ		2. 性別(○で囲む) 男 女		3. 生まれた年(○で囲む) 明治 _____ 年生まれ 大正 _____ 昭和 _____	
4. お住まいはどちらですか。 長岡市 町 丁目 番地 方					
5. お生まれはどちらですか。 都道 郡市 区町村 で生まれた。 府県 市 村					
6. 生まれてから現在まで、住まいの場所を変えたことがありますか。兵役などの場合は、備考欄に兵役などと書いてください。 <div style="text-align: right;">備 考</div>					
0 歳から 歳まで		都道 郡市 区町村 に住む。 府県			
歳から //		// //		//	
// //		// //		//	
// //		// //		//	
// //		// //		//	
7. いちばん最後に行つた学校名を書いてください。その学校が、新制か旧制か、また、卒業したか、中途退学したか、または在学中かの区別も○で囲んでください。 <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 学校名 _____ 新制 卒 業 旧制 中途退学 在学中 </div>					
8. 何新聞を読んでいますか。(○で囲む) 新潟日報 毎日新聞 読売新聞 朝日新聞 日本経済新聞 産業経済新聞 中部日本新聞 信濃毎日新聞 長岡新聞 スポーツの新聞 () その他 ()					
9. 新聞は、一日平均何分ぐらいお読みになりますか。(○で囲む) 10分以内 20分以内 30分以内 30分をこえる					
10. この一か月に、個人的な用事で手紙や葉書を何通ぐらいお書きになりましたか。(○で囲む) 0 通 1 通から 5 通まで 6 通以上					
11. 職 業 (仕事の内容をくわしく書いて下さい)			12. あなたの職業は、文字や文章の読み書きに関係 ありますか。(○で囲む) 関係がある あまり関係がない		
13. 関係のあるかたは→おもにどんなものを読み、または書いていますか。下の記入例のようにできるだけくわしく書いてください。 記入例① ○○商事株式会社総務課文書係りとして、取引先からの事務文書を読み、取引先に対する事務文書の文案を書くことが多い。 記入例② 長岡市立○○中学校教諭。理科を担当。教科関係の本や生徒のレポート、答案などを読むことが多い。 記入例③ ○○印刷株式会社の植字工として10年勤務。印刷関係の原稿を読むことが多い。					

No.

調 査 票

調査者	
日 時	
場 所	

※調査開始時刻（ 時 分）

氏名（ふりがな）	性別 男 女	年齢 歳	学歴 1 2 3
住 所 長岡市 町 丁目 番地 方	職業		
読んでいる新聞 日報 毎日 読売 日経 産経 中日 信毎 長岡 朝日	新聞を読む時間 10 20 30	手 紙 0 1 5 6 ~	

※ここを始めた時刻（ 時 分）

- 1 1. この前は、調査にご協力くださいまして、ありがとうございました。
この前、調査票が、お手もとに届く前に、長岡市でことばの調査があることを知っていましたか。
1. 知っていた 2. 知らなかった
- 11.1 どういうもので知りましたか。
1. 市政だより 2. 新聞 3. 放送 4. 人から聞いた

- 2 1. ふだん新聞をお読みになりますか。
1. 読む 2. ときどき読む 3. 読まない
22. きょう（けさ・ゆうべ）は、新聞をお読みになりましたか。
1. 読んだ 2. 読まない
- 22.1 何分ぐらいお読みになりましたか。
1. 10分以内 2. 20分以内 3. 30分以内 4. 30分をこえる
- 22.2 どこでお読みになりましたか。
1. 家庭 2. 通勤途上 3. 勤め先 4.
- 22.3 どんな所からお読みになりましたか。
1. 政治経済 2. 社会 3. スポーツ 4. 芸能 5. 家庭 6. 小説 7. 広告 8. 地方版
9.
23. 週刊誌はお読みになりますか。
1. 読む 2. ときどき読む 3. 読まない
- 23.1 どんな週刊誌をお読みになりますか。
- 23.2 ふつうどこで読みますか。

3 1. 週刊誌のほかにも、何か雑誌をお読みですか。

1. 読む 2. ときどき読む 3. 読まない

31.1 どんな雑誌をお読みですか。

32. 雑誌や週刊誌のほかにも、何か本をお読みですか。

1. 読む 2. ときどき読む 3. 読まない

32.1 どんな本をお読みですか。

4 1. 年賀状はお出しになりますか。

1. 出す 2. 出したり出さなかったり 3. 出さない

41.1 このお正月は何通ぐらいでしたか。

通

41.2 ふつう、どんな文句にしますか。相手によって、文句を変える場合は、多いものから答えて下さい。

1. 謹賀新年型 2. 賀正型 3. 新年おめでとう型 4. 謹しんで……申し上げます型
5. その他

41.3 自分で書きますか。それとも印刷にしますか。

1. 手書き 2. 印刷 3. 手書き印刷併用 4. その他

41.4 表書きはペンで書きますか。筆で書きますか。鉛筆で書きますか。あるいは、ボールペンで書きますか。

1. ペン 2. 筆 3. 鉛筆 4. ボールペン 5. わからない

41.5 表書きはたて書きですか、よこ書きですか。

1. たて書き 2. よこ書き 3. 同じくらい 4. わからない

42. 個人的な用事で、手紙や葉書は、月にどのくらい来ますか。

1. 0通 2. 1～5通 3. 6通以上

42.1 個人的な用事で、手紙や葉書は、月にどのくらい出しますか。

1. 0通 2. 1～5通 3. 6通以上

42.2 手紙や葉書の本文は、たて書きが多いですか。よこ書きが多いですか。

1. たて書き 2. よこ書き 3. 同じくらい 4. わからない

42.3 表書きは、たて書きが多いですか。よこ書きが多いですか。

1. たて書き 2. よこ書き 3. 同じくらい 4. わからない

42.4 何で書きますか。ペンと筆と鉛筆とボールペンと、どれを使うことが多いですか。

1. ペン 2. 筆 3. 鉛筆 4. ボールペン 5. わからない

43. 日記とか、手帳とか、メモとか、家計簿とか、毎日のように書くものはありますか。

1. 日記 2. 手帳 3. メモ 4. 家計簿 5. 書かない

43.1 そういうものは、たて書きですか。よこ書きですか。

1. たて書き 2. よこ書き 3. 同じくらい 4. わからない
- 43.2 ペンと、筆と、鉛筆と、ボールペンと、どれで書くことが多いですか。
1. ペン 2. 筆 3. 鉛筆 4. ボールペン 5. わからない
44. 手紙とか、そのほか何か書くときに字引きを引くことはありますか。
1. ある 2. ときどきある 3. ない
-

- 5 1. 文字の使い方のことでおたずねします。→別紙ここに並べて書いてあるもの
のうちで、どちらが読みやすいですか。 また、あなたが書くとしたら、ふつ
う、どちらの書き方をしますか。
52. では、こんどは、これをごらん下さい。→別紙並べて書いてあるものは、少
しずつ形がちがっていますが、どちらも、まちがいはなく、両方使われていま
す。あなたには、どちらが読みやすいですか。 また、あなたが書くとしたら、
ふつう、どちらの書き方をしますか。
53. 次は、これをごらん下さい。→別紙並べて書いてあるものは、ところどころ、
かなの使いがちがっていますが、あなたには、どちらが読みやすいですか。
また、あなたが書くとしたら、ふつう、どちらの書き方をしますか。
- 53.1 (年齢25歳以上の人「現代かなづかい」のほうを使うと答えたら) いつごろ、
どういうきっかけで、こちらの書き方を覚えましたか。
-

- 8 1. お宅に、学校に行っている人は、いますか。何年生ですか。
82. お子さまが学校で習ってきた字と、ご自分の習った字とが、書き方や読み方など
の点でちがっていて、お困りになったことはありませんか。
1. よくある 2. ときどきある 3. あまりない
- 82.1 たとえば、どんなことですか。
- 82.2 そういう時、どうしていらっしゃるのですか。(どうなさいましたか。)
1. 子どもに聞く 2. 教科書を研究する 3. 人に聞く 4. 辞典や参考書で調べる
5. 自分の考えどおりにさせる 6.
- 82.3 新しい字の使い方を覚えようとなさっていますか。(なさいましたか。)
1. はい 2. いいえ 3. どちらともいえない
- 82.4 どのようにして覚えようとなさっていますか。(覚えましたか。)
83. お子さまの名前は、どんな字を書きますか。すみませんが、ここに書いて下さ
い。→調査票裏面
- 83.1 その名前はどなたがおつけになりましたか。
1. 父 2. 母 3. 父母 4. 祖父 5. 祖母 6.
- 83.2 名前をつけるとき、文字のことで、何か議論になったことがありますか。
1. ある 2. ない 3.
- 83.3 戦争後になって、名前に使える漢字の範囲が制限されていることを知っていま
したか。

1. 知っていた 2. 知らなかった
- 83.4 いつ、どのようにして知りましたか。
1. 新聞など 2. 戸籍係の窓口で聞いた 3. 人に聞いた
- 83.5 名前に使える漢字の範囲が、きまっていることについて、どう思いますか。
-
- 9 1. (前の字体の問題を見せて)今、新聞や教科書では「学校」とか「三条」とか書いてありますが、昔は「學校」とか「三條」とか書いてありました。このことを、ご存じですか。
1. 知っている 2. 知らない
92. (前の書きかえの問題を見せて)今は、新聞や教科書では「アイサツ」を「あいさつ」とひらがなで書いています。昔はこれを「挨拶」という漢字で書いたものです。このように、今は、新聞や教科書などではこの漢字は使うとか、この漢字は使わないとかいうふうに、使う漢字の範囲をきめています。このことをご存じですか。
1. 知っている 2. 知らない
- 92.1 (知っている人と答えた人に)いつごろ、どんなきっかけで知りましたか。
- 92.2 その漢字の表を何というか、ご存じですか。
1. 当用漢字 2. 制限漢字 3. 新漢字 4.
93. (前のかなづかいの問題を見せて)こちらは、いまの新聞や教科書で使っているかなの使い方で、こちらは戦争前の使い方ですが、昔と今で、このようにかなの使い方がちがっていることをご存じですか。
1. 知っている 2. 知らない
- 93.1 (知っている人と答えた人に)いつごろ、どんなきっかけで知りましたか。
- 93.2 昔のかなづかいを何と言うか、ご存じですか。
1. 歴史的かなづかい 2. 旧かな(づかい) 3.
- 93.3 今のかなづかいは？
1. 現代かなづかい 2. 新かな(づかい) 3.
94. 戦争前と戦争後と比べて、ことばや文字がずいぶん変わったということが言われますが、昔と今と比べてどちらがいいとお考えですか。

※終わった時刻 (時 分)

(3) イ、ソースとしょうゆ。

ロ、ソースとしょう油。

ハ、ソースと醬油。

ニ、ソースと正油。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

(2) イ、この川であゆがつれます。

ロ、この川でアユがつれます。

ハ、この川で鮎がつれます。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

(1) イ、きょうは、よい天気です。

ロ、今日は、よい天気です。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

No.

(6) イ、電燈がつく。

ロ、電灯がつく。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

(5) イ、明るいへや。

ロ、明るい部屋。

ハ、明るい室。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

(4) イ、市長のあいさつ。

ロ、市長の挨拶。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

(9) イ、おとうさん、おかあさん。

☐
☐

ロ、お父さん、お母さん。

☐
☐

(8) イ、たばこを買う。

☐
☐

ロ、タバコを買う。

☐
☐

ハ、煙草を買う。

☐
☐

(7) イ、一分間のもくとうをする。

☐
☐

ロ、一分間の黙とうをする。

☐
☐

ハ、一分間の黙禱をする。

☐
☐

(12) イ、新潟県

☐
☐

ロ、新潟縣

☐
☐

(11) イ、学校へ行く。

☐
☐

ロ、學校へ行く。

☐
☐

(10) イ、ふたりで遊ぶ。

☐
☐

ロ、二人で遊ぶ。

☐
☐

(13) イ、観光院町

☐
☐

ロ、観光院町

☐
☐

(14) イ、蔵王町

☐
☐

ロ、蔵王町

☐
☐

ハ、蔵王町

☐
☐

(15) イ、長岡驛

☐
☐

ロ、長岡駅

☐
☐

(16) イ、東京都

☐
☐

ロ、東京都

☐
☐

(17) イ、新発田市

☐
☐

ロ、新発田市

☐
☐

(18) イ、三條市

☐
☐

ロ、三條市

☐
☐

(20) イ、大村疊店 ☐ ☐

ロ、大村疊店 ☐ ☐

ハ、大村疊店 ☐ ☐

(21) イ、職業安定所 ☐ ☐

ロ、職業安定所 ☐ ☐

ハ、職業安定所 ☐ ☐

(19) イ、長岡營業所 ☐ ☐

ロ、長岡營業所 ☐ ☐

(24) イ、小川自転車店 ☐ ☐

ロ、小川自転車店 ☐ ☐

(23) イ、小島医院 ☐ ☐

ロ、小島醫院 ☐ ☐

(22) イ、中村商会 ☐ ☐

ロ、中村商會 ☐ ☐

(25) イ、青年

只、青年

☐ ☐

☐ ☐

(26) イ、年齢

只、年令

☐ ☐

☐ ☐

(27) イ、百万人

只、百万人

☐ ☐

☐ ☐

(28) イ、眞夏

只、真夏

☐ ☐

☐ ☐

(29) イ、静岡

只、静岡

☐ ☐

☐ ☐

(30) イ、一郎様

只、一郎様

ハ、一郎様

☐ ☐

☐ ☐

☐ ☐

(33) イ、雨が降りそうです。
☐ ☐

ロ、雨が降りそうです。
☐ ☐

(32) イ、雪が降るだろう。
☐ ☐

ロ、雪が降るだろう。
☐ ☐

(31) イ、リンゴを買ふ。
☐ ☐

ロ、リンゴを買ふ。
☐ ☐

(36) イ、あはてて、さはぐ。
☐ ☐

ロ、あわてて、さわぐ。
☐ ☐

(35) イ、早く帰りませう。
☐ ☐

ロ、早く帰りましょう。
☐ ☐

(34) イ、菜の花に、てふがとまる。
☐ ☐

ロ、菜の花に、ちようがとまる。
☐ ☐

(39)

イ、パンを買いに行く。

☐
☐

ロ、パンを買ひに行く。

☐
☐

(38)

イ、本を読もう。

☐
☐

ロ、本を読もう。

☐
☐

(37)

イ、村はづれの一軒家

☐
☐

ロ、村はずれの一軒家

☐
☐

(42)

イ、木を植ゑる。

☐
☐

ロ、木を植ゑる。

☐
☐

(41)

イ、新潟へ行く。

☐
☐

ロ、新潟へ行く。

☐
☐

(40)

イ、元気に働いています。

☐
☐

ロ、元気に働いてゐます。

☐
☐

(45) イ、おとこの子、おんなの子。

☐
☐

ロ、をとこの子、をんなの子。

☐
☐

(44) イ、おじいさん

☐
☐

ロ、おぢいさん

☐
☐

(43) イ、あすは晴れるでしょう。

☐
☐

ロ、あすは晴れるでせう。

☐
☐

No.

調 査 票 (学校)

国民各層—20
1962. 10~11月

明治 大正 昭和	年生	最終卒業 学 校	お子さま の在学年	
----------------	----	-------------	--------------	--

[illegible][illegible]

(1) たて書きとよこ書きと、どちらが書きやすいですか。

1. たて書き 2. よこ書き 3. どちらとも言えない

(2) ふだん、よこ書きにしているものはありますか。

手帳 メモ 家計簿 ノート ハガキ 表書き
本文 手紙 表書き
本文

その他：

(3) 算数や理科の教科書は、よこ書きなのに、国語の教科書は、たて書きがおもになっています。このことについて、ご意見をきかせて下さい。

1. 国語や社会の教科書も、よこ書きにすべきだ。
2. 算数や理科の学習のために、国語の教科書にも1年生から、もっとよこ書きを取り入れたらよい。
3. 算数はともかくとして、理科はたて書きがよい。
4. 現状のままでよい。

(4) 自分が学校で覚えた漢字と、お子さまが学校で習っている漢字とが、書き方や読み方などの点でちがっていて、お困りになったことはありませんか。

1. よくある 2. ときどきある 3. あまりない

(5) たとえば、どんな問題が多いですか。

(6) そういう時、どうしていますか。

1. 子どもに聞く 2. 教科書を研究する 3. 人に聞く
4. 参考書や辞書で調べる 5. 自分の考えのほうを主張する

(7) 新しい漢字の書き方や読み方を覚えて、慣れるように努力なさいますか。

1. はい 2. いいえ 3. どちらとも言えない

あなたが
 昔習ったものに
 いま使っているものに
 △ ○ をつけて下さい。

寶物 寶物 遅刻 遅刻 頭腦 頭腦 寝る 寝る 破壊 破壊 闘牛 闘牛 揭示 揭示 突く 突く 一冊 一冊

恵み 恵み 榮養 榮養 價格 價格 著作 著作 黃色 黃色 勳章 勳章 温度 温度 晴天 晴天 盡きる 盡きる 争う 争う

贈り物 贈り物 亂れる 亂れる 東京灣 東京灣 一壘手 一壘手 警視庁 警視廳 鳥の巢 鳥の巢 お礼 お禮 状態 状態 争う 争う

桜 桜 並木 並木 音楽 音楽 権利 権利 参加 参加 兒童 兒童 歸る 歸る 歳暮 歳暮 所屬 所屬 静岡 静岡

真夏 真夏 眞夏 眞夏 戰車 戰車 會社 會社 纖維 纖維 謡曲 謡曲 湿度 湿度 焼く 焼く 豊作 豊作 濱べ 濱べ 暑い 暑い

歴史 歴史 道徳 道徳 拝見 拝見 食器 食器 新派 新派 横顔 横顔 山脈 山脈 金齒 金齒 續く 續く 繪筆 繪筆

総長 総長 總長 總長 解釋 解釋 渡辺 渡辺 辭典 辭典 爐ばた 爐ばた 幽霊 幽霊 抜く 抜く 壓力 壓力 専門 専門 當番 當番

鉦山 鉦山 鐵道 鐵道 政黨 政黨 公團 公團 山奥 山奥 小麦 小麦 記者 記者 展覽 展覽 壹千 壹千 種類 種類

瀧つば 汽車弁 汽車弁 与える 與える 中野驛 中野駅 弱い 弱い 東京港 東京港 百万人 百万人 弁護士 辯護士 海岸 海岸 實物 實物

處分 處分 號外 號外 新緑 新緑 裁判 裁判 穀物 穀物 國語 國語 徵集 徵集 盗む 盗む 検査 検査 節分 節分

米壽 米壽 歡迎 歡迎 雙方 雙方 山岳 山嶽 對立 對立 吳服 吳服 碎く 碎く 増加 増加 藝人 藝人 大關 大関

画伯 畫伯 寫す 寫す 百圓 百圓 金錢 金錢 沈黙 沈黙 圖工 圖工 囲む 囲む 羽根 羽根 單語 單語 聴衆 聴衆

校内 校内 包む 包む 残る 残る 秘密 秘密 守衛 守衛 疊店 疊店 缺席 欠席 體操 體操 犠牲 犠牲 食鹽 食塩

狭い 狭い 録音 録音 被害 被害 博士 博士 希望 希望 憲法 憲法 教育 教育 嚴重 嚴重 述べる 述べる 渋谷 渋谷

蟲ぼし 虫ぼし 蔵王町 蔵王町 ふみ台 ふみ臺 告げる 告げる 率いる 率いる お嬢さん お嬢さん 舊式 旧式 聖人 聖人 輸入 輸入 頼む 頼む

耕作 耕作 濟む 濟む 生糸 生絲 五條 五條 射撃 射撃 獨特 獨特 養蠶 養蠶 泣き聲 泣き聲 自轉車 自轉車 数える 數える

黒い 黒い 晝間 晝間 營業 營業 發明 發明 大仏 大仏 傳記 傳記 淚頭 淚頭 船頭 船頭 余り 余り 點字 點字

應接 應接 隨筆 隨筆 行為 行為 滿月 滿月 淺い 淺い 空氣 空氣 變化 變化 讀む 讀む 証明 証明 雜誌 雜誌

覺悟 覺悟 藥屋 藥屋 輕い 輕い 賣る 賣る 贊成 贊成 翻る 翻る 諸兄 諸兄 獻金 獻金 漢字 漢字 日曜 日曜

貳千 貳千 豫算 豫算 醫院 醫院 假定 假定 觀客 觀客 勞力 勞力 空虛 空虛 拳手 拳手 擴大 擴大 切斷 切斷

遊戲 遊戲 危險 危險 出納 出納 習字 習字 毒物 毒物 乗る 乗る 千両 千両 誤る 誤る 來る 來る 清潔 清潔

急行 急行 鶏 鶏 試驗 試驗 研究 研究 從う 從う 惡人 惡人 練る 練る 經過 經過 名稱 名稱 勸誘 勸誘

毎日 毎日 届ける 届ける 認める 認める 帶 帶 謹賀新年 謹賀新年 帳簿 帳簿 卒業 卒業 働く人 働く人 職員 職員

收入 收入 様子 様子 強い 強い 電燈 電燈 廣島 廣島

8 一冊 ナツ	7 突く ナツ	6 揭示 ナツ	5 闘牛 ナツ	4 破壊 ナツ	3 寝る ナツ	2 頭脳 ナツ	1 遅刻 ナツ	賛成 ナツ	賛成 ナツ	あなたが 今使っているものは、ナに （つけ方の例） ○をつけて下さい。
16 種類 ナツ	15 晴天 ナツ	14 伝記 ナツ	13 大仏 ナツ	12 発明 ナツ	11 著作 ナツ	10 価格 ナツ	9 栄養 ナツ	研究 ナツ	研究 ナツ	
24 争う ナツ	23 状態 ナツ	22 お礼 ナツ	21 壹千 ナツ	20 展覽 ナツ	19 記者 ナツ	18 日曜 ナツ	17 山奥 ナツ	生糸 ナツ	生糸 ナツ	
34 様 ナツ	33 所屬 ナツ	32 歳暮 ナツ	31 歸る ナツ	30 兒童 ナツ	29 参加 ナツ	28 權利 ナツ	27 音楽 ナツ	26 諸兄 ナツ	25 櫻 ナツ	
44 暑い ナツ	43 浜べ ナツ	42 豊作 ナツ	41 焼く ナツ	40 漢字 ナツ	39 謡曲 ナツ	38 乗る ナツ	37 會社 ナツ	36 戦車 ナツ	35 眞夏 ナツ	
54 晝間 ナツ	53 黒い ナツ	52 金齒 ナツ	51 山脈 ナツ	50 横顔 ナツ	49 強い ナツ	48 食器 ナツ	47 拝見 ナツ	46 道徳 ナツ	45 歴史 ナツ	
64 当番 ナツ	63 専門 ナツ	62 圧力 ナツ	61 従う ナツ	60 幽霊 ナツ	59 献金 ナツ	58 辞典 ナツ	57 収入 ナツ	56 解釈 ナツ	55 総長 ナツ	
74 盡きる ナツ	73 鳥の巢 ナツ	72 警視廳 ナツ	71 一壘手 ナツ	70 小麦 ナツ	69 亂れる ナツ	68 公団 ナツ	67 武蔵野 ナツ	66 来る ナツ	65 届ける ナツ	

84 名稱 ナ ナ ツ	83 濟む ナ ナ ツ	82 練る ナ ナ ツ	81 恵み ナ ナ ツ	80 習字 ナ ナ ツ	79 五條 ナ ナ ツ	78 射撃 ナ ナ ツ	77 獨特 ナ ナ ツ	76 海岸 ナ ナ ツ	75 實物 ナ ナ ツ
94 處分 ナ ナ ツ	93 號外 ナ ナ ツ	92 新緑 ナ ナ ツ	91 點字 ナ ナ ツ	90 餘り ナ ナ ツ	89 國語 ナ ナ ツ	88 徵集 ナ ナ ツ	87 盗む ナ ナ ツ	86 醫院 ナ ナ ツ	85 予算 ナ ナ ツ
104 米寿 ナ ナ ツ	103 雜誌 ナ ナ ツ	102 証明 ナ ナ ツ	101 山嶽 ナ ナ ツ	100 對立 ナ ナ ツ	99 吳服 ナ ナ ツ	98 碎く ナ ナ ツ	97 遊戲 ナ ナ ツ	96 藝人 ナ ナ ツ	95 大関 ナ ナ ツ
114 畫伯 ナ ナ ツ	113 寫す ナ ナ ツ	112 湿度 ナ ナ ツ	111 變化 ナ ナ ツ	110 空氣 ナ ナ ツ	109 假定 ナ ナ ツ	108 囲む ナ ナ ツ	107 羽根 ナ ナ ツ	106 検査 ナ ナ ツ	105 聴衆 ナ ナ ツ
124 校内 ナ ナ ツ	123 包む ナ ナ ツ	122 挙手 ナ ナ ツ	121 秘密 ナ ナ ツ	120 守衛 ナ ナ ツ	119 疊店 ナ ナ ツ	118 缺席 ナ ナ ツ	117 體操 ナ ナ ツ	116 惡人 ナ ナ ツ	115 食鹽 ナ ナ ツ
134 狭い ナ ナ ツ	133 隨筆 ナ ナ ツ	132 應接 ナ ナ ツ	131 博士 ナ ナ ツ	130 満月 ナ ナ ツ	129 行爲 ナ ナ ツ	128 教育 ナ ナ ツ	127 嚴重 ナ ナ ツ	126 賣る ナ ナ ツ	125 澁谷 ナ ナ ツ
144 帶 ナ ナ ツ	143 政黨 ナ ナ ツ	142 温度 ナ ナ ツ	141 軽い ナ ナ ツ	140 鑛山 ナ ナ ツ	139 急行 ナ ナ ツ	138 舊式 ナ ナ ツ	137 聖人 ナ ナ ツ	136 鶏 ナ ナ ツ	135 頼む ナ ナ ツ
154 瀧つば ナ ナ ツ	153 汽車弁 ナ ナ ツ	152 与える ナ ナ ツ	151 東京港 ナ ナ ツ	150 百萬人 ナ ナ ツ	149 弁護士 ナ ナ ツ	148 お嬢さん ナ ナ ツ	147 泣き聲 ナ ナ ツ	146 謹賀新年 ナ ナ ツ	145 数える ナ ナ ツ

あなたが現在ふつうに使っているものに
○をつけて下さい。
両方使う場合は、多い方に◎を、少ない
ほうに○をつけて下さい。

8 に於いて	7 子供等	6 からだ	5 きょう	4 世のため	3 脇わき	2 なぜ	1 御返事
16 あなた (貴方(貴女))	15 どれほど	14 袖そで	13 とにかく	12 または	11 まだ	10 あとから	9 俺おれ
26 ある日	25 殆んど	24 君たち	23 部屋へや	22 縫いしろ	21 矢張り	20 まず	19 おります
36 若い頃	35 どこ	34 この辺	33 家の人	32 えり	31 いずれ	30 一日ごとに	29 ほしい
46 たとえば	45 その他	44 如何に	43 門をはいる	42 頂く	41 何時も	40 すそ	39 一寸
56 僕ぼく	55 時が経つ	54 その儘	53 わたし	52 勿論	51 我が国	50 ふたり	49 今年
							48 お母さん
							47 身頃
							37 呉れる
							27 貰う
							17 来る筈
							18 致します
							19 致します
							20 致します
							21 致します
							22 致します
							23 致します
							24 致します
							25 致します
							26 致します
							27 致します
							28 致します
							29 致します
							30 致します
							31 致します
							32 致します
							33 致します
							34 致します
							35 致します
							36 致します
							37 致します
							38 致します
							39 致します
							40 致します
							41 致します
							42 致します
							43 致します
							44 致します
							45 致します
							46 致します
							47 致します
							48 致します
							49 致します
							50 致します
							51 致します
							52 致します
							53 致します
							54 致します
							55 致します
							56 致します

_____課 (係) 男・女 (○で囲む) 生まれた年 (○で囲む) 明・大・昭 _____ 年
 いちばん最後に行った学校名 _____ 小学校時代の居住地 _____

I 次の一組の書き方のうち、あなたは
 どちらの方が読みやすいと思います
 か。下の五つの答の中から、あてはま
 ると思うものを選んで、その番号を
 () の中に書きこんでください。

答	1. Aが読みやすい
	2. Bが読みやすい
	3. どちらも読みやすい
	4. どちらも読みにくい
	5. どちらとも言えない

また、あなたが書くとしたら、どちら
 の書き方をしますか。下の五つの答の中
 から選んで、その番号を の中に書
 きこんでください。

答	1. Aで書く
	2. Bで書く
	3. どちらも書く
	4. どちらも書かない
	5. どちらとも言えない

- | | | | |
|---|--------------------------------|-----|----------------------|
| ア | { A きょうは よい天気
B 今日は よい天気 | () | <input type="text"/> |
| イ | { A おとうさん おかあさん
B お父さん お母さん | () | <input type="text"/> |
| ウ | { A ふたりで 勉強する
B 二人で 勉強する | () | <input type="text"/> |
| エ | { A むだを省く
B 無駄を省く | () | <input type="text"/> |
| オ | { A ガラスが 割れる
B 硝子が 割れる | () | <input type="text"/> |
| カ | { A さらを 洗う
B 皿を 洗う | () | <input type="text"/> |
| キ | { A 手をふく
B 手を拭く | () | <input type="text"/> |

II 次の一組の書き方のうち、いちばん読みやすいと思う書き方を選んで、その番号を
 () の中に書きこんでください。

また、あなたが書くとしたら、どの書き方を選びますか。いちばんふつうの書き方
 を一つだけ選んで、その番号を の中に書きこんでください。

- | | | | |
|---|--|-----|----------------------|
| ア | { 1. 道が こおる
2. 道が 凍る
3. 道が 氷る | () | <input type="text"/> |
| イ | { 1. けがを 恐れる
2. ケガを 恐れる
3. 怪我を 恐れる | () | <input type="text"/> |
| ウ | { 1. けずりくず
2. 削り屑
3. 削屑 | () | <input type="text"/> |

Ⅲ 次にあげた、一組になっていることばの中には、同じ物あるいは同じ事柄をさしている組と、そうでない組とがあります。同じ物（事柄）をさしている組だけを選んで、□の中に○をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8
□	□	□	□	□	□	□	□
颱 台	熔 溶	世 興	沈 沈	工 鉦	制 制	市 私	研 研
風 風	接 接	論 論	殿 殿	業 業	御 馭	立 立	摩 磨
9	10	11	12	13	14	15	
□	□	□	□	□	□	□	
押 捺	浸 浸	科 化	乱 濫	総 創	新 振	車 車	
印 印	食 蝕	学 学	費 費	意 意	興 興	両 輛	

Ⅳ 次にあげる各組は、同じことばを、二通り（あるいは三通り）の漢字を使って書き表わしたものです。上か下かどちらか一字が、字の形が違います。

あなたは、どちらを学校で習ったと思いますか、（ ）の中に○をつけてください。（どれも習ったと思うときは、どれにも○をつけてください）どれかわからないときは、○をつけないでください。

また、あなたがいま気楽に書くとしたら、どの書き方になりますか。□の中に○をつけてください。（どれも使うときは、どれにも○をつけてください）

1	2	3	4	5	6	7
遅 遅	掲 掲	価 価	温 温	権 権	参 参	濕 濕
刻 刻	示 示	格 格	度 度	利 利	加 加	度 度
() ()	() ()	() ()	() ()	() ()	() ()	() ()
□ □	□ □	□ □	□ □	□ □	□ □	□ □
8	9	10	11	12	13	14
拜 拜	当 当	専 専	実 実	検 検	缺 欠	守 守
見 見	番 番	門 門	物 物	査 査	席 席	衛 衛
() ()	() ()	() ()	() ()	() ()	() ()	() ()
□ □	□ □	□ □	□ □	□ □	□ □	□ □
15	16	17	18	19	20	
頼 頼	應 應	證 證	帳 帳	職 職	収 収	
む む	接 接	明 明	筭 簿	員 員	入 入	
() ()	() ()	() ()	() ()	() ()	() ()	
□ □	□ □	□ □	□ □	□ □	□ □	

調 査 票

 国立国語研究所
 言語効果研究室
 1963年7月

明治 大正 昭和	年生	最終卒業	旧制	大 学 中・女学校 専門学校 小 学 校	会社
		学 校	新制	大 学 高等学校 短 大 中 学 校	
					課

— お 願 い —

1. お忙しいところ、まことに恐縮ですが、お答えくださいますようお願い申し上げます。
2. お名前はお書きくださらなくても結構です。しかし、この調査は、今後の国語政策のための資料となるものですから、真実をお聞かせくださいますようお願い申し上げます。
3. 表紙をあわせて5ページあります。各ページともご記入ください。ただし、お子さまのない方は、2ページの下の部分だけは答えてくださらなくても結構です。

次の組合せは、それぞれどちらを使いますか。使う方を○で囲んでください。

(これは、3, 4ページの答え方と違っていただきますので、ご注意ください。)

- | | | | |
|--------------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| 1 { (ミ) 日曜
(ト) 日曜 | 2 { (ケ) 午後
(チ) 午後 | 3 { (ロ) 権利
(リ) 権利 | 4 { (ビ) 国際
(コ) 国際 |
| 5 { (ホ) ヤール巾
(シ) ヤール幅 | 6 { (ニ) 職場
(ロ) 職場 | 7 { (ホ) 所属
(オ) 所属 | 8 { (ハ) 製鉄
(ヲ) 製鉄 |

調査研究の成果

I 戦後の国語施策についての知識・

関心・意見 (永 野)

国民は、戦後の国語施策について、あるいは、その結果起こった文字や表記法の社会的変改について、どのくらい知っているのだろうか。また、どう思っているのだろうか。

そもそも、政府が国語改良のための施策を進めようとしても、国民一般はそれについての知識を得る機会に乏しく、施策とは直接かかわりなく日常の読み書き生活を営んでいるものが大部分であるといえる。しかし、施策がいつどのようにして行なわれたかとか、どんな内容のことかとかいった、詳しい、正確な知識はなくても、近ごろ学校で教える文字は昔とちがうとか、戦後の新聞は読みやすくなったとか、最近はずがやさしくなったとかいうような、ぼくぜんとした意識をもつ人は、かなりいるはずである。とくに平素文字に親しむことの多い者は知識や関心をもつ機会が少なくないだろうし、また、意見もあるであろう。

とくに、子どもを通して戦後の新しい表記法に接する母親や、職場を通してそれに接する会社員には、それぞれに変改への対処のしかたがあるだろうし、意見も強いかもしれない。

そういった国語施策についての国民の知識・関心・意見をさぐるための調査の結果を、以下にまとめて述べる。

A 当用漢字についての知識

面接調査における質問と答えとの集計結果を抜粋してまとめてみると、次のようになる。

1 新字体になったことを知っているか

〔質問〕 今、新聞や教科書では「学校」とか「三条」とか書いてありますが、昔は「學校」とか「三條」とか書いてありました。このことを、ご存じですか。(調査票91)

この質問に対して「知っている」と答えた人を学歴別・年齢別に集計すると、第8表のようになる。（栖吉地区は、人数も少なく、また、ほとんどが義務教育の学歴の人なので、一括して集計し、参考のため掲げるにとどめることとした。以下同じ。）

第8表 新字体になったことを知っている人と答えた人(%)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖吉
義務教育	100	100	90	90	75	75	86	80
旧中・新高	94	86	100	89	94	63	91	
大学・高専	100	86	88	97	100	100	96	
全 体	96	94	94	90	83	74	89	

この表から、次のことがわかる。

- (1) たいていの人が知っている。
- (2) 知らないのは、学歴が低いほうの、年齢の高い層である。

2 漢字制限について知っているか

〔質問〕今は、新聞や教科書では「アイサツ」を「あいさつ」とひらがなで書いています。昔はこれを「挨拶」という漢字で書いたものです。このように、今は、新聞や教科書などでは、この漢字は使うとか、この漢字は使わないとかいうふうに、使う漢字の範囲をきめています。このことをご存じですか。（調査票92）

この質問に対して「知っている」と答えた人を学歴別・年齢別に集計すると、第9表のようになる。

第9表 漢字制限について知っている人と答えた人(%)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖吉
義務教育	0	40	50	75	50	63	53	30
旧中・新高	65	86	78	59	71	50	68	
大学・高専	100	71	94	94	100	100	95	
全 体	46	59	66	72	60	63	62	

この表から、次のことがわかる。

- (1) 全体としては、29～43才の中堅層が、比較的知っている。

(2) 学歴の高いほど、一般によく知っている。

(3) もっとも知らないのは、学歴の低い、若い層（戦後の教育を受けた人たちだから、戦前のことを知らないのは当然といえば当然）である。

なお、この表には表われていないが、学歴の低い層では、すべての年齢を通じて、女子のほうが知らない。

3 「当用漢字」という名称を知っているか

2の質問に対して「知っている」と答えた人にだけ次の質問をした。

〔質問〕 その漢字の表を何というか、ご存じですか。（調査票92.2）

この質問に対する答えを類別して、学歴別・年齢別に集計すると、第10表のようになる。

第10表 漢字の表の名称の答えの類別(%)

	義務 教育	旧中 新高	大学 高専	計	栖吉	15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才
当用漢字	41	73	78	59	67	78	77	78	56	47	26
制限漢字	0	3	8	2	0	5	0	6	0	2	1
新 漢 字	2	3	3	2	0	0	0	4	6	1	1
知らない その他	57	23	12	37	33	17	24	12	39	50	72

この表から、次のことがわかる。

(1) 「当用漢字」の名称を半数以上が知っている。

(2) 学歴が高く、年齢が低いほどよく知っている。

B 現代かなづかいについての知識

面接調査における質問と答えとの集計結果を抜粋してまとめてみると、次のようになる。

1 現代かなづかいになったことを知っているか

〔質問〕（現代かなづかいと歴史的かなづかいと並べて書いたものを見せて）こちらは、いまの新聞や教科書で使っているかなの使い方で、こちらは戦争前の使い方ですが、昔と今で、このようにかなの使い方がちがっていることをご存じですか。（調査票93）

この質問に対して「知っている」と答えた人を学歴別・年齢別に集計する

と、第11表のようになる。

第11表 現代かなづかいになったことを知っていると答えた人(%)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖吉
義務教育	100	90	80	80	69	75	80	55
旧中・新高	94	93	94	78	100	88	91	
大学・高専	100	100	100	94	100	100	98	
全 体	96	92	88	81	81	79	86	

この表から、次のことがわかる。

- (1) だいたいよく知っている。
- (2) 大学・高専，旧中・新高の学歴層は，ほとんどが知っている。
- (3) 義務教育の学歴層では，年齢の高いほうに知らない人が幾分いる。

2 「歴史的かなづかい」「旧かなづかい」の名称を知っているか

1の質問に対して「知っている」と答えた人にだけ次の質問をした。

〔質問〕 昔のかなづかいを何と言うか，ご存じですか。(調査票93.2)

この質問に対する答えを類別して，学歴別・年齢別に集計すると，第12表のようになる。

第12表 昔のかなづかいの名称の答えの類別(%)

	義務教育	旧中高専	大学	計	栖吉	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才
歴史的かなづかい	0	3	9	2	0	6	1	1	2	1	0
旧かな(づかい)	19	39	68	31	0	32	49	40	24	20	33
知らないその他	81	59	25	67	100	65	51	60	76	79	67

この表から，次のことがわかる。

- (1) 全体として名称はあまり知らない。
- (2) 「歴史的かなづかい」という名称は，ほとんど知らない。
- (3) 「旧かな(づかい)」の名称を知っている人も3分の1以下である。
- (4) 学歴の高い層ほど知っている。
- (5) 年齢差はあまりない。

3 「現代かなづかい」「新かなづかい」の名称を知っているか

2の質問をした人には，次の質問もした。

〔質問〕 今のかなづかいを何と言うか、ご存じですか。(調査票93.3)

この質問に対する答えを類別して、学歴別・年齢別に集計すると、第13表のようになる。

第13表 今のかなづかいの名称の答えの類別(%)

	義務 教育	旧中 新高	大学 高専	計	栖吉	15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才
現代かな づかい	0	11	15	6	0	16	3	5	3	2	1
新かな (づかい)	38	47	72	44	27	31	74	53	45	34	38
知らない その他	63	42	14	50	73	53	23	42	52	64	62

この表から、次のことがわかる。

- (1) 「現代かなづかい」という名称は、あまり知っていないが、「歴史的かなづかい」という名称に比べて、わずかながら知っている人が多い。
- (2) 「新かなづかい」の名称とあわせて、知っている人は半数である。
- (3) どちらの名称も、学歴の高いほうが知っている。
- (4) 年齢差は、とくに目立った傾向が見いだせないが、「現代かなづかい」の名称は、15～22才の戦後の教育を受けた年齢層が、他の層に比べて幾分多く知っており、「新かな(づかい)」の名称は、23～33才の比較的若いほうの層が、高い年齢層よりも多少知っている者が多いと認められる。

C 子どもとの食いちがいに対する 意識と処理法

自分の習った昔の表記法と、子どもの習っている今の表記法との食いちがいに関する質問に答えてもらったのは、母親調査(長岡)・母親調査(東京)・会社員調査(東京)においてである。

1 母親の場合

長岡調査と東京調査とで、質問を少し変えたので、べつべつに述べる。

(1) 長岡の母親の場合

〔質問〕 自分が学校で覚えた漢字と、お子さまが学校で習っている漢字とが、書き方や読み方などの点でちがっていて、お困りになったことは

ありませんか。(調査票(4))

これに対する答えを学歴別・年齢別に集計すると、第14表のようになる。

第14表 食いちがいで困ったことの有無(%)：母親(長岡)

	義務教育	旧女新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	長子が小 3年以下	計
よくある	24	28	24	15	29	33	26	27
ときどきある	59	62	76	61	64	60	49	63
あまりない	7	9	0	17	5	7	17	8
無答その他	9	1	0	7	2	0	9	3

全体として90%が“困った”経験をもっているわけである。

学歴別に見ると、学歴の高いほど“困った”経験が多く、旧制女専(女子師範を含む)・新制短大以上を出た人は、100%「よくある」ないし「ときどきある」と答えている。

年齢別に見ると、年の多い層ほど「よくある」がふえている。若い人は総体的に子どもの学年が低くて漢字の問題にあまり深くは悩まされないのかと一応思われるが、必ずしもそうではないらしい。いま、年齢に関係なく、長子の学年が小学校3年以下である人たちの答えを集計してみると、「よくある」「ときどきある」の和においては、27～33才の若い年齢層とほとんどちがわないが、「よくある」だけについてみると、ぐんとふえている。このことは、子どもの学年の低い、若い母親は、現にこの問題で頭を痛めているという意識が強く、若くても子どもの学年が上の母親は比較的この問題に慣れている、と解釈することができるのではないかと思われる。つまり、自分の年齢が若いということと、子どもの学年が低いということとは、条件として異なるのである。

〔質問〕たとえば、どんな問題が多いですか。(調査票(5))

これに対しては192名(全体の79%)が答え、40名以上が2つ以上の項目を書いている。前の質問が“漢字”について尋ねたものなので、「字体」と答えた人が多かったが、「送りがな」「かなづかい」「筆順」という答えもかなりあった。実数および答えた人数に対する%は次のとおりである。

○字体……………121名(63%)(単に「漢字」と書いたものを含む)

○送りがな……………35 (18%)

○かなづかい……………32 (17%)

○筆順…………… 30 (16%)

○よみ方(音訓制限)…… 12 (6%)

○発音…………… 2 (1%)(クワンケイのような問題)

具体例をあげた人がかなり多く、中には、「昔略字を書くとき書き取りで×にされた。それが今では正字となっているので戸まどう。」と答えた人などもいた。

〔質問〕 そういう時、どうしていますか。(調査票(6))

これに対する答えを集計すると、第15表のようになる。

第15表 食いちがいで困った時、どうするか(%)

	義務旧女大 教育新高専		27~34才	35~44才	45~54才	55才以上	長子 小3以下	計
子どもに聞く	35	35	12	19	37	37	28	33
教科書を研究する	30	51	48	56	38	33	51	46
人に聞く	0	4	4	2	5	0	4	3
参考書や辞書で調べる	50	53	76	46	60	50	45	55
自分の考えのほうを主張する	2	0	0	0	1	0	0	0
無答その他	33	24	4	9	33	3	11	24

(ひとりで2つ以上の答えを書いた人があるので、全体の和は100%を越える。この種の質問では、以下同様である。)

さすがに我を張る人はほとんどない。

学歴別にみると、学歴の高いほど「参考書や辞書で調べる」「教科書を研究する」が多く、学歴の低いほうが「子どもに聞く」が多い。

年齢別にみると、若い人ほど「子どもに聞く」よりも「教科書を研究する」態度が強く、とくに長子が小学校3年以下の母親は、その率が51%とぐんと高くなる。年の多い人ほどその逆で「子どもに聞く」が多いが、これはあながち“お年のせい”ではなく、年の多い人は総体に子どもの学年も高くて聞くだけのものを持っていると解釈すべきものかもしれない。しかし、長子が小学3年以下の層が、27~33才の若い年齢層に比べて、「子どもに聞く」が多くなっているところからすれば、「子どもに聞く」という答えの中には、「子どもと一緒に勉強する」というものもはいつているとも考えられ、「教科書を研究する」の数の相対的に高いことも考え合わせると、この層の“子ども”や“教科書”への関心の強さが理解されるのである。

〔質問〕 新しい漢字の書き方や読み方を覚えて、慣れるように努力なさいますか。(調査票(7))

これに対する答えを集計すると、第16表のようになる。

第16表 新しい表記法に慣れるように努力するか(%)

	義務教育	旧女新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	長子が 小3以下	計
はい	78	78	80	76	80	70	81	78
いいえ	4	2	8	2	3	3	0	3
どちらとも言えない	11	18	12	15	14	23	13	16
無答その他	7	3	0	7	2	3	6	3

「いいえ」が非常に少ないのは当然であろう。子どもの勉強を見てやる、あるいは、子どもと一緒に勉強する必要を感じている人が多いのである。とくに長子が小学3年以下の母親では「はい」がもっとも高い数字を示している。また、PTAの集会によく出る母親、中でもわれわれのこのような調査にわざわざ出席してくれるような人は、教育熱心でもあり、意識が高いともいえるのである。

(2) 東京の母親の場合

〔質問〕 自分が学校で覚えた漢字と、お子さまが学校で習っている漢字とが、書き方や読み方などの点でいろいろちがっていることをご存じですか。(調査票(4))

これに対する答えを、学歴別・年齢別・長子の学年別に集計すると、第17表のようになる。(長子の学年による層別を新しく加えたのは、長岡調査の経験から、そのことが自分の年齢とは別の条件として働いていると予想されたからである。)

第17表 昔の漢字と今の漢字とのちがいを知っているか(%)

	義務教育	旧女新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	長子の学年				計
							小3以下	小4～5	中1～3	高校以上	
知っている	100	97	100	100	95	100	98	100	100	91	97
知らない	0	3	0	0	5	0	2	0	0	9	3

ほとんどの人が知っており、学歴差も年齢差もあまりない。

〔質問〕 (知っている、と答えた方は) そのことを初めて知ったのは、お子さまが学校にはいつからですか、それとも、その前から知っていましたか。(調査票(5))

第18表 昔と今のちがいを知ったのは、子どもの入学前か入学後か(%)

	義務 教育	旧女 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の学年				計
							小3 以下	小4 ～6	中1 ～3	高校 以上	
子どもが学校にはいる前 から	14	54	75	71	50	33	78	58	36	9	55
子どもが学校にはいって から	86	43	25	24	48	67	18	42	64	86	42
よくわからない	0	2	0	2	2	0	2	0	0	5	2
無答その他	0	1	0	2	0	0	2	0	0	0	1

全体としては、子どもの入学前に知っていた人のほうが多いわけだが、学歴の高い層ほど入学前に知っており、学歴の低い層ほど入学後に知った人が多い。一般的教養、この問題への関心、平素の読み物などの相違の反映とみることができよう。

年齢別では、若い層ほど入学前に知り、年齢の高い層ほど入学後に知ったとなっている。また、長子の学年の低い人ほど入学前に知っていた人が多く、長子の学年の高い人ほど入学後に知った人が多くなる。このことについては、国語政策が実施されて日の浅いころは、世間的にあまりこの問題が知られなかったけれども、だんだんと世の中に浸透し、ジャーナリズムでも目立って取りあげられるようになった影響があると解釈できるだろう。事実、次の質問の答えの中にジャーナリズムにおける新旧の賛否の論争のことにふれたものが二三あった。

〔質問〕（お子さまが学校にはいる前から知った方は）何でお知りになりましたか。（調査票（6－1））

第19表 子どもの入学前に何で知ったか(%)

	義務 教育	旧女 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の学年				計
							小 以 下	小 3 ～ 6	中 1 ～ 3	高 校 以 上	
新聞や本で読んだ	100	58	60	59	58	100	60	57	50	62	59
人に聞いた	0	19	13	11	26	0	17	19	25	31	17
その他	0	23	27	30	16	0	24	24	25	8	23

「人に聞いた」というのは、母親どうしの知識の伝え合いという経路が最も多く、ついで、学校や幼稚園の先生から聞いたもの、妹が学校へはいつてから知ったとか、知り合いの中学生から聞いた、さらに、主人が新聞記者というケー

スや、出版関係の知人に教えられたといったものもある。

「その他」の中には、単に「その他」の所に○をつけただけのものに、無答も加えてある（以下同じ）が、とくに記入した答えもいくらかあった。その中で最も多いのは「仕事の関係」である。たとえば、「日曜学校の教師をしていた」「役所に勤務している」「本の編集をしていた」などである。また、「自分が学生時代に切替えがあった」というのが若い年齢層にいくぶんある。そのほか、「弟妹の教科書を見て知った」とか、「子どもの名前をつけることを話し合ったとき知った」とか、「登記関係の書類を作る必要があったとき知った」とかいうのもあった。

〔質問〕（お子さまが学校にはいってから知った方は）いつ、どのようにして知りましたか。（調査票（6－2））

これに対する答えを集計すると、第20表・第21表のようになる。

第20表 子どもの入学後いつ知ったか(%)

子どもが	1年生の時……63	子どもが3年生になるまでには、大多数が
	2年生の時……30	この問題に直面しているわけである。この
	3年生の時…… 3	ことは、これまで述べてきたいくつかの結
	5年生の時…… 3	果のように、長子が小学3年生以下の母親

の意識の高さと考え合わせると、興味深い問題であるといえよう。

第21表 子どもの入学後何で知ったか(%)

	義務 教育	旧女 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の学年					計
							小 以	3 下	小 4 ～	中 6 ～	1 高 3 以	校 上
教科書を見て	57	65	50	60	68	42	75	59	50	62		62
子どもに質問されて	43	25	20	20	24	42	17	29	20	31		26
そ の 他	0	10	30	20	8	17	8	12	30	8		12

全体としては「教科書を見て」が3分の1近いのだが、義務教育の学歴層、44～55才の年齢層では、「子どもに質問されて」が、他の層に比べて多い。また、長子が小3以下の層で「教科書を見て」がぐんと多いことは、この層の意識の高さを反映しているものと考えられる。

その他には、「学校で研究会があった」「先生に聞いた」など学校を通してのものと、「子どもの宿題を見て」「子どもが書いているのを見て」など子ど

もを通してのものと、ほぼ同数あった。

〔質問〕 今の漢字の書き方や読み方を覚えて、子どもに合わせようとなさったことがありますか。(調査票(7))

第22表 子どもに合わせようとしたことがあるか(%)

		義務 教育	旧女 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の学年						計
								小 以 下	3小 ～	4中 ～	1高 ～	3以 上		
は	い	100	89	78	93	82	100	90	94	57	92	88		
い	い え	0	3	9	2	6	0	2	3	14	4	4		
どちらとも言え ない		0	7	4	5	7	0	8	3	14	0	6		
そ の 他		0	1	9	0	4	0	0	0	14	4	3		

長岡の母親の場合と同様、「いいえ」が少ないが、「どちらとも言えない」が減って、「はい」がふえている。東京の母親のほうが、肯定的な、あるいは、はっきりした意見を表明しているわけである。もっとも、長岡での質問は“努力するか”であり、東京での質問は“合わせようとしたことがあるか”だから、そのニュアンスの差が反映したものかもしれない。現に、「いいえ」の答えに「今まではなかった」とわざわざ書きそえたものがあった。

〔質問〕 (右の質問で「はい」と答えた方は) どのようにして覚えようとなさいますか。(調査票(8))

第23表 今の書き方や読み方をどのようにして覚えるか(%)

	義務 教育	旧女 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の学年						計
							小 以 下	3小 ～	4中 ～	1高 ～	校 上		
子どもに聞く	57	45	67	41	49	89	33	50	38	86	50		
教科書を研究する	57	59	61	54	71	11	60	67	75	41	59		
人に聞く	0	9	17	7	11	11	7	3	13	23	10		
参考書や辞書で調べる	57	41	61	39	44	89	31	50	88	55	46		
その他	0	9	11	12	7	0	9	13	0	5	9		

長岡の場合と比べると、全体としては「参考書や辞書で調べる」が少なく、順位に変動がある。

学歴別では、長岡の場合とちがって、どの項目でも学歴層の間にさほどの大きな開きのないこと、また、学歴の高い人にかえて「子どもに聞く」の多いことが注意される。「聞く」ということの意味にもよるが、勉強という面での

子どもとの接触は、長岡の母親よりも東京の母親のほうが、機会が多いのかもしれない。

年齢別では、若い層が「子どもに聞く」や「辞書や参考書で調べる」よりも「教科書を研究する」傾向が強い点は、長岡とちょっと似ている。とくに、中年年齢層が他より多いのは、共通の特徴である。ただ、長岡では、この年齢層はすべての項目にわたって、他の年齢層よりも多く、あらゆる面での関心の強さ・意識の高さを示している。また、年の多い人は、「教科書」よりも「子どもに聞く」や「辞書や参考書で調べる」のほうがぐんとふえる。これは、長岡よりも傾向がはっきりしている。

長子の学年別では、中1～中3の層が、「教科書を研究」したり、「参考書や辞書で調べ」たりする傾向が見られる。

なお、東京でも長岡でも、「人に聞く」が低い学歴層で皆無なのは、「聞く」の意味にもよるが、注意すべき点である。この項目では、東京のほうが長岡よりも多く、また、高い学歴層で相当数あるのは、学校のPTAの研修会における講演や講習などに接する機会も含まれているものと見られる。「その他」では、「新聞」が圧倒的に多い。

2 会社員の場合

会社員調査（東京）では、母親調査（東京）と同じ質問用紙を用いたのであるが、回答者は非常に少なかった。とくに、女子は、事務員21名中2名、工員20名中1名であった。これは、いずれも若い、未婚の女性が大部分であるためである。男子でも未婚者はもちろん回答を出しうるはずはなく、事務員59名中35名、工員30名中14名と少数であった。回答も空欄が目だつので、男子の事務員・工員を合わせて、集計はすべて実数で示すこととする。（質問は省略し、集計表のみ掲げる。）

第24表 昔の漢字と今の漢字とのちがいを知っているか(実数)

	義務教育	旧中新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	計
知っている	11	7	20	2	22	14	38
知らない	1	0	2	1	1	1	3

第25表 昔と今のちがいを知ったのは子どもの入学前か入学後か(実数)

	義務教育	旧中新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	計
子どもが学校にはいる前から	8	3	10	2	14	5	21
子どもが学校にはいってから	3	3	8	0	6	8	14
よくわからない	0	0	1	0	0	1	1
無答その他	0	1	1	0	2	0	2

やはり回答者の大多数は、施策後の変化を知っており、年齢が低い層ほど、子どもの入学前に知っていたものが多い傾向がある。この点は、母親の場合と同様であるが、学歴については、母親に見られたような傾向はない。

同じ年齢層の母親と比べると、子どもの入学前に知っていたものの割合がずっと大きい。このことについては、次の2つが考えられる。

- (i) 男子は、子どもを通じてよりも、職場で知る機会のほうが多い。
- (ii) 男子は女子より、年をとってから子どもが学校へ行く。

第26表 子どもの入学前に何で知ったか(実数)

	義務教育	旧中新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	計
新聞や本で読んだ	7	3	10	1	15	4	20
人に聞いた	1	0	1	0	2	0	2
その他	0	0	1	0	0	1	1

第27表 子どもの入学後何で知ったか(実数)

	義務教育	旧中新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	計
教科書を見て	3	2	6	0	7	4	11
子どもに質問されて	1	1	3	0	0	5	5
その他	3	1	1	0	4	1	5

第28表 子どもに合わせようとしたことがあるか(実数)

	義務教育	旧中新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	計
はい	10	5	6	2	16	3	21
い	1	1	7	1	3	5	9
え	1	1	9	0	4	7	11
い	0	0	0	0	0	0	0

母親の場合と比べてみると、「何で知ったか」はだいたい母親と同様であるが、「子どもに合わせようとしたことがあるか」に対して、「いいえ」が相対的に多いこと、とくに高い学歴層・高い年齢層に多いことが特徴的である。これは、おもに事務員の答えで、事務員だけに限ると、「はい」9、「いいえ」8、「どちらとも言えない」10で、三者伯仲している。ホワイトカラーとしての見識の高さか、父親としての子どもの教育への無関心さの反映か、どちらかであろうと思われる。おそらく、教育のことは母親にまかせるという意識のあらわれと見ることができるのではなからうか。事実、子どもの教科書をあけて見る機会をもつ父親はきわめて少ない、とくに高年齢層においてそうである、というのが実情ではなからうか。

第29表 今の書き方や読み方をどのようにして覚えるか(実数)

	義務教育	旧中新高	大学高専	27～33才	34～43才	44～55才	計
子どもに聞く	1	0	2	0	1	2	3
教科書を研究する	2	0	3	0	5	0	5
人に聞く	0	1	0	0	1	0	1
参考書や辞書で調べる	8	4	1	2	10	1	13
その他	0	1	0	0	0	1	1

回答数が少ないので、特徴をつかむこと、あるいは解釈を加えることはむずかしく、また避けるべきであろうが、「子どもに聞く」や「教科書を研究する」に比べて「参考書や辞書で調べる」が多いことは、長岡の母親と同じ傾向であり、東京の母親とは反対である。

D 国語施策についての意見

面接調査・母親調査（東京）・会社員調査（東京）における質問と答えとの集計結果をまとめてみると、次のようになる。

1 一般市民の意見

面接調査は、長岡市のあらゆる職業層・学歴層・年齢層・男女にわたっての抽出調査なので、一般市民の代表意見と考えることができる。

〔質問〕 戦争前と比べて、ことばや文字がずいぶん変わったということが言われますが、昔と今と比べてどちらがいいとお考えですか。（調査

票94)

これに対する答えを類別して、学歴別・年齢別に集計すると、第30表のようになる。

第30表 国語施策についての一般市民の意見(%)

	義務教育新	旧中高	大学専	計	栖吉	15~22才	23~28才	29~33才	34~43才	44~53才	54~69才
今がよい	69	75	76	72	85	62	74	74	77	63	82
昔がよい	9	4	4	7	0	2	0	1	13	6	11
どちらともいえない わからない	13	10	12	12	0	6	9	20	7	25	5
どちらもよい	10	10	8	10	15	30	17	5	3	6	1

この表から、次のことがわかる。

- (1)「今がよい」が多い。
- (2)「昔がよい」は少なく、1割に達しない。
- (3)「今がよい」の意見には、学歴差も年齢差もあまりない。
- (4)「昔がよい」の意見は、若い層にはほとんどなく、年齢の高いほうに幾分ある。また、学歴の低いほうに少しある。
- (5)「どちらもよい」の意見は、「昔がよい」より多く、また、若い層ほど多くなる。

2 母親の意見

〔質問〕 戦後の国語政策で漢字の書き方や読み方が変わったことについて、どう思いますか。(調査票(9))

この質問に対する答えを類別して、学歴別・年齢別・長子の学年別に集計すると、第31表のようになる。いろいろな形での賛成意見を「よい」、反対意見を「わるい」で表わす。

また、それぞれの答えに理由をつけたものが少なくなかったもので、それらを「子どものためによいことだ」「子どもが困るからわるい」「自分が困るからわるい」の類型として、とくに区別して集計してみた。

第31表 国語施策についての母親の意見(%)

			義務 教育	旧中 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の学年					計	
									小3 以下	小4 ～6	中1 ～3	高校 以上			
よ	い	子どものために よいことだ	71	53	44	65	50	20	60	46	63	48	53	60	
い			0	8	6	5	7	10	10	3	13	5	7		
わ	る	子どもが困る	0	4	22	0	9	20	5	6	25	5	7	24	
る			0	29	3	20	6	39	3	17	2	25	10	3	
い		自分が困る	29	13	11	14	14	10	10	23	0	10	14		
ど	ち	どちらともい えない・わ からない	0	0	20	11	11	14	14	17	17	30	30	18	
			0	0	20	11	11	14	14	17	17	30	30		

この表から、次のことがわかる。

- (1) 全体としては「よい」が多く、「わるい」が少ない。
- (2) 「よい」は、学歴が低く、年齢が若い層ほど多く、反対に「わるい」は、学歴が高く、年齢が高い層ほど多くなる傾向がある。とくに44～55才の年齢層では、「わるい」が「よい」よりも多い。
- (3) 義務教育の学歴層は、「よい」「わるい」の意見がはっきりしている。
- (4) 「子どもが困るからわるい」は、大学高専の学歴層・44～55才の年齢層・長子が高校以上の層に、より多く見られる。
- (5) 「自分が困るからわるい」は、義務教育の学歴層・27～43才の年齢層・長子が小学校高学年の層に、より多く見られる。
- (6) 長子が中学生の層では「よい」「わるい」の意見がはっきりしていて、「よい」が他の層より多く、しかも「子どものためによいことだ」の意見が、より多く見られる。

「わるい」とする意見の理由のうち、注意すべきものを摘記すると、「自分が学生時代に苦心したことが役に立たなくなった感じがする」「小さい時覚えたものはなかなか変えられない」「一人・今日・お父さん」のようなよく使われる書き方ができなくなったのは割りきれない」「子どもが戦前の本を読めない」などである。

3 会社員の意見

〔質問〕（母親の場合と同じ）

男女合わせて、事務員80名のうち、無答54名（67.5%）、同じく工員50名のうち、無答37名（74%）で、無関心の者が著しく多かった。無関心というより

も、答えられないといったほうが適切かもしれない。つまり意見がないのである。とくに女子は、答えた者が事務員21名中1名、工員20名中ゼロであった。

第32表 国語施策についての
会社員の意見(実数)

	事務員	工 員	計
よ い	18	10	28(72%)
わ る い	3	1	4(10%)
どちらともいえない・わからない	5	2	7(18%)

答えた者を実数で類別すると、第32表のとおりである。この表に関する限りでは、一般市民や母親に比べて「よい」の割合がもっとも多い。

学歴別では、もともと被調査者が、事務員は大学高専に、工員は義務教育にかたよっているのであるが、いずれも「よい」が多い。また年齢別では、事務員の「わるい」3名はみな44～55才の層、工員の「わるい」1名は34～43才の層である。

E 名づけ漢字についての知識と意見

面接調査における質問と答えとの集計結果を抜粋してみると、次のようになる。

1 子どもの名づけに使える漢字が制限されていることを知っているか

〔質問〕戦争後になって、名前に使える漢字の範囲が制限されていることを知っていましたか。(調査票83.3)

この質問に対して「知っていた」と答えた人を学歴別・年齢別に集計すると、第33表のようになる。

第33表 名づけ漢字が制限されていることを知っていた人(%)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	割合
義務教育	13	40	80	85	56	31	55	55
旧中・新高	29	64	78	85	59	63	60	
大学・高専	78	100	100	94	85	92	92	
全 体	26	52	81	86	59	41	60	

この表から、次のことがわかる。

- (1) 全体として、学歴の高い層がよく知っているが、他の質問と比べて、年齢による反応のちがいが特徴的である。

(2) 旧中・新高と義務教育との学歴層では、29～43才の年齢層がよく知っている。

(3) 大学・高専の学歴層ではだいたいよく知っているが、もっとも若い年齢層に知らない人が幾分いる。

(4) 子どもの名づけの必要性にせまられて知った人が多いと考察される。
(繁雑になるので、ここにはいちいち示さないが、調査票83.4の質問に対する答えには、その傾向が著しく見られた。→67ページ参照)

2 名づけ漢字の制限についての意見

〔質問〕 名前に使える漢字の範囲がきまっていることについて、どう思いますか。(調査票83.5)

この質問に対する答えを類別して、学歴別・年齢別に集計すると、第34表のようになる。

第34表 名づけ漢字の制限についての意見(%)

	義務教育	旧新高	中高高専	計	栖吉	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才
きまっているほうがよい	40	50	60	45	45	34	43	52	57	44	37
きまっているのはわるい	14	13	13	13	5	4	11	14	18	17	13
どちらともいえない・わからない	46	37	27	41	50	63	46	34	25	39	49

この表から、次のことがわかる。

- (1) 「わるい」の意見は少ない。
- (2) 「よい」と「どちらともいえない・わからない」は、ほぼ同数である。
- (3) 29～43才の年齢層と大学高専の高い学歴層とには、「どちらともいえない・わからない」が少なく、意見のはっきりしている人が多くなっている。
- (4) 「わるい」の意見には、学歴差はない。
- (5) 学歴の高いほど「よい」の意見が多い。
- (6) 学歴の低いほど「どちらともいえない・わからない」が多い。

F 国語施策についての知識を得た経路

面接調査の質問事項の中に、漢字制限のことや、かなづかいが改められたことや、人名漢字が制限されたことなどについて、“いつごろ、どのようにして知ったか”を尋ねるものが含まれている。それらの集計結果を、以下にまとめて報告する。

1 漢字制限・かなづかい改定について

前述のA・2（48ページ）およびB・1（49ページ）の質問、すなわち、「使う漢字の範囲をきめていることを知っているか」（調査票92）、「かなの使い方がちがっていることを知っているか」（調査票93）に対して、「知っている」と答えた被調査者に対し、次の質問をした。

〔質問〕 いつごろ、どんなきっかけで知りましたか。（調査票92.1, 93.1）

この質問に対する答えを類別して、「漢字制限」と「かなづかい」との項目ごとに、年齢別・学歴別・性別に集計すると、第35表のようになる。

答えは、次の7つに類別した。

- (1) 「学校で教わった」「教科書で知った」などと答えたもの。——これを「学校」と略称する。
- (2) 「文書関係の仕事の必要上」とか「入社試験の際」とか「会社でパンフレットを配布した」など、社会生活のうえで、あるいは職務上の関係から知ったと答えたもの。——これを「しごと」と略称する。
- (3) 「新聞で読んだ」「雑誌で読んだ」「本で読んだ」など、広義のマス・コミのルートで知ったと答えたもの。——これを「新聞」と略称する。
- (4) 「自然に知った」とか「人に聞いた」とか答えたもの。——これを「自然」と略称する。
- (5) 「子どもの教科書を見て」とか「昔の書き方で書いたのを子どもに笑われて」など、子どもを通じて知ったと答えたもの。これには「孫」も含まれる。——これを「子ども」と略称する。
- (6) 「父の書いたものと自分の教わっているものとの食い違いから気づいた」のような答えをしたもの。——これを「食違い」と略称する。
- (7) 「よくわからない」の答えや、無答のもの。——これを「不明」と略称

するが、これらは、“どのようにして”よりも“いつごろ”のほうに答えようとしたものと思われる。事実、“いつごろ”に明確に答えたものは、きわめてわずかであり、それもすべて「発表当時」というものであった。そこで、この答えは、便宜上「新聞」の中に加えてある。

なお、各層の回答者数は、まちまちであるが、全般的に少数なので、%では示さずに実数で掲げ、相対的な傾向を見るにとどめることとした。また、栖吉地区は、やはり少数なので、男女も学歴も一括して掲げた。

第35表から、次のことが知られる。

- (1) 総体的に、「かなづかい」に比べて「漢字制限」のほうが比較的知られていないということが、よくわかる。とくに、学歴が低く、年齢の低い層において顕著である。また、経路としては、「学校」「子ども」「食い違い」において「かなづかい」のほうが全般的に多くなっている。漢字制限は1字1字の問題であるが、かなづかいは通則的な問題であるという相違が、原因となっていると思われる。
- (2) 年齢の点では、全体としてみると、15～28才あたりの低年齢層では、「学校」が圧倒的に多い。国語施策の行なわれた当時学齢前であった層はもちろん、小学生であった層も、途中で教科書が切替えになったわけである。また、29～33才の層も、旧中・新高以上の学歴層では、学校で切替えを教わる機会がありえたはずであり、それが答えにいくぶん反映している。この29～33才の年齢層から「新聞」が多くなり、34～43才および44～53才の年齢層では「子ども」が目だって多い。54～69才の年齢層の「子ども」には「孫」が相当数含まれている。これらの事実、低年齢層における「食い違い」とうらはらの関係にあるわけである。
- (3) 学歴の点では、高い学歴層ほど「しごと」「新聞」が多くなる傾向がある。文字に接する機会の多い少ないという条件の差が反映しているものと考察される。
- (4) 男女別の点では、概して、34～53才の中堅的な年齢層において、男は「新聞」のほう「子ども」よりも相対的に多く、女は「子ども」のほう「新聞」よりも相対的に多いことが注意される。とくに、「旧中・新高」の学歴層において、その傾向が顕著である。

第35表 漢字制限・かなづかい改訂についての知識を得た経路(実数)

制 定 時 年 齢	学 歴 性 別	義 務 教 育				旧 中 ・ 新 高				大 学 ・ 高 専				合 計				栖 吉 (男女)	
		男		女		男		女		男		女		男		女		漢字制限	かなづかい
		漢字制限	かなづかい	漢字制限	かなづかい	漢字制限	かなづかい	漢字制限	かなづかい	漢字制限	かなづかい	漢字制限	かなづかい	漢字制限	かなづかい	漢字制限	かなづかい		
学 齢 前	15才 〜 22		学 校 2 新 聞 1		新 聞 1	学 校 6 新 聞 1	学 校 10	学 校 6 しごと 新 聞 1	学 校 11 しごと 新 聞 2	学 校 4 新 聞 1	学 校 2 新 聞 1	学 校 2 新 聞 2		学 校 10 新 聞 2	学 校 14 しごと 新 聞 3	学 校 8 しごと 新 聞 1	学 校 11 しごと 新 聞 2	学 校 1	学 校 1
			食 違 1 不 明 1		食 違 2 不 明 1	不 明 3	不 明 2	不 明 1	食 違 1 不 明 2		食 違 2	不 明 2	不 明 2	不 明 3	食 違 3 不 明 3	不 明 3	食 違 3 不 明 5		
小 学 生	23 〜 28	学 校 1 しごと	学 校 2 自 然 1	学 校 2	学 校 5 しごと	学 校 5	学 校 4	学 校 4 しごと 自 然 2	学 校 7 しごと 新 聞 1	学 校 2 しごと 新 聞 1	学 校 4 しごと 新 聞 1	学 校 1	学 校 1	学 校 8 しごと 新 聞 1	学 校 10 しごと 新 聞 1	学 校 7 しごと 自 然 2	学 校 13 しごと 新 聞 1	学 校 1 新 聞 1	学 校 1 新 聞 1
							不 明 1	不 明 1								不 明 1			
旧 中 女 生	29 〜 33	新 聞 2 しごと 新 聞 1	新 聞 2 しごと 食 違 1	新 聞 2	新 聞 3	学 校 1 しごと 新 聞 1	学 校 2 新 聞 2 しごと 新 聞 1	新 聞 3 しごと 新 聞 1	学 校 1 しごと 新 聞 1	学 校 5 しごと 新 聞 1	学 校 4 しごと 新 聞 2	学 校 1	学 校 2 しごと 新 聞 1	学 校 6 しごと 新 聞 1	学 校 6 しごと 新 聞 1	学 校 1 しごと 新 聞 1	学 校 3 しごと 新 聞 2		
				不 明 1	不 明 1	不 明 1	不 明 1	不 明 1	不 明 2	不 明 2	不 明 1	食 違 1	不 明 2		不 明 2	不 明 2	不 明 5	不 明 3	
	34 〜 43	新 聞 5 しごと 新 聞 2	新 聞 1 しごと 新 聞 3	新 聞 4	新 聞 4	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 2	新 聞 3 しごと 新 聞 6	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 9	しごと 新 聞 11	しごと 新 聞 2	しごと 新 聞 3	しごと 新 聞 10	しごと 新 聞 14	しごと 新 聞 2	しごと 新 聞 4	子ども 2	子ども 3
				不 明 3	不 明 2						不 明 3	不 明 1			不 明 5	不 明 2	不 明 3	不 明 2	
	44 〜 53	新 聞 1 しごと 新 聞 3	新 聞 2 しごと 新 聞 3	新 聞 1 しごと 新 聞 1	自 然 1 子ども 3	新 聞 4 しごと 新 聞 2	しごと 新 聞 1	新 聞 2 しごと 新 聞 7	しごと 新 聞 2	しごと 新 聞 4	しごと 新 聞 3	新 聞 2	新 聞 1	しごと 新 聞 4	しごと 新 聞 4	新 聞 5 しごと 新 聞 5	新 聞 3 しごと 新 聞 10	子ども 1	自 然 1 子ども 2
	54 〜 69	新 聞 2 しごと 新 聞 2	新 聞 1 しごと 新 聞 2	自 然 2 子ども 1	自 然 1 子ども 1	自 然 1	新 聞 1 しごと 新 聞 2	新 聞 1 しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1	しごと 新 聞 1		新 聞 1
				不 明 1	不 明 1										不 明 2	不 明 1	不 明 1	不 明 1	

- (5) 経路としては、全般的に見ると、「新聞」が最も多く、ついで「学校」「子ども」「自然」「しごと」「不明」「食違い」の順となっている。

2 人名漢字の制限について

前述のE・1（63ページ）の質問、すなわち、「戦後になって名前に使える漢字の範囲が制限されていることを知っていたか」（調査票83.3）に対して、「知っていた」と答えた被調査者に対して、次の質問をした。

〔質問〕 いつ、どのようにして知りましたか。（調査票83.4）

この質問に対する答えを、年齢別・学歴別・性別に集計すると、第36表のようになる。

第36表 人名漢字についての知識を得た経路(%)

区分 答え	年 齢						学 歴			性 別		計	
	15才 ～22	23 28	29 ～33	34 ～43	44 ～53	54 ～69	義務 教育	旧 新	中 高	大 高	学 専		男
新聞などで 読んだ	18.6	29.3	39.1	40.6	33.9	26.8	31.0	30.6	64.7	43.4	25.6	34.8	
戸籍係の窓 口で聞いた	0	6.7	6.3	7.3	11.3	1.4	4.8	8.3	7.1	9.6	3.3	6.5	
人に聞いた	66.1	62.7	49.2	41.4	52.8	63.4	59.5	50.0	27.1	40.6	61.4	51.8	
そ の 他	15.3	1.3	5.4	10.7	2.0	8.5	4.7	11.1	1.1	6.4	9.7	6.9	

この表から、次のことが知られる。

- (1) 「戸籍係の窓口で聞いた」が44～53才の年齢層において、かなり多い。この年齢層の人たちが子どもの名前を届け出たころは、まだ施策の知識が一般に普及していなかったため、窓口で初めて聞いたというケースが多かったものと解釈される。それが、比較的知識の一般的普及にともなって、若い年齢層ほど少なくなるわけである。最も低い年齢層で0、最も高い年齢層でわずかなのは、この層の人たちが戸籍係の窓口で足を運ぶ必要が皆無か、少ないかの反映で、当然のことである。
- (2) 高い学歴では「新聞などで読んだ」が多く、低い学歴では「人に聞いた」が多い。
- (3) 男子は女子よりも「新聞で読んだ」「戸籍係の窓口で聞いた」が多く、女子は「人に聞いた」が多い。

G ま と め

以上述べてきたことをまとめると、次のようになる。

- (1) 漢字やかなづかいが戦後改められたことに関しては、比較的知られている。とくに学歴の高い層では年齢にかかわらず概して知っており、学歴が低く年齢の高い層に知らない人がある。ただし、漢字制限については、戦後教育を受けた年齢層の低学歴層が知らない。
- (2) 「当用漢字」の名称は比較的知られているが、「現代かなづかい」「歴史的かなづかい」の名称はほとんど知られておらず、「新かな」「旧かな」として知られている。
- (3) 自分と子どもとの表記法の食いちがいについては、学歴・年齢にかかわらずほとんどが知っている。また、母親は大多数が、それについて困った経験を持っており、学歴が高く年齢が高いほど、その傾向が強い。
- (4) 困った問題としては、漢字の字体が圧倒的に多く、ついで、送りがな、かなづかい、筆順の順である。
- (5) 自分と子どもとの表記法の食いちがいについて、母親は、学歴が高く、年齢が低いほど子どもの入学前に知り、学歴が低く年齢が高いほど子どもの入学後に知るが、ほとんどが小学3年になるまでには知っている。会社員は母親に比べて、子どもの入学前に知る割合が相対的に多い。
- (6) 母親は概して子どもと合わせようとする傾向があるが、会社員の男子は、それについては、高学歴・高年齢の層において、無関心ないし否定的な傾向が相対的に強い。
- (7) 長子が小学3年以下である母親は、あらゆる面で意識・関心が強く、積極的である傾向がある。
- (8) 名づけ漢字の制限のことは、名づけの必要にせまられた年齢層がよく知っており、それについての「よい・わるい」の意見もその層がはっきりしている。
- (9) 学歴の高い層ほど、改革について理解が深い。
- (10) 国語施策についての知識を得る経路としては、全般的には、新聞などを読むことを通してというのが多いが、「学校」とか「子ども」とか「しご

と」とか「出生の届出」など，実生活上の必要経験という場面におけるものも少なからずあることが注意される。

Ⅱ 新旧の実態, およびその傾向と年齢・職業・学歴・性別などとの関係

A 長岡市における面接調査の場合(渡辺)

1 調査票

面接調査に使用した調査票のなかで、文字の使い方に関する市民の意識をたずねるために用意した部分は次のとおりである。

A 文字の使い方のことでおたずねします。ここに並べて書いてあるもののうちで、どちらが読みやすいですか。

また、あなたが書くとしたら、ふつう、どちらの書き方をしますか。

(「ここに」といって示したものは、「概要」の25～26ページ、(1)～(10)の10問である。)

B では、こんどは、これをごらん下さい。並べて書いてあるものは、少しずつ形がちがっていますが、どちらもまちがいでではなく、両方使われています。あなたは、どちらが読みやすいですか。

また、あなたが書くとしたら、ふつう、どちらの書き方をしますか。

(「これを」といって示したものは、「概要」の26～29ページ、(11)～(30)の20問である。)

C 次は、これをごらん下さい。並べて書いてあるものは、ところどころ、かなの使いがちがっていますが、あなたには、どちらが読みやすいですか。また、あなたが書くとしたら、ふつう、どちらの書き方をしますか。

(「これを」といって示したものは、「概要」30～32ページ、(31)～(45)の15問である。)

問題は、全部で45問ある。調査の実施に当たっては、被調査者に1問1問別々にたんだく印刷したものを順次1枚ずつ提示して、そのつど回答を求め、それを調査者が記入するという方法をとった。

なお、このたんだく調査票は、次に述べるような意図で構成されている。

(a) 当用漢字音訓表に関するもの——当用漢字音訓表に触れる漢字表記とそれ

を避けたかな表記のいずれが、市民の間で読みやすいと意識されているか。また、彼らは、そのどちらで書いているか。これを音訓制限の中でも特に問題があると思われる語の中から五つを選び、それらについて調べてみようとした。調査票Aの(1)(5)(8)(9)(10)の5問がこれである。

(b) 当用漢字字体表に関するもの——市民は、当用漢字のいわゆる新字体・旧字体のいずれを読みやすいと意識しているか。また、現に彼らは、そのいずれを書いているか。これを、日ごろ長岡市民に関係の深い地名などに結びつけて、18の漢字についてみようとした。調査票Bの(20)と(20)を除く18問がこれである。(20)問は、「𪛗」「𪛘」の簡略俗体が市民の間でどの程度行なわれているかを見ようとしたもの。(20)は、表外字ではないが、同音の漢字による書き替えに関するもので、新聞などで現在広く行なわれている「年齢→年令」が市民の間ではどの程度行なわれているかを見ようとしたものである。

18の漢字は、次のような観点から選んである。

(i) 点画の方向・長さの変わったもの

青——青

(ii) 点画の省略されたもの

都——都

(iii) 画の併合したもの

様——様——様

(iv) 部分の省略されたもの。

県——縣，疊——疊——疊，医——醫，条——條，藏——藏——藏

(v) 部分の簡略化されたもの

駅——驛，会——會，転——轉，学——學，営——營

観——觀，発——發，真——眞，静——靜

(vi) 全体の簡略化されたもの

万——萬

(c) 現代かなづかいに関するもの——市民は、現代かなづかい、歴史的かなづかいのいずれで書かれたものを読みやすいと意識しているか。また、彼らは、そのどちらで書いているか。これを13語のかなづかいについてみようとした。調査票(C)の(30)と(41)を除く13問がこれである。(30)問は、回答の信頼性をみるため

に出した、いわばあそびの問題である。(4)は、現代かなづかい細則第8の本則とするものが、どの程度市民一般の間に受け入れられているかをみようとしたものである。

13の問題は、次のような観点から選んである。

(i) 動詞の活用に関するもの。

買う——買ふ、買い——買ひ、読もう——読まう

(ii) 助動詞（の活用）に関するもの。

ましょう——ませう、でしょう——でせう だろう——だらう、
そうです——さうです

(iii) じ——ぢ、ず——づ の対応に関するもの。

おじいさん——おぢいさん、村はずれ——村はづれ

(iv) い——ゐ、え——ゑ、お——をの対応に関するもの。

います——ゐます、植える——植ゑる、おとこ・おんな——をとこ
・をんな

(v) ちょう——てふ の対応に関するもの。

ちょう——てふ

(d) かな書き・まぜ書き・同音の漢字による書き替え等に関するもの——調査票Aの(2)(4)(3)(6)(7)あわせて5問のうち、(2)(4)は、表外漢字を含む語のかな書きに関するもの、(3)は、表外字を含む語のかな書き・まぜ書き・同音の漢字による書き替えに関するものである。また、(7)問は、表外字を含む語のかな書き・まぜ書きに関するもの、(6)は、当用漢字補正案で改められた燈→灯の字体が、市民の間で、どの程度行なわれているかを見ようとしたものである。

2 調査結果の分析

(1) 年齢・学歴・男女の層の違いからみた音訓表・新字体・新かなづかいへの順応度

310人の被調査者が、上にあげた45の個々の問題にどのように反応したかということ述べる前に、まず彼らが(a)当用漢字音訓表に関する5問、(b)当用漢字字体表に関する18問、(c)現代かなづかいに関する13問のそれぞれの問題群に全体としてどのように反応したか、そして、その全体的な反応の仕方が、学歴の違いや年齢の違い、または男女の違い等の条件によって、どう変化していくか、ということから報告する。

被調査者の回答のうち、a)当用漢字音訓表に関する5問については、各問題ごとに漢字表記を読みやすいとしたものに0点、かな表記を読みやすいとしたものに2点、読みやすさ（または、読みにくさ）の点で、どちらも変わらないと答えたものに1点を与える。また、書く場合に漢字で書くと答えたものに0点、かなで書くと答えたものに2点、漢字でもかなでも書くというものに1点を与える。

こうすると、この音訓表に関する5問全部の得点は、読む場合、書く場合のいずれも、最高10点から0点の間に分布することになる。これを仮に音訓点と呼ぶことにする。

同じような考え方で、(b)当用漢字字体表に関する18問、(c)現代かなづかいに関する13問についても、読む場合、書く場合のおおのについて、字体点・かなづかい点というものを算出する。新字体・新かなづかいのほうを読みやすいとしたものに2点、旧字体・旧かなづかいのほうを読みやすいとしたものに0点、読みやすさではどちらも同じだというものには1点を与える。同じように新字体・新かなづかいで書くというものには2点、旧字体・旧かなづかいで書くというものには0点、そのどちらでも書くというものには1点を与える。このようにすると、字体点は、読む場合、書く場合ともに36点から0点の間に分布し、かなづかい点は、26点から0点の間に分布することになる。

このようにして310人の被調査者（内訳は、市部が290人、農村部の栖吉地区が20人。）の音訓点・字体点・かなづかい点を、読む場合と書く場合に分け、年齢・学歴・男女の層ごとに平均値を求めてみると、第37表ようになる。各欄ともに上段の数値が読む場合の点、下段の数値が書く場合の点である。なお、栖吉地区は、被調査者の数が全体で20人しかいないので、これを、市部の場合のように学歴層 $3 \times$ 年齢層 $6 = 18$ の層に分けることはしない。学歴と男女の層の違いだけでみることにする。

第37表 音訓・字体・かなづかい各点の年齢層・学歴層・男女別分布
(音訓点)

学歴	年 齢		市 部						栖吉
	15—22才	23—28才	29—33才	34—43才	44—53才	54—69才	全体		
1.義務教育	2.6 2.6	2.1 2.2	1.9 1.4	2.2 1.6	1.7 1.8	0.9 1.9	1.8 1.8	3.6 3.4	
2.旧制中女, 新 制 高	3.3 2.2	2.9 2.4	2.4 1.4	2.0 1.6	1.4 0.8	1.8 1.3	2.4 1.7	2.0 5.0	
3.大学, 高専 以上	2.2 1.8	2.4 2.3	1.6 1.9	2.7 2.3	0.6 0.5	0.8 0.8	1.9 1.7	— —	
男	3.1 2.5	2.2 2.3	2.0 1.2	2.6 1.8	1.2 1.1	1.2 1.5	2.0 1.8	3.8 3.8	
	3.1 2.2	2.6 2.3	2.2 1.8	1.8 1.5	1.7 1.7	0.9 2.1	2.1 1.7	3.1 3.5	
女	3.1 2.2	2.6 2.3	2.2 1.8	1.8 1.5	1.7 1.7	0.9 2.1	2.1 1.7	3.1 3.5	
	3.1 2.3	2.4 2.3	2.1 1.5	2.2 1.6	1.5 1.4	1.1 1.7	2.1 1.8	3.4 3.6	
全 体	3.1 2.3	2.4 2.3	2.1 1.5	2.2 1.6	1.5 1.4	1.1 1.7	2.1 1.8	3.4 3.6	

(学歴の1.義務教育, 2.旧制中学・女学校, 新制高校 3.大学・高専以上の三つ)
(の層のそれぞれには中退者も含めてある。以下同じ。)

(字体点)

学歴	年 齢		市 部						栖吉
	15—22才	23—28才	29—33才	34—43才	44—53才	54—69才	全体		
1.義務教育	33.5 34.5	29.5 29.7	29.6 29.7	26.0 27.1	24.8 26.9	24.3 32.1	27.1 30.1	26.7 27.1	
2.旧制中女, 新制高	34.2 34.9	31.4 31.9	24.2 25.1	23.3 24.8	25.1 25.8	27.3 27.8	28.0 28.9	30.0 31.0	
3.大学・高専 以上	33.9 34.6	27.4 30.3	27.7 29.6	27.7 28.9	28.3 28.8	23.0 25.8	27.8 29.1	— —	
男	33.2 34.8	30.8 31.6	27.9 29.2	25.9 27.1	25.3 26.6	23.3 25.2	27.2 28.6	29.3 29.6	
女	34.5 34.7	29.6 29.8	26.4 26.4	24.6 25.9	25.0 26.7	26.9 27.8	27.8 30.6	25.2 25.7	
全 体	33.9 34.8	30.2 30.6	27.1 27.2	25.2 26.5	25.1 26.6	24.8 26.2	27.5 29.6	27.1 27.5	

(かなづかい点)

学 歴	年 齢		市 部						栖吉
	15—22才	23—28才	29—33才	34—43才	44—53才	54—69才	全体		
1.義務教育	26.0 26.0	25.2 25.1	21.5 22.0	21.3 21.5	26.6 20.2	16.7 16.3	21.0 21.1	19.9 19.8	
2.旧制中女, 新制高	25.2 25.2	24.9 24.9	23.6 23.3	21.5 21.0	18.7 18.7	17.1 17.3	22.6 22.5	18.5 18.0	
3.大学・高専 以上	25.4 25.4	24.3 25.7	24.3 24.3	22.6 23.1	22.9 23.4	17.8 18.3	22.7 23.1	— —	
男	25.2 25.5	24.7 24.9	23.9 24.0	21.8 21.9	20.6 20.6	17.2 16.4	21.9 21.8	19.9 19.8	
女	25.6 25.7	25.3 25.2	21.5 21.7	21.3 21.1	18.2 19.1	16.4 16.9	21.7 21.8	19.7 19.4	
全 体	25.4 25.6	25.1 25.0	22.7 22.8	21.5 21.5	19.5 19.9	16.9 16.6	21.8 21.8	19.8 19.6	

この表について、以下に若干の注釈をつけ加える。

○音訓点について

- i 点数が極端に低い。——前にも述べたとおり、音訓点は、5問全部かな書きの選択肢を支持すれば、10点になり、全部漢字書きの選択肢を支持すれば、0点になる。つまり点数が10点に近ければ、近いほど、当用漢字音訓表制定の精神が市民の間に受けいれられていることになる。

しかし、音訓点は、表の示すとおり、学歴・年齢・男女の別のいずれの層においても、極端に低くなっている。当用漢字音訓表が内閣訓令として告示されたのは、昭和23年であるが、当時学齢前の幼児もしくは小学校・中学校の児童・生徒であった15歳から22歳までの年齢層および23歳から28歳までの被調査者層でも、得点は3点以下。最高年齢層の54歳から69歳までの層にいたっては、1点前後の点数である。

これは、問題にした五つの語の性質に影響されるところが相当大きいのであろうが、反面、市民の日常の読み書く言語生活の中では、当用漢字音訓表が、現代かなづかいや当用漢字字体表にはない、特別の問題点をもっていることを示しているのだらう。

- ii 概して高年齢層ほど点数が低い。——音訓点は、すべての年齢層において低い。しかし、概して、年齢が高くなるにしたがって、音訓点が低くなっていくことがわかる。つまり年齢の高い層ほど、概して漢字書きの選択肢を支持し、年齢の低い層ほど、概してかな書きの選択肢を支持する傾向が強いのである。
- iii 学歴別・男女別にはさしたる違いはない。つまり学歴・性という要因は、きいていない。
- iv 概して読む場合の点数が書く場合の点数よりも高い。——つまり読む場合は、かな書きのほうを読みやすいが、自分で書く場合は、漢字書きという傾向があるのだらう。
- v 市部よりも栖吉地区のほうが点数が高い。すなわち、栖吉地区のほうが、市部よりも音訓表への順応度が高い。

○字体点について

- i 概して点数が非常に高い。——字体点は、18問全部新字体の選択肢を支

持すれば、36点になり、全部旧字体の選択肢を支持すれば、0点になる。つまり、この18字という尺度ではかった限りでのことであるが、点数が36点に近ければ、近いほど、「この表の字体は、漢字の読み書きを平易にし、正確にすることをめやすとして選定した」という当用漢字字体表の精神が市民の間に受けいれられていることになる。

事実、第37表をみると、字体点は、学歴別・年齢別・男女別のいずれの層においても、非常に高い。

- ii 概して、高年齢層ほど点数が低い。——つまり概して高年齢層ほど旧字体の選択肢を支持する傾向が強い。
- iii 学歴別・男女別にみた場合、さしたる違いはない。——つまり学歴・性という要因は、この種の、この程度の問題にはきいていない。
- iv 概して、読む場合よりも書く場合のほうが、わずかではあるが、点数が高い。——つまり読む場合は旧字体を支持しても、書く場合は新字体を支持するという傾向がうかがえる。これは、音訓点の場合と逆である。
- v 市部よりも栖吉地区のほうが、わずかではあるが、点数が低い。すなわち、栖吉地区のほうが市部よりも、旧字体を支持する傾向が、わずかではあるが強い。

○かなづかい点について

- i 概して点数が非常に高い。——かなづかい点は、13問全部現代かなづかいの選択肢を支持すれば、26点になり、全部歴史的かなづかいの選択肢を支持すれば、0点になる。つまり、この13問を尺度にした限りでのことではあるが、点数が26点に近ければ、近いほど、現代かなづかいは、市民の日常の読み書く生活の中に受けいれられていることになる。反対に、0点に近ければ、近いほど、それが受けいれられていないことになる。第37表は、そのかなづかい点が、学歴別・年齢別・男女別いずれの層においても非常に高いことを示している。
- ii 高年齢層ほど点数が低い。——つまり高年齢層ほど歴史的かなづかいの選択肢を支持する傾向が強い。そして、この傾向は、音訓点や字体点の場合よりもはるかにはっきりしている。
- iii 学歴別・男女別にみた場合、さしたる違いはない。——つまり、この種

のこの程度の問題には、学歴・性という要因は、きいていない。

iv 読む場合と書く場合との間には、ほとんど違いがない。——これは、読む場合に現代かなづかいを読みやすいとするものは、書く場合にも現代かなづかいで書き、読む場合に歴史的かなづかいを読みやすいとするものは、書く場合にも歴史的かなづかいで書く傾向があるからであろう。このことは、音訓点や字体点つまり漢字の問題の場合と異なる点である。

v 市部よりも栖吉地区のほうが、わずかではあるが、点数が低い。すなわち、栖吉地区のほうが、市部よりも、旧かなづかいを支持する傾向がわずかではあるが強い。

(2) 読み書く生活の違いからみた、新字体・新かなづかいへの順応度

面接調査では、この報告書の21ページから23ページまでに示してあるような質問項目を手がかりに、市民の日常生活における読み書く生活の実態の一部をもあわせて調査している。

しかし、これらの質問の全部について、310人の被調査者がどのように答えたかの報告は、ここでは割愛する。ここでは、これらの調査項目のうち、次にあげるいくつかの項目によって明らかにされた市民の読み書く生活の実態が、たんざく調査票によって確かめられた市民の文字づかい意識の実態とどのように関係しているかだけを報告することにする。

23 週刊誌はお読みになりますか。

1. 読む 2. ときどき読む 3. 読まない。

31 週刊誌のほかに、何か雑誌をお読みですか。

1. 読む 2. ときどき読む 3. 読まない。

32 雑誌や週刊誌のほかに、何か本をお読みですか。

1. 読む 2. ときどき読む 3. 読まない

42.1 個人的な用事で、手紙や葉書は、月にどのくらい出しますか。

1. 0通 2. 1～5通 3. 6通以上

44 手紙とか、そのほか何か書くときに字引きを引くことはありますか。

1. ある 2. ときどきある 3. ない

質問項目の23「週刊誌はお読みになりますか」、同じく31「週刊誌のほかに、何か雑誌をお読みですか」、32「雑誌や週刊誌のほかに、何か本をお読みです

か」の三つに対する被調査者の回答を、それぞれ「読む」「読まない」の二グループに大別する。それと字体点（書）・かなづかい点（書）との関係をみると、第38表(イ)(ロ)(ハ)のようになる。

また、質問項目42.1「個人的な用事で、手紙や葉書は、月にどのくらい出しますか」に対する被調査者の回答を、0通（つまり書かぬ）と1通以上（つまり書く）の二グループに大別し、これと字体点（書）・かなづかい点（書）との関係をみると、第38表(ニ)のようになる。(イ)(ロ)(ハ)(ニ)の表中の数字は、最左端の欄のかっこの中に示した被調査者数に対する百分比である。

同じように質問項目44「手紙とか、そのほか何か書くときに字引きを引くことがありますか」に対する被調査者の回答と、字体点(書)・かなづかい点(書)との関係を見ると、第38表(ホ)のようになる。

第38表 読み・書く生活の違いと字体点・かなづかい点

(イ) 週刊誌

	字 体 点 (書)				か な づ か い 点 (書)			
	36—31	30—25	24—19	18—0	26—24	23—19	18—14	13—0
読 む (211)	42.7	36.5	17.5	3.3	62.6	21.8	11.4	4.3
読まぬ (98)	28.6	43.9	15.3	12.2	46.9	19.4	27.6	6.1

ほかに不明(1)

(ロ) 雑誌

	字 体 点 (書)				か な づ か い 点 (書)			
	36—31	30—25	24—19	18—0	26—24	23—19	18—14	13—0
読 む (178)	41.6	36.0	17.4	5.1	65.2	19.7	10.7	4.5
読まぬ (129)	33.3	44.2	16.3	6.2	46.5	22.5	25.6	5.4

ほかに不明(3)

(ハ) 単行本

	字 体 点 (書)				か な づ か い 点 (書)			
	36—31	30—25	24—19	18—0	26—24	23—19	18—14	13—0
読 む (165)	52.1	30.9	12.1	4.8	69.7	16.4	9.1	4.8
読まぬ (141)	22.7	47.5	22.0	7.8	44.0	26.2	24.8	5.0

ほかに不明(4)

(二) 手紙と葉書

	字 体 点 (書)				かなづかい点 (書)			
	36—31	30—25	24—19	18—0	26—24	23—19	18—14	13—0
書 く (246)	40.2	38.6	16.3	4.9	58.1	20.7	15.9	5.3
書かぬ (60)	30.0	40.0	18.3	11.7	53.3	23.3	20.0	3.3

ほかに不明(4)

(ホ) 字引き

	字 体 点 (書)				かなづかい点 (書)			
	36—31	30—25	24—19	18—0	26—24	23—19	18—14	13—0
あ る (118)	44.9	40.7	7.6	6.8	71.2	14.4	11.9	2.5
ときどきある(77)	39.0	36.4	22.1	2.6	51.9	26.0	15.6	6.5
な い (107)	30.8	40.2	23.4	5.6	47.7	24.3	22.4	5.6

ほかに不明(8)

この表から週刊誌やその他の雑誌・単行本を読むと答えた層は、読まない
と答えた層よりも、字体点(書)・かなづかい点(書)がかなりの程度高いこ
とがわかる。特に単行本を読むと答えた層は、読まないと答えた層に比して、
はるかに高い。

同じように、手紙・葉書を書くに答えた層と、書かないと答えた層との間に
も、かなりの開きをみることができる。また、手紙とか、そのほか何かを書く
ときに、字引きをひくことがあると答えた層は、ないと答えた層よりも、字体
点・かなづかい点(書)がかなりの程度高い。

つまり、これらの問題でのぞいた限りでのことではあるが、当用漢字字体表
や現代かなづかいは、雑誌や週刊誌・単行本を読む層や手紙や葉書を書く層、
何かものを書くときに字引きをひくことがある層のほうが、そうでない層より
も強く受け入れているのである。

(3) 職業との関係

310人の被調査者の職業を、その職種の地位によって分類し、それと字体点
(書)・かなづかい点(書)との関係をみると、第40表 (イ)(ロ)のようになる。表
の見方は、第38表に準ずる。なお、職種の地位による分類基準の内容は、第39
表に示すようなものである。

第39表 職種の地位による分類基準の内容

企業経営者（従業員数10人以上の会社や企業の経営者）

専門的職業（医師・弁護士・芸術家・薬剤師・僧侶・専門的技術者など）

教師（小・中・高校・大学など）

管理的職業（官庁・会社の課長以上、駅長・郵便局長・警察署長・校長など）

小企業者（使用人数9人以下の会社企業、または個人企業の経営者）

事務技術的職業（各種事務職員、技術職員、警察官、公安官など）

熟練労働者（自動車運転手・理髪師など免許を必要とする職種、旋盤工、機械組立工など技術を必要とする職種）

半熟練労働者（大工・左官など各種職人、紡織工など生産工程従事者、商店員など販売従事者）

非熟練労働者（主として肉体労働に従事する者）

農業従事者（農耕・畜産などに従事する者）

第40表（イ）職業と字体点との関係（％）

字 体 点		36～31	30～25	24～19	18～0	平均年齢
職業（人数）						
企業経営者（3）		33.3	33.3	33.3		53.8歳
専門的職業（17）			76.5	23.5		40.2
教師（36）		58.3	27.8	11.1	2.8	40.1
管理的職業（14）		28.6	21.4	35.7	14.3	46.8
小企業者（20）		10.0	60.0	25.0	5.0	46.6
事務技術的職業（51）		52.9	33.3	5.9	7.8	34.4
熟練労働者（21）		33.3	42.9	19.0	4.8	33.3
半熟練労働者（26）		42.3	34.6	15.4	7.7	33.9
非熟練労働者（8）		37.5	37.5	25.0		42.7
農業従事者（9）		22.2	66.7	11.1		41.8
家庭の主婦（商家）（16）		12.5	56.3	18.8	12.5	42.3
家庭の主婦（農家）（12）		8.3	41.7	16.7	33.3	44.1
家庭の主婦（一般）（42）		21.4	42.9	31.0	4.8	42.4
学 生 ・ 生 徒（28）		100				19.5
無 職（5）			100			51.8
分 類 不 能（2）			50.0	50.0		
計（310）		38.1	39.0	16.8	6.1	38.1

(ロ) 職業とかなづかい点との関係(%)

かなづかい点		26—24	23—19	18—14	13—0	平均年齢
職業(人数)						
企業経営者	(3)	33.3	33.3	33.3		53.8歳
専門的職業	(17)	64.7	11.8	5.9	17.6	40.2
教師	(36)	86.1	11.1	2.8		40.1
管理的職業	(14)	14.3	35.7	35.7	14.3	46.8
小企業者	(20)	35.0	25.0	30.0	10.0	46.6
事務技術的職業	(51)	74.5	17.6	5.9	2.0	34.4
熟練労働者	(21)	52.4	28.6	19.0		33.3
半熟練労働者	(26)	57.7	23.1	19.2		33.9
非熟練労働者	(8)	37.5	50.0	12.5		42.7
農業従事者	(9)	44.4	11.1	44.4		41.8
家庭の主婦(商家)	(16)	31.3	50.0	12.5	6.3	42.3
家庭の主婦(農家)	(12)	25.0	16.7	50.0	8.3	44.1
家庭の主婦(一般)	(42)	42.9	23.8	26.2	7.1	42.4
学生・生徒	(28)	100				19.5
無職	(5)	20.0	40.0	20.0	20.0	51.8
分類不能	(2)			50.0	50.0	
計	(310)	57.4	21.0	16.8	4.8	38.1

第39表(イ)(ロ)によると、字体点・かなづかい点とも、当然のことだが、学生・生徒層が最も高い。次いで高いのは、教師層・事務技術的職業層である。これに対して、点数が低いのは、字体点では、農家の主婦・商家の主婦・一般家庭の主婦・管理的職業層・小企業者層など、かなづかい点では、同じく管理的職業層・小企業者層・農家の主婦などである。これらの違いは、純職業的条件・年齢的条件・学歴的条件などのからみあいによって生ずるものと考えられる。

たとえば、第41表をみると、専門的職業層と教師層とは、年齢・学歴の上ではほとんど違いがない。学歴の上では、ともに高等教育を受けた者がほとんど全部で、年齢も、その平均年齢が40.2、40.1と非常に接近している。それにもかかわらず、二つの層の間には字体点・かなづかい点ともかなりの断層がある。特に字体点に見られる断層は、非常に大きい。そしてこれらの断層は、一方が専門的職業層、他方が教師という、その従事する職業のちがいがから生まれてくるものであろう。

第41表 専門的職業層と教師層の学歴と年齢の比較

	義務教育卒	旧制中学・ 新制高校卒	大学・高専卒	平均年齢
専門的職業層 (17名)	0 名	1 //	16 //	40.2 歳
教 師 (36名)	0 名	1 //	35 //	40.1 歳

また、第42表をみると、同じ教師という職業層の内部でさえも、その教師が小学校の教師であるか、中学校の教師であるか、それとも高校・大学の教師であるかの違いによって、字体表や現代かなづかいに順応する程度が異なっていることがわかる。この表は、36名の教師層のうちから、小中高校・大学の教師だけをぬき出して、それぞれの層の字体点・かなづかい点の分布と年齢の平均を算出した結果を示している。この表から、字体点では、小学では全員の教師が最高の得点段階にランクされ、ついで、中学・高校・大学の順に、得点が減少していくことがわかる。また、かなづかい点は、小学・中学の教師が最高の得点段階にランクされ、ついで高校・大学の教師の順になっている。つまり、上級の学校の教師ほど、字体表や現代かなづかいに対する順応度が低いのである。

第42表 小・中・高・大学の教師層の得点分布と平均年齢

	字 体 点 (書)				かなづかい点 (書)				平 均 年 齢
	36—31	30—25	24—19	18—0	26—24	23—19	18—14	13—0	
小学教師(14名)	14 (100%)				14 (100)				36.4歳
中学教師(7名)	4 (57.1)	3 (42.9)			7 (100)				36.9
高校教師(11名)	2 (18.2)	5 (45.5)	3 (27.3)	1 (9.1)	8 (72.7)	3 (27.3)			45.4
大 学(1)			1 (100)				1 (100)		62.5

第43表 小・中・高・大学の教師層の年齢の分布

年齢の段階	小 学	中 学	高 校	大 学
15 才 ～ 22 才				
23 才 ～ 28 才	1	1	1	
29 才 ～ 33 才	4	2	2	
34 才 ～ 43 才	9	3	3	
44 才 ～ 53 才		1	3	
54 才 ～ 69 才			3	1
計	14	7	12	1

もっとも、第43表をみると、年齢の上では、小学の教師が最も若く、ついで中学・高校の教師の順、そして大学の教師が最も高い年齢層であることがわかる。そこで、23歳から43歳までの三つの年齢層に属する小学14名、中学6名、高校6名のそれぞれのグループの字体点・かなづかい点の分布を見ると、第44表のようになる。

第44表 23歳～43歳の年齢層の教師の得点分布と平均年齢

	字 体 点 (書)				かなづかい点 (書)				平 均 年 齢
	36—31	30—25	24—19	18—0	26—24	23—19	18—14	13—0	
小学教師(14名)	14 (100%)				14 (100)				36.4歳
中学教師(6名)	4 (66.7)	2 (33.3)			6 (100)				34.8
高校教師(6名)	1 (16.7)	4 (66.7)	1 (16.7)		5 (83.3)	1 (16.7)			34.8

この表から、小学校の教師は、平均年齢では、中学・高校の教師よりも高いにもかかわらず、字体点は全員最高の得点段階にランクされていることがわかる。これに対して、中学・高校の教師は、小学の教師よりも年齢が若いにもかかわらず、字体点が低い。とりわけ高校の教師の得点は著しく低い。

かなづかい点も、小学・中学の教師の得点に対して、高校の教師の得点が低い。つまり23歳から43歳までの、比較的若い年齢層の間でも、上級の学校の教師ほど、字体表や現代かなづかいに対する順応度が低くなっていく傾向がある。これは、同じ教師層の中にありながら、それぞれ小学・中学・高校の教師であるという、職業的条件の違いを、そのまま敏感に反映したもののなのであろう。

(4) 問題ごとの分析表

(a) 当用漢字音訓表に関する5問の場合

音訓表に含めた五つの問題の、それぞれ1問ごとの平均点を求め、その点の高い順に配列してみると、第45表のようになる。各欄ともかっこ外の数値は、市部290人の被調査者の平均点であり、かっこ内の数値は、栖吉地区20人の被調査者の平均点である。配列の順序は、市部の平均点の大小によった。

また、第45表の問題ごとの平均点の内容を、読む場合と書く場合のおのこのについて、年齢層別にもっとくわしく示したのが第46表である。表中各欄とも

左上の数字は、読む場合の当該選択肢の支持率（それぞれの年齢層に含まれる被調査者を100とする）を示し、右下の数字は、同じく書く場合の当該選択肢の支持率を示す。

第45表 音訓表5問の平均点

音	訓	読	む	書	く
たばこ・タバコ・煙草		1.3	(1.5)	1.3	(1.6)
きょう・今日		0.3	(0.4)	0.1	(0.3)
ふたり・二人		0.2	(0.4)	0.1	(0.4)
おとうさん、おかあさん お父さん、お母さん		0.2	(0.4)	0.1	(0.4)
へや・部屋・室		0.1	(0.8)	0.1	(1.0)

第46表 音訓表5問の年齢層別選択肢支持率

支持選択肢	点 数	市 部								栖吉
		15-22	23-28	29-33	34-43	44-53	54-69	全体		
		才	才	才	才	才	才			
たばこ	2	15.7 18.2	32.2 41.3	43.5 36.9	26.1 24.1	22.0 27.8	28.5 42.4	27.1 30.1	60.0 70.0	
タバコ	2	71.8 73.2	49.0 37.8	26.2 26.2	29.4 26.4	23.4 23.4	10.5 8.1	34.9 32.7	10.0 10.0	
たばこ・タバコ	2	0 0	0 0	0 0	0.3 0	0 0	0 0	0.1 0	5.0 0	
たばこ・煙草	1	0 0	2.8 8.4	0 0	1.0 0	1.0 0	0 0	0.7 1.0	0 0	
タバコ・煙草	1	1.9 0	0.7 0	0 0	0.3 0.3	0 0	2.3 0.6	0.8 0.2	0 0	
たばこ・タバコ・煙草	1	3.8 0	2.8 0	0.6 0	9.6 0	9.6 0	0.6 4.7	5.2 0.8	0 0	
煙草	0	6.7 8.6	12.6 12.6	29.8 36.9	33.3 49.2	44.0 48.8	58.1 44.2	31.1 35.3	25.0 20.0	
きょう	2	17.7 3.8	3.5 6.3	10.7 3.0	16.2 10.9	9.6 3.8	2.3 9.3	11.0 6.6	20.0 15.0	
きょう・今日	1	2.4 3.8	0 0	0 2.4	2.6 0.7	3.8 0	4.7 0	2.4 1.2	0 0	
今日	0	79.9 92.3	96.5 93.7	89.3 94.6	81.2 88.4	86.6 96.2	87.8 90.7	85.8 92.3	80.0 85.0	
ふたり	2	21.5 10.0	11.9 11.9	4.8 4.8	8.6 5.6	3.8 3.8	0.6 5.2	8.7 6.6	15.0 15.0	
ふたり・二人	1	2.4 3.8	0 0	0 0	7.9 0.3	0 0	2.3 2.3	2.7 1.1	5.0 5.0	
二人	0	76.1 86.1	88.1 88.1	95.2 95.2	80.9 91.4	96.2 96.2	97.1 92.4	87.9 91.6	80.0 80.0	
おとうさん、おかあさん	2	7.7 3.8	11.9 9.1	9.5 1.2	10.0 7.9	1.9 1.9	7.0 11.6	7.9 5.9	15.0 15.0	
おとうさん、おかあさん お父さん、お母さん	1	3.8 0	5.6 8.4	5.4 0	5.3 2.6	1.9 1.9	0 0	3.7 2.0	5.0 5.0	
お父さん、お母さん	0	88.5 96.2	82.5 82.5	85.1 98.8	82.2 86.8	96.2 96.2	93.0 87.8	87.7 91.4	80.0 80.0	
へや	2	9.6 0	6.3 0	7.7 1.2	3.6 4.0	5.7 0	0 4.7	5.4 2.8	40.0 50.0	
へや・部屋	1	1.9 5.7	0 0	0 0	2.6 2.6	0 1.9	0 2.3	1.0 2.3	0 0	
へや・室	1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	

支持選択肢	点 数	市 部									栖吉
		15—22 才	23—28 才	29—33 才	34—43 才	44—53 才	54—69 才	全体			
へや・部屋・室	1	1.9 0	0 0	0 0	2.6 0	0 0	0 0	1.0 0	0 0	0 0	
部	屋	0 80.9	0 90.9	0 86.9	0 66.7	0 84.7	0 83.1	0 80.3	0 60.0	0 50.0	
室	0	5.7 13.4	2.8 8.4	4.8 0	24.1 4.3	9.6 13.4	9.9 9.9	11.1 8.1	0 0	0 0	
部	屋・室	0 0	0 0	0.6 0.6	0.3 0.3	0 1.9	7.0 7.0	1.2 1.5	0 0	0 0	

「たばこ・タバコ・煙草」が1.3～1.5で、比較的点数が高いほかは、いずれも点数が低い。とりわけ「へや・部屋・室」は、極端に点数が低い。

「たばこ・タバコ・煙草」では、年齢の若い層ほど「タバコ」を、そして年齢の高い層ほど「煙草」を支持する傾向が強い。これは、被調査者たちが受けた学校教育に影響さ

第47表 字体表18問の平均点

れるところが大きいのだろう。「たばこ」は、29～33歳の年齢層で支持率が高い。「きょう・今日」以下の4問は、いずれも漢字書きの支持率が圧倒的に高い。これは、どの年齢層でもかわらない。しかし、年齢の若い層ほどかな書きを、そして年齢の高い層ほど漢字書きを支持するという傾向は「タバコ・煙草」の場

字 体	読 む	書 く
中村商会・——會	1.9(1.8)	1.9(1.8)
長岡駅・——驛	1.9(1.7)	1.9(1.8)
小島医院・——醫——	1.8(1.9)	2.0(1.9)
新発田市・——發——	1.8(1.8)	1.9(1.8)
学校・學——	1.8(1.7)	1.8(1.7)
長岡営業所・——營——	1.7(1.6)	1.8(1.6)
百万人・——萬——	1.7(1.9)	1.9(2.0)
小川自転車店・——轉——	1.7(1.8)	1.8(1.8)
新潟県・——縣	1.7(1.8)	1.8(1.8)
観光院町・觀——	1.6(1.4)	1.7(1.5)
青年・青——	1.6(1.8)	1.7(1.8)
一郎様・——様・——様	1.6(1.4)	1.8(1.4)
大村疊店・——疊——・——疊——	1.4(1.5)	1.5(1.6)
東京都・——都	1.3(1.6)	1.4(1.6)
真夏・眞——	1.1(0.8)	1.2(0.8)
静岡・靜——	1.0(1.2)	1.0(1.1)
三条市・——條——	1.0(1.0)	1.0(0.9)
蔵王町・藏——・藏——	0.8(0.8)	0.8(0.7)

合とちがって、4問ともそれほどはっきりした形では認めることができない。

「部屋・室」では、どの年齢層とも「部屋」の支持が圧倒的に高い。

(b) 当用漢字字体表に関する18問の場合

字体点を含めた18の問題のそれぞれ1問ごとの平均点を求め、その点の高い順に配列してみると、第47表のようになる。この18問の平均点の個個の内容を第46表に準じて、もっとくわしく示したのが、第48表である。なお、第48表の末尾には「電燈・電灯」「職業安定所・職業安定所・職業安定所」「年齢・年齢」の3問の選択肢支持の状況も示してある。

第48表 字体表18問の年齢層別選択肢支持率

		支						部		栖吉
		15—22	23—28	29—33	34—43	44—53	54—69	全体		
		才	才	才	才	才	才			
中村商会	2	96.2 100	94.4 100	95.8 100	87.1 95.7	89.5 95.7	77.3 84.9	89.8 96.0	85.0 90.0	
——会・——會	1	1.9 0	5.6 0	4.2 0	11.6 3.0	10.0 3.8	8.1 1.2	7.4 1.6	5.0 0	
——會	0	1.9 0	0 0	0 0	1.3 1.3	0.5 0.5	14.5 14.0	2.8 2.4	10.0 10.0	
長岡駅	2	100 100	96.5 100	96.4 94.6	82.9 95.4	95.2 99.5	80.2 90.1	91.1 96.6	85.0 90	
——駅・——驛	1	0 0	3.5 0	3.0 0	9.6 2.0	4.3 0	5.8 0.6	4.8 0.1	0 0	
——驛	0	0 0	0 0	0.6 5.4	5.0 2.6	0.5 0.5	14.0 9.3	3.4 2.7	15.0 10.0	
小島医院	2	94.3 100	99.3 100	91.1 100	83.2 98.3	81.8 97.6	82.0 94.8	87.7 98.4	90.0 95.0	
一医・一醫	1	1.9 0	0 0	6.5 0	12.9 0.3	15.7 0	12.8 0	9.1 0.1	5.0 0	
——醫——	0	3.8 0	0.7 0	2.4 0	4.0 1.3	2.4 2.4	5.2 5.2	3.2 1.5	0 0	
新発田市	2	100 100	100 100	95.8 99.4	87.8 90.4	68.9 86.1	76.2 81.4	87.5 92.4	90.0 90.0	
一発・一發	1	0 0	0 0	1.8 0	7.6 2.6	19.1 0	5.2 0	6.2 0.7	0 0	
——發——	0	0 0	0 0	2.4 0.6	4.6 6.9	12.0 12.0	18.6 18.6	6.2 6.6	5.0 5.0	
学 校	2	98.1 100	99.3 100	97.0 92.9	87.1 87.1	75.6 79.9	77.3 80.8	88.5 89.5	80.0 85.0	
学——・學——	1	1.9 0	0 0	0.6 0	3.9 2.6	8.1 5.7	1.2 4.7	3.0 2.3	5.0 0	
學——	0	0 0	0.7 0	0 4.8	8.9 10.2	16.3 12.4	21.5 14.5	8.2 7.5	15.0 15.0	
長岡営業所	2	98.1 100	93.7 99.3	85.7 92.9	83.2 93.1	74.2 82.3	66.9 79.7	83.5 91.2	80.0 80.0	
一営・一營	1	1.9 0	5.6 0	4.2 0	11.6 0.3	6.2 0	12.8 4.7	7.4 0.7	0 0	
——營——	0	0 0	0.7 0.7	10.1 7.1	2.6 4.0	19.6 17.7	20.3 15.7	8.5 7.4	20.0 15.0	

		市部								栖吉
		15—22 才	23—28 才	29—33 才	34—43 才	44—53 才	54—69 才	全体		
百 万 人	2	98.1 100	93.7 94.4	76.2 92.9	75.9 87.5	76.6 98.1	72.1 89.0	80.8 92.6	95.0 100	
一万・一萬一	1	1.9 0	5.6 2.8	6.5 0	20.1 8.6	13.9 1.9	8.7 1.7	10.6 3.1	0 0	
——萬——	0	0 0	0.7 2.8	17.3 7.1	4.0 4.0	9.6 0	14.5 4.7	7.9 3.7	5.0 0	
小川自転車店	2	93.8 100	93.7 100	96.4 97.6	77.9 87.5	62.2 83.7	59.3 66.9	79.7 89.0	85.0 85.0	
一転・一轉一	1	1.9 0	5.6 0	1.2 0	10.2 0	22.2 1.9	12.8 0	9.4 0.3	5.0 5.0	
——轉——	0	4.3 0	0.7 0	2.4 0	11.9 12.5	15.7 14.4	27.9 33.1	10.9 10.7	10.0 10.0	
新 潟 県	2	94.3 96.2	93.7 94.4	88.1 88.1	70.3 78.9	75.6 89.0	61.6 72.1	79.4 85.8	90.0 85.0	
——県・——縣	1	3.8 0	0 0	6.0 1.8	13.2 5.6	13.9 0	19.8 9.9	10.0 3.1	0 0	
——縣	0	1.9 3.8	6.3 5.6	6.0 10.1	16.5 15.5	10.5 11.0	18.6 18.0	10.5 11.1	10.0 15.0	
観光院町	2	96.2 100	94.4 100	86.9 92.9	70.3 78.2	62.7 66.6	66.3 66.9	78.1 83.0	70.0 75.0	
観——・觀——	1	1.9 0	5.6 0	6.0 0	11.6 0	5.7 0	14.0 9.3	7.7 1.3	0 0	
觀——	0	1.9 0	0 0	7.1 7.1	18.2 21.8	31.5 29.7	19.8 23.8	14.2 15.0	25.0 20.2	
青 年	2	99.5 98.1	69.9 70.6	61.9 61.3	65.3 70.6	80.9 98.1	87.2 91.3	77.2 81.8	90.0 90.0	
青——・青——	1	0.5 0	6.3 5.6	11.9 0.6	10.2 0	19.1 1.9	4.1 0.6	9.0 1.2	0 0	
青——	0	0 1.9	23.8 23.8	26.2 38.1	24.4 29.4	0 0	8.7 8.1	13.9 17.0	10.0 10.0	
一郎様	2	91.9 98.1	79.7 93.0	61.3 72.6	67.3 80.2	60.3 78.0	70.3 83.1	71.4 83.8	65.0 70.0	
——様・——様	1	0 0	0 0	0 4.8	0 3.0	0 3.8	0 2.3	0 2.4	0 0	
——様・——様	1	3.8 1.9	5.6 2.8	3.0 0.6	12.2 1.3	6.2 0	2.3 0	6.2 1.1	0 0	
一様・一様・一様	1	0 0	11.2 0	4.2 0	4.3 0	19.6 0	12.8 4.7	8.2 0.7	5.0 0	
——様	0	3.8 0	0 0	7.7 3.0	1.3 1.3	1.9 1.9	0 0	2.4 1.1	0 0	
——様	0	0.5 0	3.5 4.2	23.8 19.0	14.9 12.5	12.0 16.3	14.5 9.9	11.7 10.5	30.0 30.0	
——様・——様	0	0 0	0 0	0 0	0.3 0	0 0	0 0	0 0.1	0 0	
大村畳店	2	98.1 96.2	84.6 93.7	52.4 75.0	56.8 69.6	57.9 61.2	55.8 69.8	66.7 76.4	75.0 80.0	
一畳一・一畳一	1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	
一畳一・一畳一	1	1.9 0	0 0	17.3 0	11.6 0	1.9 4.3	7.0 0	7.0 0.7	0 0	
一畳一・一畳一・一畳一	1	0 0	5.6 0	3.6 0	2.0 0	5.7 0	5.2 0	3.4 0	0 0	
——畳——	0	0 0	0 5.6	7.1 4.8	2.3 2.6	3.8 3.8	5.2 6.4	3 3.6	0 0	

		市 部							全体	栖吉
		15—22	23—28	29—33	34—43	44—53	54—69			
		才	才	才	才	才	才			
—疊—	0	0	9.8	19.6	27.4	30.6	26.2	19.9	20.0	
		3.8	0.7	19.6	26.4	30.6	23.8	18.9	15.0	
—疊—・—疊—	0	0	0	0	0	0	0.6	0.1	0	
		0	0	0.6	0	0	0	0.1	0	
東 京 都	2	91.4	45.5	23.2	36.0	45.5	57.0	49.6	70.0	
		100	62.2	32.7	58.7	69.9	82.0	67.9	80.0	
—都—・—都—	1	8.6	28.0	32.1	38.0	32.2	30.8	28.8	15.0	
		0	0	0	0	0	5.2	0.7	0	
—都—	0	0	26.6	44.6	26.1	22.5	12.2	21.6	15.0	
		0	37.8	67.3	41.3	30.1	12.8	31.3	20.0	
真 夏	2	96.2	80.4	58.9	29.4	29.7	44.2	53.3	40.0	
		100	83.9	57.7	37.6	34.0	45.3	57.2	40.0	
真—・真—	1	3.8	8.4	7.7	9.6	10.5	5.2	7.7	0	
		0	8.4	3.0	0.3	1.9	0	1.8	0	
眞—	0	0	11.2	33.3	61.1	59.8	50.6	39.0	55.0	
		0	7.7	39.3	62.0	64.1	54.7	40.9	55.0	
静 岡	2	87.1	53.8	32.1	27.4	31.3	45.9	44.9	55.0	
		95.7	53.8	38.1	29.7	40.7	50.0	50.0	55.0	
静—・静—	1	6.2	8.4	16.1	8.9	15.7	7.0	10.3	5.0	
		1.9	5.6	0	0	0	0	1	0	
静—	0	6.7	37.8	51.8	63.7	52.6	47.1	44.8	35.0	
		2.4	40.6	61.9	70.3	55.0	49.4	48.2	40.0	
三 条 市	2	68.9	37.1	52.4	39.3	34.9	34.3	44.5	45.0	
		73.7	35.0	55.4	43.2	38.3	34.9	47.2	45.0	
一条—・一條—	1	2.4	11.2	7.7	6.9	11.5	14.5	8.6	5.0	
		0.5	2.8	7.1	0.7	1.9	0	1.9	0	
—條—	0	28.7	51.7	39.9	53.8	53.6	51.2	46.8	45.0	
		25.8	62.2	37.5	56.1	59.8	65.1	50.9	50.0	
蔵 王 町	2	71.8	37.1	14.9	23.1	28.2	24.4	33.1	35.0	
		77.5	39.9	28.0	27.7	32.2	26.7	38.5	35.0	
蔵—・蔵—	1	0	0	0.6	0.3	0	0	0.2	0	
		0	0	0	0	0	0	0	0	
蔵—・蔵—	1	1.9	0	4.8	0.3	0	0	1.1	0	
		0	0	4.8	0	0	0	0.7	0	
蔵—・蔵—・蔵—	1	0	5.6	19.6	10.9	10.0	11.0	9.5	10.0	
		0	0	5.4	0.3	0	0	0.8	0	
蔵—	0	23.4	37.8	31.5	16.8	15.8	43.6	26.2	20.0	
		21.5	37.8	36.9	17.2	20.1	51.2	28.5	25.0	
蔵—	0	2.4	19.6	28.6	46.2	44.0	15.7	28.2	25.0	
		0.5	22.4	25.0	49.5	47.8	22.1	30.1	30.0	
蔵—・蔵—	0	0	0	0	0	1.9	5.2	1.1	0	
		0	0	0	0	0	0	0	0	
電 燈		51.7	21.0	20.2	26.4	19.1	44.8	30.6	25.0	
		56.0	21.7	22.6	39.6	19.6	35.5	33.9	15.0	
電 灯		45.9	76.2	75.6	59.1	72.2	45.9	61.5	65.0	
		42.1	75.5	77.4	56.1	79.9	55.2	63.0	80.0	
電燈・電灯		2.4	2.8	4.2	14.5	8.6	9.3	7.8	5.0	
		1.9	2.8	0	4.3	0.5	4.7	2.4	0	
職業安定所		54.5	39.2	44.6	52.1	55.0	55.8	51.0	60.0	
		33.5	29.4	44.0	46.5	51.2	51.2	43.4	55.0	
転—		1.9	11.9	10.7	14.9	13.4	7.0	10.3	15.0	
		3.8	12.6	17.9	19.1	13.4	9.3	13.1	15.0	
転—		34.0	42.7	21.4	23.8	12.0	25.6	25.7	20.0	
		52.6	56.6	37.5	29.0	22.0	34.9	37.2	25.0	

	市							部							栖吉
	15-22	23-28	29-33	34-43	44-53	54-69	全体	15-22	23-28	29-33	34-43	44-53	54-69	全体	
職一・職一	3.8 4.3	0.7 0	11.9 0	1.3 0	0 0	4.7 3.8	3.4 2.1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0
職一・職一	0 0	0 0	2.4 0	0 0	0 0	3.8 0	1.0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0
職一・職一・職一	0 0	5.6 0	6.0 0	5.9 0	9.6 0	4.7 0	5.3 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0
職一・職一	5.7 5.7	0 0.7	3.0 0.6	2.0 2.6	6.2 9.6	2.3 0	3.3 3.5	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0
年 齢	37.1 13.4	1.6 0	11.1 4.8	6.1 4.6	19.1 10.0	8.8 5.8	13.9 6.7	15.0 5.0							
年 令	52.8 82.8	91.9 100	86.4 94.6	81.1 95.4	73.9 90.0	81.4 94.2	77.4 92.5	75.0 90.0							
年齢・年齢	10.1 3.8	6.5 0	2.5 0.6	12.8 0	7.0 0	9.8 0	8.7 0.7	5.0 5.0							

第47・48の両表について、いくつかの注記をしておく。

1. 「真夏・真一」「静岡・静一」「三条市・一條一」「蔵王町・蔵一・蔵一」などを除いては、どの問題も点数が非常に高い。
2. 書く場合の点数が読む場合の点数よりも低いものは、一つもない。いいかえれば、読むには旧字体でもよいけれども、書く場合には、簡略な字形を好む傾向がある。

第49表 現代かなづかい13問の平均点

3. 新字体の支持率を問題ごとに年齢層別にみていくと、次のことがほぼ、共通的にうかがえる。どの年齢層でも、書く場合のほうの支持率が読む場合のほうの支持率よりも低いことはない。
4. どの問題も、新字体の支持率は、概して年齢の若い層が高く、年齢の高い層が

か な づ か い	読 む	書 く
おとこ・おんな・をとこ・をんな	1.9(2.0)	1.9(2.0)
降りそうです・——さう——	1.9(1.9)	1.9(1.9)
植える・植ゑる	1.8(1.7)	1.9(1.7)
読もう・読まう	1.8(1.4)	1.8(1.4)
ちょう・てふ	1.8(1.6)	1.8(1.6)
買う・買ふ	1.8(1.7)	1.8(1.6)
買い・買ひ	1.8(1.8)	1.7(1.7)
います・ゐます	1.7(1.7)	1.7(1.7)
降るだろう・——だらう	1.6(1.6)	1.6(1.7)
帰りましょう・——ませう	1.5(1.2)	1.5(1.2)
晴れるでしょう・——でせう	1.5(1.4)	1.5(1.3)
おじいさん・おぢいさん	1.4(1.2)	1.4(1.1)
村はずれ・村はづれ	1.4(0.9)	1.4(0.7)

低い。

- 「電燈・電灯」は、全体的には「電燈」よりも「電灯」の支持率が高い。
しかし、15～22歳の年齢層では、わずかの差ではあるが、逆に「電燈」の支持率が高くなっている。
- 「職業安定所・取～・取～」では、全体的には、「取～」の支持率が最も高く、ついで「取～」「取～」の順。年齢層別にみても、ほぼこの関係がうかがわれる。
- 「年齢・年令」では、「年令」の支持率が圧倒的に高い。ただし、15～22歳の年齢層では、「年齢」の支持率が比較的高い。

(c) 現代かなづかいに関する13問の場合

かなづかい点に含めた13の問題の、それぞれ1問ごとの平均点を示したのが第49表である。また、この13問の平均点の個々の内容をもっとくわしく示したのが第50表である。なお、第50表の末尾には「新潟へ行く・新潟え行く」「あはてて、さはぐ・あわてて、さわぐ」の2問の選択肢支持の状況も示してある。

第50表 現代かなづかい13問の年齢層別選択肢支持率

		市 部							栖吉	
		15—22	23—28	29—33	34—43	44—53	54—69	全体		
		オ	オ	オ	オ	オ	オ			
おとこの子、おんなの子	2	100 100	100 100	95.2 100	97.4 98.7	90.4 96.2	72.7 73.3	93.1 95.2	95.0 100	
おとこ～、おんな～・をとこ～、をんな～	1	0 0	0 0	4.8 0	2.3 0	5.7 0	4.1 0	2.8 0	5.0 0	
をとこ～、をんな	0	0 0	0 0	0 0	0.3 1.3	0 0	23.3 26.7	3.4 4.2	0 0	
降 り そ う で す	2	98.1 98.1	96.5 100	92.9 92.9	93.7 75.4	87.6 86.6	89.5 93.0	93.0 94.2	95.0 95.0	
～そ う～・～さ う～	1	0 0	3.5 0	0 0	1.7 0	6.7 0	7.6 0	3.1 0	0 0	
～ さ う	0	0 0	0 0	7.1 7.1	4.6 4.6	5.7 13.4	2.9 7.0	3.6 5.5	5.0 5.0	
植 え る	2	98.1 98.1	99.3 100	90.5 95.2	91.4 93.1	82.3 96.2	78.5 83.7	90.0 94.3	80.0 85.0	
植 え る ・ 植 ゑ る	1	0 0	0.7 0	4.8 0	1.7 0	13.9 0	3.5 0.6	4.1 0.1	5.0 0	
植 ゑ る	0	1.9 1.9	0 0	4.8 4.8	6.9 6.9	3.8 3.8	18.0 15.7	6.0 5.6	15.0 15.0	
読 も う	2	100 100	96.5 100	95.2 100	91.7 91.4	78.0 84.2	76.7 79.1	89.7 92.1	65.0 70.0	
読 も う ・ 読 ま う	1	0 0	3.5 0	2.4 0	3.3 0	6.2 0	4.1 0.6	3.2 0.1	5.0 0	
読 ま う	0	0 0	0 0	2.4 0	2.3 5.9	15.7 15.7	19.2 20.3	6.4 7.1	25.0 25.0	

		市 部							栖吉	
		15—22	23—28	29—33	34—43	44—53	54—69	全体		
		才	才	才	才	才	才			
ち	う	2	100 100	99.3 100	92.3 97.0	82.2 84.5	72.2 74.6	78.5 72.1	86.5 87.3	75.0 80.0
ち	う・てふ	1	0	0.7	5.4	3.0	10.5	5.2	4.2	5.0
			0	0	0	0	0	0	0	0
て	ふ	0	0	0	2.4	14.9	17.2	16.3	9.4	20.0
			0	0	3.0	15.5	23.4	27.3	12.3	20.0
買	う	2	99.5 100	99.3 100	92.3 89.9	75.9 78.5	80.9 86.6	76.2 78.5	86.0 87.8	80.0 80.0
買	う・買ふ	1	0.5	0.7	0	5.0	11.5	8.1	4.6	5.0
			0	0	0	0	0	0.6	0.1	0
買	ふ	0	0	0	7.7	19.1	7.7	15.7	9.5	15.0
			0	0	10.1	21.5	13.4	20.9	12.1	15.0
買	い	2	97.6 100	93.7 88.8	80.4 85.1	86.5 85.8	78.5 86.6	69.8 67.4	84.6 86.0	85.0 85.0
買	い・買ひ	1	2.4	3.5	7.7	5.9	13.9	1.2	6.0	10.0
			0	5.6	2.4	3.3	3.8	0.6	2.6	0
買	ひ	0	0	2.8	11.9	7.6	7.7	29.1	9.4	5.0
			0	5.6	12.5	10.9	9.6	32.0	11.4	15.0
い	ま	2	100 100	93.7 94.4	77.4 86.9	85.5 88.4	65.1 75.1	64.5 60.5	81.3 84.6	85.0 85.0
い	ます・ゐます	1	0	6.3	13.1	5.0	13.9	2.9	6.6	0
			0	5.6	2.4	3.0	0	0.6	1.8	0
ゐ	ま	0	0	0	9.5	9.6	21.1	32.6	12.0	10.0
			0	0	10.7	8.6	24.9	39.0	13.5	10.0
降	る	2	98.1 98.1	99.3 100	85.7 81.5	75.2 73.3	64.1 71.8	60.5 67.4	79.5 80.8	80.0 85.0
降	るだろ	1	0	0.7	3.6	4.3	12.4	10.5	5.3	0
			0	0	0	9.6	5.7	0.6	3.5	0
降	る	0	1.9 1.9	0	10.7 18.5	20.5 15.8	19.6 22.0	29.1 32.0	14.5 15.3	20.0 15.0
帰	り	2	100 100	99.3 100	77.4 79.8	76.2 78.2	56.0 54.5	31.4 34.3	73.3 74.4	60.0 60.0
帰	りま	1	0	0.7	0	2.3	8.1	2.9	2.4	0
う			0	0	0	0.3	0	1.2	0.2	0
帰	りま	0	0	0	22.6	21.5	35.9	65.1	24.1	40.0
せ			0	0	20.2	21.5	45.5	64.0	25.2	40.0
晴	れ	2	98.1 100	93.7 94.4	79.8 79.8	78.5 78.9	100 52.6	32.0 33.7	72.7 73.5	65.0 65.0
晴	れ	1	1.9	0.7	7.7	3.6	0	1.7	3.7	10.0
			0	0	0	1.7	0	2.3	0.7	0
晴	れ	0	0	5.6	12.5	17.8	0	66.3	23.6	25.0
			0	5.6	20.2	19.5	47.4	64.0	25.7	35.0
お	じ	2	98.1 98.1	85.3 85.3	70.8 64.3	60.1 62.4	45.9 61.2	38.4 37.2	65.6 67.8	55.0 55.0
お	じい	1	0	0.7	4.8	5.6	19.1	7.0	6.5	10.0
さん			0	0	0	0.3	0	0	0.1	0
お	ぢ	0	1.9 1.9	14.0 14.7	24.4 35.7	34.3 37.3	34.4 38.3	54.7 62.2	27.8 32.0	35.0 45.0
村	は	2	79.9 85.2	79.7 77.6	66.7 88.7	53.8 59.4	43.5 61.2	39.5 44.8	59.4 68.4	40.0 35.0
村	はず	1	4.3	11.9	19.6	12.9	27.8	10.5	14.3	5.0
			2.4	11.2	1.2	3.3	5.7	0.6	3.8	0
村	は	0	15.7 12.4	8.4 11.2	13.7 10.1	33.3 37.0	28.7 33.0	50.0 54.7	26.2 27.7	50.0 60.0

	市						部		栖吉
	15-22	23-28	29-33	34-43	44-53	54-69	全体		
	才	才	才	才	才	才			
新 潟 へ 行 く	96.2	63.6	84.5	88.4	91.9	82.6	86.0	95.0	
	96.2	69.2	82.7	91.1	95.7	82.6	87.8	95.0	
新 潟 え 行 く	3.8	33.6	10.1	7.6	3.8	17.4	11.1	5.0	
	3.8	30.8	14.9	6.3	4.3	17.4	11.2	5.0	
新 潟 へ～・新 潟 え	0	2.8	5.4	2.6	4.3	0	2.5	0	
	0	0	2.4	1.3	0	0	0.7	0	
あ は て て, さ は ぐ	0	2.8	9.5	6.6	3.8	2.9	4.4	20.0	
	0	5.6	9.5	9.2	5.7	7.6	6.4	20.0	
あ わ て て, さ わ ぐ	98.1	97.2	85.1	87.5	86.1	96.5	91.2	80.0	
	98.1	94.4	85.7	88.1	92.3	91.9	91.5	80.0	
あ は て て, さ は ぐ・あ わ て て, さ わ ぐ	0	0	5.4	2.0	10.0	0.6	3.1	0	
	0	0	4.8	0	1.9	0.6	1.1	0	

第49・50の両表にいくつかの注記をつけておく。

1. 「村はずれ・村はづれ」「おじいさん・おぢいさん」の、いわゆるづーず、ぢーじの対応に関する問題と、「晴れるでしょう・～でせう」「帰りましょう・～ませう」「降るだろう・～だらう」の助動詞に関する問題を除いては、総じて点数が非常に高い。
2. 読む場合の点数と書く場合の点数は、「植える・植ゑる」「買い・買ひ」の二つを除いては、どれも同じ。
3. 各問題とも、新かなづかいの支持率は総じて年齢の若い層ほど高く、年齢の高い層ほど低い。
4. 格助詞の「へ・え」は、「へ」の支持率が、どの年齢層でも非常に高い。

(d) まぜ書き・かな書き等に関する4問の場合

まぜ書き・かな書き等に関する「あゆ・アユ・鮎」「あいさつ・挨拶」「しょうゆ・しょう油・醤油・正油」「もくとう・黙とう・黙禱」の選択肢支持の状況は、第51表に示すとおりである。

第51表 まぜ書き・かな書き4問の年齢層別選択肢支持率

		市 部							栖吉
		15—22才	23—28才	29—33才	34—43才	44—53才	54—69才	全体	
あ	ゆ	9.6 14.4	0.7 12.6	14.9 19.0	16.8 23.4	3.8 13.4	30.2 30.2	13.0 19.2	45.0 55.0
ア	ユ	67.9 52.2	43.4 38.5	34.5 31.5	30.7 26.1	29.2 33.0	12.8 19.2	36.4 33.1	25.0 30.0
鮎		18.7 33.5	52.4 43.4	45.8 48.8	40.3 44.9	53.6 53.6	54.7 43.6	43.1 44.6	30.0 15.0
あ	ゆ・ア	0 0	0 2.8	0 0	0 0	0 0	0 4.7	0 1.0	0 0

	市 部							全体	栖吉
	15—22	23—28	29—33	34—43	44—53	54—69	全体		
	才	才	才	才	才	才			
ア ヌ ・ 鮎	3.8 0	0.7 0	4.8 0.6	5.6 5.3	1.9 0	2.3 2.3	3.5 1.7	0	0
あ ゆ ・ ア ヌ ・ 鮎	0 0	0 0	0 0	6.6 0	11.5 0	0 0	3.7 0	0	0
あ ゆ ・ 鮎	0 0	2.8 2.8	0 0	0 0.3	0 0	0 0	0.3 0.4	0	0
あ い さ つ	33.5 54.1	16.1 25.9	22.0 26.2	13.9 25.4	21.5 36.8	18.6 27.9	20.7 32.9	40.0 70.0	
挨 拶	64.1 40.2	78.3 74.1	70.2 73.8	78.2 73.9	74.6 55.5	81.4 72.1	74.5 64.6	55.0 30.0	
あ い さ つ ・ 挨 拶	2.4 5.7	5.6 0	7.7 0	7.6 0.3	3.8 7.7	0 0	4.7 2.4	5.0	0
し ょ う ゆ	7.7 16.3	14.7 20.3	0.6 14.9	4.0 12.9	0 5.7	11.6 11.6	5.8 13.2	0	30.0
し ょ う 油	35.9 38.5	18.2 21.7	8.3 12.5	11.2 24.8	4.3 10.0	5.2 7.0	13.9 20.0	10.0 25.0	
醬 油	54.1 41.1	58.7 40.6	80.4 58.9	66.7 50.8	68.4 58.4	78.5 60.5	67.4 51.7	80.0 35.0	
正 油	1.9 3.8	8.4 11.9	10.1 13.1	7.9 10.9	19.6 19.6	4.7 9.3	8.8 11.4	10.0 10.0	
しょうゆ・しょう油	0 0	0 0	0 0	1.3 0	0 0	0 0	0.3 0	0	0
醬 油 ・ 正 油	0 0	0 0	0.6 0	0 0	7.7 0	0 4.7	1.4 0.7	0	0
し ょ う 油 ・ 醬 油	0 0	0 5.6	0 0.6	3.3 0.3	0 0	0 7.0	0.8 1.9	0	0
しょうゆ・しょう油・醬油・正油	0 0	0 0	0 0	3.0 0	0 0	0 0	0.7 0	0	0
し ょ う ゆ ・ 醬 油	0 0	0 0	0 0	0 0	0 1.9	0 0	0 0.3	0	0
しょうゆ・しょう油・醬油	0 0	0 0	0 0	0 0.3	0 0	0 0	0 0.1	0	0
し ょ う ゆ ・ 正 油	0 0	0 0	0 0	0 0	0 3.8	0 0	0 0.7	0	0
も く と う	35.4 45.0	9.1 21.7	24.4 22.0	12.9 27.7	15.3 24.9	16.3 30.2	18.9 29.1	60.0 75.0	
黙 と う	64.6 54.5	67.1 69.9	54.2 63.7	48.5 49.2	33.0 58.9	24.4 34.3	48.2 54.2	25.0 20.0	
黙 禱	0 0.5	23.8 8.4	21.4 14.3	30.4 18.5	51.7 14.4	59.3 30.8	30.9 14.6	15.0 5.0	
も く と う ・ 黙 と う	0 0	0 0	0 0	0 0	0 1.9	0 0	0 0.3	0	0
黙 と う ・ 黙 禱	0 0	0 0	0 0	1.7 1.7	0 0	0 0	0.4 0.4	0	0
も く と う ・ 黙 と う ・ 黙 禱	0 0	0 0	0 0	5.3 0	0 0	0 4.7	1.3 0.7	0	0
も く と う ・ 黙 禱	0 0	0 0	0 0	0 3.0	0 0	0 0	0 0.7	0	0

第51表にいくつかの注記をつけ加えておく。

1. 「あゆ・アユ・鮎」では、全体としては「鮎」の支持率が最も高く、ついで「アユ」「あゆ」の順。「アユ」の支持率は、年齢の若い層ほど高く、

年齢の高い層ほど低い。「鮎」は、15～22歳の年齢層の読む場合に低いほかは、各年齢層とも共通して高い。「あゆ」は、各年齢層とも、読む場合よりも、書く場合のほうの支持率が高い。

2. 「あいさつ・挨拶」は、「挨拶」の支持率が非常に高い。「挨拶」では、書く場合よりも読む場合のほうの支持率が高く、「あいさつ」では、読む場合よりも書く場合のほうの支持率が高い。
3. 「しょうゆ・しょう油・醤油・正油」でも、全体的には「醤油」の支持率が圧倒的に高い。ついで「しょう油」が高く、「しょうゆ・正油」の支持率は低い。どの年齢層でも「醤油」の支持率は、書く場合よりも、読む場合のほうが高く、「しょう油・しょうゆ」は、読む場合よりも、書く場合のほうの支持率が総じて高い。
4. 「もくとう・黙とう・黙禱」では、全体的には、「黙とう」の支持率が高く、「もくとう」と「黙禱」は、書く場合と読む場合とで、支持率の大小関係が逆になる。概して、年齢の若い層では「黙とう・もくとう」の支持率が高く、年齢の高い層では「黙禱」の支持率が高い。

B 母親の文字の使いかた (永 野)

1 新字体を使うか、旧字体を使うか

(1) 新字体・旧字体の定義

この報告書で用いる「新字体・旧字体」ということばの表わす内容について、ここで説明しておきたい。

“新字体”というのは、“旧字体”に対する概念であって、一般的に言えば、昭和24年4月に制定された「当用漢字字体表」(以下「字体表」と略称する)に掲げられている字体のうち、それ以前に用いられていた字体と異なる新しい字体のことである。しかし、“以前に用いられていた字体と異なるもの”といっても、簡単にかたづけるわけにはいかない。

たとえば、「醫・參・寫」などは、以前に用いられていたものであって「字体表」に掲げられてはいないから、その意味で旧字体と呼ぶことができる。しかし、「字体表」に載っている「医・参・写」も、以前に“略字”として通用していたから、これらを“以前と異なる”という意味での新字体とは、必ずしもいうことはできない。しかし、このような場合、本字とされていた「醫・參・寫」を旧字体と呼び、「医・参・写」を新字体と呼ぶこととする。

また、一般の印刷物に使われる明朝体と、国定読本に用いられる教科書体とで、字体の異なるものがあった。たとえば、明朝体の「内・黄・研・節」は、教科書体では「内・黄・研・節」となっており、筆写の際は多くこの教科書体が用いられていた。したがって、この場合も、前述のものと同様「内」などを新字体と呼ぶことは、一般的には不適切であるが、この調査においては、「内」などの教科書体を新字体、「内」などの明朝体を旧字体として扱っている。

次に、「字体表」の「包・突・毎・寿」などは、以前は「包・突・毎・壽」のような字体であって、これらは「字体表」に登録されることによって認められた字体であるという意味で新字体といえることができる。もっとも、行書や草書では「毎・寿」などと書かれることがあったから、全く目新しいというものではないが、楷書体としては新字体というべきである。「包・突・毎・寿」を新字体、「包・突・毎・壽」を旧字体と呼ぶ。

なお、「衛」と「衛」,「𨔵」と「翻」はそれぞれ同字の異体とされていたの

であるが、字体表には後者が載っている。そこで、後者を新字体、前者を旧字体とする。また「𠂔→𠂔」「𠂔→𠂔」などは問題外とする。

この報告という新字体・旧字体には、以上のような各種のものが含まれているのである。いま、これらを整理して、新字体を便宜上次の3種類に分けることとする。

(i) 略体 (ii) 教科書体 (iii) 新体

(i) 略体と認める基準を、上田万年ほか共編の『大字典』に、「略字」「俗字」「同字」「通ずる字」「別体」「異体」などとして新字体が登録されているもの、および、昭和21年11月告示の「当用漢字表」に、簡易字体が本体として採用されたもの(131字)とする。厳密に言えばちがうが新字体とよく似ているものは含める。たとえば、『大字典』に「述」の俗体として載せられている「述」は、新字体「述」と同じと認める。しかし、「拔」の俗体「拔」は新字体「抜」と同じとは認めない。

この略体に対する旧字体は、本字である。

(ii) 教科書体と認めるのは、この場合、戦前の第2期から第5期までの国定読本に新字体と同じものが使われていたか、または、それらに略字として併記されていたものが新字体と同じであるものである。ただし、国定読本の字体は、期によって必ずしも同じでないものが、少なくない。たとえば、「乗」は、第2・4・5期は「乗」、第3期(黒表紙・白表紙とも)は「乗」であり、また「号」は、全期を通じて「號」となっているが、第3期の白表紙と第4期とでは、「号」が略字として併記されている。このようにまちまちであるが、全期を通じて新字体と同じものが用いられているものも、どの期か1つだけに新字体が用いられているものもすべて一括して、教科書体と認める。また、たとえば、新字体「羽」は、国定読本では第2期を除き、第3期から5期まで「羽」となっているが、これも新字体と同じと見なして、教科書体として扱うこととする。

この教科書体に対する旧字体は明朝体である。

(iii) 新体は、上記の俗体・教科書体以外のもので、戦後まったく新しく新字体として認められたものである。いわば狭義の新字体である。しかし、「氣」や「転」や「毎」などのように草書体や筆写の際の習慣上新字体と同じに書か

れていたものも、この仲間にはいるわけで、その意味ではすべてが“まったく新しい”とはいえないにしても、便宜上このように呼ぶこととするのである。

なお、略体と教科書体とを、戦前からあった字体という意味で一括する必要がある場合は、“旧略字体”と呼ぶこととする。

(2) 新字体の類型

旧字体から新字体への変化のしかたを、次のような類型に分けた。(カッコの中は、左が旧字体、右が新字体。)

- ①点画の方向・長さの変わったもの(半→半, 羽→羽, 内→内, 勇→勇)
- ②点画の省略されたもの……………(突→突, 徳→徳, 隠→隠)
- ③画の交差の変わったもの……………(告→告, 急→急, 吳→呉)
- ④画の併合したもの……………(研→研, 冊→冊, 儉→儉)
- ⑤組み立ての変わったもの……………(默→黙, 勳→勳)〈これは④にも属する〉
- ⑥部分の省略されたもの……………(蟲→虫, 應→応, 聲→声)
- ⑦部分の簡略化されたもの……………(榮→栄, 氣→気, 佛→仏)
- ⑧全体の簡略化されたもの……………(舊→旧, 萬→万, 圓→円)
- ⑨異体の統一されたもの……………(衛→衛, 翻→翻)

(3) 母親調査における字形の選択の実態

母親調査(長岡)の調査票第3～5面, 母親調査(東京)の調査票第3・4面における, 新字体・旧字体の選択の結果を, 以下にまとめて述べる。前述のとおり, この調査は, “昔習ったと思う字体” “今使っている字体” の選択であるが, “昔習った字体” はともかく, “今使っている字体” を問うには, このような反省方式では, 実は必ずしも適当でない。しかし, 後に述べるように, 書取りの一致度を検証し, また, 同種の類型の字体の選択のされかたをも考えあわせてみると, 相当程度の信頼は置くことができると思われる。

(a) 類型別にみた傾向

新字体の類型別に, 旧か新かの選択の傾向を一覧表にして示すと, 第52表のとおりである。見出しは, 字ではなく語で示す。太字が問題の字である。見出しの頭につけてある記号は, △が略体, ○が教科書体, ◎が新体である。「旧旧」は「旧字体を習い, 旧字体を使っている」, 「両新」は「旧字体と新字体との両方を習い, 新字体を使っている」の意味。「旧新」「新新」もそれぞれ, 「旧を

習い、新を使う」「新を習い、新を使う」である。「旧両」とか「両旧」とか、「両両」その他の組み合わせもあるが、全般的にきわめて少数なので、この表には省略した。とくに多い組み合わせの字があれば、後にふれることとする。

「新を使う」という欄は、「旧新」「両新」「新新」の和であり、要するに、新字体だけを使う者の数を表わすわけである。したがって、旧字体だけを使うか、新字体だけを使うかの傾向は、「旧旧」の欄と「新を使う」の欄とを比較すればわかることになる。数字は、それぞれの組み合わせを記入した被調査者の、全体に対する％である。また、数字の太字は、「旧旧」から「新新」までの4項のうち、最も多いものを示す。なお、各類型ごとの配列は、「新を使う」の多い順になっている。

第52表 新字体か旧字体か、類型別一覧表(%)：母親調査(長岡)(被調査者 237名)

1 点画の方向・長さの変わったもの

2 点画の省略されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
△ 憲 法	2	14	4	72	90
○△校 内	6	19	6	63	88
○ 被 害	3	9	3	74	86
○ 晴 天	5	31	12	43	86
○ 率いる	5	14	2	68	84
○ 出 納	7	22	8	54	84
○ 耕 作	10	32	8	42	82
△ 空 虚	11	43	9	26	78
○ 輸 入	15	43	8	26	77
○ 習 字	17	19	6	43	68
○ 日 曜	22	27	6	34	67
○△教 育	12	21	10	35	66
○ 弱 い	15	27	8	31	66
○ 羽 根	17	22	11	31	64
○ 裁 判	19	19	6	33	58
○△録 音	38	28	7	18	53
○ 新 緑	38	29	5	19	53
◎ 博 士	35	16	3	33	52
△ 述べる	35	40	4	8	52
◎ 聖 人	41	24	4	17	45
○ 始 頭	47	24	6	13	43
○ 希 望	45	17	3	19	39
◎ 東京港	27	10	2	26	38
◎ 包 む	40	11	0	27	38

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△黄 色	3	26	5	59	90
○ 横 顔	2	20	5	62	87
◎ 穀 物	7	43	5	33	81
△ 盗 む	11	20	3	54	77
◎ 徴 集	21	43	6	21	70
△ 山 奥	38	33	4	18	55
○△記 者	38	33	3	15	51
◎ 抜 く	40	24	1	25	50
◎ 食 器	41	29	3	18	50
△ 種 類	41	30	2	17	49
○ 山 脈	44	22	1	22	45
○ 諸 兄	45	30	1	14	45
○ 暑 い	43	29	3	11	43
○ 新 派	40	17	2	23	42
△ 道 徳	55	29	2	8	39
△ 歴 史	50	29	3	6	38
◎ 漢 字	54	25	2	9	36
△ 収 入	49	27	3	4	34
○ 著 作	49	22	2	9	33
△ 頼 む	54	21	3	9	33
◎ 涙	62	23	3	6	32
◎ 歳 暮	65	17	2	1	20
◎ 突 く	66	16	0	2	18
◎ 謹賀新年	67	11	0	5	16

3 画の交差の変わったもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○ 認める	2	12	3	72	87
○△告げる	3	9	1	75	85
○ 清潔	23	16	3	46	65
○△呉服	23	18	4	43	65
○ 誤る	30	17	2	36	55
◎ 急行	51	25	3	10	38

4 画の併合したもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○ 増加	1	40	19	35	94
○△研究	1	35	7	51	93
△ 悪人	2	63	20	8	91
○ 贈り物	3	36	14	39	89
○△温度	4	25	9	54	88
◎ 毎日	5	72	12	4	88
△ 様	4	67	14	6	87
○ 毒物	6	65	11	11	87
◎ 海岸	9	67	16	4	87
◎ 危険	8	66	19	1	86
○△並木	0	9	6	70	85
△ 検査	11	61	23	0	84
△ 千両	11	62	15	5	82
△ 試験	13	62	17	1	80
○△黒い	13	41	12	26	79
◎ 沈黙	13	37	11	30	78
○△乗る	11	48	11	18	77
○△勳章	15	36	11	27	74
△ 来る	17	59	8	7	74
△ 満月	19	53	11	7	71
△ 居ける	19	39	5	25	69
◎ 焼く	25	49	15	2	66
◎ 線る	27	38	8	13	59
○ 一冊	33	33	7	6	46
◎ 帯	57	30	3	1	34
△ 従う	61	21	4	3	28
△ 狭い	68	18	1	1	20

6 部分の省略されたもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△点字	0	50	39	8	97
○△虫ぼし	0	47	45	4	96
△ 予算	0	56	32	8	96
◎ 芸人	0	63	31	2	96
△ 泣き声	1	57	39	0	96
○△号外	0	56	37	2	95
△ 圧力	0	58	30	7	95
△ 医院	1	61	33	1	95
△ 独得	2	56	33	4	93
○△生糸	2	48	42	2	92
○△余り	2	54	35	3	92
◎ 公団	2	62	28	2	92
○△処分	3	61	28	1	90
△ 応接	4	60	27	1	88
△ 展覧	14	62	12	6	80
△ 式千	17	51	21	2	74
◎ 墨店	21	54	18	1	73
◎ 価格	20	59	12	0	71
△ 聴衆	21	49	7	14	70
△ 五条	30	42	12	0	54
◎ 専門	49	39	3	3	45
◎ 蔵王町	51	37	5	2	44
△ 射撃	56	30	3	4	37
△ 恵み	58	30	1	1	32
△ 随筆	56	24	3	4	31

7 部分の簡略化されたもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△大関	0	53	34	11	98
△ 実物	1	62	33	3	98
△ 尧明	1	65	31	2	98
○△鉄道	0	55	41	1	97
△ 会社	0	62	32	3	97
○△宝物	0	62	33	2	97
△ 政党	0	58	25	13	96
△ 絵筆	0	64	31	1	96
△ 残る	1	58	31	7	96
△ 覚悟	1	74	22	0	96

○△豊作	0	37	26	32	95	△桜	6	55	29	1	85
○△渡辺	0	53	39	3	95	△軽い	7	61	21	3	85
△辞典	0	55	33	7	95	○△帰る	7	63	22	0	85
○△乱れる	0	58	29	8	95	△証明	4	54	26	4	84
△済む	1	58	29	8	95	○△所属	6	55	22	7	84
△鉦山	1	61	33	1	95	△囲む	10	58	24	2	84
△拡大	1	67	26	2	95	△薬屋	13	66	13	4	83
△中野駅	2	63	29	3	95	△児童	9	62	15	4	81
△営業	2	69	25	1	95	△大仏	11	57	23	0	80
△労力	2	71	21	3	95	△音楽	11	61	18	1	80
△切断	0	61	26	7	94	△歓迎	13	53	18	8	79
○△賛成	1	36	9	49	94	△宅千	10	52	25	1	78
△当番	1	56	36	2	94	△仮定	16	58	18	2	78
○△東京湾	1	62	26	6	94	◎鳥の巢	16	65	11	1	77
○△変化	1	62	30	2	94	△観客	17	51	16	8	75
◎空気	1	63	30	1	94	△権利	15	52	14	8	74
△図工	2	57	31	6	94	△勧誘	15	58	13	3	74
○△節分	0	15	5	73	93	△頭脳	18	53	12	6	71
△国語	1	59	33	1	93	◎戦車	21	57	14	0	71
△金銭	1	60	32	1	93	△碎く	21	54	13	3	70
△浅い	2	66	25	2	93	△洪谷	24	55	12	1	68
△経過	2	67	22	4	93	△単語	25	52	16	0	68
○△献金	3	49	25	19	93	△雑誌	24	52	15	0	67
△犠牲	0	14	5	73	92	△総長	25	43	16	3	62
◎自転車	3	65	26	1	92	△厳重	30	50	8	3	61
△続く	3	67	25	0	92	△闘牛	22	38	4	18	60
○△お礼	0	53	37	1	91	△湿度	33	44	11	3	58
△浜べ	2	54	35	2	91	△屋間	33	42	14	1	57
△対立	3	63	27	1	91	△真夏	35	40	12	3	55
△栄養	3	69	19	3	91	△数える	3	13	34	6	53
◎警視庁	2	64	24	2	90	◎鶏	42	39	6	6	51
△読む	3	68	22	0	90	△幽霊	38	41	7	2	50
△学手	4	69	19	2	90	◎破壊	41	38	4	7	49
◎伝記	5	62	28	0	90	△遅刻	39	39	3	6	48
△小麦	6	60	27	2	89	○掲示	37	35	3	9	47
△滝つぼ	6	60	27	1	88	△状態	39	43	4	0	47
△名称	7	65	21	2	88	△拝見	42	35	8	4	47
△炉ばた	5	60	24	3	87	△遊戯	46	28	7	6	41
△参加	5	62	20	5	87	◎寝る	47	40	1	0	41
△解釈	7	61	23	3	87	△争う	41	30	5	5	40
◎売る	7	62	25	0	87	◎織維	43	33	4	3	40
△金歯	7	57	25	4	86	△静岡	41	23	7	9	39

◎ 謡 曲	52	23	8	3	34
◎ 一墨手	54	28	3	0	31
△ 行 為	52	24	3	2	29
◎お嬢さん	65	16	0	1	17

8 全体の簡略化されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△食 塩	0	33	30	33	96
△ 欠 席	0	44	38	14	96
○△体 操	0	30	43	22	95
○△ふみ台	0	46	37	12	95
○△旧 式	1	57	34	4	95
○△百万人	0	53	40	1	94
○△与える	2	63	30	1	94
○△山 岳	1	49	35	9	93
△ 双 方	1	53	27	13	93

△ 写 す	3	63	29	1	93
○△百 円	0	47	44	2	92
○△画 伯	2	50	37	5	92
○△養 蚕	3	57	31	4	92
△ 弁護士	7	65	20	1	86
△ 汽車弁	8	64	19	2	85
◎ 米 寿	14	55	22	3	80
○△尽きる	51	32	7	0	39

9 異体の統一されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△守 衛	4	14	7	67	88
△ 秘 密	7	17	8	56	81
○△強 い	18	23	8	30	61
△ 翻 る	44	32	3	5	40

この表を見ると、次のような傾向のあることがわかる。

- (i) 旧字体が多く使われている漢字は、各類型とも、主として戦後に作られた新体であるか、または、旧略字体（すなわち教科書体や俗体のあったもの）でも、それがあまり一般的でなかったものである、と認められる。（◎印のついたものは、各類型とも、比較的下位に集まっている。）
- (ii) 新字体が多く使われている漢字は、主として戦前から略体や筆写体のあった旧略字体である。とくに、教科書体は「新の傾向」の％が相対的に多いと認められる。（○のついたものは、各類型とも、比較的中位以上に群らがっている。）
- (iii) 旧字体を習ったが、今は新字体を使うとされる字は、昔から略字・筆写体として教えられ、通用していたものが多く、書きやすさがその要因であると認められる。類型4の「画の併合」、6の「部分の省略」、7の「部分の簡略化」、8の「全体の簡略化」にとくにそれが多い。（類型1における「虚・輪・述」、2における「穀・徴」や◎のついた戦後の新体で中位以上にある「毎・海」その他も、同じ理由によると解釈できる。これらは、活字にはなくても、習字など筆写の習慣のあったものである。）

(iv) 両方習ったとする人の比較的多い字は、類型 6・7・8に見られる。30%を越すものについては、「習った」ということの意味にもよるが、信頼度が高い。そして、それらの字が○印のついた教科書体であるものが多いことは、注意すべきである。なお、(iii) と (iv) とは関連が深い。

(v) 新字体を習ったとする人の多い字は、ほとんど旧字体が明朝体のものであり、少数はあまり使われなかった異体である。(「新新」の欄の数字が太字になっているものを見てゆくと、そのことが認められる。)

(vi) 回答者数の少ない字は、答えにくい字である。たとえば「包・港」の「己」は、ついていたか、いなかったか、つけて書くか、離して書くか、反省法でははっきり答えが出せないものと認められる。

(vii) 類型別の特徴を見ると、2「点画の省略」は旧字体を使うものが比較的多く、4「画の併合」、6「部分の省略」、7「部分の簡略化」、8「全体の簡略化」などは、「旧新」すなわち、旧字体を習ったが新字体を使うとするものが比較的多い。また、1「点画の方向・長さ」、3「画の交差」、9「異体の統一」などは、上位が「新新」、下位が「旧旧」と両極端に分かれる。

なお、「旧両」「両両」「両旧」の答えが10名(4.2%)以上の字を次に示す。

「旧両」……様

「両両」……礼・証・円

「両旧」……収・並・条・状・争・静・総

次に、東京調査の結果をまとめて、第53表に示す。東京では、長岡調査より漢字の数を減らした。(長岡では225字、東京では154字)

その理由は、後に述べる「制限漢字・制限音訓」の調査の時間をとるためである。長岡のから省いたものは、次のような字である。

●旧字体が明朝体のもの(例：判)

●選択がむずかしいと思われたもの(例：潔・耕)

●変化の類型の同じもののうち、選択の型が近似しているもの(例：弱)

●あまり使わないもの(例：爐)

第53表 新字体か旧字体か、類型別一覧表(%)：母親調査(東京)(被調査者 117名)

1 点画の方向・長さの変わったもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○晴天	8	50	6	26	82
○△校内	6	33	1	47	81
○△羽根	15	33	0	29	62
○新緑	30	44	3	14	61
○習字	23	37	2	21	60
○△教育	20	34	3	19	56
○日曜	30	34	0	16	50
◎博士	40	26	0	23	49
◎包む	32	15	0	22	37
◎聖人	51	29	1	7	37
◎東京港	33	15	0	20	35

2 点画の省略されたもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○横顔	6	22	0	64	86
△盗む	13	30	0	40	70
◎徴集	25	52	1	9	62
○山脈	33	40	2	14	56
△山奥	36	34	1	21	56
○△記者	41	35	1	17	53
○暑い	43	40	1	11	52
○諸兄	44	37	1	13	51
◎食器	39	29	2	19	50
△種類	44	39	1	9	49
○著作	46	37	1	8	46
△歴史	43	35	2	8	45
△道徳	51	38	0	7	45
△収入	49	38	0	5	43
◎漢字	58	27	0	8	35
△頼む	65	27	0	3	30
◎歳暮	62	21	3	3	27
◎突	70	22	0	1	23
◎謹賀新年	71	11	0	5	16

3 画の交差の変わったもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△呉服	32	26	2	28	56

◎ 急行 53 30 0 6 36

4 画の併合したもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
△悪人	2	76	5	10	91
○△温度	4	54	3	32	89
△様	6	81	6	1	88
◎海岸	5	79	3	3	85
○△黒い	11	59	4	20	83
△検査	13	76	6	1	83
◎焼く	17	75	3	2	80
△来る	11	72	3	3	78
△屈ける	20	39	3	31	73
○△乗る	20	55	6	12	73
△満月	18	58	3	9	70
○一冊	25	53	5	6	64
◎練る	27	51	3	6	60
◎帯	56	36	0	2	38
△従う	62	36	0	0	36
△狭い	58	30	1	3	34

6 部分の省略されたもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△号外	0	76	16	7	99
△医院	1	83	14	1	98
△泣き声	1	84	11	2	97
◎芸人	2	85	9	3	97
△予算	0	80	12	4	96
△独得	2	84	9	3	96
◎公団	2	89	4	2	95
○△点字	1	71	15	8	94
△圧力	2	79	10	4	93
○△余り	1	73	15	4	92
△応接	5	82	7	3	92
○△処分	6	79	9	3	91
◎価格	6	78	4	0	82
◎疊店	13	80	2	0	82
△展覧	15	68	4	7	79
△聴衆	15	69	2	5	76
◎武蔵野	41	56	0	3	59

◎ 専門	39	54	0	1	55
△ 五 条	45	42	1	1	44
△ 射 撃	50	42	0	2	44
△ 恵 み	52	39	1	1	41
△ 随 筆	56	29	1	7	37

7 部分の簡略化されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
△ 鉱 山	0	83	12	4	99
△ 当 番	0	88	9	2	99
◎ 警視庁	0	90	6	3	99
△ 発 明	1	83	14	2	99
△ 実 物	0	84	12	2	98
△ 栄 養	0	86	9	3	98
△ 対 立	0	86	8	3	97
○△大 関	0	74	13	9	96
○△変 化	0	80	12	4	96
△ 辞 典	0	82	9	5	96
○△乱れる	0	85	10	1	96
△ 小 麦	2	89	6	1	96
△ 国 語	3	88	7	1	96
◎ 空 気	0	85	7	3	95
○△豊 作	2	60	10	25	95
○△お 礼	0	80	14	0	94
△ 会 社	0	81	12	1	94
△ 政 党	1	72	7	15	94
△ 済 む	0	77	10	6	93
△ 浜 べ	2	76	15	2	93
△ 数える	3	83	7	3	93
△ 軽 い	3	82	7	3	92
○△帰 る	3	83	7	1	91
△ 拳 手	6	83	6	2	91
△ 解 釈	5	80	7	3	90
◎ 売 る	7	82	6	2	90
△ 渋 谷	4	86	3	0	89
△ 金 歯	7	82	4	3	89
△ 淹 ぽ	8	80	6	3	89
△ 証 明	7	73	11	4	88
△ 参 加	8	74	10	4	88
△ 音 楽	9	83	5	0	88
○△献 金	3	57	9	21	87

△ 囲 む	6	76	8	3	87
△ 桜	9	78	9	0	87
◎ 伝 記	10	77	10	0	87
○△所 属	5	69	7	10	86
△ 児 童	6	80	3	3	86
△ 名 称	9	76	7	2	85
◎ 鳥の巢	15	76	3	2	81
△ 大 仏	11	76	4	0	80
△ 頭 脳	15	74	3	3	80
△ 壺 千	13	68	9	2	79
△ 仮 定	15	73	5	1	79
△ 権 利	15	69	5	4	78
△ 闘 牛	15	59	3	15	77
△ 雑 誌	22	68	6	3	77
◎ 戦 車	17	72	4	0	76
△ 碎 く	22	65	1	5	71
△ 厳 重	24	64	3	3	70
△ 総 長	27	58	5	3	66
△ 湿 度	26	61	3	1	65
△ 状 態	30	59	4	2	65
△ 真 夏	31	58	2	1	61
△ 昼 間	35	54	3	2	59
△ 遅 刻	37	50	2	5	57
△ 幽 霊	37	53	2	1	56
◎ 破 壊	33	46	0	9	55
◎ 掲 示	33	46	0	9	55
◎ 鶏	40	49	1	4	54
◎ 寝 る	40	51	0	2	53
◎ 一壘手	48	43	1	1	45
△ 争 う	43	43	0	1	44
△ 拝 見	49	36	0	2	38
△ 行 為	56	35	2	1	38
△ 遊 戯	52	32	2	3	37
◎ 謡 曲	52	33	1	2	36
◎お嬢さん	66	27	1	0	28

8 全体の簡略化されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△体 操	0	61	21	16	98
○△百万人	0	80	13	4	97
○△旧 式	2	78	15	3	96

○△食 塩	0	58	12	25	95	◎ 米 寿	9	76	7	1	84
△ 山 岳	1	70	13	12	95	○△尽きる	35	58	2	2	62
△ 欠 席	1	72	14	9	95	9 異体の統一されたもの					
○△画 伯	1	72	14	9	95	漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○△与える	3	80	9	3	92	○△守 衛	7	25	2	54	81
△ 写 す	9	80	8	1	89	△ 秘 密	9	26	2	47	75
△ 汽車弁	8	79	6	3	88	○△強 い	15	25	3	38	66
△ 弁護士	11	77	7	3	87						

この表を見ると、新字体を使うもの・旧字体を使うものの全体的傾向は長岡の場合とよく似ていて、前述の7項目(101～102ページ)は全面的に合致するといってよい。

たとえば、各類型ごとの各文字の順位は近似しているし、2「点画の省略」は旧字体を使うものが多く、8「全体の簡略化」は新字体を使うものが多い、という特徴は、いっそう顕著である。

ただ、1「点画の方向・長さ」の類型では、東京のほうが長岡よりも「旧字体を習った」とあるものが多くなっている。(晴・羽・習・教・曜など)

なお、「両両」「両旧」の答えはほとんどなかったが、「旧両」と答えた者が5名(4.3%)以上あった字は、次のとおりである。

「旧両」……著・様・条・専・真・戦・拝・渋

「様」は長岡と共通であり、「条」は長岡では「両旧」であった。

(b) 層別にみた傾向

被調査者が全体として、新字体を使うか、旧字体を使うかの傾向を、調査した全文字につき、学歴別・年齢別・長子の学年別に比較してみると、第54表のようになる。

第54表 新字体を使うか旧字体を使うかの層別比較(%)

	義務 教育	旧中 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の学年				計
							小3 以下	小4 ～6	中1 ～3	高校 以上	
長 新を使う	70	75	79	74	75	76	72	—	—	—	75
岡 旧を使う	21	22	21	22	23	19	23	—	—	—	22
東 新を使う	73	74	71	76	70	81	74	73	71	75	73
京 旧を使う	17	24	26	21	27	18	25	25	22	22	24

全体として、新字体を使うか、旧字体を使うかの傾向は、長岡と東京とで、さしたるちがいはなく、かなり近似している。

しかし、学歴別にみると、長岡では、学歴の高い層ほど新字体を使う傾向がある（旧字体はあまり開きがない）のに、東京ではその反対で、学歴の高い層ほど旧字体を使う傾向を示している（新字体はあまり開きがない）。これは解釈に苦しみところであるが、後に述べるように、書き取りでは、東京の母親も学歴の高いほど新字体を使う傾向を見せているから、おそらく、反省による新旧の選択にあたって、東京の母親の学歴の高い層は、自分の旧字体に対する知識に引きずられたのではないかと考えられる。

年齢別にみると、高い年齢層において、他の年齢層よりも新字体を使う度合いが多く、旧字体を使う度合いが少ない傾向を示し、この点は長岡と東京とで似ている。

長子の学年別では、長岡で小3以下の層が平均値よりも新字体を使う度合いが少なく、旧字体を使う度合いが多くなっているように見え、東京でも長子が小学生の層で、旧字体を使う度合いが平均値よりも多い傾向を見せている。これはごくわずかな差で、かなり微妙ではあるが、長子の学年の低い母親という層については、いろいろの面で注意する必要があると思われるのである。このことは、後述する書き取りの際にもふれる。

2 制限漢字と制限音訓の使用はどうか

母親調査（東京）では、新字体を使うか・旧字体を使うかの選択の問題と同じ方法で、制限漢字（当用漢字表に載っていない漢字。表外字ともいう）と制限音訓（当用漢字音訓表に載っていない音訓）との使用の実態を調べた。

(1) 問題に選んだ漢字と音訓の性質

問題に選ぶ漢字と音訓とは、あまり使われないものであるよりは、使用度の高いものであったほうがよい。そのために、国立国語研究所で行なった漢字調査・語彙調査の結果を利用することとした。

すなわち、制限漢字は、『現代雑誌九十種の用語用字第二分冊漢字表』（国立国語研究所報告22）の第1表「使用率順漢字表」において使用順位の高いものの中から選定し、制限音訓は、『現代雑誌九十種の用語用字第一分冊総記および語彙表』（報告21）の第2表「使用率順語彙表（全体）」における、順位の高い

語のうち制限音訓で書かれる可能性のあるもの（熟字訓・当て字を含む）から選定した。

(2) かなで書くか、漢字で書くか

問題の語をかなで書くか、漢字で書くかの答えは、新字体か旧字体かと同様反省法によったので、必ずしも実際に書く場合と合致するとはいえない。しかし、これも新字体旧字体の場合と同様、書き取りと重複させた語についてその一致度を検証してみると、相当程度信頼が置けそうなので、だいたいの傾向は察知することができると考えてよい。

いま、項目別、語別に、かなで書くか、漢字で書くかの傾向を表にして示すと、第55表のとおりである。数字は、「かなを使う」「漢字を使う」などと答えた人数の％である。

この表に表われた限りでは、制限漢字については、副詞・形式名詞その他の形式語は比較的かなで書かれることが多く、名詞やよく使われる代名詞などは比較的漢字で書かれることが多いように見うけられる。漢字で書かれることの多いものは、その漢字が一般的に使用度の高いものである傾向があるようである。

制限音訓についても、副詞・形式名詞・接頭語などは比較的かなで書かれることが多く、使用度の高いものほど漢字で書かれることが多いようである。

なお、これらの語に関する限りは、総じて新表記法に非同調的な傾向があると見ることができる。

第55表 かなで書くか、漢字で書くか(%)：母親（東京）

制限漢字					
語		かな	漢字	無答	
兎	に	角	85	13	2
そ	の	儘	72	27	1
来	る	筈	64	33	3
殆	ん	ど	45	53	2
	俺		44	34	22
貰	う		44	54	2
に	於	て	44	55	1
或	る	日	43	54	3
	襟		32	59	9
	脇		27	66	7

勿	論	27	70	3
僕 据 身		15	80	5
		15	83	2
	頃	14	83	3
誰 い 袖		13	85	2
	頃	4	95	1
		1	94	5

制限音訓				
語		かな	漢字	無答
矢	張	76	22	2
呉	れ	73	25	2

こ	の	辺	70	27	3	貴	方(貴女)	23	72	5	
時	が	経	70	29	1	そ	の	他	22	75	3
何		れ	57	42	1	何	時	も	18	78	4
未		だ	55	40	5	君		達	15	81	4
御	返	事	54	44	2	頂		く	15	85	0
直	ぐ	に	52	45	3	例	え	ば	13	84	3
世	の	為	50	49	1	如	何	に	13	86	1
何		故	43	56	1	門	を	入	12	86	2
何		処	41	56	3	縫		代	10	89	1
先		ず	28	68	4	お	母	さ	10	89	1
後	か	ら	27	68	5	又		は	9	87	4
子	供	等	27	70	3	致	し	ま	9	87	4
我	が	国	26	69	5			体	6	93	1
ど	れ	程	26	71	3			私	3	94	3
居	り	ま	26	71	3	今		日	3	97	0
一	日	毎	25	75	0	二		人	3	97	0
欲	し	い	24	72	4	部		屋	3	97	0
家	の	人	24	74	2	今		年	3	97	0
一		寸	23	76	1						

(3) 層別にみた傾向

被調査者が全体として、かなで書くか、漢字で書くかの傾向を、調査した全文字につき、制限漢字・制限音訓を合わせて、学歴別・年齢別・長子の学年別に比較してみると、第56表のようになる。

第56表 かなで書くか、漢字で書くかの層別比較(%)：母親(東京)

	義務旧中大学			27~34~44~			長子の学年				計
	教育	新高	高専	33才	43才	55才	小3以下	小4~6	中1~3	高校以上	
かなを使う	32	29	34	31	30	29	30	30	33	28	30
漢字を使う	63	68	65	69	66	66	69	69	58	64	67
無答その他	5	3	1	0	4	5	1	1	9	8	3

全体として、学歴差や年齢差はあまりないといってよいが、学歴の高いほうがかなを使うことが多く、年齢の高いほうがかなを使うことが少ないという傾向が、わずかながら認められる。また、長子が小学生の層に、漢字を多く用いる傾向がかなり顕著に認められる。このことは、新字体か旧字体かの調査において、長子の学年の低い母親のほうが、旧字体を用いる傾向があることと軌を一にする。言いかえれば、子どもの小さい母親のほうが、子どもの大きい母親

よりも“旧式”なのである。後述する書き取りによる調査でも、似た傾向が見られる。

3 書き取りにおける表記の実態

反省法による選択だけでは必ず実態がつかめるとは保証しがたいので、書き取りをしてもらって、実際にどんな表記をするかを調べた。書き取りの方法は17ページに述べたとおりであるが、その問題文と、それに含まれている問題項目は、次のとおりである。長岡のと東京のとで、少し変えた部分がある。

(1) 問題文と問題項目

問題文には、制限漢字・制限音訓・字体・かなづかい・送りがなに関連のあら語が多く含まれている。下線を付したものが国語施策による新しい表記法、その下に書いてあるのが旧表記法である。

(a) 長岡における問題文

- ① わたしは、きのうの日曜日におかさんとさかな屋に買い物に行きました。
- | | | | | | |
|---|----|---|---|---|----|
| 私 | 昨日 | 曜 | 母 | 魚 | 買物 |
|---|----|---|---|---|----|

- ② おとうさんのへやには明るい電燈がつき、タバコの煙がいっぱい立ちこ
- | | | | |
|---|----|------|----|
| 父 | 部屋 | 明かるい | 煙草 |
|---|----|------|----|

めています。

ゐ

- ③ きょう漢字の読み方の宿題が出ました。先生がうちの人に手伝ってもら
- | | | | | | |
|----|---|----|---|---|---|
| 今日 | 漢 | 讀方 | 家 | 傳 | 貰 |
|----|---|----|---|---|---|

わずにひとりで考えましょうと言いました。

は 一人 へ せう ひ

- ④ 私は東京都の神田区で生まれましたが、小学校にはいってまもなく、お
- | | | | | |
|---|---|----|---|---|
| 都 | 區 | 生れ | 學 | 入 |
|---|---|----|---|---|

じいさんといっしょに新潟県の三条市に疎開して参りました。それはたし

ぢ	縣	條	参(まる)
---	---	---	-------

か大東亞戦争が始まったばかりのころだったと思います。

亞戦争 始った 頃 ひ

- ⑤ 暑中お見舞 申し上げます。

暑 申上げ

- ⑥ 明けておめでた ございます。

た

(b) 東京における問題文

- ① 暑中お見舞 申し上げます。

暑 御 見舞 申上げ

- ② わたしは、きのうの日曜日におかあさんとふたりでさかな屋に 買い物に

私 昨日 曜 母 二人 魚 買物

行きました。

- ③ 今度道徳の教科書が新しく作られ、歴史上の人物の話などがいろいろ扱

徳 教 歴 等 色々

われるそうです。

は さ

- ④ ぼくは人間の条件を受読しています。

僕 條 讀 居

- ⑤ きょうは漢字調べの宿題が出ました。先生がうちの人に手伝ってもら

今日 漢 宿 家 傳 貰は

ずにひとりでやりなさいと言いました。

一人

ひ

- ⑥ 私は昔、新聞記者をしていたころ、小田急の参宮橋駅の近くに住んでお

者 居 頃 急 参 驛 居(を)

りましたが、大東亜戦争中に強制疎開で横浜のいなかに移り、そこで終戦

亞戦争 強 横濱 田舎 其所・其処 戦

を迎えました。

へ

(「宿」の旧字体を「宿」としたのは、後に述べるように、第3期の国定読本で用いていたものとの関連を見ようとしたための措置である。)

(2) 項目別にみた傾向

被調査者が新表記によるか旧表記によるかを、項目別に集計すると、次のよ

うになる。

第57表 新表記か旧表記か(%)：母親(長岡)

制限漢字				
語	かな がき	漢字 がき	その 他	
貰わずに 頃	77 5	21 92	2 3	

制限音訓				
語	かな がき	漢字 がき	その 他	
たばこ	32	68	0	
おかあさん	13	85	3	
うち	13	86	1	
おとうさん	9	90	0	
きのう	7	91	2	
ひとり	4	95	1	
はいて	5	95	1	
きょう	3	96	1	
わたし	4	96	0	
へや	4	96	0	
さかな	3	97	0	

字体			
語	新	旧	その 他
△神田区	96	3	1

△学校	88	10	3
△大東亜	87	9	4
◎新潟県	68	29	3
○東京都	60	40	0
△読み方	48	39	14
△参り	47	18	47
○日曜日	46	28	26
○暑中	43	53	4
◎手伝って	41	46	13
◎戦争	36	60	4
◎漢字	17	60	24
△三条	14	86	1
△戦争	6	91	4

(注)「その他」のうち、
「曜」は、大部分が「旺」。
そのほかは、かながき
または誤字、脱字など。

かなづかい			
語	新	旧	その 他
います	82	5	13
言い	76	20	4
もらわず	70	29	2

ましよう	69	27	4
おめでとう	52	6	42
考え	48	42	11
おじいさん	44	31	25
まいり	35	2	63

(注)「その他」の数の多いのは、漢字がきが大部分。

送りがな			
語	入れ る	入れ ぬ	その 他
明かるい	83	12	5
申し上げ	59	40	1
始まった	58	35	7
読み方	54	35	11
生まれ	35	65	1
買い物	12	78	9

(注)「明かるい」が新しく、「明るい」が古いとは必ずしもいえないが、便宜上このように取り扱う。

第58表 新表記か旧表記か(%)：母親(東京)

制限漢字				
語	かな がき	漢字 がき	その 他	
貰わずに 頃	80 9	20 91	0 0	

制限音訓				
語	かな がき	漢字 がき	その 他	
そこ	91	8	1	
います	85	12	3	
いた	85	15	0	
な	49	51	0	

いろいろ	46	53	1
おりました	44	51	5
お見舞	26	74	0
うち	20	78	2
おかあさん	14	84	2
きのう	13	87	0
わたし	10	90	0
ぼく	9	91	0
さかな	5	95	0
いなか	3	94	3
きょう	3	97	0
ふたり	3	97	0
ひとり	2	97	1

字体			
語	新	旧	その 他
○横浜	98	0	2
△横浜	93	5	2
△大東亜	93	6	1
△駅	92	7	1
△参宮橋	81	14	5
◎小田急	67	33	0
△愛読	62	38	0
○△強制	55	28	17
◎手伝い	53	45	2
○△宿題	52	45	3

○ 日 曜	46	33	21
○△記 者	45	54	1
○ 暑 中	45	54	1
○△教科書	37	62	1
◎ 終 戦	35	64	1
◎ 戦 争	35	64	1
△ 道 徳	24	75	1
△ 歴 史	22	60	18
◎ 漢 字	14	79	7
△ 条 件	13	85	2

△ 戦 争	5	92	3
-------	---	----	---

(注)「その他」のうち
「曜」は「旺」、そのほかは、かながき、誤字、脱字。

扱われる	79	19	2
言いました	77	23	0
迎えました	66	32	2

かなづかい			
語	新	旧	その他
そうです	93	5	2
もらわず	80	20	0

送りがな			
語	入れ る	入れ ぬ	その他
申し上げ	71	29	0
買い物	11	89	0
見舞い	11	89	0

長岡・東京とも、制限漢字・制限音訓・字体・送りがなは、字や語によって新旧の傾向がちがうが、かなづかいは、著しく新かなへの傾向を示している。

制限漢字は、よく使われるやさしい字と、あまり使われないむずかしい字の代表を選んで問題文に入れたので、予想したとおりの結果となった。

制限音訓は、長岡の場合、世間で比較的漢字がきにされることの多い語（主として名詞）をわざと選び、どの程度かながきがあるかを見ようとしたため、これらの語に関する限り、きわめて非同調的な傾向を示したが、東京の場合は、代名詞・副詞・補助動詞などをも問題に含めたので、語によってちがうという傾向がはっきり現われた。（「居」には「いる」の訓が認められているが、補助動詞の場合はかながきにするという一般的な慣習ができていたので、この問題に加えた。）

字体については、戦前から略字や俗字の使われていた旧略字体ほど新字体で書かれ、戦後になって初めて作られた新体や、略体でも戦前あまり一般的でなかったものが旧字体で書かれる傾向にある。この点は、反省法による選択の場合とよく似ている。ここで注意されるのは、「横」以外の教科書体（○印のついているもの）が、だいたいまんなかへんに集まっている、つまり、新旧のどちらへも著しくかたよらず、両者ともにかなり使われているということであるが、これについては、後に述べる。（→121ページ）

かなづかいは、旧かなづかいでハ行に活用する動詞の語尾を主として見ようと考えたのであるが、平均して3割前後が旧かなといったところが実情のようである。

送りがなは、動詞の場合は入れ、転成名詞の場合は入れないという傾きが見

えるが、もちろん、問題文の中の語に関する限りのことである。

(3) 層別にみた傾向

新表記・旧表記の傾向は、学歴層・年齢層・長子の学年層によってどうちがうか。この点を明らかにするために、次のような集計を試みた。

被調査者ひとりひとりにつき、制限漢字・制限音訓・字体・かなづかい・送りがなの各項目ごとに、すべての語を新表記で書けば+10点、すべてを旧表記で書けば-10点、半分新表記で半分旧表記で書けば0点のように得点を与え、層別に平均点を求めた。(送りがなは“入れる”を新表記とした。)

その結果は、第59表のとおりである。

第59表 新表記旧表記傾向層別平均点

(長岡)	義務教育	旧女 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の 学年	計
							小3 以下	
制 限 漢 字	+3.6	+1.8	+1.2	+3.1	+2.1	+0.4	+3.0	+2.1
制 限 音 訓	-6.8	-6.9	-6.6	-6.8	-6.8	-7.7	-7.1	-6.8
字 体	-0.3	+1.1	+3.7	+0.2	+1.2	+2.3	-0.4	+1.1
か な づ か い	+3.1	+4.9	+7.1	+4.8	+5.0	+3.0	+4.2	+4.7
送 り が な	+0.1	+0.9	+1.0	+1.5	+0.7	-0.6	+1.5	+0.7

(東京)	義務教育	旧女 新高	大学 高専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	長子の学年				計
							小3 以下	小4 ～6	中1 ～3	高校 以上	
制限漢字	0	-0.7	-3.5	+0.2	-1.9	-2.8	-1.4	-1.3	-1.8	0	-1.1
制限音訓	-5.5	-1.4	-1.8	-3.9	-3.9	-3.3	-4.2	-4.5	-2.2	-3.0	-3.8
字 体	+0.6	+0.6	+1.4	+0.6	+0.5	+3.1	+0.4	-0.2	+2.4	+1.8	+0.3
かなづかい	+2.9	+6.1	+6.6	+6.9	+5.3	+7.2	+6.0	+4.8	+7.5	+7.0	+6.0
送りがな	-7.1	+4.6	-3.2	-4.5	-4.5	-4.8	-5.0	-5.2	-1.5	-4.1	-4.6

この2つの表から、次のことがわかる。(長岡と東京とで共通する傾向になる項目もあり、逆の傾向になる項目もある。)

- (i) 制限音訓については、年齢差も学歴差もほとんどないといってよい。ただし、東京の義務教育の層には漢字がきの傾向が著しく現われている。

- （ii）学歴の高いほど、制限漢字が残り、新字体を使い、新かなを使い、新しい送りがなを使う傾向がある。（ただし、東京では、旧女・新高の層が大学・高専の層よりも送りがなについては新しい傾向を示している。）要するに、学歴の高いほど概して新しい表記を使う中で、制限漢字だけが古いということになるが、しかし、この場合の“制限漢字が残る”というのは、むずかしい漢字が書けるということとほぼ同義であるし、わずか2字のことでもあるから、結局、学歴の高いほど、新表記に従う傾向があると見てさしつかえないと思う。
- （iii）年齢の高いほど、制限漢字が残り、新字体を使い、旧かなが残り、古い送りがなが残る傾向がある。（ただし、東京では、かなづかいにおいて、高い年齢層がかえて最も新しい傾向を示している。）要するに、年齢の高いほど概して古いほうを使う中で、字体だけが新しいということになる。これは、字体選択の調査結果と合致する。ただし、この年齢差は、学歴差ほどに明白な傾向とは必ずしも言いがたく、後に述べるような要因(国定読本とのちがいの対応→117～121ページ)も関連しているのではないと思われる。
- （iv）長岡の場合、長子が小学3年以下、東京の場合、長子が小学生である層について、他の層と比べて、相対的に次のことが認められる。
- （ア）制限漢字を使う人が少ない。（ただし、東京の高校以上の層では最も少ない。）これは、年齢層の傾向と一致するということであって、必ずしも長子の学年が低いということとは関係が薄いと思われる。
- （イ）制限音訓を用いる傾向が強い。また、旧字体を用いる傾向が極端に表われる。年齢の高いほどかながきが多く、また新字体を使うことと裏返しの関係にあるわけである。長子の学年が上になるほど、かながきがふえ、新字体を用いる者が多くなるということは、母親が音訓や字体に関して子どもの勉強から影響を受けることが大きいことの表われではないかと考えられる。
- （ウ）旧かなづかいをより多く用いる。若い母親が旧かなを用いるというのは、子どもの影響がまだ少ないためと考えられる。
- （エ）送りがなについては、長岡では新しく、東京では古いという逆の

結果が出ている。この理由はよくわからない。

4 反省による選択と実際に書くこととの一致度

新字体を使うか旧字体を使うか、あるいは、漢字で書くかかなで書くかということは、実際に書いた結果を見なければ、ほんとうのところはわからない。しかし、反省による選択でも、自分で自分のことを考えるのだから、まったく合っていないということはなく、むしろ、だいたい一致するはずだと考えるほうが適当であろう。

その一致度を、選択の問題と書き取りの問題との間で重複している字や語について検証してみた。

(1) 母親調査(長岡)の場合

共通している9字についての一致度は、第60表のとおりである。

第60表 選択と書き取りとの一致度(%)：母親(長岡)

選択	実際	参	暑	漢	曜	戦	読	争	伝	条	全体
新 新		85	36	15	50	39	57	5	45	12	34
旧 旧		4	42	56	14	22	3	54	9	38	28
新 旧		10	14	23	26	37	40	37	42	47	34
旧 新		2	8	6	10	2	0	4	3	3	4
一致度		89	78	71	64	61	60	59	54	50	62

結局、40%弱は信用できないということになるが、かなり一致している漢字は、「参・暑・漢・曜」など、比較的一致している字は「戦・独・争」などで、著しくちがう漢字は「条・伝」であった。

この一致度については、東京の調査の場合のほうが、字数も多く、また、制限漢字・制限音訓についても検討できるので、次項にさらに詳しく述べる。

(2) 母親調査(東京)の場合

共通しているもの(字体16字、かなか漢字か10語)についての一致度は第61表のとおりである。

第61表 選択と書き取りとの一致度(%)：母親(東京)

字	体	浜	参	横	暑	者	教	徳	伝	漢	強	急	条	争	戦	歴	曜	全体
一致したもの		87	83	77	75	70	66	66	65	61	59	59	57	54	52	51	49	64
不一致のもの		6	10	15	21	24	26	29	30	27	15	35	33	38	41	14	18	24
その他		7	7	8	4	3	8	5	5	12	26	6	10	8	7	35	33	12

かなか漢字か	き う	よ り	ふ た さん	お か あ さん	わ た し	ぼ く	頃	う ち	お り ま す	お (御)	貰 う	全 体
一致したもの	97	95		93	91	85	81	79	66	62	60	81
不一致のもの	2	3		4	6	10	16	16	25	35	38	16
その他	1	2		3	3	5	3	5	9	3	2	3

かな書きか漢字書きかの問題のほうが、新字体か旧字体かの問題よりも一致度が著しく高い。字体のほうは、一点一画の微妙なちがいであり、かなか漢字かは、比較的反省しやすい、ということがわかる。長岡の場合と比べると、一致度はほぼ同様であり、不一致度は東京のほうが、いくぶん下まわる。要するに、かな書き、漢字書きの選択は、比較的信頼のおけるものであり、新字体、旧字体の選択は、3～40%は割引きして考えないとあてにならないということである。

一致したもののうち、選択で新字体と答えて書き取りでも新字体を書いたものの多い字は「浜・参・横・伝・強・急・戦・曜」であり、旧を選び旧を書いたものの多い字は「暑・教・徳・漢・条・争・歴」であった。また、不一致のものうち、新を選びながら旧を書いたものの比較的多い字は「戦・争・条・伝・漢・徳・教・暑・者」などであり、旧を選びながら新を書いたものの比較的多いものは「急・横」などであった。

かながきか漢字がきかについては、ほとんどが、旧を選んで旧を書いたものであるが、「貰う」は、かながきを選んでかながきにしたもののが40%と多かった。また、「貰う」については、旧を選びながらかながきにした者が35%という数値を示した。旧を選んで新を書いたものの多い語は、ほかに「おります」があり、反対に、新を選びながら旧を書いた語には「お(御)」がある。

「新新」「旧旧」の一致、「新旧」「旧新」の不一致を別個に示すと、次のとおりである。

第62表 選択と書き取りとの一致度(%)：母親(東京)

				字 体	かなか漢字か
新を選択し、新を書いたもの				37	13
旧	〃	旧	〃	27	68
新	〃	旧	〃	18	7
旧	〃	新	〃	6	9

(3) 面接調査の場合

参考のため、面接調査における例にふれておきたい。面接調査のたんざくで、やはり字体の問題を扱い、新字体を使うか旧字体を使うか（簡略俗体を含む）をたずねた。それは「学校・新潟県・長岡駅・蔵王町・観光院町・三条市・新発田市・東京都・営業所・職業・畳店・商会・医院・自転車・青年・年齢・百万人・真夏・静岡・一郎様」の20字であったが、この調査の被調査者のうちT氏・N氏の2名を、調査の翌年、報告会に長岡市に行った際、再び面接して、前と同じ字を実際に書いてみてもらった。その結果は、少数の字について次のような不一致を示した。

	T氏	N氏
面接調査の時の答え	畳	都 恥 畳
実際に書いた字	畳	都 職 畳

このように、この2名の場合は、不一致はごくわずかで、全体としてはほぼ一致したといってよい。N氏

は「都」は、近ごろ意識してこのように書くようにしている、と言っていた。ちなみに、T氏は火災保険会社の支所長であり、N氏は寺の住職で、自宅で学習塾を開いている人であって、いずれも文字を書くことには関係の深い職業についている。

5 国定読本の字体と母親の文字の使いかたとの対応

(1) 奇妙な事実

母親調査（長岡）の書き取りの答案を調べているとき、奇妙な事実気づいた。それは、問題文の中の「都」や「暑」の字体が、どうも大正生まれの人と昭和生まれの人とで、かなりはっきりとちがうらしいということである。すなわち、大正生まれの人は、大多数が「都」や「暑」にテンをうたない字体を書くのに対し、昭和生まれの人は、大多数がそれにテンをうつ字体を書くのである。これは、“母親は年齢の高い層ほど新字体を用いる傾向がある”という調査結果の一環をなす現象であるにはちがいないが、しかし、この2つの字に関する限り、別の問題が含まれているのではないかと思われたのである。

それは、国定読本における字体の相違である。「都・暑」は、第3期のいわゆる白表紙本（ハナ・ハト）では、テンをうたない字体（本報告にいう新字体）が使われているのに対し、第4期のいわゆるサクラ読本（サイタ・サイタ）で

は、テンをうつ字体（本報告にいう旧字体）が使われているのである。母親の答案における字体の相違の事実は、そのことと関連があるのではなからうか。

そうしてみると、また、もうひとつ奇妙な事実が目についた。それは「宿」の字体である。この字を、昭和生まれの人は、大多数が新字体と同じく、「ウカンムリにイ百」と書くのに、大正生まれの人は、大多数が「ウカンムリにーイ白」と書くのである。前者をかりに新字体、後者をかりに旧字体と呼ぶとすれば、白表紙本では旧字体が用いられ、サクラ読本では新字体が用いられていて、正に対応するのである。

そこで、母親調査（東京）では、この問題を明らかにすることを計画に加えることとし、問題文に、国定読本の期によって字体の異なるものを2、3ふやして実施してみたのである。

(2) 年齢層の分け直し

ところで、この調査における年齢層の分け方は、若い人たちのほうを国語施策当時の学年で分けたのに対応させたものであるため、国定読本の期と一致しない。そこで、使った国定読本の期に合わせて年齢層を分け直し、字体のちがいの対応を見てみることにした。

被調査者が小学生当時使用した国定読本は、第2期（ハタ・タコ）から第5期（アカイ・アカイ）にわたる。すなわち、次のとおりである。

- 第2期（ハタ・タコ）……明治43年から大正6年まで使用
- 第3期（ハナ・ハト）……大正7年から昭和7年まで使用
- 第4期（サイタ・サイタ）…昭和8年から昭和15年まで使用
- 第5期（アカイ・アカイ）…昭和16年から昭和20年まで使用

これに合わせて被調査者の年齢層を分け、書き取りで書いた字体がそれぞれの教科書の字体と合っている人、合わない人の人数を調べたのである。

(3) 問題の字

ところで、長岡調査では、選択の問題の中に、「広」の新字体と「廣・廣」の旧字体と3字並べて選択させる問いが含まれているので、これをも勘案することとした。この場合は「広」を度外視し、「廣」を新字体、「廣」を旧字体とかりに呼ぶこととする。（本報告書の用語では、「広」が新体、「廣」が教科書体、「廣」が明朝体である。）

問題となる字は、次のとおりである。(カッコ内の数字は類型番号。97ページ参照)

●長岡 曜(①) 都・暑・廣(以上②) 宿(⑤)

●東京 曜・教(以上④) 暑・者・横(以上②) 宿(⑤) 強(⑨)

これらの字が、各期の国定読本でどんな字体になっているかを見ると、第63表のとおりである。(○印は新字体、×印は旧字体を表わす)

第63表 字体期別対照表

	第2期	第3期	第4期	第5期
曜	× 曜	○ 曜	○ 曜	○ 曜
教	× 教	○ 教	× 教	× 教
都	○ 都	○ 都	× 都	× 都
暑	○ 暑	○ 暑	× 暑	× 暑
者	○ 者	○ 者	× 者	× 者
廣	× 廣	○ 廣	○ 廣	○ 廣
横	× 横	○ 横	○ 横	○ 横
宿	○ 宿	× 宿	○ 宿	○ 宿
強	○ 強	× 強	× 強	○ 強

(注) 第3期には、第2期の
を改訂したいわゆる黒表
紙本(ハタ・タコ)も併用
され、地域によって異な
っていたが、ここに掲げ
た字の字体に関する限
り、白表紙本と同じなの
で、一括して扱うことと
した。

(4) 対 応

これらの字につき、長岡と東京とを別個にして、書き取りの字体を集計すると、第64表のようになる。(第2期と第5期との人数が少ないので、一応実数で示し、カッコの中に%を参考に掲げた。)

また、長岡と東京とを一緒にし、9字全部を一括して、新字体・旧字体を問わず、その期の読本の字体と書いた字体とが一致した人数の、全人数に対する割合を示すと、第65表のようになる。

これらの表を見ると、総体に、書き取りの字体が国定読本の字体と一致する傾向が強いということがわかる。ということは、小学生時代に覚えた字体は、年をとってもいつまでも残るということを示すのではなからうか。幼いときに一点一画に注意して書くことをたたきこまれ、指がひとりでにそう書いてしま

第64表 読本と書き取りとの字体の一致・不一致（英数および%）

生	年	明 40 ～ 明 43			明 44 ～ 大 14			大 15 ～ 昭 8			昭 9 ～ 昭 10		
	使った読本 読本との一致・不一致	第 2 期			第 3 期			第 4 期			第 5 期		
		一 致	不一致	その他	一 致	不一致	その他	一 致	不一致	その他	一 致	不一致	その他
長岡	曜	× 0(0)	4(80)	1(20)	○ 71(59)	27(22)	23(19)	○ 74(69)	17(16)	17(16)	○ 5(100)	0(0)	0(0)
	都	○ 3(60)	2(40)	0(0)	○ 105(87)	16(13)	0(0)	× 80(74)	26(24)	2(2)	× 4(80)	1(20)	0(0)
	暑	○ 4(80)	1(20)	0(0)	○ 75(62)	45(37)	1(1)	× 82(76)	18(17)	8(7)	× 4(80)	1(20)	0(0)
	廣	× 3(60)	0(0)	2(40)	○ 85(70)	22(18)	14(12)	○ 81(75)	18(17)	9(8)	○ 2(40)	0(0)	3(60)
東	宿	○ 3(60)	0(0)	2(40)	× 71(59)	37(31)	13(11)	○ 81(75)	14(13)	13(12)	○ 4(80)	0(0)	1(20)
	曜	×	—	—	○ 21(50)	10(24)	11(26)	○ 41(55)	15(20)	18(24)	○ 1(100)	0(0)	0(0)
	教	×	—	—	○ 21(50)	20(48)	1(2)	× 50(68)	23(31)	1(1)	× 0(0)	1(100)	0(0)
	暑	○	—	—	○ 30(71)	12(29)	0(0)	× 55(74)	19(26)	0(0)	× 1(100)	0(0)	0(0)
京	者	○	—	—	○ 32(76)	10(24)	0(0)	× 53(72)	20(27)	1(1)	× 0(0)	1(100)	0(0)
	横	×	—	—	○ 41(98)	0(0)	1(2)	○ 73(99)	0(0)	1(1)	○ 1(100)	0(0)	0(0)
	宿	○	—	—	× 31(74)	8(19)	3(7)	○ 52(70)	20(27)	2(3)	○ 0(0)	1(100)	0(0)
	強	○	—	—	× 17(40)	18(43)	7(17)	× 17(23)	43(58)	14(19)	○ 1(100)	0(0)	0(0)

(注) ○または×は、それぞれ、その教科書の字体が、新字体・旧字体であることを示す。

第65表 読本と書き取りとの一致度(%)

	第2期	第3期	第4期	第5期	全体
一致	52	67	70	72	67
不一致	28	25	22	16	24
その他	20	8	8	13	9

うまで身につくように教えられたものは、容易に消えがたいわけである。このことを考えると、母親たちが新字体を書くというのが、戦前からの旧略字体が多く、戦後の新体がわりあい少ないという事実と正に符合するのである。つまり、新字体を書くように“変わった”のではなく、前から新字体と“同じであった”のである。

おな、不一致の多い「曜」や「強」は、新字体のほうが書きやすいし、また、不一致の比較的多い「教」や「暑」を考え合わせると、習字の際の毛筆の筆勢ということも考え合わせることができないのではないかと思う。「暑」については、「日」の上にきちんと点をうたず、字の肩にうったものまでも旧字体として集計した。第3期の場合、「都」を新字体で書きながら「暑」が旧字体という人がとくに多かったのは、そのためである。そして、それは、いわば筆くせともいえることがらであろう。

ともかく、読本の字体がいつまでも忘れられずに残っているということは、調査した字だけでなく、他の字についても一般的にいえることではないかと思われるのである。

ただ、第65表に見るように、年齢の若いほど一致度が高いということは、小学校を卒業してからの年数が多いほど、学習の影響が薄れ、社会に順応する、その差が反映していると解釈されるわけで、このことも、小学校時代の学習の強い影響力を裏書きするといえるだろう。

なお、書き取りにおいて教科書体のものが新旧どちらへも著しくかたよらなかった(112ページ参照)のは、これらの字が、読本の期によって新だったり旧だったりであるためと考えられる。「横」は第2期のみ旧字体で、被調査者が少ない。)被調査者全体としては、学校で教わったとおり書く人が多いとすれば、このような結果となるのは当然である。「曜」は、他の字と条件がちがう。)

6 まとめ

以上述べてきたことをまとめると、母親の文字の使いかたとして、次のようなことがいえる。

- (1) 全体的にみると、新字体の使用率は4分の3弱、旧字体の使用率は4分の1強である。
- (2) 新字体は、戦前からの旧略字体や筆写体が多く用いられ、戦後に作られた新体は相対的に普及度が少ない。類型別にみると、「画の併合したもの」「部分の省略されたもの」「部分の簡略化されたもの」「全体の簡略化されたもの」は新字体の使用度が高く、「点画の省略されたもの」は使用度が低い傾向が強い。
- (3) 制限漢字、制限音訓については、使用度の高いものほど漢字で書かれ、副詞や形式名詞・補助動詞・接頭語などの形式語は比較的かな書きにされる。概して非同調的傾向が認められる。
- (4) かなづかいについては、新かなづかいへの同調的傾向が強い。
- (5) 送りがなについては、動詞・複合動詞には入れるが、動詞からの転成名詞になると入れない傾向がある。
- (6) 学歴の高いほど、新字体を使い、多くな書きにし、新かなづかいを使い、新しい送りがなを使うというふうに、概して新しい表記に従う傾向が強いが、制限漢字は、書くことができるので使う傾向がある。
- (7) 年齢の高いほど、旧かなづかいや制限漢字を使いやすい傾向があるが、字体については、新字体を使う傾きが強い。
- (8) 長子の学年が低いほど、旧字体を使い、多く漢字書き(制限音訓)にし、旧かなづかいを用いる傾向が強い。(ただし、制限漢字は使わない。)子どもが小さいために、子どもを通じての新表記の影響がまだ少ないものと考察される。
- (9) 字体については、小学校の教科書で習った字体が、いつまでも忘れられずに残る傾向がかなり強く認められる。

(付録1) 国定読本の期別による字体の異同一覧

参考のために、第2期から第5期までの国定読本において字体の異同のあるものを一覧しうるように第66表として示す。2・3黒・3白・4・5は、それぞれ、第2期(ハタタコ)・第3期黒表紙本(ハタタコ)・第3期白表紙本(ハナハト)・第4期(サイタサイタ)・第5期(アカイアカイ)を表わす。また、各欄の記号は、次のとおりである。

○……新字体と同じ字が本文に使われているもの。

×……旧字体が本文に使われているもの。

○×…新字体と同じ字がまず低学年で使われ、それが上の学年で旧字体になっているもの。

×○…旧字体が本文に使われていて、頭注に新字体と同じものが略体として併記されているもの。

比較対照の便宜上、これまで使用してきた類型別に示す。なお、ここに掲げたのは、母親調査に関連のあるものだけである。(異同のあるものとはいえないが、新字体と同じものだけが本文に使われているものも、併記することとした。なお、ここに掲げたのは、本調査でとりあげた漢字だけである。)

第66表 国定読本期別字体異同一覧

1 点画の方向・長さの変わったもの

漢 字	2	3 黒	3 白	4	5
羽	×	○	○	○	○
習	×	○	○	○	○
弱	×	○	○	○	○
曜	×	○	○	○	○
内	×	○	○	○	○
納	×	○	○	○	×
教	×	○	○	×	×
害	○	○	○	×	×
耕	×	○	○	×	×
望	○	×	×	×	×
緑	×	×	×	○	○
録	×	×	×	○	○
船	×	○	○	○	○
晴	○	○	○	×	×
輪	○	○	○	○	○
判	○	○	○	○	○
率	○	○	○	○	○

2 点画の省略されたもの

漢 字	2	3 黒	3 白	4	5
者	○	○	○	×	×
暑	○	○	○	×	×
都	○	○	○	×	×
諸	○	○	○	×	×

著	○	○	○	×	○
黄	×	○	○	○	○
横	×	○	○	○	○
脈	○	×	×	○	○
派					○

3 画の交差の変わったもの

漢 字	2	3 黒	3 白	4	5
告	×	○	○	×	×
潔	×	○	×		
呉	×		○		
誤	×	○	○		
認		○	○		×

4 画の併合したもの

漢 字	2	3 黒	3 白	4	5
毒	×	×	×	○	
乗	×	○	○	×	×
黒	×	○	○	×	×
増	×	○	○		
敷		○			
贈		○			
温	○	○	○	×	×
並	○	○	○	○	○
研		○	○	○	○
冊		○		○	

6 部分の省略されたもの

漢 字	2	3 黒	3 白	4	5
処	×	×	×○	×○	×
号	×	×	×○	×○	×
点	×	×	×○	×○	×
虫	○	○×	○×	×○	○
糸	○×	○×	×○	×○	○
余	×○	×	×	×	×

7 部分の簡略化されたもの

漢 字	2	3 黒	3 白	4	5
帛	×	×	×	×○	×
変	×	×	×	×○	×
湾	×	×	×	×○	×
豊	×	×	×	×○	×
献	×	×	×	×○	×
宝	×	×	×○	×○	×
乱	×	×	×○	×○	×
属	×	×	×○	×○	×
辺	×	×	×○	×○	×
礼	×	×	×○	×○	×
関	×	×	×○	×○	×

鉄	×	×	×○	×	×
贅	○	○	○		
節	○	○	○	○	○
掲	○	○		×	×

8 全体の簡略化されたもの

漢 字	2	3 黒	3 白	4	5
万	○×	○×	×○	×○	×
画	×	○×	×○	×○	×
尽	×	×	×○	×○	×
旧	×	×	×○	×○	×
円	×	×	×○	×○	×
体	×	×	×○	×○	×
蚕	×	×	×○	×○	
台	×	×	×	×○	×
塩	○	○		×○	○
与	×	×	×○	×	×
岳				○	

9 異体の統一されたもの

漢 字	2	3 黒	3 白	4	5
衛	×	×	×	○	○
強	○	×	×	×	○

(付録2) たて書きとよこ書きとどちらが書きやすいか

母親調査の書き取りでは、長岡でも東京でも、「たて書きとよこ書きと、どちらが書きやすいか」の質問をした(調査票(1))ので、参考までに、その集計結果を第67表に示す。

第67表 たて書き・よこ書き支持率(%)

		学 歴			年 齢			計
		義務教育	旧女新高	大学高等	27才～33	34～43	44～55	
長岡	た て 書 き	67	68	71	50	75	67	69
	よ こ 書 き	15	13	16	24	10	13	14
	どちらともいえない	15	20	16	26	15	20	18
東京	た て 書 き	86	72	75	69	76	78	74
	よ こ 書 き	14	16	20	20	13	22	16
	どちらともいえない	0	11	5	9	11	0	10

学歴の高いほど，よこ書きの支持者が相対的に多く，年齢の高いほど，たて書きの支持者が多い傾向が見られる。また，東京の母親のほうが，意見がはっきりしている。

C 会社員の文字の使いかた（永野）

1 新字体を使うか、旧字体を使うか

会社員調査（長岡）の調査票の第2面下段の字体に関する20の組み合わせのうち、簡略俗体を除いた18字について、また、会社員調査（東京）の調査票第3・4面における154字について、“昔習った字体”と“今使っている字体”を反省選択してもらった結果を集計して掲げる。

（1）類型別にみた傾向

母親調査の場合と同様、新字体の類型別に、旧か新かの選択の傾向を一覧表にして示すと、第68表および第69表のとおりである。見出し、記号、数字の示し方その他、すべて母親調査の場合に準ずる。ただし、東京のほうは、会社員と工員とに分け、それぞれを男女別にし、1つの字について4行ずつ並記してある。上の2行が会社員、下の2行が工員、太字が男子、細字が女子である。したがって、第1行目は会社員男子、2行目会社員女子、3行目工員男子、4行目工員女子となる。被調査者が少数なのにもかかわらず、このように分けたのは、学歴や年齢がそれぞれにかたよっている（たとえば、会社員男子は高学歴層に、工員女子は低い学歴層で低い年齢層に、といったぐあい）ので、一括するよりも分けて比較したほうがよいと考えたからである。

第68表 新字体か旧字体か、類型別一覧表、（%）：会社員調査（長岡）

（被調査者197名）

類型	漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
2	△ 収 入	41	19	4	22	45
	△ 頼 む	61	13	2	16	31
4	○△ 温 度	3	16	7	63	86
	△ 検 査	8	49	15	22	86
6	△ 応 接	4	49	15	23	87
	◎ 価 格	4	51	13	23	87
	◎ 専 門	30	31	8	24	63
	△ 当 番	2	52	15	23	90
	△ 実 物	3	51	17	22	90

7	△ 証 明	3	41	18	27	86
	△ 権 利	7	40	9	37	86
	△ 参 加	5	45	13	27	85
	△ 湿 度	11	47	8	24	79
	△ 遅 刻	18	39	4	29	72
	△ 拝 見	20	20	5	40	65
	○ 掲 示	30	32	6	22	60
8	△ 欠 席	0	42	14	36	92
9	○△ 守 衛	3	10	4	71	85

この表を見ると、一字一字の傾向は、母親調査の場合とかなりよく似ているといえる。

また、文字は少数ではあるが、類型の特徴も同様に認めることができる。

ただ、会社員のほうが、母親よりも、全般に新字体を使う傾向がわずかながら多いことが認められるのである。

第69表 新字体か旧字体か、類型別一覧表(%)：会社員調査(東京)

(被調査者：全体130名、会社員男子59名、会社員女子21名、工員男子30名、工員女子20名)

1 点画の方向・長さの変わったもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○ △ 校内	7 10 3 15	36 29 53 30	2 10 3 15	49 38 37 40	87 77 93 85
○ 晴天	10 14 17 5	42 43 47 50	3 5 3 10	36 29 17 25	81 77 67 85
○ △ 教育	24 10 7 20	24 38 33 15	3 14 3 10	32 29 23 10	59 81 59 35
○ △ 羽根	36 29 23 25	31 29 37 30	3 5 3 10	17 24 17 25	51 58 57 65
○ 習字	36 14 33 25	27 43 40 30	5 5 7 15	17 19 7 20	49 67 54 65
○ 日曜	37 29 43 25	27 43 37 45	0 5 3 10	20 14 10 5	47 62 50 60
◎ 博士	46 48 23 20	27 24 20 5	0 5 7 15	17 14 43 55	44 43 70 75
○ 新緑	46	34	3	7	44

	19 10 5	48 50 60	10 3 5	19 30 20	77 83 85
◎ 聖人	54 43 30 20	29 38 47 50	2 10 3 5	12 0 10 10	43 48 60 65
◎ 包む	58 38 30 35	14 24 27 10	2 0 0 10	9 14 33 45	25 38 60 65
◎ 東京港	53 38 33 35	5 19 20 10	0 0 0 5	17 10 27 20	22 29 47 35

2 点画の省略されたもの

漢字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
△ 盗む	12 0 17 5	31 24 33 35	0 10 3 20	53 62 43 40	84 96 79 95
○ 横顔	10 14 0 0	34 19 30 25	3 0 3 15	46 57 67 60	83 76 100 100
◎ 徴集	27 29 3 0	56 33 67 70	2 10 7 10	12 19 20 20	70 62 94 100
○ 諸兄	33	49	2	12	63

	38	48	0	10	58
	20	70	3	7	80
	35	45	10	10	65
○ 暑 い	39	42	3	12	57
	43	38	5	14	57
	20	63	3	10	76
	30	30	15	20	65
○ △ 記 者	37	36	0	19	55
	33	43	0	14	57
	17	70	3	10	83
	35	40	5	20	65
○ 山 脈	41	39	3	12	54
	33	29	5	19	53
	43	50	7	0	57
	5	50	5	35	90
△ 山 奥	25	31	0	20	51
	33	48	5	14	67
	10	53	7	27	87
	5	70	5	15	90
○ 著 作	41	39	2	10	51
	43	52	0	0	52
	23	67	0	7	74
	30	40	10	5	55
△ 種 類	42	37	2	12	51
	29	48	5	14	67
	10	77	3	7	87
	25	45	10	10	65
◎ 食 器	46	34	0	14	48
	38	38	5	14	57
	13	57	3	23	83
	15	40	15	30	85
△ 道 徳	51	36	0	12	48
	62	29	0	5	34
	20	60	3	13	76
	25	50	10	10	70
△ 歴 史	58	36	0	2	38
	48	38	5	10	53
	17	60	3	13	76

	5	55	10	20	85
△ 収 入	54	32	0	5	37
	57	33	0	10	43
	40	47	7	3	57
	15	55	15	10	80
◎ 漢 字	66	29	2	2	33
	57	24	5	5	34
	33	53	0	0	63
	30	40	10	15	65
◎ 歳 暮	63	20	0	5	25
	52	24	0	14	38
	53	30	0	7	37
	40	25	5	20	50
△ 頼 む	71	22	0	3	25
	52	29	5	10	44
	47	40	7	7	54
	20	55	10	15	80
◎ 謹賀新年	80	10	0	3	13
	71	14	5	0	19
	50	27	0	10	37
	45	25	15	15	55
◎ 突 く	85	10	0	2	12
	71	20	0	0	20
	40	57	0	0	57
	65	25	10	0	35

3 画の交差の変わったもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○ 呉 服	41	20	2	31	53
△	43	33	5	5	43
	7	40	3	37	80
	20	30	5	35	70
◎ 急 行	63	22	0	7	29
	62	14	0	10	24
	63	33	0	3	36
	40	45	10	5	60

4 画の併合したもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
△ 悪 人	2 0 0 0	70 67 63 50	5 14 13 20	19 19 23 20	94 100 100 90
○ △ 温 度	5 10 0 0	48 48 37 25	7 10 3 20	36 19 53 55	91 77 93 100
◎ 海 岸	14 5 10 5	75 71 70 80	5 10 3 15	2 14 10 0	82 95 83 95
△ 検 査	12 14 0 0	76 62 77 75	5 10 17 20	0 14 7 5	81 86 100 100
△ 様	14 29 13 0	70 62 70 65	5 5 10 20	3 5 7 15	78 72 87 100
△ 満 月	15 19 13 5	68 52 67 65	5 5 10 15	3 14 10 15	76 71 87 95
△ 届ける	19 14 7 10	44 33 37 20	5 5 0 15	25 33 43 55	74 71 80 90
○ △ 黒 い	25 29 20 25	37 38 37 55	5 0 7 5	29 19 33 5	71 57 77 65
○ △ 乗 る	24 29 17 30	56 48 53 40	2 5 10 5	12 5 7 5	70 58 70 50

◎ 練 る	29 29 23 10	53 52 50 65	5 10 7 5	9 10 20 10	67 72 77 80
○ 一 冊	24 33 13 40	53 52 60 15	3 5 3 5	10 10 10 5	66 67 73 25
△ 来 る	29 24 13 0	58 52 70 75	3 10 10 15	2 5 3 5	63 67 83 95
◎ 焼 く	41 33 13 10	49 43 73 70	3 10 0 10	2 14 10 10	54 67 83 90
◎ 帯	61 57 37 60	32 33 43 30	0 5 13 5	0 0 0 0	32 38 56 35
△ 従 う	66 43 20 25	27 38 63 50	3 10 10 15	0 0 3 10	30 48 76 75
△ 狭 い	73 24 27 30	17 38 53 45	0 10 0 10	3 5 7 10	20 53 60 65

6 部分の省略されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
△ 予 算	0 0 0 0	88 76 63 60	10 10 13 15	2 14 23 25	100 100 100 100
△ 医 院	0 0 0	83 71 73	12 14 13	3 10 7	98 95 93

	0	75	15	10	100
○ 点 字	0	85	10	3	98
△	0	76	10	14	100
	7	63	13	10	86
	0	45	20	35	100
○ 号 外	0	85	10	3	98
△	0	67	19	14	100
	0	73	20	7	100
	0	60	20	20	100
△ 独 得	0	85	10	2	97
	0	71	5	19	95
	0	80	7	13	100
	0	65	15	20	100
○ 余 り	2	85	10	2	97
△	5	76	10	10	96
	0	70	10	17	97
	0	65	15	20	100
△ 圧 力	0	86	5	5	96
	10	76	10	5	91
	0	70	17	10	97
	0	55	15	30	100
△ 泣き声	2	83	10	3	96
	5	71	10	14	95
	0	80	17	3	100
	0	65	20	15	100
◎ 公 団	2	86	5	3	94
	5	71	10	14	95
	0	73	17	3	93
	0	75	15	10	100
◎ 価 格	2	81	10	2	93
	5	81	5	10	96
	3	83	7	7	97
	5	75	10	10	95
○ 処 分	3	81	10	2	93
△	10	62	10	14	86
	3	70	10	17	97
	0	70	15	15	100
◎ 芸 人	5	83	9	0	92

	5	62	14	14	90
	0	83	13	3	100
	0	65	20	15	100
△ 応 接	7	78	10	2	90
	10	67	10	10	87
	0	67	7	27	100
	0	70	15	15	100
△ 展 覧	11	71	5	9	85
	5	76	5	14	95
	0	87	3	10	100
	5	70	10	15	95
△ 五 条	17	70	5	0	75
	10	62	10	10	82
	13	67	13	0	80
	15	70	15	0	85
△ 聴 衆	32	56	2	7	65
	24	42	10	19	71
	7	67	7	13	87
	0	55	15	30	100
◎ 疊 店	31	59	5	0	64
	19	57	10	10	77
	3	80	10	3	93
	0	65	15	15	95
◎ 専 門	36	54	0	3	57
	43	38	10	5	53
	10	73	10	3	86
	25	45	10	15	70
△ 随 筆	51	36	2	9	47
	38	48	5	10	63
	17	57	3	23	83
	15	50	15	15	80
△ 意 み	58	36	0	2	38
	43	38	10	0	48
	23	63	3	3	69
	20	55	15	10	80
◎ 武蔵野	58	32	2	0	34
	29	57	5	5	67
	20	70	0	7	77

	10	60	20	10	90
△ 射 撃	59	31	0	3	34
	48	33	5	10	48
	43	47	3	0	50
	15	55	10	20	85

7 部分の簡略化されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
△ 対 立	0	85	12	2	99
	5	71	10	14	95
	0	77	10	10	97
	0	60	20	20	100
△ 鉦 山	0	90	7	2	99
	0	76	10	14	100
	0	70	10	17	97
	0	60	20	20	100
○ △ 大 関	0	85	10	3	98
	0	71	14	14	100
	0	57	7	37	100
	0	65	15	20	100
○ △ 豊 作	0	54	9	34	97
	0	52	14	29	95
	0	54	10	37	100
	0	30	15	55	100
△ 浜 ベ	0	76	14	7	97
	5	67	5	14	86
	0	70	20	10	100
	0	50	30	20	100
○ △ 変 化	0	83	12	2	97
	0	62	14	24	100
	0	73	7	20	100
	0	65	15	20	100
△ 実 物	0	85	12	0	97
	0	76	10	10	96
	0	83	13	3	100
	0	75	10	15	100
△ 会 社	0	88	9	0	97
	5	67	14	10	91

	0	77	17	7	100
	0	70	15	15	100
△ 発 明	0	88	5	3	96
	5	86	0	5	91
	0	73	13	13	99
	0	75	10	15	100
◎ 空 気	3	85	9	2	96
	10	67	10	10	87
	0	80	13	7	100
	0	80	15	5	100
△ 当 番	0	80	12	3	95
	0	76	10	14	100
	3	70	23	3	96
	0	65	15	15	95
○ △ 献 金	2	71	10	14	95
	0	67	10	24	100
	0	50	7	43	100
	0	25	20	55	100
△ 済 む	2	73	19	3	95
	10	71	14	5	90
	0	67	3	17	87
	0	55	15	30	100
○ △ 所 属	2	75	5	15	95
	10	57	10	24	91
	0	67	3	30	100
	0	35	15	50	100
○ △ 乱れる	2	80	10	5	95
	0	62	14	24	100
	0	67	20	13	100
	0	65	15	20	100
△ 滝つぼ	3	85	10	0	95
	0	71	19	10	100
	0	70	17	10	97
	5	70	15	10	95
◎ 警視庁	3	80	7	7	94
	5	71	10	14	95
	0	80	13	7	100
	0	60	15	25	100

○ お 礼	0	78	12	3	93
△	0	76	5	14	95
	0	80	13	0	93
	0	75	10	15	100
△ 軽 い	2	78	10	5	93
	0	67	10	19	96
	0	80	10	7	97
	0	55	25	20	100
△ 解 釈	3	81	9	3	93
	5	67	14	14	95
	0	80	10	10	100
	0	55	15	25	95
△ 国 語	3	81	9	3	93
	0	71	10	14	95
	3	73	20	0	93
	0	75	15	10	100
◎ 売 る	3	81	12	0	93
	5	76	10	10	96
	0	80	10	7	97
	0	70	25	5	100
△ 政 党	5	81	7	5	93
	0	71	14	14	100
	0	67	7	23	97
	0	55	15	30	100
△ 証 明	2	78	14	0	92
	0	71	10	10	91
	0	73	13	7	93
	5	55	20	15	90
△ 数える	3	76	7	9	92
	10	71	10	10	91
	7	70	7	13	90
	0	50	20	30	100
△ 名 称	7	83	9	0	92
	14	67	10	10	87
	10	70	3	10	83
	5	75	10	10	95
△ 参 加	2	73	9	9	91
	5	71	10	14	95

	7	77	10	7	94
	0	70	10	20	100
△ 辞 典	5	71	12	7	90
	0	71	10	19	100
	0	63	7	30	100
	0	60	15	25	100
△ 仮 定	5	81	9	0	90
	10	67	14	10	91
	0	73	10	13	96
	5	60	15	15	90
△ 権 利	7	75	7	7	89
	5	67	14	14	95
	0	70	10	17	97
	0	45	15	40	100
○ 帰 る	7	80	7	2	89
△	10	62	14	14	90
	10	73	13	0	86
	0	70	15	15	100
△ 拳 手	9	80	7	2	89
	5	76	10	10	96
	0	73	10	17	100
	0	60	20	20	100
△ 栄 養	5	80	5	3	88
	0	76	5	10	91
	3	80	3	10	93
	0	75	10	15	100
△ 壺 千	9	73	12	2	87
	14	71	0	10	81
	7	73	13	3	89
	10	50	15	20	85
◎ 伝 記	10	80	5	2	87
	5	81	5	10	96
	3	70	3	13	86
	5	80	10	0	90
△ 団 む	10	80	5	2	87
	10	67	10	14	91
	3	70	7	20	97
	0	55	15	25	95

△ 金 齒	10	71	5	10	86
	10	71	5	14	90
	0	80	7	10	97
	0	60	15	20	95
△ 小 麦	15	73	5	2	80
	0	67	10	14	91
	7	67	17	7	91
	5	70	15	10	95
△ 雜 誌	19	70	5	2	77
	10	67	10	10	87
	3	83	13	0	96
	5	65	20	5	90
△ 児 童	20	61	7	7	75
	10	57	5	14	76
	10	57	10	10	77
	0	50	15	35	100
◎ 戦 車	20	68	5	0	73
	19	62	10	10	82
	10	60	20	3	83
	0	75	10	10	95
△ 大 仏	20	71	2	0	73
	29	62	5	5	72
	13	73	7	3	83
	10	80	10	0	90
△ 碎 く	24	64	5	2	71
	14	62	10	14	86
	10	60	10	17	87
	15	45	15	20	80
△ 桜	20	63	7	0	70
	10	76	10	5	91
	13	77	7	3	87
	10	65	10	0	75
△ 頭 腦	27	59	5	3	67
	24	52	5	14	71
	7	77	10	3	90
	0	60	10	20	90
△ 昼 間	31	49	5	10	64
	29	52	5	10	67

	17	60	20	3	83
	10	75	10	0	85
△ 総 長	31	53	10	0	63
	29	52	10	10	72
	7	67	13	10	90
	0	65	15	20	100
△ 拝 見	32	54	3	5	62
	57	19	0	5	24
	47	47	7	0	54
	50	35	10	0	45
△ 音 楽	32	59	2	0	61
	14	71	10	5	86
	7	80	10	3	93
	0	90	10	0	100
△ 渋谷	34	58	3	0	61
	24	62	10	5	77
	3	73	7	13	93
	5	55	20	20	95
△ 湿 度	36	58	2	0	60
	19	62	10	5	77
	7	73	13	7	93
	20	55	15	10	80
△ 厳 重	41	56	2	0	58
	33	52	5	10	67
	3	70	10	13	93
	10	50	15	15	80
△ 行 為	41	51	3	2	56
	24	52	14	5	71
	20	63	3	7	73
	45	30	15	5	50
△ 真 夏	32	51	0	3	54
	24	57	5	10	72
	13	70	7	3	80
	5	70	10	15	95
◎ 鳥の巣	39	51	0	2	53
	24	62	5	5	72
	13	77	7	3	87
	5	65	10	15	90

○ 掲 示	42	33	2	17	52
	48	29	5	10	44
	13	73	0	10	83
	10	50	10	20	80
△ 状 態	41	48	3	0	51
	33	48	5	14	67
	7	77	10	3	90
	15	70	10	0	80
△ 闘 牛	44	37	2	9	48
	19	57	5	14	76
	3	57	10	23	90
	5	40	10	45	95
△ 幽 霊	49	44	2	0	46
	29	38	5	19	62
	13	70	3	7	80
	0	60	15	25	100
△ 遊 戯	49	39	3	3	45
	24	43	5	14	62
	17	53	7	20	80
	30	40	10	20	70
◎ 寝 る	51	40	0	2	42
	43	38	5	5	48
	27	47	7	7	61
	20	60	5	5	70
◎ 破 壊	53	32	0	10	42
	38	38	5	14	57
	3	60	13	20	93
	5	50	5	35	90
△ 遅 刻	54	36	0	3	39
	29	47	5	14	66
	0	60	7	30	97
	0	45	5	50	100
◎ 鶏	59	36	3	0	39
	24	48	5	14	67
	20	53	3	17	73
	15	55	20	10	85
◎ 謡 曲	56	32	0	5	37
	48	43	5	5	53

	20	60	7	3	70
	5	60	10	10	80
△ 争 う	61	29	2	2	33
	57	38	5	0	43
	7	67	13	7	87
	20	50	10	5	65
◎ 一塁手	61	31	0	2	33
	57	33	0	5	38
	33	43	3	7	53
	25	45	5	15	65
◎お嬢さん	61	29	0	2	31
	43	33	5	5	43
	43	33	7	3	43
	30	45	10	5	60

8 全体の簡略化されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○ 画 伯	0	80	10	7	97
△	5	67	10	19	96
	0	63	20	17	100
	0	65	10	25	100
○ 体 操	2	64	12	19	95
△	0	67	19	14	100
	0	53	17	30	100
	0	50	25	25	100
△ 汽 車 弁	3	71	10	14	95
	10	67	10	14	91
	3	67	7	10	84
	5	70	15	10	95
○ 旧 式	3	73	10	12	95
△	0	71	14	14	100
	0	53	10	33	96
	0	50	15	35	100
○ 食 塩	2	51	12	31	94
△	0	67	14	19	100
	0	43	3	53	100
	0	15	20	65	100
○ 山 岳	0	74	14	5	93
△					

	0	62	14	24	100
	3	63	10	20	93
	0	60	10	30	100
△ 欠 席	3	76	12	5	93
	0	71	14	14	100
	0	70	7	23	100
	0	60	20	20	100
○ △ 百万人	2	76	14	2	92
	0	71	14	10	95
	0	77	17	7	100
	0	70	20	10	100
○ △ 与える	3	81	9	2	92
	5	71	10	14	95
	0	77	13	7	97
	0	65	15	15	95
△ 弁護士	7	80	9	3	92
	10	62	10	14	86
	3	80	7	10	97
	0	65	20	15	100
△ 写 す	9	80	9	0	89
	10	71	10	10	91
	0	80	10	10	100
	0	75	15	10	100

◎ 米 寿	14	73	5	0	78
	0	71	10	14	95
	3	70	10	13	93
	0	70	15	15	100
○ △ 尽きる	32	56	3	0	59
	19	62	5	10	77
	13	70	10	3	83
	15	55	15	15	85

9 異体の統一されたもの

漢 字	旧旧	旧新	両新	新新	新を使う
○ △ 守 衛	10	32	7	41	80
	0	29	5	57	91
	0	30	0	67	97
	0	15	10	65	90
△ 秘 密	19	27	9	31	67
	10	24	10	33	67
	13	33	3	43	79
	0	35	15	40	90
○ △ 強 い	27	22	9	32	63
	19	19	10	52	81
	10	40	3	37	80
	5	20	15	50	85

この表を、母親調査（東京）の第53表と比べてみると、類型ごとの各文字の順位は、かなりよく似ている。もちろん、字によって多少の変動はまぬがれないが、上位・中位・下位といった文字群がほぼ共通であることは認めることができる。そして、その特徴は、101・102・105ページに述べたこととほぼ同様であるといつてよい。

次に、会社員相互の間の比較をしてみると、工員よりも事務員のほうが旧字体に対する知識があるらしく、反応も確かである。工員には、たとえば女子の場合、類型1の「教」や「港」のように、回答数の著しく少ない字がある。もっとも、この種のものは、事務員も、また母親の場合も概して回答者は相対的に少なくはあった。「新を使う」の順位は、大きく動く字もあるが、全体として上位・中位・下位の群が大きく変動することは少ない。ただ、下位の字におい

て、事務員では「新を使う」の％がぐっと下がるようなものでも、工員では必ずしも目に見えて下がるとは限らない。これは、実際に新字体を使っているのか、それとも、今の世の中では新字体を使うようになったのなら、自分も新字体を使わねばならぬ、という潜在意識が反映したものか、断定できない。なお、この点は、次項で述べることと関連する。

(2) 層別にみた傾向

被調査者が全体として、新字体を使うか、旧字体を使うかの傾向を、調査した全文字につき、学歴別・年齢別に比較してみると、第70表のようになる。

第70表 新字体を使うか旧字体を使うかの層別比較(%)

			義務 教育	旧 中 新 高	大 学 高 専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	計	
長 岡	会社員	新を使う	76	82	74	85	74	77	81	
		旧を使う	20	17	26	15	26	19	19	
東 京	事 務 員	男	新を使う	—	75	72	74	70	68	71
			旧を使う	—	24	28	26	29	24	27
		女	新を使う	—	79	66	77	76	55	77
			旧を使う	—	20	34	23	22	45	22
	工 員	男	新を使う	85	88	—	86	86	—	86
			旧を使う	15	12	—	14	16	—	14
		女	新を使う	88	80	—	87	81	—	87
			旧を使う	12	20	—	13	19	—	13

全体としてみると、工員（女）が最も新字体に傾き、東京の事務員（男）が最も旧字体に傾き、その順位を新しい傾向を示すほうからみると、

工員（女）—工員（男）—会社員（長岡）—事務員（女）—事務員（男）となる。この順位は、年齢構成・学歴構成と関係が深い。

学歴別にみると、概して学歴の高い層ほど新字体を使わずに旧字体を使う傾向があり、また年齢別にみると、年齢が高くなるほど新字体を使わず旧字体を使う傾向がある。

男女別にみると、全般的には男子よりも女子のほうが新字体を使う傾向があるが、女子でも高い学歴層、高い年齢層では、かえって男子よりも旧字体に傾くことが注意される。

母親の場合と比較してみると、学歴の高いほど旧字体を使う傾向は、東京の母親と似ており、長岡の母親とは反対である。また、年齢の高いほど旧字体を使うという傾向は、母親の場合とまったく反対である。東京の母親の高学歴層の旧字体への傾きについては、前に疑いを残しておいたが、いまこれを保留して大胆に推測すると、会社員（とくに事務員）は学歴が高く、年齢が高いほど古く、反対に、母親は学歴が高く、年齢が高いほど新しい、という注目すべき対照を示すことになるのではなかろうか。

2 制限漢字と制限音訓の使用はどうか

会社員調査（東京）では、母親調査（東京）と同じ調査票を使って、制限漢字・制限音訓の使用の実態を調べた。

(1) かなで書くか、漢字で書くか

項目別・語別に、また、事務員（男・女）、工員（男・女）別に一覧表にして示すと、第71表のとおりである。

全体としてみると、事務員のほうが工員よりも概して漢字を多く使う傾向がある。

語別にみると、総体に順位がほぼ似ているが、「身頃・襟・裾・脇・袖・縫代」などの裁縫用語は、相対的に、男はかなで書くことが多く、女は漢字で書くことが多い傾向が見られる。また、「俺・僕」の男子専用の代名詞は、女に無答が多かった。この裁縫用語・男子専用代名詞を含めて、母親調査の場合と、かなり似ていることが判定される。

第71表 かなで書くか漢字で書くか（％）

(1) 事務員（男） 制 限 漢 字							
語	かな	漢 字	無 答				
そ の 儘	59	37	4	俺	22	76	2
兎 に 角	59	39	2	貰 う	22	76	2
身 頃	37	58	5	殆 ん ど	22	76	2
襟	32	66	2	袖	15	85	0
来 る 筈	29	70	1	勿 論	10	88	2
に 於 い て	29	70	1	誰	9	90	1
或 る 日	25	70	5	若 い 頃	7	92	1
裾	24	76	0	僕	7	92	1
脇	22	75	3				

制 限 音 訓			
語	かな	漢 字	無 答
時 が 経 つ	48	51	1

直	ぐ	に	46	53	1
縫	れ	代	44	51	5
呉	る	張	42	58	0
矢			39	58	3
未	だ		39	61	0
何	れ	等	37	61	2
子	供		34	64	2
御	返	事	32	64	4
世	の	為	31	66	3
ど	れ	程	30	70	0
先		ず	29	66	5
こ	の	辺	29	68	3
貴	方(貴女)		29	71	0
居	り	ま	27	70	3
何		故	27	71	2
君		達	25	73	2
何		処	25	73	2
家	の	人	24	75	1
我	が	国	24	75	1
一	日	毎	22	76	2
何	時	も	20	78	2
又		は	20	80	0
そ	の	他	19	76	5
後	か	ら	19	81	0
如	何	に	15	83	2
欲	し	い	15	83	2
一		寸	15	83	2
頂		く	14	85	1
致	しま	す	12	85	3
例	え	ば	12	86	2
門	を	入	10	88	2
お	母	さん	9	90	1
	私		7	92	1
今		年	7	92	1
	体		7	93	0
部		屋	5	92	3
今		日	5	93	2
二		人	2	97	1

(2) 事務員(女)

制限漢字

語	かな	漢字	無答
そ	の	儘	71 29 0
兎	に	角	67 33 0
貰		う	38 62 0
来	る	筈	33 67 0
殆	ん	ど	33 67 0
に	於	て	19 81 0
勿		論	19 81 0
或	る	日	19 81 0
身		頃	19 81 0
		誰	14 86 0
		脇	14 86 0
		俺	10 76 14
		襟	10 90 0
		裾	10 90 0
若	い	頃	10 90 0
		僕	5 76 19
		袖	5 95 0

制限音訓

語	かな	漢 字	無 答	
矢	張	67	33	0
時	が	67	33	0
直	ぐ	62	38	0
未	だ	62	38	0
御	返	52	48	0
何	れ	52	48	0
呉	る	43	57	0
何	時	43	57	0
こ	の	38	62	0
先	ず	33	62	5
何	故	29	71	0
ど	れ	29	71	0
一	日	29	71	0
何	毎	24	76	0
一	處	24	76	0
世	の	24	76	0
居	り	19	81	0

家の人	19	81	0
頂く	19	81	0
後から	19	76	5
君達	14	86	0
欲しい	14	86	0
その他	14	86	0
貴方(貴女)	14	86	0
子供等	10	90	0
縫代	10	90	0
我が国	10	90	0
門に入る	10	90	0
例え	10	90	0
体	5	95	0
致します	5	95	0
如何に	5	95	0
今日	0	100	0
又	0	100	0
部屋	0	100	0
お母さん	0	100	0
今年	0	100	0
二人	0	100	0
私	0	100	0

(3) 工員(男)

制限漢字

語	かな	漢字	無答
兎に角	77	23	0
身頃	70	30	0
その儘	70	30	0
来る筈	63	33	4
脇	54	43	3
裾	50	50	0
或る日	47	50	3
貰う	40	60	0
袖	37	63	0
殆んど	33	67	0
俺	30	70	0
襟	30	70	0
に於いて	23	77	0
勿論	20	80	0
若い頃	13	87	0

誰	10	87	3
僕	10	90	0

制限音訓

語	かな	漢字	無答
時が経つ	83	17	0
矢張	77	23	0
未だ	67	33	0
縫代	57	33	10
この辺	50	50	0
呉れる	50	50	0
何れ	50	50	0
御返事	50	50	0
世の為	47	53	0
家の人	47	53	0
門に入る	47	53	0
直ぐに	43	57	0
何故	40	57	3
何処	33	63	4
貴方(貴女)	33	63	4
その他	30	67	3
子供等	27	73	0
後から	27	73	0
居ります	27	70	3
先ず	27	70	3
どれ程	23	73	4
欲しい	23	73	4
頂く	23	77	0
如何に	20	80	0
一日毎に	20	77	3
何時も	20	77	3
一寸	20	77	3
又は	13	87	0
君達	13	87	0
例え	13	87	0
我が国	13	87	0
部屋	3	97	0
致します	3	97	0
体	0	97	3
今日	0	100	0
お母さん	0	100	0

今	年	0	100	0
二	人	0	100	0
私		0	100	0

(4) 工 員 (女)

制 限 漢 字

語	かな	漢 字	無 答
兎に角	90	10	0
来る筈	85	15	0
その儘	80	20	0
殆んど	70	30	0
に於いて	60	35	5
或る日	50	40	10
勿論	45	55	0
貰う	45	55	0
襟	40	60	0
俺	25	65	10
脇	25	70	5
若い頃	15	85	0
僕	10	85	5
据	10	90	0
身頃	10	90	0
誰	5	95	0
袖	0	100	0

制 限 音 訓

語	かな	漢 字	無 答
矢張	85	15	0
御返事	85	10	5
時が経つ	80	20	0
未だ	80	20	0
呉れる	75	20	5
何れ	75	25	0

世の為	60	30	10
直ぐに	55	45	0
一日毎に	40	50	10
先ず	40	60	0
子供等	35	60	5
何故	35	65	0
この辺	30	70	0
我が国	30	70	0
家の人	25	75	0
欲しい	25	75	0
例え	20	80	0
何処	20	80	0
如何に	20	80	0
後から	15	75	10
どれ程	15	85	0
君達	15	85	0
その他	15	85	0
何時も	15	85	0
頂く	10	90	0
貴方(貴女)	5	80	15
お母さん	5	90	5
一寸	5	95	0
門を入る	5	95	0
今日	0	95	5
体	0	95	5
又	0	100	0
致します	0	100	0
居ります	0	100	0
縫代	0	100	0
部屋	0	100	0
今	0	100	0
二年	0	100	0
私	0	100	0

(2) 層別にみた傾向

被調査者が全体として、かなで書くか、漢字で書くかの傾向を、調査した全文字につき、制限漢字・制限音訓を合わせて、学歴別・年齢別に比較してみると、第72表のようになる。

第72表 かなで書く割合の層別比較（％）：会社員（東京）

		義 教 育	旧 新 中 高	大 高 学 専	27～ 33才	34～ 43才	44～ 55才	計
事務員	男	2	21	25	25	28	18	24
	女	—	23	23	23	23	21	23
工 員	男	32	34	—	35	31	32	32
	女	30	30	—	31	10	—	30

第72表は、かなで書く割合を示したものであるが、全体としては、工員よりも事務員のほうが、かなを用いない傾向がある。

男女の比較をすると、女のほうが漢字を使う傾向がある。

また、学歴の高いほうがかなを多く使い、年齢の高いほうがかなを少なく使うという傾向があり、前者は母親の場合と似ている。

3 ま と め

以上述べてきたことをまとめると、会社員の文字の使いかたとして、次のようなことがいえる。

- (1) 全体的にみると、新字体の使われかたは、母親の場合とかなり似ているが、概して会社員のほうが、母親よりも新字体を使う傾向がある。ただし、事務員男子は、母親よりも旧字体を多く使う傾向がある。
- (2) 工員よりも事務員のほうが旧字体についての知識があるらしい。また、男子よりも女子のほうが新字体を使う傾向がある。新字体を使う傾向の強いほうから順位づけると、次のようになる。

工員女子 工員男子 会社員（長岡） 事務員女子 事務員男子

この順位は、各グループを構成する学歴層・年齢層との関連が深い。

- (3) 学歴の高いほど旧字体を用い、年齢の高いほど旧字体を用いる傾向がある。また、男子より女子のほうが新字体を使う傾向があるとはいえ、高学歴層の女子はかえって男子よりも旧字体への傾きが強い。
- (4) 制限漢字・制限音訓については、事務員のほうが工員よりも多く漢字書きにし、女子のほうが男子よりも多く漢字書きにする傾向がある。また、男女とも、よく使用する語ほど漢字書きにする傾きが見られる。
- (5) 母親と比べてみると、とくに事務員では、学歴が高く、年齢が高いほど

旧字体を用いるという点、母親の場合、学歴が高く、年齢が高いほど新字体を用いるのと、まったく反対の傾向を示している。ただし、学歴の高いほど、多くな書きを用いる点は、母親と同じ傾向を示している。

- (6) 会社員（とくに事務員男子）と母親とでは、母親のほうが子どもの影響を受けやすいと考察される。

（付録） 簡略俗体の使用度

会社員調査（東京）では、8つの漢字（語）について、簡略俗体を使うか否かを尋ねた。（45ページの調査票第1面参照）。いま、「俗体を使う」と答えた者の％を示すと、第73表のとおりである。（カッコの中は正体）

字によって、俗体が多く使われるもの、あまり使われないものがあり、その差が著しいが、総体に俗体の使われる度合いは少なくはないといわなければならないまい。

第73表 簡略俗体の使用度(%)：会社員（東京）

	事 務 員		工 員	
	男	女	男	女
巾（幅）	88	100	97	100
杈（権）	64	52	33	50
后（後）	53	19	57	65
屮（属）	49	38	47	50
𠂔（職）	29	52	77	95
𠂔（曜）	27	33	23	35
鉄（鉄）	20	19	33	10
口（国）	7	5	20	25
平 均	42	41	41	48

D 新聞への投書原稿の実態(高橋)

1 はじめに

これは、昭和38年6月にある新聞の一定の投書欄に投書された原稿のうち当時25才以上の人の手になるもの71通を分析したものである。新聞に掲載される場合には、新聞社で多少手を入れるのであるが、これは原稿のままを資料とした。この中には、新聞に掲載されたものもあるし、されなかったものもある。なお、資料には匿名希望のものもあり、原稿は、公表すべき性質のものでないので、新聞社の所在地や社名、それに投書欄の呼び名などは、報告をさける。

この資料は、かなづかいや漢字字体が、年齢・性別・職業によってどのような違いとなってあらわれるかをみようとしたのであるが、性別では女子が圧倒的に多く、職業では主婦と農業が多く、その「農業」と記載されたものもほとんどが農家の主婦であり、また「主婦」と書かれたものも、かなりが農家の主婦のようなので、職業別、性別の比較をすることができなかった。

71通の筆者のうちわけは、第74表の通りである。

第74表 投稿資料筆者の年齢・性別・職業

年 齢	25		26	28	29	30	31		32		33				
資料No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
性 別	男	女	女	女	男	女	女	女	女	女	女	女	女	男	男
職 業	農 業	主 婦	主 婦	主 婦	農 業	農 業	主 婦	主 婦	主 婦	主 婦	主 婦	主 婦	主 婦	?	会 社 員

34			35			36				37			38	
16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
女	女	男	女	女	女	女	男	男	女	女	女	男	女	女
農 業	主 婦	教 員	主 婦	主 婦	主 婦	農 業	農 業	農 業	主 婦	主 婦	農 業	会 社 員	?	農 業

40			41		42	43			44		45			
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
女	女	女	男	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女
主	農	主	会	農	農	主	主	主	主	主	主	主	主	主
婦	業	婦	社員	業	業	婦	婦	婦	婦	婦	婦	婦	婦	婦

46				47		48			49	50		51		52
46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
女	女	女	男	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女
主	主	主	農	主	主	主	主	主	農	農	主	農		主
婦	婦	婦	業	婦	婦	婦	婦	婦	業	業	婦	業	?	婦

53	54	55		56	61			68		70
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71
男	男	女	女	女	女	女	女	女	女	女
?	農	主		主			農			農
	業	婦	?	婦	?	?	業	?	?	業

2 新聞投書のかなづかい

この資料にあらわれたかなづかいは第75表の通りである。この表は、歴史的かなづかいと現代かなづかいで異なるもののみをあげた。また、同一人が同じ単語について、同じように書き表わしている場合、1回とみた。つまり、異なり語についてのかなづかいの回数を示したものである。ただし、同一人が同一語について二様のかなづかいを行なった場合には、新旧それぞれについて1回ずつに勘定した。

第75表 新聞投書のかなづかい

年	資	ハ行ーワ行				ゐ	ぢ づ		長 音							○ ケ月 ー ○カ月	漢 字 音	合 計
		ハ 行 五 段	ハ 行 下 一	ハ 行 語 幹	そ の 他		ぢ ー じ	づ ー ず	書 カ ラ ウ	ダ セ ウ	デ セ ウ	ア リ ガ タ ウ	ウ レ ン ウ	サ カ ウ	シ ス ル サ ウ	そ の 他		
令	No.	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧	新 旧
25	1	6	1	1		2		1						2			1	14
	2	3				1		1									1	5
26	3	4	1			1		1		1			1				1	10
28	4	6	1	1		1		1	1								1	13
29	5	4		2		2			1		1							7
30	6	6	2			1			3	1					2			15
31	7	2	1	1		1			1									6
	8	4	1	1	1	1			1								1	10
32	9	8	3	1	1	1			1					2			1	16
	10	1	3	1		2		1	2	1	1			2	1		2	9
33	11	4	6	2	2	1			1		1		1				1	8
	12	2	1	2	1	1			1	2			2				1	9
	13	2	6			1			1		1				1			5
	14	5	2		1	2			1	1			1				2	15
	15	8	2	1		1		1					2			1		16
	16	3	4	1						1								5
34	17	6	2			2		2		1								13
	18	5	1	1		2		4		1			1	1	1		1	18
	19	3	3			1			1	1			1	1				11
35	20	3	3	1		1			1		1			1				10
	21	9	3	1		1			1	1					1		2	19
	22	6	1	1		1				1							1	1
36	23	6	1	1		1							1				1	10
	24	3	2							1							1	7
		1															1	2

	25	3	1		3				1					7	6
	26	3	1		2		1	1	2			1	10	4	
37	27	7	4	2	2		1	2				1	19	2	
	28	5	4	2	2	1	1	2			1		1	17	3
38	29	6	1	2	2	1	2		1	1	2		1	17	7
	30	3	2		1		1	1					6	3	
40	31	5	2		1		2	1	1			1	11	2	
	32	3	3	1	1	1		2				1	8	5	
	33	6	1	1	4	1	1	2				1	17	1	
41	34	6	2	1	1		3		1	1	1		16	2	
	35	3	1	1	1			1	1	1			8	2	
42	36	3	1							1			5	0	
43	37	3	3	1	1		1	1	1				2	11	2
	38	1	1	1					1				3	3	
	39	4	1		2		1		1	1	1		10	1	
44	40	1	6	2	2	1	2	2	1	2	1		3	6	18
	41	2	1	1	1	1	2	1					4	5	
45	42	6	2	1	1	1			1	1			13	1	
	43	2	1		1		1	1	1	1			5	7	
46	44	3	5	2	1	1	2		1				2	9	10
	45	4	1	1	2		1		1	1			2	12	1
	46	3	2		1	2	3		1			1	11	3	
	47	5	1	1	1	4		1	1			1	15	7	
	48	4	2		2	2			1			2	13	0	
	49	3	3	1	1	1	1		1				11	1	
47	50	9	2	3	1	3	1	1			2		23	0	
	51	3		1	1	3	2					1	11	3	
48	52	2	1	2	1	1			1	1		1	9	5	
	53	6	1	1	1		1	1	1	1			12		
		5		1			1	1	1					9	

	54	3	3			1			1		1					8	8
			1						1							0	8
49	55		5	1					2								8
	56	3	1												1	5	2
50		2															
	57		4	1	1		2		1		1		1			2	6
										1							7
	58	3	1	2		1		1	1	1		1				2	10
51								1									4
	59	3	1		1	2										1	8
		2		1	1												4
52	60	7			1	5		1	1			1	1			1	18
																	0
53	61	5	2			2		1	1			1	1			3	16
																	0
54	62	2				3		1	1							2	9
			1														1
	63	4	1	1		1	1			1		1				2	12
55																	0
	64	1	1	1												3	
		2		1	1	1				1						1	7
56	65	4		1		2		1	1			1					10
								1									1
	66		2	1	1	1			1							1	7
		2			1							1	1			1	6
61	67	1	2	1		1						2					7
		5	2													1	8
	68	3		1		1			1								6
		4															4
	69	8	4	1	2	4			1			1	1	1		1	24
68				1					2							1	4
	70	8	1	1		2		1	3			1		2		1	19
		1	2														4
70	71	4	1				1		1			1				2	10
		2															2
合 計	282	87	36	15	97	10	21	50	25	2	45	21	13	0	55	759	
	111	33	14	6	4	8	25	10	10	1	1	1	0	11	8	243	
旧かな率	0.28	0.27	0.28	0.29	0.05	0.44	0.54	0.17	0.29	0.33	0.02	0.05	0.00	1.00	0.11	0.24	
	0.28			0.04	0.52	0.13			1.00			0.11	0.24				

(1) 年齢とかなづかい

第75表の合計欄によって、旧かな率 $\left(\frac{\text{歴史的かなづかい}}{\text{現代かなづかい} + \text{歴史的かなづかい}}\right)$ を求め、年代ごとに平均すると、第76表の最右欄のようになる。ここに見られるように、旧かな率は、20代を除けば、30代から60代まで、大きな違いは見られない。

第76表 旧かな率の分布と、年代別平均旧かな率（新聞投書）

平均	人数 (%) (累計%)	旧かな 率 $\frac{1}{2}$ 以上	$\sim \frac{1}{2}$ 以上	$\sim \frac{1}{3}$ 以上	$\sim \frac{1}{4}$ 以上	$\sim \frac{1}{5}$ 以上	$\sim \frac{1}{6}$ 以上	$\sim \frac{1}{7}$ 以上	$\sim \frac{1}{8}$ 以上	$\sim \frac{1}{9}$ 以上	$\sim \frac{1}{10}$ 以上	$\frac{1}{10}$ 未 満	0	平均 旧かな 率
20代 (25~29)	5 (100) (100)	(0)	(0)	(0)	1 (20) (20)	1 (20) (40)	(40)	(40)	(40)	(40)	(40)	3 (60) (100)		0.11
30代 (30~38)	25 (100) (100)	(0)	1 (4) (24)	5 (20) (44)	5 (20) (52)	2 (8) (56)	1 (4) (56)	(56)	1 (4) (60)	1 (4) (64)	4 (16) (80)	5 (20) (100)		0.23
40代 (40~49)	25 (100) (100)	1 (4) (4)	4 (16) (20)	4 (16) (36)	2 (8) (44)	3 (12) (56)	2 (8) (56)	1 (4) (64)	(68)	(68)	(68)	6 (24) (92)	2 (8) (100)	0.28
50代 (50~56)	10 (100) (100)	1 (10) (10)	1 (10) (20)	1 (10) (30)	2 (20) (50)	(50)	(50)	(50)	(50)	(50)	1 (10) (60)	1 (10) (70)	3 (30) (100)	0.21
60代 (61~70)	6 (100) (100)	(0)	1 (16) (16)	2 (34) (50)	(50)	(50)	1 (16) (66)	2 (34) (100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	0.28

しかし、個人旧かな率を見ていくと、第76表のように、その間に差が出てくる。旧かな率 $\frac{1}{2}$ 以上の人は、20代で0%，30代4%，40代，50代20%，60代16%となっている。また、旧かな率が $\frac{1}{10}$ に満たないものは、20代60%，30代36%，40代32%，50代40%，60代0%となっている。

これらのことから、旧かな率と年代との関係は、次のようになっているといふことができよう。

- (i) 38年当時20代のものは、旧かな率が、30代以上のものより低い。
- (ii) 30代から60代まで、ほぼ同様の旧かな率を示している。
- (iii) しかし、これは旧かな率の平均についてであって、その分布はいちようでない。
- (iv) 年代があがるにしたがって、旧かな率の低いものがへり、旧かな率の高いものがふえていく。
- (v) 年代が高くても、旧かな率の低い人もいるし、30代にも旧かな率の高い人もいる。

これらのことから、さらに、

- (vi) かなづかいは、個々人については、ある程度急激に変化し、30代以上の人（学校で旧かなを習った人）については、次第に旧かなから新かなへの移行が行なわれる。そして、その移行は、若い人のほうが年とった人よりもはやい。

という傾向があるのではないかと推察できる。

なお、20代に旧かな率0の人がいなかったが、「○ケ月」をはずすと、5人のうち2人が旧かな率0ということになる。

以上のことは、新聞投書の資料についていえることであるが、投書する人は、書くということにおいて、ふつうの人以上の関心があると思われるので、この資料だけを見ることによってこの結果を一般的なものにおしひろげることにはできない。

(2) 旧かな率の高いものと低いもの

第75表の最下段にみられるように、旧かなづかい率は、かなづかいの類型によって異なる。これを、旧かな率の高いほうから順にならべると、次のようになる。

○ケ月……………1.00	ぢづ……………0.52	ハ行……………0.28
長音……………0.13	漢字音……………0.11	ゐゑを……………0.04

このうち、上位の「○ケ月」や「ぢ」や「づ」は、現代かなづかいで教育を受けた20代の人にも使われている。このことは、かなづかいに影響を及ぼす経路が教科書以外に存在することを実証するものであり、興味深い。また20代の人の書いた原稿に「ぢ・づ」や旧ハ行の歴史的かなづかいがまじることの原因としては、経路の問題以外に、連濁・連呼の「ぢ・づ」や助詞の「は・へ」との混乱があるのかもしれない。

(a) ハ行——ワ行

歴史的かなづかいでハ行になるワ行（ワイウエオ）にも、活用の点でいくつかにわかれるものがあるが、それぞれの間に、それほど大きな違いはない。

歴史的かなづかいでハ行四段になる動詞、またはその派生語として、次のようなものがあつた。〔(x—y)は、xがその語を現代かなづかいで書いた人の異なり人数、yが歴史的かなづかいのそれである。〕

あう(会・合・逢)(11-1), つきあい(0-1), 話し合い(2-0),
 見合わせる(1-0), あつかう(1-1), あてがう(1-0), 洗
 う(2-0), いう₁(言う)(37-27), いう₂(～という)(36-11),
 憩う(2-0), 祝う(1-0), 伺う(1-0), 失う(3-1), 歌う
 (3-1), 疑う(2-0), 奪う(1-0), うるおい(1-0), 追う
 (5-0), 負う(2-0), 行なう(5-6), おそう(2-1), おも
 う(思・想)(48-25), おもわしい(1-0), 飼う(2-0), 買う(5
 -1), かまう(1-0), 通う(0-2), きらい(2-0), 喰う(6
 -0), 狂う(2-0), 乞われる(1-0), 物乞い(1-0), さそ
 う(4-0), 慕わしい(1-0), ～してしま(17-4), 吸う(1-
 1), 戦う(1-0), 給う(0-2), ちがう(8-2), 人違い, (1-
 0) 間違い(0-1), 使う(9-3), 手伝い(0-1), 集い(1-
 0), 問う(2-1), ともなう(1-0), 習う(2-1), 匂い(3-
 0), 拭う(1-0), 願う(12-4), はう(3-0), 払う(1-1),
 支払う(0-1), 拾う(2-0), 震わせる(1-0), 毛ぶるい(1-
 0), 振まい(1-0), 舞う(3-0), 向かう(1-4), もらう(9-
 2), 養われる(0-1), よそおい(1-0), 笑う(7-4)

歴史的かなづかいでハ行下二段になる動詞, またはその派生語として, 次の
 ようなものがあつた。

とりあえず(1-0), 止めあえず(1-0), あたえる(4-1), 訴
 える(1-1), うろたえる(1-1), 教える(5-6), かえる(替
 変)(4-4), ひきかえ(1-0), よみがえって(1-0), かかえ
 る(4-0), かぞえる(2-0), かまえる(3-0), 考える(18-
 9), 考え(5-4), 加える(3-0), こたえ(2-1), こらえる
 (2-0), 支え(1-0), 差しつかえ(0-1), そえる(3-0),
 そなえる(1-1), そろえる(4-0), たくわえる(1-0), たた
 える(1-0), たえる(2-1), たとえ(5-2), 間違える(1-0),
 伝え(1-0), 整える(1-0), ひかえ(2-0), むかえる(6-
 1)

歴史的かなづかいで語幹がハ行になる用言, またはその派生語に, 次のよう

なものがあつた。

あえぐ(1-0), あらわす・あらわれる(2-5), いたわる(1-0), 教わる(0-1), おわり(1-0), かえす(3-2), かえる(返)(1-0), かえる(帰)(2-0), かかわる(1-2), かわす(1-0), こわす(1-0), さわられた(0-1), とおり(2-0), とおして(0-1), なおす(1-0), 見なおした(0-1), ならわし(4-0), にぎわす(1-0), はいる(1-0), ほおっておく(1-0), まわる(5-0), とびまわる(1-0), あやうく(0-1), あわれ(1-0), くわしい(1-0), こわく(1-0), さわやか(1-0), やわらか(2-0)

そのほかに、歴史的かなづかいでハ行になるワ行音の語に、次のようなものがあつた。

勢い(2-0), ウグイス(1-0), うわつく(1-0), おまえ(1-0), かたわら(1-0), かべぎわ(1-0), お互い(2-1), たわし(1-0), ニワトリ(0-1), 病い(0-1), さえ(助詞)(5-3)

歴史的かなづかいでハ行になるものを、上の四つにわけてみたが、その間に大きな違いはなかつた。

使用者の少ないものは、はっきりしないが、この資料によって、歴史的かなづかいがかなり残っているといえるものに、次のような語のあることがわかつた。

言う₁(37-27), いう₂(36-11), 行なう(5-6), おもう(48-25), 通う(0-2), ～してしまう(17-4), 違う(8-2), 使う(9-3), 願う(12-4), もらう(9-2), 向かう(1-4), 笑う(7-4), 教える(5-6), かえる(替・変)(4-4), 考える(18-9), 考え(5-4), たとえ(5-2), あらわす・あらわれる(2-5), かえす(3-2), さえ(助詞)(5-3)

ここに現われた語は、使用度の比較的高いものであるが、意味の上での共通的な特徴を見出すことは、困難である。たとえば、「言う」「行なう」「思う」……など人間の行動、とくに心理的な行動を表わす語が多いなどということ

も、この限りではいえるが、そのことにどれだけの一般性があるかという点になると、はなはだあやしくなる。

ただ、次のような点は、特に書きとどめるに価するであろう。

(i) 「追う」「喰う」「まわる」など少数の語をのぞいては、いずれも、5人

以上に使用されるとかならず1人以上が歴史的かなづかいを使っている。

(ii) 係助詞「さえ」は、8人のうち、3人が歴史的かなづかいで書いていた。

以上にあげた語のうち、ハ(ワ)行の五段動詞及びその派生語については、ア段～オ段の5段にまたがるので、そのうちわけを第77表(1)に示す。なお、これに属する単語は、同一人が同一語を使った場合でも種々の形・用法であらわれるので、延べ回数で示した。この表で、「は₁」は未然形のうちの「う」につながるものをのぞいたもの、「は₂」は「う」につながるものを示す。(実際には、「～はう」の形はあらわれなかった。)また「え₁」「へ₁」は仮定形(または已然形)と命令形であり、「え₂」「へ₂」は可能動詞など下一段動詞(「言える」「見える」など)である。

この表から、次のようなことがいえる。

(i) 「という」と「～してしまう」とは、現代かなづかいの傾向が強かった。

た。その2語をのぞくと、

(ii) イ段とオ段は、現代かなづかいの傾向が強かった。

(iii) ウ段とエ段₁は、歴史的かなづかいの傾向がいくらか強かった。

(iv) ア段とエ段₂も、かなりの程度に、歴史的かなづかいが使われていた。

第77表(1) ハ(ワ)行五段動詞およびその派生語の、語尾変化と、かな

づかいの状況

(延べ回数)

	わ	は ₁	い	ひ	う	ふ	え ₁	へ ₁	え ₂	へ ₂	お	は ₂	計(現)	計(歴)
思う	7		101	30	19	24	1	5	3	1	0	0	131	66
思ふ		6												
言う	11		13	8	18	30	3	3	3	3	0	0	48	59
言ふ		15												
～という	1		0	0	94	23	5	0	3	0	0	0	103	23
～といふ		0												
～してしまう	0		8	1	15	5	1	0	0	0	1	0	25	6
～してしまふ		0												
その他(現)	41		106	10	17	19	1	2	7	3	3	0	175	50
その他(歴)		16												
計(現)	60		228	49	163	101	11	10	16	7	4	0	482	204
計(歴)		37												

第77表(2) ハ(フ)行五段動詞の未然形等の種類とかなづかいの状況

(延べ回数)

	～わない ～わす ～はない ～はず	～われる ～はれる	～わせる ～わす ～はせる ～はす	～わしい ～はしい	～はう ～おう	計(現) 計(歴)
思わ～ 思は～	3 3	3 3	0 0	1 0	0 0	7 6
言わ～ 言は～	0 1	11 13	0 1	0 0	0 0	11 15
といわ～ といは～	0 0	1 0	0 0	0 0	0 0	1 0
てしまわ～ てしまは～	0 0	0 0	0 0	0 0	1 0	1 0
その他(わ～) その他(は～)	6 4	21 10	13 2	1 0	2 0	43 16
計(現) 計(歴)	9 8	36 26	13 3	2 0	3 0	63 37

ア段のなかのうちわけは、第77表(2)の通りである。この表から、「～ない、～ず」や「～れる」のほうが、「～せる、～す」などよりも、歴史的かなづかいの傾向が強いことがわかる。

イ段のうち「思ひ～」が30回使われているが、そのうちわけは、次の通りである。

想ひ・思ひ・おもひ(名詞化したもの)……………16
 思ひ出・おもひで……………4
 思ひ出して……………1
 思ひおよんで……………1
 思ひこんで……………1
 思ひがけなく……………1
 思ひます……………1
 思ひながら……………5

これを見ると、「思ひ」が「思う」という動詞の活用形として使われているのは、「思ひます」と「思ひながら」の6回だけである。これに対して、「思い～」のほうは、次の通りである。

思い、想い、おもい(名詞化したもの)……………30
 思い出……………5
 複合動詞……………22
 思います……………34

～と思い…………… 3

思いながら・思いつつ…………… 6

お思いになる…………… 1

このように「思う」という動詞の活用形になっているものが44回使われている。

「言い」の場合は、次の通りである。

「言いふらす」など複合動詞…………… 5 言ひ出した…………… 1

と言ひ…………… 4 と言ひ…………… 5

言いながら…………… 3 言ひながら…………… 1

言いたい…………… 1 言ひたい…………… 1

イ段, 「その他」の現代かなづかいのうちわけは、次の通りである。

派生語・複合詞(「話し合い」「吸い続ける」「手伝い」など)……………82

連用中止(「～を失い」など)……………10

食いに行く…………… 1

～したい(「逢いたい」など)…………… 8

お逢いする・お願いする…………… 5

これが、歴史的かなづかいでは、

派生語・複合語(行ひ…2, 向ひ, 笑ひ, 願ひ,

おつきあひ, 無駄遣ひ, 人違ひ, 扱ひ方)…………… 9

お願いします…………… 1

となっている, つまり, 動詞の活用形としてのイ段は, 「言う」をのぞいて, 圧倒的に, 現代かなづかいへの傾向が強かったといえる。

エ段₁は, 大体において「～えば」「～へば」の形であるが, ほかに, 次のようなものがあった。

「とはいえ」2, 「といえども」(以上「という」),

「戦え(命令形)」「違へど」(以上「その他」)

ハ行(ワ行)五段動詞の假定形については, 「という」「～してしまう」を除けば, 歴史的かなづかいが現代かなづかいよりも多少多かったが, このことは, 例が少ないので, なんともいえない。

以上のことから, さきに第77表(1)で見た傾向の(ii)～(iv)は, 次のように書

きかえられる。

(ii) 連用形と意志形(「～しよう」の形)は、現代かなづかいの傾向がかなり強かった。

(iii) 終止・連体形と仮定形とは、歴史的かなづかいの傾向がいくらか強かった。

(iv) 否定形と受身・可能・尊敬形、それに可能動詞にも、かなりの程度に歴史的かなづかいが使われていた。

(b) ゐ・ゑ・を

歴史的かなづかいで「ゐ」になるものには、次のようなものがあった。

いる₁(居)(12—0), いる₂(～している)(56—4), くらい(4—0)
歴史的かなづかいで「ゑ」になるものには、次のようなものがあった。

植えて(1—0), うぶごえ(1—0), すえる(1—0), ゆえに(3—0)

歴史的かなづかいで「を」になるものには次のようなものがあった。

～しておる(11—0), おじさん(2—0), おばさん(2—0), おかしい(3—0), だしおしみ(1—0)

歴史的かなづかいで「ゐ」「ゑ」「を」になるもののうち、歴史的かなづかいで書かれたのは「～している」だけであった。ここに属するものは、「いる」「～している」「～しておる」を除いて、4人以上が使った語がないので、1語1語については何もいえないが、歴史的かなづかいでハ行になるものとくらべると、歴史的かなづかいになる傾向がいちじるしく弱いということがいえる。

「いる」の場合、自立的用法を使った11人がいずれも現代かなづかいで書き、補助的な用法を使ったもののうち4人が歴史的かなづかいで書いているのは、「いう」の場合と逆であって、このことから、この問題を一般化できなくなる。なお、「ゐる」を使った4人のうち、3人は、「～している」とも書いている。第78表はこのことを示している。数字は延べ使用回数である。

第78表 「～してゐる」と書いた人の状況(新聞投書)

年 齢	資 料 No.	～ し て い る	～ し て ゐ る
	40	1 回	11 回

44 才	41	5 回	1 回
45 才	42	10 回	3 回
	43	0 回	4 回

(c) ぢ・づ

歴史的かなづかいで「ぢ」になるものには、次のようなものがあった。

あじわう (1-1), いじらしい (0-1), おじさん (2-0), おやじ (0-1), じき (0-1), じっと見て (0-1), 首すじ (1-0) すじ (1-0), 閉じて (0-1), ひがんじまふ (0-1), 口じゃ (5-1),

歴史的かなづかいで「づ」になるものには、次のようなものがあった。

あずける (0-1), わきいずる (0-1), いずれ (2-1), いずこ (0-2), いたずら (3-0), うずく (1-0), うずめる (1-0), 訪ずれる (1-0), 気まずい (0-1), くずれる (1-0), ぐずぐず (0-1), ずきずき (1-0), たずねる (2-1), ねずみ色 (0-1), はずれ (0-1), まず (3-4), むずかる (0-2), めずらしい (2-1), ゆずる (0-1), わずか (3-0), ずつ(助詞) (1-7)

「じ」「ず」の代わりに「ぢ」「づ」を使った人が、約半数あり、これは、「〇ヶ月」を除いて、旧かなづかい率が最も高かった。

「ず」の旧かなづかい率が「じ」のそれより高いのは後述のY氏やS氏の場合と同じである。

歴史的かなづかいが2人以上によって使われているものに、次のようなものがある。

ずつ (1-7), まず (3-4), むずかる (0-2), いずれ・いずこ (2-3) このうち、「まず」や「いずれ・いずこ」は、S氏の場合と共通する。その二語に「ずつ」を加えて、この三語(厳密には、「いずれ・いずこ」は1語でないし、また「ずつ」のような接尾語ともいわれるものを一語というには問題があるが)は、一般にも、旧かなづかい率が高いと思われる。

「ずつ」の使用状況は、次の通りであった。

第79表 「ずつ」と「づつ」（新聞投書）

年	齡	32才	33	34	38	46		48	56
資	料 No.	10	11	18	30	44	47	53	65
ず	つ			1					
づ	つ	1	2		1	1	1	1	1

20代には「ずつ」の使用例がなかったが、「ずつ」を歴史的かなづかいで書く傾向は、この限りでは、30代以上に年代差はみとめられない。

(d) 長 音

五段動詞の意志形・推量形（動詞または助動詞の未然形に「う」のついたもの）には、次のようなものがあった。

いただく（2—0），おこう（1—0），送ろう（1—0），踊ろう（1—0），おろそう（1—0），頑張ろう（1—0），聞こう（1—0），叱ろう（0—1），しまおう（1—0），過ごそう（1—0），出そう（1—0），飲もう（0—1），乗ろう（1—0），守ろう（1—0），やろう（1—0），であろう（6—2），でなかりう（3—0），だろ（24—6），～したろ（3—0）～でしょう（16—9），～ましょ（9—1）

形容詞のウ音便には、次のようなものがあった。

ありがとう（2—0），うれしゅう（0—1）

副詞の「こう」「そう」は、次のようであった。

こう（20—0），そう（25—1）

伝聞の「そう」、様態の「そう」は、次のようであった。

～するそう（1—0），～しそう（20—1）

その他の長音には、次のようなものがあった。

きのう（1—0），きょう（2—0），こうもり（1—0），おしゅうとさん（1—0），ようやく（8—0）

長音は、「じ」「ず」やハ行とくらべて、歴史的かなづかいで書かれる率が低い。

長音の中で、歴史的かなづかいが比較的多かったのは、「～でしょう」（16—9）、「～だろ（24—6）」、「であろう」（6—2）などの活用語尾、字音かなづかいでは比況の助動詞の「よう」（31—4）のようなもの、つまり、文法的部

分に見られる。

五段活用意志形・推量形は、 $\frac{10}{60}=0.17$ の旧かなづかい率を示したが、これから「～だろう」と「であろう」を除いて意志形だけにすると $\frac{2}{30}=0.07$ となつて、旧かな率はぐんと低くなる。

「だろう」や「よう」が歴史的かなづかいで書かれることが比較的多いのに対し、伝聞の「～するそう」や様態の「～しそう」に、歴史的かなづかいがほとんどみられないので、これも、助動詞一般の問題としてとり出すことはできない。

(e) 字音語

字音かなづかいには、次のようなものがあった。

けんか (0—1), うとうしい (4—0), けっこう (1—0), さようなら (1—0), じょうず (1—0), しょうちゅう (1—0), ちょうど (1—0), とうとう (2—0), とうてい (1—0), 同りょう (1—0), ねぼう (0—1), 繁じょう (1—0), ぶどう (2—0), べんとう (1—0), ぼう然 (0—1), ほんとう (3—0), まほう (1—0), みじん (0—1), むしょう (1—0), ゆうゆう (1—0), ようす (1—0) よう (な, に) (31—4)

漢字を音よみにする部分を含んだ語の場合、さきにのべた「やう」のほか「けんくわ」「ねぼう」「ぼう然」「みぢん」があらわれたが、いずれも(0—1)なので、その語の特徴というわけにはいかない。

字音語の場合、33才に「やう」が1人(この人は「よう」も使っている)あるだけで、他は40代以上であり、歴史的かなづかいは、年代の高い方に集まっているようである。

(f) ○か月

「○か月」については、25才から68才にいたる11人がいずれも「○ケ月」と書いている。この「ケ」はもともと漢字の符号化されたものであるので、かなづかいというより漢字の問題であるかもしれない。しかし実際に使っている人は、ふつう、かたかなの「ケ」と意識しているので、ここでは、かなづかいの問題として扱っておく。

「〇か月」は、現代かなづかいに最もなりにくいものであろう。

(3) 新聞投書のかなづかい (まとめ)

(1)(2)でのべたことをまとめておく。

(i) 38年当時20代のものは、30代以上のものより旧かなづかい率が低い。

(ii) 30代～60代は、年代ごとに平均すると、ほぼ同様の旧かなづかい率を示している。

(iii) 年代があがるにしたがって、旧かなづかい率の高い個人がふえていく。

(iv) 語別にみると、旧かなづかい率の最も高いのは「〇か月」である。

(v) 字別にみると、「ケ」のあとに、「づ」「ぢ」がつづいている。

(vi) 長音や「ゐ・ゑ・を」などは、ハ行にくらべて、旧かなづかい率が低い。

(vii) 歴史的かなづかいが2人以上によって使われたものは、次の通りである。

〇ケ月 (0—11), 給ふ (0—2), 通ふ (0—2), むづかる (0—2),
づつ (1—7), 向かふ (1—4), あらはす・あらはれる (2—5),
かかはる (1—2), いづれ・いづこ (2—3), まづ (3—4), 教へ
る (5—6), いう(といふ) (36—11), 行なふ (5—6), かへる(替・
変) (4—4), 言ふ(自立語) (37—27), かへす (3—2), 考へる・考
へ (23—13), さへ (5—3), 笑ふ (7—4), ～でせう (16—9), お
もふ (48—25), たとへ (5—2), 願ふ (12—4), ～であらう (6—
2), ～だらう (24—6), ～してしまふ (17—4), もらふ (9—2),
～やうだ (31—4), ～してゐる (56—4)

(viii) ハ(ワ)行五段動詞は、活用形によってかなづかいのあらわれかたが異なり、連用形や意志形・推量形では現代かなづかいの傾向が強く、終止・連体形や仮定形では、歴史的かなづかいの傾向が強い。

以上は、ここに用いた資料の限りでいえることである。

3 新聞投書の漢字字体

当用漢字1850字のうち、字体表によって、旧正体とかわったものがある。この71人の書いた新聞投書に使われた漢字の中で、異なり130字が、それに含まれていた。130字のうち、41字はもっぱら新字体が使われ、23字はもっぱら旧字体が使われた。そして、残りの66字が、新・旧両様に使われていた。その漢字のうちわけは、第82表のとおりである。

(1) 年齢と字体

年齢差をきわだたせるために、新字体と旧字体の両様に使われた漢字66字について、各人が新・旧字体をどのように使ったかを示したものが、第80表である。この表の数字は、異なり字を示している。だから、1人が同じ字を同じ字体で書いた場合は1に勘定してある。また、同一文字を新・旧両様に使った場合には、新・旧それぞれに1ずついれてある。

第80表を、さらに年代ごとにまとめたものが第81表である。

第80表 年齢と字体（新聞投書）

年 齢	25		26	28	29	30	31		32		33				
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
新 字 体	10	11	9	8	5	6	1	6	6	3	4	4	6	10	7
旧 字 体	1	1	0	0	4	0	2	1	4	3	11	5	5	5	5
計	11	12	9	8	9	6	3	7	10	6	15	9	11	15	12

34			35			36				37			38	
16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
7	4	7	8	3	6	7	6	8	6	8	12	11	12	7
1	3	1	0	0	2	2	1	2	5	5	2	6	5	5
8	7	8	8	3	8	9	7	10	11	13	14	17	17	12

40			41		42	43			44		45			
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
5	10	8	8	7	3	12	2	12	7	6	9	6	6	10
5	5	3	2	5	2	3	7	5	6	3	1	3	0	2
10	15	11	10	12	5	15	9	17	13	9	10	9	6	12

46				47		48			49	50		51		52
46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
6	5	9	9	8	12	2	2	5	6	9	2	3	3	12
0	2	0	4	1	0	2	1	1	4	5	4	1	3	0
6	7	9	13	9	12	4	3	6	10	14	6	4	6	12

53	54	55		56	61			68		70	25~70
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	71人
11	7	6	4	1	4	2	6	8	7	5	473
1	0	0	1	1	2	7	5	3	3	2	192
12	7	6	5	2	6	9	11	11	10	7	665

第81表 旧字体使用率の分布と年代別平均旧字体率（新聞投書）

年 齢	人 数 (%) (累計%)	$\frac{3}{4}$ 以上	$\frac{1}{2}$ 以上	$\frac{1}{4}$ 以上	$\frac{1}{8}$ 以上	$\frac{1}{16}$ 以上	$\frac{1}{32}$ 以上	$\frac{1}{64}$ 以上	$\frac{1}{128}$ 以上	$\frac{1}{256}$ 以上	$\frac{1}{512}$ 以上	$\frac{1}{1024}$ 以上	$\frac{1}{2048}$ 以上	$\frac{1}{4096}$ 以上	$\frac{1}{8192}$ 以上	0	平均旧 字体率
20 代 (25~29)	5 (100) (100)	0	0	1 (20) (20)										2 (40) (60)	2 (40) (100)		0.12
30 代 (30~38)	25 (100) (100)	3 (12) (12)	1 (4) (16)	9 (36) (52)	2 (8) (60)	1 (4) (64)		3 (12) (76)	2 (8) (84)						4 (16) (100)		0.33
40 代 (40~49)	25 (100) (100)	1 (4) (4)	2 (8) (12)	7 (28) (40)	4 (16) (56)	2 (8) (64)	2 (8) (72)	1 (4) (76)		1 (4) (80)	1 (4) (84)				4 (16) (100)		0.28
50 代 (50~56)	10 (100) (100)	1 (10) (10)	2 (20) (30)	1 (10) (40)	1 (10) (50)	1 (10) (60)									1 (10) (70)	3 (30) (100)	0.22
60 代 (61~70)	6 (100) (100)	1 (16) (16)	0 (16) (16)	2 (34) (50)	3 (50) (100)												0.41

第81表から、次のことがいえる。

(a) 平均旧字体率については、

(i) 20代が最も低い。

(ii) 60代が最も高い。

(iii) 30代~50代については、年代が高いほど、旧字体率が低い。

(b) 個人旧字体率の分布も、平均旧字体率の傾向と相応じている。

(i) 20代では、5人のうち4人までが旧字体率が $\frac{1}{10}$ 未満である。

(ii) 60代では、6人の旧字体率がいずれも $\frac{1}{4}$ 以上である。

(iii) 個人旧字体率の集まっている場所は、30代より40・50代の方が低い所にある。

以上のようなことから、

(i) 20代と60代に関しては、旧かなづかい率の場合と同様の傾向を示しているといえる。

(ii) 30代～50代に関しては、旧かなづかい率の場合と異なった傾向を示しているといわなければならない。

そして、

(iii) 30代～50代に関して旧字体率が、年代が高いほど低いことは、母親調査の場合と似ている。

このことは、新聞投書をするような人々にあっては、P T Aの呼びかけに応じて出てくる母親と同様に、子供との接触によって新字体をおぼえるという習得過程の存在することを示しているのではないかと考えられる。

(2) 旧字体率の高い文字と低い文字

130字のうち、どんな漢字において旧字体率が高く、どんな漢字において旧字体率が低いかをしらべてみる。

a 新字体の類型と新旧の傾向

130字を、母親調査の際の分類にしたがって八種にわけると、第82表のようになる。

第82表 新字体の類型と新旧の傾向（新聞投書）

	新	新 一 旧	旧
1 点画の方向・長さの変わったもの		教弱 (4人—4人)	
2 点画の省略されたもの		器者暑諸緒都突 (21人—30人)	奥 収 涙 (7人)
3 画の交差の変わったもの	告産並 (6人)	負 (1人—9人)	急 (1人)
4 画の併合されたもの	劍険験 (7人)	惡焼乗帯満黙来 (50人—22人)	儉 検 従 様 (4人)
6 部分の省略されたもの	医恵県号声団点独予 (58人)	応条専処 (16人—8人)	隠疊 (2人)
7 部分の簡略化されたもの	栄営絵関勸飲縣経参 残辞児釈証醉銭鉄図 変訳乱恋 (103人)	困為会党学観気帛既举権国維 惨実洪真寝教戦総巢統対沢担 単断遅昼転伝当読悩壳発払宝 楽 (365人—106人)	桜 広 碎 将 状 慎 静 争 闘 脳 仏 謡 励 (30人)

8 全体の簡略化されたもの	旧体台与 (29人)	画欠写万 (11人—6人)	
9 異体の統一されたもの		強 (5人—7人)	
計	41字 (203人)	66字 (473人—192人)	23字 (44人)

この類型によって全体をすっきりわけることとはできないが、傾向として、大体次のようなことがいえる。

- (i) 点画の省略されたもの(2)については、旧字体を使った人のほうが新字体を使った人より多かった。
- (ii) 点画の方向・長さの変わったもの(1)については、新旧が同人数であった。これは、同人数であるが、130字全体については、旧字体の約3倍の新字体が使われているので、この類型は、相対的に旧字体にかたよっているといえる。
- (iii) 同様の理由で、画の併合されたもの(4)も、相対的にやや旧字体傾向がある。
- (iv) 部分の省略されたもの(6)および全体が簡略化されたもの(8)は、新字体傾向が強くあらわれた。
- (v) 部分が簡略化されたもの(7)も新字体傾向が強いが、130字全体とほぼ同じ傾向をしているので、相対的には他の類型に比してその傾向が強いとはいえない。

(b) 旧略字体の有無と新旧の傾向

第82表によって、もっぱら新字体の使われた文字、もっぱら旧字体の使われた文字、両方の使われた文字をくらべると、新字体がよく使われるものには、どうも、当用漢字制定前から略字または筆写体として通用していたものが多いようである。そこで、そういう観点から、S氏の字体の傾向について分析する際に用いた(a)(b)(c)3種の資料(214ページ参照)とつきあわせてみることにする。

- (a) 当用漢字が制定されたとき「簡易字体」が本体として採用された131字
- (b) サクラ読本に略体の示されている25字
- (c) 昭和21年に旧制高校生20名の書いた感想文集に使われた略字体のうち、新字体と一致する141字

もちろん、この3資料にふくまれない略字や印刷体(たとえば「鼎」「酔」

「伝」「産」など）もあるが、過去の通用体の限界をはっきりさせることにはいろいろの困難があるので、とまかく一応、客観的資料として、この3資料を使うことにする。

この新聞投書の資料にあらわれた新旧字体と資料 (a) (b) (c) との関係を示したものが第83表である。

第83表 旧略体の有無と新旧の傾向（新聞投書）

	新	新 一 旧	旧
甲 (a)(b)(c)に あるもの	関 (14), 体 (26) 変 (21), 乱 (3) 4字(64人)	画 (6—1), 処 (4—2) 宝 (1—1), 万 (1—2) 4字(12人—6人)	
乙 (a)(b)にあ るもの	旧 (1) 号 (1) 台 (1), 3字(3人)	帰 (25—1) 1字(25人—1人)	
丙 (a)(c)にあ るもの	絵 (4), 経 (8) 転 (4), 残 (5) 辞 (3), 図 (3) 声 (32), 独 (1) 恋 (1), 予 (9) 10字 (70人)	圀 (1—1), 会 (26—2) 覚 (13—3), 学 (29—1) 観 (3—2), 欠 (2—2) 実 (25—2), 数 (18—4) 沢 (7—1), 断 (6—1) 当 (35—1), 読 (17—2) 発 (6—2), 満 (6—4) 14字 (194人—28人)	
丁 (a)にある もの	医 (2), 営 (2) 栄 (2), 勸 (1) 飲 (2), 参 (9) 积 (1), 証 (3) 銭 (1), 鉄 (1) 点 (9), 並 (3) 訳 (6) 13字 (42人)	挙 (5—2), 権 (2—3) 惨 (1—1), 写 (2—1) 總 (2—4), 続 (19—2) 対 (14—2), 担 (3—1) 遅 (2—3), 悩 (1—2) 10字 (51人—21人)	隠 (1), 脳 (1) 励 (2) 3字 (4人)
戊 (c)にある もの	告 (1), 与 (1) 2字 (2人)	悪 (17—1), 応 (7—2) 気 (55—4), 強 (5—7) 国 (4—3), 雑 (4—3) 者 (10—13), 弱 (2—3) 諸 (2—3), 転 (5—4) 10字 (111人—43人)	様 (1), 広 (1) 2字 (2人)
	恵 [△] (1), 剣 (2)	為 [△] (4—3), 器 (1—1)	桜 [△] (1), 奥 [△] (1)

己 (a)(b)(c)の いずれに もないも の	険 (3), 驗△(2) 県 (2), 産△(2) 兎△(8), 酔△(1) 団 (1),	既△(1—1), 救△(2—1) 洪△(1—1), 緒 (1—1) 暑○(3—2), 焼 (1—1) 条△(2—2), 乗△(8—5) 真△(4—16), 寝 (2—4) 戦 (6—8), 専 (3—2) 巢 (1—1), 帯 (2—1) 昼△(2—2), 伝 (4—1) 都○(3—2), 突 (1—8) 単△(1—3), 売 (2—2) 負△(1—9), 払△(1—2) 黙 (4—1), 来△(12—9) 楽△(7—4)	急 (1), 儉△(1) 検△(1), 碎△(1) 収△(2), 従△(1) 将△(4), 疊 (1) 状△(4), 慎 (1) 静△(5), 争△(5) 闘△(2), 仏△(2) 謡 (1), 涙 (4)
	9字 (22人)	27字 (80人—93人)	18字 (38人)
計	41字 (203人)	66字 (473人—192人)	23字 (44人)

なお、太字は、旧字体が新字体より少なくなかったものである。

また、己のうち

△は、新字体と同じ字体が大字典に略体としてのっているもの、

○は、新字体と同じ字体が、サクラ読本以外の読本にのっているものである。

この表により、同じ新字体でも、以前から略体等として通用していたものは比較的多く使われ、新しく作られたものは使われ方が比較的少ないことがわかる。第84表は、第83表を、さらにまとめたものである。

第84表 旧略字体と旧字体率（新聞投書）

	新字体使用		両字体使用		旧字体使用		計		
	字数	人数	字数	人数	字数	人数	新字体 人数	旧字体 人数	旧字体 率
2種類以上の資料にある字(甲乙丙)	17字	137人	19字	231人—35人	0字	0人	368人—35人		0.09
1種類の資料にある字(丁戊)	15字	44人	20字	162人—64人	5字	2人	206人—66人		0.24
3資料のどれにもないもの(己)	9字	22人	27字	80人—93人	18字	38人	102人—131人		0.56
計	41字	203人	66字	473人—192人	23字	40人	676人—232人		0.26

第84表をみると、旧略字体があったかなかったか、あるいは、旧略字体がよく使われたかどうか（2種類以上の資料にあるかどうか）ということが、現在の旧字体率と非常に関係深いことがわかる。

この分析に (a) (b) (c) 3資料しか用いなかったことは、やや応急的であるとのそしりをまぬがれないと思うが、過去に略体があったかどうかを厳密に調べ、またその使われ方による重みづけをさらに合理的にほどこすならば、第

84表の傾向は、いっそういちじるしくあらわれるものと考えられる。

(3) 旧略字体の有無と年代別旧字体率

第83表の甲乙丙のうち、新聞投書で新・旧両字体の使われたもの19字について、年代ごとの旧字体率を求めたのが第85表である。また、己のうち、新・旧両字体の使われたもの27字について、年代ごとの旧字体率を求めたのが第86表である。

第85表 略体のよく使われた文字の年代別旧字体率（新聞投書）

		画	処	宝	万	婦	囀	会	覚	学	観	欠	実	数	沢
20 代	新 旧				3			1	3			2	1		
30 代	新 旧	4 1	3 1		1 1	6 1	1 1	7 1	7 1	9 1	2 2	2 1	9 1	7 1	2 1
40 代	新 旧	1 1	1 1	1 1		11 1	1 1	11 1	4 1	13 1	1 1		7 1	8 2	3 1
50 代	新 旧	1 1		2 1		4 1		6 2	1 2				5 1	1 1	1 1
60 代	新 旧				1 1	1 1		2 2		4 2			2 1	1 1	1 1
計	新 旧	6 1	4 2	1 1	1 2	25 1	1 1	26 2	13 3	29 1	3 2	2 2	25 2	18 4	7 1

断	当	読	発	満	計	旧 体	字 率
	2		3	1	16	0	0.00
4	14	6	2	2	87	16	0.16
1	13	6	1	2	84	9	0.10
1	5	2			27	5	0.15
	1	3		1	17	5	0.23
6	35	17	6	6	231	35	0.13

第86表 略体のあまり使われなかった文字の年代別旧字体率（新聞投書）

		為	器	既	教	洪	緒	暑	焼	条	乗	真	寝	戦	専
20 代	新 旧	1 1	1 1		1							1 1	1 1	1 1	2
30 代	新 旧	1 1		1 1	1 1	1 1	1 1	1 1		3 3		1 7	3 3	2 2	1
40 代	新 旧	1 2					2 1		2 1	4 1	2 1		2 1	3 3	1
50 代	新 旧	1 1						1 1		1 1	1 1			1 1	
60 代	新 旧										1 1	1 1		2 2	
計	新 旧	4 3	1 1	1 1	2 1	1 1	3 1	1 2	1 1	2 2	8 5	4 16	2 4	6 8	3 2

巢	帯	単	昼	伝	都	突	売	負	払	黙	来	楽	計	旧 体	字 率
1						2					4	3	16	6	0.27
1				1	2	2	1	2	1	2	1	3	24	39	0.62
1		1	1	1		1	3	4	1	2	2	1	23	31	0.57
	1	1	1	2	2		1	2		3			14	8	0.36
			1			1		1			2	2	3	9	0.75
1	2	1	2	4	3	1	2	1	1	4	12	7	80	93	0.54
1	1	1	3	2	1	2	8	2	9	2	1	9	4		

第85表と第86表とから、次のようなことがわかる。

- (i) 当用漢字制定前に略体のよく使われた漢字（甲乙丙）については、30～50代の旧字体率の差がきれいにあらわれない。——この傾向は、旧かな率の場合と似ている。
- (ii) 当用漢字制定前に略体がなかったか、あまり使われなかったか、どちらかであった漢字（己）については、30代よりも40代が、また40代よりも50代が、旧字体率が低い。——この傾向は、66文字についてみた旧字体率の傾向をさらにきわだったものになっている。

このことは、当用漢字制定前にあまり使われなかった字体を習得するのに、子供からの経路がかなり大きな重みを持つのではないかということを推測させる。さらにおしはかるならば、全くの新字体というものは、かなり意識的であれば習得できないものであるということがいえるのかもしれない。

(4) 新聞投書の字体（まとめ）

(1)～(3)でのべたことをまとめておく。

- (i) 昭和38年当時年齢20代のものは30代以上のものよりも旧字体を使う率が低い。
- (ii) 60代のものは、50代以下のものよりも、旧字体を使う率が高い。
- (iii) 30代～50代については、年代が高いほど、旧字体を使う率が低い。
- (iv) (iii)でのべた傾向は、母親調査で見られた傾向と一致し、これは、子供を通じて新字体をおぼえるという経路の存在することを物語るものと思われる。
- (v) (iii)でのべた傾向は、当用漢字制定前にはあまり使われなかった字体を新字体としている漢字にしぼると、いっそうきわだってあらわれ

る。

- (vi) 当用漢字制定前から略体・筆写体として通用していた字体を新字体とした当用漢字は、制定前にあまり通用していなかった字体を新字体としたものより、旧字体で書かれる率が低い。
- (vii) 新字体の類型としては、点画の省略されたものが、旧字体で書かれやすく、部分の省略されたものや全体の簡略化されたものが新字体で書かれやすい。

Ⅲ 個人の文字使用の変化の実態とその条件

A Y氏の場合（渡辺）

1. Y氏の略歴

Y氏とは、前国会議員八百板正氏で、次のような経歴をもったかたである。

- 明治38年福島県伊達郡飯野町に生まれる。現在59歳。（昭和39年現在）
- 福島中学を中退後上京、大正14年、日本フェビアン協会に参加し、はじめて社会主義運動に加わる。（20歳）
- 翌年普通選挙法がしかれ、無産政党が結成されたので、これに入党。間もなく同党が分裂、日本労働農民党につく。
- その後日本労働農民党は、合同して、日本大衆党、全国労農大衆党、社会大衆党となったが、農民運動をしながら、これらの党で党の活動に従事。のち戦争の進行とともに、社会大衆党は昭和15年に解散。
- また、昭和4年ごろから福島県で農民運動に力を注ぎ、多くの農民組合を組織する。戦時中昭和16年には戦争反対者として投獄される。
- 戦後、日本農民組合を再建結成し、同時に準備委員となって、日本社会党を結成する。そして日本農民組合福島県連会長、日本社会党福島県連会長、日本農民組合本部書記長、同副委員長、同中央執行委員長を歴任。
- また、この間に福島県農地委員、中央農地委員に任命され、農民運動とあわせて、ひろく農地解放・自作農創設の運動を実際に推進する。
- 昭和22年に福島一区から衆議院議員に初当選。以来昭和38年の総選挙まで連続7回衆議院議員に当選。
- 衆議院議員になってからは、日本社会党代議士会長、党農民部長、国会对策委員長、選挙対策委員長等を歴任。現在全日本農民組合会長、日本社会党福島県本部顧問、福島県労農会議議長等の職にある。

2. Y氏の資料

わたしたちは、八百板正氏の特別のご好意によって、次に示す資料を拝借することができた。資料は、主として同氏が国会で演説や質問をなさったとき、その準備として書かれたメモや草稿の類である。したがって、これらの資料は、もともと他人に見せることを意識して書かれたものではない。他人に見せることを意識して書かれたものでないから、他人に見せることを目的とした手紙・葉書、雑誌の原稿などの場合とちがって、表記法の上で、いちいち辞書その他を参考になさったことも少ないだろう。つまり、八百板氏個人の表記法が

強く現われていることが多いだろう。ここに、これらの資料の、資料としてもつすぐれた点がある。

強いて、これらの資料について難を言えば、次の2点がある。

1. 執筆の時期が、昭和26年から38年の13年間に限定され、25年以前の資料がない。
2. 昭和27、28年に執筆されたものが多く、26年から38年までの各年に平均的に分布していない。とりわけ、29・34・35年の3年の資料が欠けている。

しかし、それはともかく、このような貴重な資料をわたしどもに快く貸してくださった八百板氏のご好意に対しては、深い感謝の念をささげる次第である。なお、これらの資料は、すべて現代口語文で書かれていることは、いうまでもない。(資料の総量を枚数でいうと、B5判複写紙で計602枚である。)

(資料一覧)

No.	執筆の年月	標 題
1.	26年10月	第12国会・米麦等のノート
2.	26 ごろか	中央メーデーに対する日本農民組合代表としての挨拶の原稿
3.	27	吉田内閣諸方官房長官に対する質問の原稿
4.	27	向井大蔵大臣に対する質問の原稿
5.	27	メモ
6.	27	予算委員会質問メモ
7.	27	マーカット声明・日米経済協力・リ声明・法令改廃
8.	27・5	第13国会ノート
9.	28・3 ごろ	予算案の組替えを求める動議の趣旨弁明の原稿
10.	28・4・19	第26回選挙公報の草案
11.	28・5・1	中央メーデーに対する祝詞
12.	28・5	暫定予算補正反対討論の原稿
13.	28・6	衆議院本会議吉田首相に対する質問原稿
14.	28・10・29	臨時国会での質問原稿
15.	28	総選挙ラジオ放送の原稿
16.	28	吉田首相と福永官房長官への質問原稿
17.	28	衆議院予算委員会質問メモ
18.	28	吉田内閣岡野経審長官に対する質問原稿
19.	28	補正予算についての質問原稿
20.	28	総選挙ラジオ放送原稿

21. 28	吉田総理の施政方針についての質問原稿
22. 28	衆議院予算委員会での質問原稿
23. 28	選挙演説モデル用原稿
24. 28	財政投資
25. 28	M S A 協定について
26. 28	標題なし
<hr/>	
27. 30・2・27	衆議院第27回選挙NHK放送原稿
28. 30・2	選挙公報草案
29. 30ごろ	メモ
30. 30ごろか	胃袋・囲炉裏・かまど
<hr/>	
31. 31・3	農民組合30年記念大会挨拶の原稿
32. 31	選挙のラジオ放送の原稿
<hr/>	
33. 32	メモ
34. 32	衆議院議長不信任演説の草稿
35. 32ごろ	総評大会に対する挨拶の原稿
<hr/>	
36. 33・5	総選挙
37. 33・5	総選挙演説原稿
38. 33・5	総選挙関係文書
39. 33・5	総選挙準備関係メモ
<hr/>	
40. 36・8ごろ	日本社会党中央委員会での選挙報告の原稿
41. 36・8	社会党大会での地方選挙対策提案説明のメモ
<hr/>	
42. 37	社会党大会での総選挙対策の件
43. 37	中央委員会での地方選挙対策の説明のメモ
<hr/>	
44. 38	社会党大会地方選挙対策の件
45. 38・5	統一地方選挙についての某雑誌社の依頼原稿
46. 38	不正選挙に関する衆議院本会議での質問演説の原稿

一、二の見本を172～173ページに示しておこう。(資料No.35から)

3. 漢字の字体

この昭和26年から38年にわたる46の資料の中で、まず八百板正氏は、どのような漢字を新旧いずれの字体で、どのような語を書き表わすために、どれだけ書いておられたか。この問題を、当用漢字字体表に定める字体との関連において、次の四つに分けて、以下に報告する。

労働者と農民が、テイケイしなければならぬと
 ソビエトは社会主義運動の最初に出てくる
 定義があります、これは疑問のものは皆様の
 中には一人も居ないと思ひます、しかしまた
 日本の労働者と農民が既にそのテイケイが
 来ていると、~~実~~ ^際に思つてゐる人もまた皆
 様の中には一人も居ない ~~ものはあり~~ ^と思ひま
 す

4

あなた戸は

②①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

たとえ

これをケイモウして 労働者の

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

労働三法の あり方を知らしめ

てやりたいと来えといふかもしれない、これをわ

からせることか 農民と味方につける みちた

と思はれるかもしれない、しかし ~~労働者~~ とい

れは無駄だと思ひます、 何故ならば、これよ

ア	使用された字体が全部新字体であったもの。	56字	計 115字
イ	同じく、全部旧字体であったもの。	40字	
ウ	新旧二つの字体が使用されたもの。	13字	
エ	いわゆる俗体とあわせて使用されたもの。	6字	

(1) 使用された字体が全部新字体であったもの

使用された字体がすべて当用漢字字体表の定める字体と同じであると認定することができたのは、全体で56字あった。それを使用度数の多い順に配列して示したのが、第87表である。

表の読みかたを説明する。たとえば「党・黨」は、昭和27年から38年までの12年間に、「社会党、自民党、民社党、与野党、党派」など、34の語を書き表わすために、延べ341回使用された。そしてその際使用されたのは、すべて「党」という新字体であって、旧字体の「黨」は1回も使用されなかった。第87表は、以下このようなことを示している。

また、「國」の字以下の字体についている※印は、八百板氏が小学生のときに使用された当時の国定教科書「文部省^{尋常}小學國語讀本」全12巻の中に1回以上現われた字体であることを示す。ただし、「与」は、「文部省^{尋常}小學國語讀本」では「与」, 同じく「号」は「号」, 「鉄」は「鉄」となっていた。新旧二つの字体に※印のついているものは、左側の字体が右側の字体の略体として「文部省^{尋常}小學國語讀本」に提示されていたものである。新旧両方の字体に※印をつけないものは、もちろん「文部省^{尋常}小學國語讀本」全12巻に1回も現われなかった漢字である。

第87表 全部新字体であったもの

	度数	使用年	使 用 語	
			語数	用 例
党・黨	341	27~38	34	社会一・自民一・民社一・与野一・一派
国・國	246	27~38	31	独立一・一政一・一庫一・一会一・一際
対・對	152	26~38	12	一策一・一反一・絶一・一立一・一決
予・豫	123	27~38	6	一算一・一金一・一想一・一備費一・一防
*体・體	118	27~38	22	自治一・弱一・一制一・一質一・全一
労・勞	105	26~37	4	一働一・勤一・一農一・就一
挙・舉	75	28~38	2	選一・検一
戦・戰	74	27~38	12	一争一・一時一・一後一・一力一・一線
*関・關	53	27~38	5	一係一・機一・一する一・一税一・一連

	度数	使用年	使 用 語	
			語数	用 例
*点・*點	52	27～38	9	一・重一・力一・要一・起一
区・*區	35	28～36	8	地一・全国一・選挙一・各一・一カク
発・*發	35	27～38	13	一展一・一足一・一する・活一・一言
担・*擔	33	27～38	3	負一・一当・分一
売・*賣	30	28～33	3	一る・販一・一却
*与・*與	28	27～38	4	給一・一論・一党・一野党
圧・*壓	26	26～38	6	一迫・一力・弾一・一制
*属・*屬	26	28～38	5	従一・レイ一・一国・所一・一する
弁・*辨	21	27～38	5	答一・代一・陳一・一明・一護士
悪・*惡	19	28～38	6	一い・一しかれ・一質・一意・一趣味
証・*證	18	28～38	6	保一・一抛・一紙・受取一・一文
参・*參	17	27～38	6	一る・一議・一考・降一・一加
麦・*麥	17	28～31	3	一・小一・米一
声・*聲	15	27～33	3	一・一・一明
変・*變	14	27～31	6	一る・大一・一化・一更・一な
営・*營	13	27～38	5	運一・経一・陣一・一繕費・一農
断・*斷	13	26～38	6	判一・一じて・一る・裁一・一行
庁・*廳	8	27～28	2	保安一・調査一
余・*餘	8	28～31	2	一る・一
拡・*擴	7	28～38	2	一大・一張
辞・*辭	7	28～38	4	祝一・一職・一表・訓一
旧・*舊	4	28～31	2	復一・一軍人・一地主
広・*廣	4	28～37	2	一い・一島
氣・*氣	3	28～31	2	一・生意一
*号・*號	3	38	1	第一一
*鉄・*鐵	3	28	2	一鋼・一砲
*礼・*禮	3	28～33	2	お一・一儀
栄・*榮	2	28	2	一ある・繁一する
続・*續	2	37	1	連一
*都・*都	2	37～38	1	一道
*乱・*亂	2	32	2	混一・一斗
湾・*灣	2	30～37	2	真珠一・一
*横・*橫	1	38	1	一行
帰・*歸	1	28	1	一り
継・*繼	1	28	1	一統
撃・*擊	1	37	1	打一
欠・*缺	1	38	1	一かん
献・*獻	1	28	1	一金
港・*港	1	38	1	一

	度数	使用年	使　　用　　語	
			語数	用　　例
雑・*雑	1	27	1	一誌
廃・*廢	1	28	1	一止
*辺・*邊	1	28	1	この一
豊・*豐	1	33	1	一かな
*宝・*寶	1	28	1	一
薬・*藥	1	28	1	一礼
楽・*樂	1	36	1	一観的
両・*兩	1	27	1	一方

つまり、第87表にかかげた56字の旧字体のうち、「黨・壓・廳・擴・辭・繼」の6字を除いた残りのものは、八百板氏が小学校で確かに教えられたはずの字体であると考えることができる。同じく56字の新字体のうち、「体・関・点・与・属・号・鉄・礼・都・乱・横・辺・宝」の13字を除いた残り43の字体は、八百板氏が少なくとも国語の教科書を通しては小学校では教えられなかったはずの字体であると考えていいだろう。

したがって、われわれはこの表から、上にあげた46の資料の中で、八百板氏が小学校で教えられたはずの43の字体をそれぞれ1回も使用せず、それに代わって、小学校では教えられなかったはずの43の字体だけを使用していたということを知ることができる。このことは、「この表の字体は、漢字の読み書きを平易にし、正確にすることをめやすとして選定した」という当用漢字字体表の字体選定の精神が、現在59歳の八百板氏にも容易に受け入れられる性質のものであったことを示しているのだろう。

しかし、そうは言っても、当用漢字字体表にのっている字体は、そのほとんどが字体表の制定以前から、略字体として世間に広く行なわれていたものである。したがって、上のことから、昭和24年、つまり八百板氏が44歳であったときに公布された当用漢字字体表が、八百板氏個人のその後の漢字の書き方の習慣に決定的な影響を及ぼしたなどとは、もちろんとてもいえない。そうであるかどうかは、字体表制定以前の八百板氏の資料を調査した上で、はじめて明らかになることである。

(2) 使用された字体が全部旧字体であったもの

昭和26年から38年までの間に使用された字体が全部旧字体であったのは、全

部で40字ある。それを第87表にならって示したのが、第88表である。表の読み方は、第87表に準ずる。たとえば、「総・總」は、昭和27年から38年までの12年間に、「総理・総裁・総合的・総選挙」など11の語を書き表わすために延べ73回使用された。しかし、その際使用されたのは、すべて「總」という旧字体であって、新字体の「総」は、1回も使用されなかった。(以下同じ。)

つまり、昭和27年から38年までの間に、当用漢字字体表の定める「総」という字体は、都合73回現われ得る機会をもった。だがそれにもかかわらず、「総」は1回も現われなかったのである。

個人の表記習慣に対する当用漢字字体表の影響という観点から見ると、少なくとも「総・總」に関する限り、当用漢字字体表は、昭和27年から38年までの12年間という長年月をかけても、八百板正氏という個人の文字づかいの習慣に対して、全くゼロの影響しか及ぼし得なかったということになる。以下「数・數」「強・強」「条・條」等、そのように見ていくと、つまり八百板氏個人についていうならば、「この表の字体は、漢字の読み書きを平易にし、正確にすることをめやすとして選定したものである」という当用漢字字体表の字体選定の精神は、「総・總」以下いくつかの字体に関する限り、その効果はゼロに等しいということになる。

第88表 全部旧字体であったもの

	度数	使用年	使 用 語	
			語数	用 例
総・*總	73	27～38	11	一理・一裁・一合的・一選挙・一額
数・*數	43	28～38	17	多・一票・一字・過半・一量
強・*強	34	26～38	14	一制・一化・一引・一い・一調
条・*條	34	26～38	6	一約・一件・一文・東・信一
負・*負	30	27～37	2	一担・背一う
画・*畫	30	27～38	2	計・一策
従・*從	29	27～38	5	一う・一属・一事・一來・操一
*払・*拂	23	26～38	4	一いのけ・一い下げ・一う・支一う
險・*險	19	30～36	2	危・一保一
単・*單	17	27～38	3	一に・一独・一個
伝・*傳	13	27～38	5	宣・一える・一統・手・一ロ一
応・*應	12	27～38	4	一一・一急・一ずる・一援
*諸・諸	12	28～37	3	一君・一斗争・一(もち)
真・*眞	8	27～38	3	一の・写・一相

	度数	使用年	使 用 語	
			語数	用 例
*弱・弱	7	28～36	2	一 体・一 い
*乗・乗	6	27～32	4	一 る・一 せる・一 り出す・便一
踐・踐	6	28～38	1	実一
転・*轉	6	28	4	一 用・一 ずる・運一・逆一
励・*勵	6	28	1	奨一
仮・假	4	28～33	3	一 政府・一 定・一 称
拠・*據	4	28～33	2	証一・根一
検・*檢	4	30～38	3	一 挙・一 束・一 討
将・*將	4	31～38	2	一 来・大一
観・*觀	3	36～38	3	一 迎・一 測・楽一的
験・*驗	3	28～31	3	体一・経一・試一
壘・*壘	3	30～31	1	一
惨・慘	2	28	2	悲一・一 状
写・*寫	2	28	1	一 真
収・收	2	28	1	買一
緒・緒	2	28～30	1	一一
*益・益	1	32	1	利一
勧・*勸	1	38	1	一 告
芸・*藝	1	27	1	一 能
肅・肅	1	28	1	一 正
称・*稱	1	33	1	仮一
寝・*寢	1	28	1	一 込んだ
巢・*巢	1	28	1	あき一
錢・*錢	1	28	1	追一
帯・*帶	1	33	1	世一
弾・*彈	1	28	1	一 圧

(3) 新字体・旧字体の画数の比較

ここで、使用された字体が全部新字体であった56字と、使用された字体が全部旧字体であった40字、あわせて96字の漢字について、それぞれの新旧二つの字体の字画数の比較をしてみよう。比較するのは、次の二つの点である。

- i 旧字体の画数÷新字体の画数＝画数比率
- ii 旧字体の画数－新字体の画数＝画数差

第89表は、96の漢字を画数比率の大きい順に配列したものである。見出しは新字体によった。表中漢字の右肩に※印のついているのは、使用された字体が全部旧字体であったもの。※印のついていないのは、使用された字体が全部新字体であったものである。

第89表 新旧字体の画数の比較

	画 数		画数率	画数差
	新字体	旧字体		
庁	5	25	5.0	20
与	3	14	4.7	11
辺	4	18	4.5	14
弁	5	21	4.2	16
予	4	16	4.0	12
旧	5	18	3.6	13
礼	5	18	3.6	13
庄	5	17	3.4	12
体	7	23	3.3	16
広	5	15	3.0	10
写*	5	15	3.0	10
区	4	11	2.8	7
芸*	7	19	2.7	12
号	5	13	2.6	8
変	9	23	2.6	14
欠	4	10	2.5	6
宝	8	20	2.5	12
応*	7	17	2.4	10
声	7	17	2.4	10
励*	7	17	2.4	10
拡	8	18	2.3	10
余	7	16	2.3	9
伝*	6	13	2.2	7
壳	7	15	2.1	8
湾	12	25	2.1	13
抛*	8	16	2.0	8
担	8	16	2.0	8
对	7	14	2.0	7
党	10	20	2.0	10
点	9	17	1.9	8
乱	7	13	1.9	6
仮*	6	11	1.8	5
帰	10	18	1.8	8
疊*	12	22	1.8	10
属	12	21	1.8	9
気	6	10	1.7	4
拳	10	17	1.7	7
旁	7	12	1.7	5

采	9	14	1.6	5
断	11	18	1.6	7
鉄	13	21	1.6	8
転*	11	18	1.6	7
証	12	19	1.6	7
続	13	21	1.6	8
弘*	5	8	1.6	3
画*	8	12	1.5	4
勧*	13	20	1.5	7
継	13	20	1.5	7
献	13	20	1.5	7
險*	11	16	1.5	5
辞	13	19	1.5	6
営	12	17	1.4	5
関	14	19	1.4	5
観*	18	25	1.4	7
検*	12	17	1.4	5
国	8	11	1.4	3
参	8	11	1.4	3
称*	10	14	1.4	4
条*	7	10	1.4	3
麦	7	11	1.4	4
豊	13	18	1.4	5
験*	18	23	1.3	5
雑	14	18	1.3	4
惨*	11	14	1.3	3
単*	9	12	1.3	3
彈*	12	15	1.3	3
廃	12	15	1.3	3
発	9	12	1.3	3
両	6	8	1.3	2
収*	5	6	1.2	1
肅*	11	13	1.2	2
数*	13	15	1.2	2
戦	13	16	1.2	3
踐*	13	15	1.2	2
総*	14	17	1.2	3
菓	16	19	1.2	3
楽	13	15	1.2	2
悪	11	12	1.1	1
横	15	16	1.1	1
強*	11	12	1.1	1

撃	15	17	1.1	2	帯*	10	11	1.1	1
緒*	14	15	1.1	1	都	11	12	1.1	1
諸*	15	16	1.1	1	益*	10	10	1.0	0
将*	10	11	1.1	1	港	12	12	1.0	0
乗*	9	10	1.1	1	弱*	10	10	1.0	0
従*	10	11	1.1	1	真*	10	10	1.0	0
寝*	13	14	1.1	1	巢*	11	11	1.0	0
銭*	14	16	1.1	2	負*	9	9	1.0	0

第3表を見て気づくことは、※印のつかない漢字は概して上位に集中して現われ、そして※印のついた漢字は概して下位に集中して現われているということである。つまり大まかに言うと、画数比率の大きい漢字ほど新字体が用いられ、画数比率の小さい漢字ほど旧字体が用いられているという傾向がみられるのである。

(4) 新旧二つの字体が使用されたもの

新旧二つの字体が使用された漢字は、全資料を通じて、わずか13字しかなかった。第90表に示す漢字がそれである。

このうち、「者・者」「当・當」「価・價」「争・争」の4字は、旧字体の使用された割合が圧倒的に高く、「会・會」「実・實」「独・獨」「団・團」の4字は、新字体の使用された割合が圧倒的に高い。これに対して、残りの「学・學」「来・來」「処・處」「覚・覺」「県・縣」の5字は、新字体の使用された割合が旧字体の使用された割合よりも高いことは高いが、その差がそんなに開いてはいない。

それでは、これら13の漢字は、これを通時的にみた場合、新旧二つの字体の現われかたは、どのようになるか。その様子を示したのが、第91表である。

まず、「者・者」「当・當」「価・價」「争・争」の4字は、新字体の使用度数が非常に少ない。しかし、当用漢字字体表の影響という見地からみるならば、この少ない使用度数が比較的新しい年にかたまって現われれば、当用漢字字体表の影響が、使用度数の少ないなりに、あったと認められるわけである。しかし4字とも、このような傾向は、それほどはっきりした形では認めることができない。

次に、「会・會」「実・實」「独・獨」「団・團」の4字は、旧字体の使用度数が非常に少ない。しかし、これも少ない旧字体の使用度数が、比較的古い時代

に集中して現われていれば、当用漢字字体表の影響があったと認められるわけである。だが、「独・獨」の場合を除いては、それほどはっきりした形では認めることができない。「学・學」「来・來」「処・處」「覚・覺」「県・縣」の5字の場合も同じである。

つまり、当用漢字字体表は、この場合でも、八百板氏個人の漢字表記の習慣にほとんど影響を及ぼしていないことになる。

第90表 新旧混用のもの

	度 数		使用年	使 用 語	
	新	旧		語数	用 例
*者・者	4	145	26—38	27	労働—・支配—・社会主義—・有権—・企業—
当・*當	22	66	26—38	24	—選—・—落—・正—・割—・—初
価・*價	3	71	26—36	11	—格—・米—・物—・代—・創—学会
争・*爭	8	34	27—38	5	戦—・斗—・—議—・競—・—う
会・*會	239	6	27—38	29	集—・社—・委員—・国—・演説—
実・*實	73	3	27—38	21	—力—・現—・—体—・—質—・確—
独・*獨	50	3	28—38	6	—立—・—占—・—禁法—・—断—・—単—
団・*團	29	1	26—38	4	—結—・—体—・—爭議—・—集—
学・*學	18	6	28—38	10	科—・—習—・創価—会—・小—・—生
来・*來	13	4	27—38	6	従—・將—・元—・以—・—る
処・*處	10	9	27—38	8	何—・—理—・—罰—・—分—・—置
覚・*覺	5	3	27—36	5	感—・自—・—悟—・サッ—・—える
県・*縣	5	2	36—38	6	—会—・—議會—・府—・—連—・神奈川—

第91表

字体 年	者	者	当	當	価	價	争	爭	会	會	実	實	独	獨	団	團	学	學	来	來	処	處	覚	覺	県	縣
26		12		2		1			1		1				1											
27		1	3	4		2		1	11		3	1							1		2	4	2			
28		2	54	15	34	56	5	7	92	2	18		26	3	9		13		2		7	3	1	1		
30		8		3					3	25		3	1	1			2	2			1		1			
31		6	2	1	1	1		5	10		3		12		8				2				1			
32		12		2		7		1	25	1	2		3		2	1			1	7		1				
33		2	27	2	6	1	4		4	12		1		6		5			1							
36		6		5	1		1	4	26	2	10						3							2	1	1
37		10		2			2	7	10									1		1					1	1
38		9		7				2	27	1	10	1	2		4			2		3		1			3	
計	4	145	22	66	3	71	8	34	239	6	51	3	50	3	29	1	18	6	13	4	10	9	5	3	5	2

(5) いわゆる簡略俗体とあわせて使用されたもの

いわゆる簡略俗体とあわせて使用されたものは、第92表に示す六つの漢字である。この表を見ると、簡略俗体が新字体、旧字体に比して、いかに多く用いられているかがよくわかる。

第92表 俗体と混用のもの

	度 数			使用年	使 用 語	
	新	旧	俗		語数	用 例
権・*權・权	1	9	53	27—38	22	政—・—力・主—・ストライキー
闘・*闘・斗	2	0	51	26—36	7	—う・—争・戦—的・乱—・力—
第・次	0	/	35	27—38	12	—4次・次—・—14条・—15国会
歴・*歷・厂	0	0	2	32—33	1	—史
幅・巾	0	/	2	38	1	大—
卒・卒	0	/	1	27	1	—直

(6) ま と め

以上(1)(2)(3)(4)(5)に報告したことを総括すると、漢字の異なる字体の使い方に
関して、八百板氏の場合ほぼ次のことが言えるだろう。

1. 当用漢字字体表にも採用されている、字画が旧字体に比して比較的単純な略体がよく使用されている。字画の複雑な字体は、たとえ小学校時代に教えられたものでも、使用されていない。ただし、これが当用漢字字体表の影響によるものであるとは、資料の関係で現在のところ断定できない。むしろ、そうでないかも知れない。
2. 小学校時代に教えられた字体が仮に複雑な字画のものであっても、それに対応する略体の字画が相対的に言ってそれほど単純でない場合は、その小学校時代に教えられた字体のほうが強固な習慣となって、あとあとまで残るものであるらしい。
3. つまり、小学校時代に教えられた旧字体が用いられるか、それとも字体表にある新字体が用いられるかは、二つの字体の画数の違いの大小に規定される場合が非常に多いらしい。
4. 字画の単純な俗体もよく使用されるものであるらしい。
5. つまり、当用漢字字体表それ自身の積極的な影響は、八百板氏の場合、すこぶる小さなものであるらしい。

4 かなづかい

(1) 「現代かなづかい」の細則によって整理した場合

昭和26年から38年にわたる46の資料の中で、八百板氏が用いたかなづかいを「現代かなづかい」の細則に従って、整理してみると、次のようになる。

細則第1 ゐ、ゑ、をは、い、え、おと書く。ただし助詞のをを除く。

八百板氏の資料の中で、この細則に該当するものは、第93表に示すとおり、わずか3語しかなかった。

この表の読み方は、たとえば、「～ている」という補助動詞は、26年から38年までの間に、かなで表記されたものが207回あるが、それは全部新かなづかいで表記されていて、旧かなづかいで表記されたものは、1例もなかった、というぐあいに読んでいくことにする。(以下同じ。)

第93表 細則第1・ゐゑを→
い、え、お

	新	旧	使用年
～ている	207	0	26 — 38
～ておる	63	0	27 — 38
くらい	1	0	30
計3語	271	0	26 — 38

つまり、「～ている」「～ておる」「くらい」の3語を合わせて、かなで書かれた271回の用例は、すべて新かなづかいで書かれ、旧かなづかいで書かれたものは、1例もなかったのである。

細則第2 くわ、ぐわは、か、がと書く。

これに該当する用例なし。

細則第3 ぢ、づは、じ、ずと書く。

これに該当するものを第94表に示す。づ、ずに関するものが、26年から38年

第94表 細則第3 ぢ・づ→じ・ず

	新	旧	使用年		新	旧	使用年
たずねる	0	4	27—38	わずか	0	21	28
きずく	0	3	26—37	まず	0	20	27—38
たずさわる	0	2	26—28	おのずと	0	1	28
うなずく	0	1	28	計 12語	0	69	26—38
はずみ	0	1	28	いじめる	3	0	28—32
いずれ	0	11	26—31	はじ(恥)	1	0	31
みずから	0	1	27	けじめ	1	0	38
まずい	0	3	28				
ずさん	0	1	28	計	5	0	28—38

までの13年間に、異なりで計12語、延べ69の用例があった。そして、そのすべてが旧かなづかいで表記されている。

ぢ、じに関するものは、同じく28年から38年までの11年間に、異なりで計3語、のべ5回の用例があった。これらの用例は、づ、ずの場合とはちがって、すべて新かなづかいで表記されていた。

細則第4 ヲに発音されるはは、わと書く。ただし助詞のはは、はと書くことを本則とする。

この細則に該当する用例を第95表に示す。用例は、動詞が大部分で、それに名詞、形容詞、連体詞、副詞などの語が少しある。全体で異なり41語、延べ149。

第95表 細則第4 (は→わ)

	新	旧	使用年		新	旧	使用年
かわる	5	0	28～36	支払わ{一せる 一れる	0	2	28～38
さわる	4	0	31～32	戦わ{一せる・一れる 一ぬ	0	6	31～38
たずさわる	2	0	26～28	従わ{一せる 一ねば	0	4	27～37
きわめる	1	0	28	奪われる	0	3	28～30
こだわる	1	0	28	合わぬ	0	3	28
まどわす	1	0	28	失われる	0	2	28～30
現わされる	1	0	33	疑われる	0	1	28
なりおわる	1	0	38	補われる	0	1	28
まぎらわしい	1	0	28	振わない	0	1	28
きわどい	1	0	30	引合わない	0	1	28
こわい	1	0	31	伴わぬ	0	1	28
まわり	1	0	28	とわれる	0	1	30
帰りぎわ	1	0	28	揃わぬ	0	1	28
間ぎわ	2	0	28～33	小 計 17語	0	69	26～38
にわとり	1	0	28	言わ{一れる・一せ る・一ぬ etc	16	10	27～33
なわ	1	0	31	行われる	1	9	28～38
不てぎわ	1	0	32	買わ{一れる・一せ る・一ねば	1	5	28～31
思わく	1	0	36	貰わない	1	3	28～32
いわゆる	2	0	31	いわば	4	1	32～38
小 計 19語	29	0	26～38	小 計 5語	23	28	27～38
思わ{一れる・一ざ る・一ぬ	0	19	27～36	計 41語	52	97	26～38
使わ{一れる・一な い・一ねば	0	11	27～37				
食わ{一れる・一せ る・一される	0	6	27～30				
払わ{一せる 一ない	0	6	26～38				

このうち、26年から38年にかけての異なり19語、延べ29の例は、すべて新かなづかい、同じく26年から38年までの異なり^(注1)17語、延べ69の用例は、すべて旧かなづかいで書かれている。また、27年から38年までの異なり5語、延べ51の用例は、そのうち23が新かなづかい、28が旧かなづかいで書かれている。

新かなづかいだけで書かれた19語は、語幹の中に「は」を含む動詞と、それに名詞、形容詞、連体詞などであるが、旧かなづかいだけで書かれた17語は、すべては行五段活用の未然形の部分を含んだ動詞である。また、新旧二つのかなづかいで書かれた5語のうち、副詞の「いわば」を除いた4語も、は行五段活用の未然形を含んだ動詞であり、しかも、そのうち「言われる・一せる・一ぬ」等を除いた残りの3語は、圧倒的に多く旧かなづかいで書かれている。

つまり、八百板氏の場合、は行五段活用の未然形は旧かなづかいで書き、それ以外の場合は、新かなづかいで書くという習慣のあることがわかる。

新旧二つのかなづかいが混用された5語を通時的に見ると第96表のようになる。

第96表

(言わ {一れる・一せる} 一ぬ, etc)			(行なわれる)			(いわば)		
年 \ かなづかい	新	旧	年 \ かなづかい	新	旧	年 \ かなづかい	新	旧
27	0	1	28	1	1	28	1	1
28	11	5	36	0	1	32	1	0
30	1	2	37	0	1	33	1	0
31	1	2	38	0	6	38	1	0
32	1	0	計	1	9	計	4	1
33	2	0						
計	16	10						

(買わ {一れる・一せる} 一ぬば)			(貰わない)		
年 \ かなづかい	新	旧	年 \ かなづかい	新	旧
28	1	3	28	0	3
31	0	2	32	1	0
計	1	5	計	1	3

(注1) たとえば、「思われる・思わざる・思わぬ」のように、未然形に異なる助動詞のついてできた語も、便宜的に異なりで1語とかぞえた。

細則第5 イに発音されるひは、いと書く。

これに該当する用例を下の第97表に示す。27年から38年までの間における異なり57語、延べ181の用例のうち、55語延べ169は、すべて新かなづかいで書かれ、2語延べ12の用例は、新旧両方のかなづかいが混用されている。ただし、旧かなづかいだけで書かれた語は、一つもなかった。

新旧二つのかなづかいが混用された「違い（間一・ます）」を通時的にみると、左の第98表のようになる。

第98表

年	違い { 間一 ます	
	新	旧
27	2	0
28	4	1
30	2	0
31	2	0
33	1	0
計	11	1

第97表 細則第5 (ひ→い)

	新	旧	使用年		新	旧	使用年
思い { 一ます・一出し ます・一出 一込み	50	0	27-38	ついに	2	0	30
言い { 一ます・一張る 一出す etc(注1)	14	0	27-38	失い	2	0	28-31
食い { 一つぶす・一つ なく・一とめる etc(注2)	13	0	28-30	ヤトイ兵	1	0	31
使い { 一方・一よう ムダー	13	0	28-38	横ばい	1	0	28
貰いたい	12	0	27-38	尻ぬぐい	1	0	28
戦い { 一・一とる 一ます	14	0	26-38	思い思いの	1	0	27
一合い { 殺し せり・一抱 き etc(注3)	6	0	30-36	ぐあい	1	0	30
願います	6	0	28-38	うばいとる	1	0	37
買い { 一あげる・一入 れる・一叩く	5	0	28-33	背負い	1	0	28
払い { 一のける 一下げる	4	0	26-28	お祝い	1	0	31
伺います	4	0	28-38	補い	1	0	28
ねらい	3	0	28	おかまいなし	1	0	28
吸い { 一上げる 一込む	3	0	31-37	取扱い	1	0	28
追い { 一まくる・一込 む・一つめる	3	0	28-37	たくい	1	0	28
				～てしまい	1	0	30
				幸い	1	0	33
				強い	1	0	28
				小 計 55 語	169	0	26-38
				違い { 間一 ます	11	1	27-33
				計 57 語	180	1	26-38

注1 ほかに、言いのがれる・言い放つ・言い得る

注2 ほかに、食いすぎ・食いもの・つまみ食い・食いつき

注3 ほかに、おつき合い・割り合い

細則第6 ウに発音されるふは、うと書く。

これに該当する用例を第99表に示す。全体で異なり28語、延べ550の用例のうち、27年から38年までの25語延べ99の用例は、すべて新かなづかいで書かれており、同じく27年から38年までの残りの3語延べ451の用例は、新かなづかいが117、旧かなづかいが334と、新旧二つのかなづかいが混用されている。

第99表 細則第6 (ふ→う)

	新	旧	使用年		新	旧	使用年
使う	19	0	27—38	奪う	1	0	28
違う	13	0	27—33	背負う	1	0	28
一合う(注)	11	0	27—38	争う	1	0	27
戦う	9	0	31—38	つちかう	1	0	36
買う	9	0	28—31	笑う	1	0	38
貰う	8	0	28—33	まかなう	1	0	28
向う	5	0	31—38	危い	1	0	38
行う	4	0	28	小計 25語	99	0	27—38
しまう	3	0	28—32	言う	39	330	27—38
従う	3	0	27—36	思う	74	3	27—38
食う	2	0	28—30	支払う	4	1	28—32
扱う	2	0	28	小計 3語	117	334	27—38
償う	2	0	28	全体 計 28語	216	334	27—38
失う	1	0	28				
疑う	1	0	32				

注 合う・見合う・話し合う・いましめ合うなど。

第100表

(言う)

年	かなづかい	新	旧
27		0	34
28		10	176
30		9	26
31		18	27
32		2	15
33		0	12
36		0	12
37		0	7
38		0	21
計		39	330

(思う)

年	かなづかい	新	旧
27		6	0
28		47	0
30		3	3
31		2	0
32		4	0
33		2	0
36		1	0
39		9	0
計		74	3

(支払う)

年	かなづかい	新	旧
28		3	1
32		1	0
計		4	1

このうち、「言う」は旧かなづかいで書かれていることのほうがはるかに多く、「思う」は、新かなづかいで書かれていることのほうがはるかに多い。これらを通時的にみると、第100表のようになる。

「言う」は、31年をピークとして、28年から32年にかけて新かなづかいが現われるが、以後再び旧かなづかいだけになる。「思う」は、30年に3例だけ旧かなづかいが現われるが、そのほかは、すべて新かなづかいである。

細則第7 オに発音されるふは、おと書く。

これに該当する用例なし。

細則第8 エに発音されるへは、えと書く。ただし助詞のへは、へと書くことを本則とする。

これに該当する用例を第101表に示す。異なり37語延べ234の用例のうち、26年から38年までの異なり33語延べ133の用例は、すべて新かなづかいで書かれている。同じく27年から38年までの異なり4語延べ101の用例は、新旧二つ

第101表 細則第8 (へ→え)

	新	旧	使用年		新	旧	使用年
言える	32	0	28—38	訴える	2	0	28—33
加える	17	0	27—38	戦え { —ば —る	2	0	32—37
かえる(換・替)	11	0	28—36				
支える	4	0	26—36	～してしまえば	1	0	27
押える	7	0	28	教える	2	0	28
与える	6	0	27—38	負える	1	0	28
見える	4	0	28—32	わきまえる	1	0	28
食え	4	0	28—30	かえりみる	1	0	32
買える	4	0	28—31	捕える	1	0	32
使え { —る —ば	4	0	28	ひとえに	1	0	33
				整える	1	0	37
貰える	3	0	28—33	笑えば	1	0	38
まきぞえ	3	0	28	小 計 33語	133	0	26—38
唱える	3	0	28—38	考える	57	1	27—38
そろえる	3	0	30—37	答える	17	1	27—38
もちこたえる	3	0	28	例えば	13	1	27—37
思えば	3	0	28—38	～さえ(助詞)	10	1	28—31
迎える	2	0	28—38	小 計 4語	97	4	27—38
伝える	2	0	28—38	全体計 37語	230	4	26—38
たえる	2	0	31—32				
かかえる	2	0	28—38				

のかなづかいが混用されているが、そのうち97が新かなづかい、4が旧かなづかいというぐあいに、新かなづかいが圧倒的に多く用いられている。もちろん、用例が旧かなづかいだけで書かれた語は、1語もなかった。

二つのかなづかいが混用された4語101の用例を、語ごとに通時的にみると、第102表のようになる。4語とも28年に旧かなづかいの用例が現われている。

第102表

(考える)

年	かなづかい	新	旧
27		3	0
28		27	1
30		3	0
31		1	0
32		4	0
36		7	0
37		2	0
38		10	0
計		57	1

(答える)

年	かなづかい	新	旧
27		3	0
28		10	1
38		4	0
計		17	1

(～さえ＜助詞＞)

年	かなづかい	新	旧
28		4	1
31		2	0
32		2	0
37		1	0
38		1	0
計		10	1

(例えば)

年	かなづかい	新	旧
27		3	0
28		9	1
37		1	0
計		13	1

細則第9 オに発音されるほは、おと書く。

この細則に該当する用例を第103表に示す。27年から38年までの異なり8語延べ32の用例のうち、7語延べ23語は、すべて新かなづかい、残りの1語延べ9の用例は、新旧二つのかなづかいが混用されている。しかし、旧かなづかいだけで書かれた語は、一つもなかった。

第103表 (ほ→お)

	新	旧	使用年		新	旧	使用年
とおり	12	0	27-36	おおう	1	0	28
なおす	5	0	28-36	小計 7語	23	0	27-38
すなお	2	0	27-38	なお	8	1	28-38
おおかた	1	0	36	全体計 8語	31	1	27-38
におい	1	0	28				
しおどき	1	0	31				

この1語を通時的にみると、次ページの第104表のようになる。28年に旧かなづかいが現われて、以後は全部新かなづかいである。

細則第10 ニの長音は、ゆうと書く。

細則第11 エ列長音は、エ列のかなにえをつけて書く。

細則第12 オの長音は、おうと書く。

以上の三つの細則に該当する用例なし。

細則第13 コおよびゴの長音は、こう、ごうと書く。

この細則に該当する用例を第105表に示す。27年から37年までの間に現われた4語延べ43の用例のうち、3語延べ5の例は、すべて新かなづかい。残る

1語の38の用例のうち一例だけが旧かなづかいである。この語の用例を通時的にみると、第106表のようになる。旧かなづかいの1例は、28年に現われている。

第104表 (なお)

年	かなづかい	新	旧
28		4	1
31		1	0
36		1	0
38		2	0
計		8	1

第105表

細則第13 (コ・ゴの長音→こう・ごう)

	新	旧	使用年
こう(副詞)	37	1	27—36
置こう	3	0	30—37
書こう	1	0	30
行こう	1	0	37
計 4語	42	1	27—37

第106表

(こう)

年	かなづかい	新	旧
27		4	0
28		20	1
30		2	0
31		5	0
32		3	0
33		2	0
36		1	0
計		37	1

細則第14 ソおよびゾの長音は、そう、ぞうと書く。

これに該当する用例を第107表に示す。新かなづかいだけで書かれた語は1

第107表

細則第14(ソ・ゾの長音→そう・ぞう)

	新	旧	使用年
そう(副詞)	12	45	27—38
通そう	0	1	27
過そう	0	1	28
乗り出そう	0	1	32
そう(接尾語)	1	2	27—31
計 5語	13	50	27—38

語もない。副詞の「そう」と助動詞の「そう」が新旧二つのかなづかいが混用されている。これを通時的にみると、次ページの第108表のようになる。副詞の「そう」を新かなづかいで書いた用例は、27、28、30年にだけ現われて、以後は1例も現われていない。

細則第15 トおよびドの長音
は、とう、どうと
書く。

細則第17 ホおよびボ、ポの
長音は、ほう、ぼ
う、ぼうと書く。

細則第19 ヨの長音は、よう
と書く。

細則第27 キョおよびギョの
長音は、きょう、
ぎょうと書く。

第108表

そう(副詞)

かなづ かい 年	新	旧
27	3	4
28	8	24
30	1	4
31	0	4
32	0	1
33	0	3
36	0	1
37	0	1
38	0	3
計	12	45

そう(接尾語)

かなづ かい 年	新	旧
27	0	1
30	1	0
31	0	1
計	1	2

以上4つの細則に該当する用例は、下の第109表に示すとおりで、「～よう」を除いては、その数が全く少ない。

第109表 細則15. 17. 19. 27.

	新	旧	使用年
立とう	1	0	31
いっぽう	1	0	36
よう(様)	143	0	26—38
ようやく	0	2	30
きょう(今日)	0	1	28

細則第20 ロの長音は、ろうと書く。

これに該当する用例を次ページの第110表に示す。「～であろう」「～になろう」「けずろう」「とろう」の4語延べ12の用例はすべて旧かなづかい、「なかるう」「つくろう」の2語延べ2例は新かなづかいで書かれている。また、「～だろう」「やろう」の2語延べ12の用例は、新旧二つのかなづかいが混用されている。

この混用されている2語12の用例を通時的にみると、第111表のようになる。

第110表 細則第20

(口の長音→ろう)

	新	旧	使用年
～であろう	0	7	28—38
～になろう	0	3	28—31
けずろう	0	1	28
と ろ う	0	1	28
なかろう	1	0	28
つくろう	1	0	28
～だ ろ う	3	6	28—38
や ろ う	1	2	28—31
計 8 語	6	20	28—38

第111表

(～だろう)

かなづかい	新	旧
年		
28	2	3
30	0	3
38	1	0
計	3	6

(やろう)

かなづかい	新	旧
年		
28	0	2
31	1	0

細則第28 ショおよびジョの長音は、しょう、じょうと書く。

これに該当する用例は、第112表に示すとおり、「～でしょう」「～ましょう」の2語しかなかった。27年から38年までの59の用例は、すべて旧かなづかいで書かれている。

第112表 細則第28 (ショ・ジョの長音→しょう・じょう)

	新	旧	使用年
～でしょう	0	42	27—38
～ましょう	0	17	28—33
計	0	59	27—38

細則第16 ノの長音は、のうと書く。

細則第18 モの長音は、もうと書く。

細則第21 キュおよびギュの長音は、きゅう、ぎゅうと書く。

細則第22 シュおよびジュの長音は、しゅう、じゅうと書く。

細則第23 チュの長音は、ちゅうと書く。

細則第24 ニュの長音は、にゅうと書く。

細則第25 ヒュおよびビュの長音は、ひゅう、びゅうと書く。

細則第26 リュの長音は、りゅうと書く。

細則第29 チョの長音は、ちょうと書く。

細則第30 ニョの長音は、にょうと書く。

細則第31 ヒョおよびビョの長音は、ひょう、びょうと書く。

細則第32 ミョの長音は、みょうと書く。

細則第33 リョの長音は、りょうと書く。

以上13の細則に該当する用例なし。

(2) まとめ

以上細則別に八百板氏のかなづかいについて報告してきたことを要約すると、次のようになる。

1. 細則 1, ゐ・ゑ・を→い・え・おの問題では、少なくとも「～ている」「～ておる」については、完全に新かなづかいに移行している。
2. 細則 3, ぢ・づ→じ・ずの問題では、づは、まだ新かなづかいのずに全く移行していないと、ほぼ完全に言えるだろう。また、ぢは、ほぼ完全に新かなづかいに移行しているらしい。しかし、これは用例が少ないので、はっきりそうと断定することはできない。
3. 細則 4, は→わの問題は、は行五段動詞の未然形の部分は、二、三の例外を除いて、すべて旧かなづかいで書き、それ以外の場合（動詞・名詞・形容詞・連体詞など）は、ほとんど全部新かなづかいで書くという、はっきりした傾向がある。
4. 細則 5, ひ→いの問題。これは、ほぼ完全に新かなづかいに移行していると認めることができる。
5. 細則 6, ふ→うの問題。「言う・言ふ」の場合を除いて、新かなづかいにほぼ完全に移行していると認めることができる。
6. 細則 8, へ→えの問題。新かなづかいにほぼ完全に移行していると認めることができる。
7. 細則 9, ほ→おの問題。用例が少ないので、はっきりそうとは断定できないが、新かなづかいにほぼ完全に移行していると認めることができると言っていいだろう。
8. 細則13, コの長音→こうの問題。用例が非常に少ないので、はっきりそうだとはいえ、とても断定できないが、ほぼ新かなづかいに移行しているらしい。
9. 細則14, ソの長音→そうの問題。用例が非常に少ないので、はっきりそうだとはいえ、とても断定できないが、旧かなづかいが強く保持されているらしい。
10. 細則19, ヨの長音→ようの問題。「よう(様)」の1語の用例しかなかった。

たが、少なくともこれに関する限り、完全に新かなづかいに移行している。

11. 細則20, ロの長音→ろうの問題。用例は、すべて動詞の未然形に助動詞「う」のついた形のものだけであるが、この用例に関する限り、旧かなづかいがかなりの程度保持されているようだ。

12. 細則28, シヨの長音→しょうの問題。用例は、「～でしょう」「～ましよう」の二つの助動詞だけだが、これに関する限り、完全に旧かなづかいが保持されている。

つまり、八百板氏個人の文字づかいの習慣には、現代かなづかいの準則の全体が全体として体系的な形でははいっていないことがわかる。

(3) 動詞を語ごと・活用形ごとに整理した場合

以上、「現代かなづかい」の細則に従って整理した資料のうちから、二つ以上の活用形が現われた五段動詞と五段動詞からの派生動詞（およびその転成名詞など）だけをぬき、それを語ごと、活用形ごとに整理してみると、第113表のようになる。

第113表

	新	旧	使用年		新	旧	使用年
思わ{一れる・一ざる 一ぬ	0	19	27—36	食わ{一れる・一せる 一される	0	6	27—30
思{一ます・一出し ます・一出・一 込み・etc	51	0	27—38	食{一つぶす・一つ なく・一とめる etc	13	0	28—30
思う	74	3	27—38	食う	2	0	28—30
思えば	3	0	28—38	食え	4	0	28—30
言わ{一れる・一せる 一ぬ・etc	16	10	27—33	買わ{一れる・一せる 一ねば	1	5	28—31
言{一ます・一張る 一出す・etc	14	0	27—38	買{一あげる・一入 れる・一叩く	5	0	28—33
言う	39	330	27—38	買う	9	0	28—31
言える	32	0	28—38	買える	4	0	28—31
使わ{一れる・一ない 一ねば	0	11	27—37	戦わ{一せる・一れる 一ぬ	0	6	31—38
使{一方・一よう・ ムダ	13	0	28—38	戦{一・一とる 一ます	14	0	26—38
使う	19	0	27—38	戦う	9	0	31—38
使え{一・一ば 一る	4	0	28	戦え{一ば 一る	2	0	32—37

	新	旧	使用年		新	旧	使用年
行われる 行う	1 4	9 0	28—38 28	—合う{—見—話 し—etc	11	0	27—38
貰わない 貰いたい	1 12	3 0	28—32 27—38	補われる 補い	0 1	1 0	28 28
貰う 貰える	8 3	0 0	28—33 28—33	失われる 失い 失う	0 2 1	2 0 0	28—30 28—31 28
払わ{—せる —ない	0	6	26—38	疑われる 疑う	0 1	1 0	28 32
払い{—のける —下げる	4	0	26—28	違い{間— —ます	11	1	27—33
支払わ{—せる —れる	0	2	28—38	違う	13	0	27—33
支払う	4	1	28—32	笑う 笑えば	1 1	0 0	38 38
従わ{—せる —ねば	0	4	27—37	背負い 背負う 負える	1 1 1	0 0 0	28 28 28
従う	3	0	27—36	しまう —してしまえば	3 1	0 0	28—32 27
奮われる うばいとる 奪う	0 1 1	3 0 0	28—30 37 28				
—合わぬ{—引き— —殺し—・せり —合い{—抱き— etc	0 6	4 0	28 30—36				

「言う」以外は、どの語も未然形は、そのほとんど全部が旧かなづかいで書かれ、他の連用形、終止形・假定形などの活用形は、そのほとんど全部が新かなづかいで書かれていることが多い。つまり未然形だけが旧かなづかいのハ行にとどまり、他の活用形はハ行から新かなづかいのワ行へほぼ完全に移行しているという傾向がある。使う・食う・買う・戦う・貰う・合う、などは、特にこの傾向がはっきりしている。これは、おそらく助詞の「は」が「は」と書かれていることの類推によるのではなからうか。

B S 氏 の 場 合 (高橋)

1 S 氏の経歴と資料について

長岡調査では、年齢を6層に分けているが、その低いほうから三番目が29～33才(37年現在)の5カ年で、最も刻みが小さい。この層は、現代かなづかいや当用漢字が制定された時(昭和21年)に旧制中学に在学していた人々の層である。この人たちは、小学校ですでに歴史的かなづかいを習い、また漢字を旧字体で習っている。その後、中学校時代に国語改革を見、教育の上でなんらかの影響を受けただろうと思われる。また、中学時代に新しい文字づかいへのきりかえが行なわれなかったとしても、さらに上に進む場合に、高校・大学・就職という三つの試験をへる中で、あるいは改変を強いられたかもしれない。

こういう第三の層に属する人に文字づかいの改変の一つの典型が見られるだろうという予想をたて、資料を求めたところ、さいわいS氏がある人に当てて書いた昭和23～36年にわたる手紙(葉書をふくむ)59通を借りることができたので、その中の、かなづかいと漢字の字体について、13年のあとをおってみた。

S氏は昭和5年兵庫県に生まれ、昭和12年小学校に入学、18年に県立の中学校に入学、23年、旧制高校に入学したが、学制改革で24年高校閉鎖、同年大学(新制)に入学した。大学ではフランス文学を専攻したが、病気等でおくれ、32年に卒業し、ある民間放送の会社に就職した。

S氏の59通の手紙は、大学入学の少し前から就職後までにわたっているが、就職後の手紙は、印刷された年賀状のようなものが多く、現在のS氏の文字らしいようすは、あまりわからない。しかし、S氏は大学時代に文字づかいをかえており、その資料には第三層に属する人々の一つの典型が見られる。

2 S 氏 の かなづかい の 変 化

(1) いづごろ、どのような契機で変わったか

昭和23年12月から36年1月にわたる、59通の手紙のうちには、歴史的かなづかいばかりで書かれたもの(R)が23通、現代かなづかいばかりで書かれたもの(G)が6通、両方が使われたもの(RG)が24通、現代かなづかいと歴史的かなづかいで表記法の異なる語を使っていないもの(N)が6通あった。こ

こに（RG）と（N）の例をあげてみよう。

（RGの例）〔固有名詞の記号化は筆者〕お葉書が着いた時は、丁度Tへ帰っていた時でした。Pの方から、Q放送の営業の方の偉い人は、「兎に角学科試験の方に通って貰はぬと、手のほどこし様がない」とのこと。学科、実技、体と、それぞれむづかしいといふ結果になってうんざりです。A氏は、推薦状を書いてくれました。お決り文句のはめちぎり。落っこちても殺されるんじゃないから呑気にやります。Rの求人にも履書は出しておきましたので、十月廿八日の試験には、その時旅費があれば行ってみる心算なので五年振りの東京見物が出来ると楽しみにして居ります。もしそうになりましたら、Bさんとお酒がのめることになるでしょう。悪しからず。Cさんとは何とかして会ひたいと思っています。サインラ ……………
………昭和31年10月6日

（Nの例）〔寄せ書きのハガキの中で〕スッカラカンのポケットに両手を入れ、麦麩帽子をかぶり二人のあとをついて歩いています。……………昭和30年7月22日

上の（RG）には、歴史的かなづかいと現代かなづかいで表記の異なる箇所が7つあり、そのうち2箇所が歴史的かなづかい、4箇所が現代かなづかいであり、また、1箇所は最初歴史的かなづかいで書いたものを、現代かなづかいに直している。このように、両者で表記の異なるもののうち、何箇所を歴史的かなづかいで書き、何箇所を現代かなづかいで書いたかを示したのが第114表である。

第114表 S氏の手紙に表われた歴史的かなづかいと現代かなづかい（延べ回数）

年	23	24										25				
月	12	3	3	7	9	9	10	11	11	12		2	3	4	8	8
日	24	9	31	14	9	10	2	1	23	2		28	4	19	5	13
使用 回数	歴史	7	8	39	12	3	38	45	27	8		26	4	6	25	18
	現代	1	2	1	1		5	9	3				1		3	

年		26			27								28			
月		4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11	4	6	6	7
日		5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27	2	3	13	24
使用 回数	歴史	8	3	4		1	14	11	1	6	4	17	5	2	2	3
	現代	5					1	3		2	1	1				

年				30						31						
月		7	10	4	5	7	8	11	11	1	3	7	7	7	9	9
日		28	5	19	26	22	2	14	18	1	30	7	20	24	6	21
使用 回数	歴史	4	6	8	3		1	1	2	6	7	3	7	1	1	7
	現代		1							3	1		1			1

年						32				33	34		35		36
月		9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日		29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用	歴史	3	2		2			1	2						
回数	現代		5	3	20		3	1	5	1		1	1		

この表によれば、S氏のかなづかいは、31年10月6日の手紙を境にして、歴史的かなづかい主体から、現代かなづかい主体へ転換している。この転換期に書かれた10月6日の葉書に両かなづかいが混在し、しかも（さきにRGの例に示したように）歴史的かなづかいを現代かなづかいにあらためた箇所があることは注目に価する。他の手紙には、この種のなおしがない。

S氏は、32年春に卒業・就職しているが、31年秋には、就職試験を契機にかなづかいをあらためたわけである。この時期の手紙には、就職に関することと、ことばに関することがちよいちよい顔を出す。

（9月21日）………最近は、小母さん宛の便りを書くにも言葉遣ひ、假名、文法のあやまりなどないかとひやひや致します。僕も色々就職をしなればなりませんので、今日学校で求職票といふのを貰ってきました。……………

（9月29日）………今度Pの紹介でQ放送を受けることになりましたが、求人アナウンサーばかりなので、一応アナウンサーとしての試験を（又もや）受けねばなりません。標準語に関する本教へて下さい。アクセントを直してくれる人教へて下さい。……………

現代かなづかいが発表されたのは、昭和21年11月であるが、S氏がかなづかいをあらためたのは、それからちょうど10年たっているわけである。S氏は、21年には旧制中学の4年生であった。それから旧制高校と新制大学という二つの入学試験を通過しているが、その時には、かなづかいをあらためなかった。そして長い大学生活の終りに至って、就職試験を契機として、これをあらため

た。一つのケースである。おそらく、他にも同類を求められるであろう。

第114表において、昭和23～31年9月29日の8年間および、31年10月25日～35年8月8日までの4年間には、それぞれの期間中での変化の傾向が見出せないで、その期間をそれぞれひとくくりにすると、第115表のようになる。

第115表 31年10月6日の前と後のかなづかい使用回数

	9月29日以前	10月6日	10月25日以後
歴史的かなづかい	407回	2回	5回
現代かなづかい	46回	5回	36回

ある一時点を境にして、このように変わったことは、変わりかたとしては、非常に急激であったといえることができる。

(2) 何が変わりやすく、何が変わりにくかったか

歴史的かなづかいが主体であった時期の453回のうちわけは第116表の通りであった。

第116表 歴史的かなづかいを主体とした時期の453例のうちわけ

	歴 史 的	現 代
かう・さう—こう・そう（副詞）	3	11
ゐ・ゑ・を—い・え・お（「ゐる」を除く）	2	9
ち—じ（「ぢゃーじゃ」を含む）	1	8
漢字音（「やう」—「よう」を含む）	3	6
さう—そう（伝聞・様態の助動詞）	8	5
ゐる—いる（「～てゐる」—「～ている」を含む）	122	4
は・ひ・ふ・へ・ほ—わ・い・う・え・お	206	3
～ませう・～でせう—～ましよう・～でしよう	35	0
書かう・～だらうetc—書こう・～だろうetc	15	0
づ—ず	9	0
忙しう・おめでたう—忙しゅう・おめでとう	2	0
いてふ—いちょう	1	0
合 計	407	46

現代かなづかいが主体になってからの41回のうちわけは第117表のとおりで

ある。

第117表 現代かなづかいを主体とした時期の41例のうちわけ

	歴 史 的	現 代
づーず	3	0
は・ひ・ふ・へ・ほーわ・い・う・え・お	2	22
～でせう・～ませうー～でしょう・～ましょう	0	6
～さうー～そう（伝聞・様態）	0	2
いてふーいちよう	0	2
やうーよう（様）	0	1
ゐるーいる	0	1
をばさんーおばさん	0	1
～だらうー～だらう	0	1
計	5	36

第116～117表を見ると、S氏の歴史的かなづかい使用から現代かなづかい使用への過程は、語の種類または語形の種類によって異なることがわかる。そこで、各種類ごとにその細部を調べることにする。

(a) 歴史的かなづかいハ行→現代かなづかいワ行の場合

歴史的かなづかいではハ行を使い、現代かなづかいではワ行(わいうえお)を使う語が資料全体の中に、延べ236回あらわれるが、各手紙における、歴史的かなづかいと現代かなづかいで書かれた語の延べ語数と異なり語数は、第118表のとおりである。「y/x」という形で示したものは、xが延べ語数、yが異なり語数である。(以下この項の表はみなこれに従う。)

第118表 S氏の歴史的かなづかいと現代かなづかい（ハ行→ワ行）

年		23	24									25				
月		12	3	3	7	9	9	10	11	11	12	2	3	4	8	8
日		24	9	31	14	9	10	2	1	23	2	28	4	19	5	13
使用回数	歴史	2/8		11/28	4/7	1/1	5/15	4/14	4/12	2/4		11/17	2/2	3/3	10/17	3/11
	現代				1/1			1/1	1/1							
注					a			b	c							

年	26			27								28			
月	4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11	4	6	6	7
日	5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27	2	3	13	24
使用回数	歴史 3%	1/4	2%		1/4	5%	5/7	1/4	2%		4/10	1/4	1/4	1/4	2%
	現代														
注															

年				30						31					
月	7	10	4	5	7	8	11	11		1	3	7	7	7	9
日	28	5	19	26	22	2	14	18		1	30	7	20	24	6
使用回数	歴史 1/4	1/4	2%	2%				2%	1/4	1%		3/4		1/4	1%
	現代														
注															

年					32				33	34		35		36
月	9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日	29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用回数	歴史 2%	2%		1/4			1/4							
	現代	1/4	2%	1/11		2%		5%	1/4			1/4		
注				p			q							

注 a:さいわい b:強いて c:なくなっちゃいます。 p:応へれば
q:思はれ

歴史的かなづかいではハ行、現代かなづかいではワ行であるものは、S氏の場合、31年10月6日の前と後でかなりはっきりとかわっている。歴史的かなづかい時代には現代かなづかい混入率 $\frac{3}{209}$ で、2%を割り、現代かなづかい時代には歴史的かなづかいの混入率は $\frac{2}{24}$ で、10%を割っている。

この、233例のうちわけは、次の通りである。

○ハ行四段ーワ行五段動詞およびその派生語…………… 193例

言う (76例), 思う (54例), あう (会う, 合う), 味わう,
あつかう, 洗う, 祝う, 伺う, 疑う, 追う, おおい, 行き交
う, 通う, さまよう, しまう, 吸う, 損う, 気狂い, 使

う、訪う、願う、はう、はからう、払う、拾う、ふるまう、舞う、貰う、装う、[※]鎧う、(※「おおい」は「おほひ」の「ひ」に着目してここにあげた。「ほ」は別の所でとりあげる。「祝う」「装う」は漢字で書かれていたので、かなづかいの問題としては、ここ以外ではとりあげない。)

○ハ(ア) 行上一段動詞の派生語…………… 1 例

強いて

○ハ(ア) 行下一段動詞およびその派生語…………… 28 例

取敢えず、終え、教え、とりかえ、よみがえ、かけがえ、構え、考え、こたえ(答え、応え)、支え、備え、堪え、例え、見違え、伝え、捕え、迎え

○ハ(ワ) を語幹にもつ動詞…………… 5 例

現わす、相かわらず、おおい、こだわ、まわる

○さへ(さえ)…………… 3 例

○その他・あ[※]おい(葵)、さいわい、せわしい、ちいさい、とおく、…… 6 例

まえ (※「あふひ」は、問題になる箇所が2字でできているが、一回として扱った。)

歴史的かなづかい時代における現代かなづかいの3例はいずれも24年にある。従って、24年～31年にわたって混入率がふえたなどとはいえない。しかし、24年は、他の年にくらべて歴史的かなづかいの使用も極めて多いので、24年の混入率が、他の年に比して高いともいえない。

ハ行四段時代にワ行五段が混入したのは、 $\frac{1}{108}$ で、きわめて少ない。しかも、この1例は、「なくなっちゃいます」という口ことばのスタイルの表現において書かれた。このことは、文章語的な表現においては、ハ行四段への、現代かなづかいの混入がほとんどなかったということを示しているようである。このことは、下一段動詞語尾に、混入がみられなかったこととあわせて考えると、興味深いものがある。

「強いて」は上一段動詞起源であるが、副詞化しており、その点で、「その他」の項と同類のものといえるかもしれない。もし、そうとすれば、その他の項の混入率が $\frac{2}{3}$ となって、かなり高くなる。

以上のことは、かなづかいにおける文法体系のささえというものを考える上で、興味が深い。

S氏の現代かなづかい時代における当該の語は、ワ行五段が19例、ア行下一段が5例で、他のものがないので、文法体系のささえの、かなづかい切り替えへの影響は、この限りでは、なんともいえない。

(b) 歴史的かなづかいヰ・エ・ヲ→現代かなづかいイ・エ・オ

ここに該当する語140例のうちわけは、次の通りである。

ゐる(「～である」を含む)…122例	～ている……………6例
～ぐらゐ……………2例	～ぐらい(「～くらい」)…4例
	あじさい……………1例
	植える……………1例
	おばさん……………3例
	しておられる……………1例

各手紙についての新旧両かなづかいの使用状況は、第119表の通りである。

第119表 S氏の歴史的かなづかいと現代かなづかい (ヰエヲ→イエオ)

年	23	24										25				
月	12	3	3	7	9	9	10	11	11	12		2	3	4	8	8
日	24	9	31	14	9	10	2	1	23	2		28	4	19	5	13
使用回数	歴史	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{6}$	$\frac{1}{6}$	$\frac{1}{4}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{15}$	$\frac{2}{22}$	$\frac{2}{6}$	$\frac{1}{4}$		$\frac{1}{6}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{4}$	$\frac{1}{3}$
	現代			$\frac{1}{1}$			$\frac{1}{2}$		$\frac{1}{1}$						$\frac{2}{2}$	
注			a			b	p	cq							d	

年	26	27										28			
月	4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11	4	6	6	7
日	5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27	2	3	13	24
使用回数	歴史	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$			$\frac{1}{6}$		$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{1}$			$\frac{1}{1}$
	現代	$\frac{2}{2}$					$\frac{1}{1}$			$\frac{1}{1}$					
注	e						f			g					

年				30							31						
月		7	10	4	5	7	8	11	11	1	3	7	7	7	9	9	
日		28	5	19	26	22	2	14	18	1	30	7	20	24	6	21	
使用 回数	歴史	½	⅓	⅓	¼		⅓			¼		⅓	½	⅓			
	現代		¼							½							
注			h							i							

年						32				33	34		35		36
月		9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日		29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用 回数	歴史														
	現代		1/4		1/4		1/4								
注			j		k		l								

注 現代かなづかい… a 面白い^ㄅくらい。 b 啼^ㄅいています。 覚えていた。 c おば様。
d 思はれて^ㄅいる、おばさん。 e 生きて^ㄅいる。 失敗^ㄅくらい。 f あちさい。 g 植
えて。 h 一つ^ㄅくらい。 i 少し^ㄅくらい。 お^ㄅられました。 j 帰^ㄅっていた。 k 息づ
いて^ㄅいます。 l おばさん。
歴史的かなづかい… p 五重^ㄅぐらゐ。 q 重ねた^ㄅぐらゐ。特に注をつけないものは、
すべて「ある」「てゐる」を含む

(キエヤーイエオ)の場合は、(ハ行ーワ行)の場合より現代かなづかい化して
いる傾向が強かった。しかし、使用例が少ないので、S氏自身のこととしても
一般化するわけにはいかない。歴史的かなづかい時代の「いる」の、現代かなづ
かい混入率が3%なのに対して、「くらい」のそれが $\frac{1}{4}$ であることは、注目に価
する。

なお、ここにあらわれた現代かなづかいが、現代かなづかい制定後の変化な
のか、その前からの表音化の延長なのかは、この限りでは、さだかでない。

(c) 歴史的かなづかいヂ・ヅ→現代かなづかいジ・ズ

この項に該当する例は、第120表の通りである。

この項に該当する例は、少ないが、その中では、ジとズで傾向が異なってい
る。ジの場合は、「恥ぢいる」の一例を除いて全部が現代かなづかいであるのに
対して、ズの場合は、32年まで、全部歴史的かなづかいになっている。このこ

とは、(一般論としてはいえないが)「まづ」と「じゃない」については、かなりおちついた傾向とみていだろう。

第120表 S氏の歴史的かなづかいと現代かなづかい(ヂ・ツージ・ズ)

年	23	24										25				
月	12	3	3	7	9	9	10	11	11	12		2	3	4	8	8
日	24	9	31	14	9	10	2	1	23	2		28	4	19	5	13
使用回数	歴史	½				¼										
	現代						¼						¼		¼	
注	p					q	a						b		c	

年	26			27									28			
月	4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11		4	6	6	7
日	5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27		2	3	13	24
使用回数	歴史		¼				¼					¼			¼	
	現代						¼		½							
注		r					ds		e		t				u	

年	30								31							
月	7	10	4	5	7	8	11	11	1	3	7	7	7	9	9	
日	28	5	19	26	22	2	14	18	1	30	7	20	24	6	21	
使用回数	歴史	¼		½												
	現代								¼	¼						
注	v		w						f	g						

年					32				33	34		35		36
月	9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日	29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用回数	歴史			¼				¾						
	現代		¼											
注		h		x				y						

注 現代かなづかい…a・b・c・d・f・g・h ～じゃない(6例)

d あじさい e もみじ, 土いじり
 歴史的かなづかい…p 恥ぢいる, いたづらっ子 q むづむづした
 r いづれ t いづれも y もののはづみ
 s・u・v・w・x・y まづ (7例)

(d) 活用語尾の長音

ここでは、動詞の意志形・推量形（動詞の未然形に助動詞「う」がついたもの、ならびに「～だろう」「～でしょう」「～ましょう」と、形容詞の連用形音便を扱う。

第121表に示すように、S氏は、これに関しては、歴史的かなづかいの時代にも現代かなづかいの時代にも、他のかなづかいの混入がない。

第121表 S氏の歴史的かなづかいと現代かなづかい（活用語尾の長音）

年	23	24										25				
月	12	3	3	7	9	9	10	11	11	12		2	3	4	8	8
日	24	9	31	14	9	10	2	1	23	2		28	4	19	5	13
使用回数	歴史		3	2	1		6	6	5			2		1	4	4
	現代															

年	26			27									28			
月	4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11		4	6	6	7
日	5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27		2	3	13	24
使用回数	歴史			1			2	3		1	2	2		1		
	現代															

年	30								31						
月	7	10	4	5	7	8	11	11	1	3	7	7	7	9	9
日	28	5	19	26	22	2	14	18	1	30	7	20	24	6	21
使用回数	歴史		2	1			1								2
	現代														

年					32				33	34		35		36
月	9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日	29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用 回数	歴史													
	現代		1	1	4			1				1		

使用例は次の通りである。

<歴史的かなづかい>

あらう…………… 2 例

行かう…………… 4 例

帰らう…………… 1 例

書かう…………… 1 例

探さう…………… 1 例

出さう…………… 2 例

～してやらう… 1 例

～だらう………… 3 例

～でせう………… 33 例

～ませう………… 4 例

<現代かなづかい>

～だらう………… 1 例

～でしょう……… 6 例

～ましょう……… 1 例

忙しう…………… 1 例

あめでたう……… 1 例

(e) 副詞「こう」「そう」と、その派生語

ここに該当する使用例のあらわれかたは、第122表の通りである。

第122表 S氏の歴史的かなづかいと現代かなづかい(「こう」「そう」)

年	23	24									25				
月	12	3	3	7	9	9	10	11	11	12	2	3	4	8	8
日	24	9	31	14	9	10	2	1	23	2	28	4	19	5	13
使用 回数	歴史						1								
	現代	1	2			3	1	1							
注	a	b				c	dp	e							

年	26			27								28			
月	4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11	4	6	6	7
日	5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27	2	3	13	24
使用 回数	歴史											2			
	現代	1										1			
注	f											gq			

年				30						31					
月	7	10	4	5	7	8	11	11	1	3	7	7	7	9	9
日	28	5	19	26	22	2	14	18	1	30	7	20	24	6	21
使用 回数	歴史														
	現代											1			
注												h			

年					32				33	34		35		36
月	9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日	29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用 回数	歴史													
	現代		1											
注		i												

注 そう(c)。そうでせう(e)。そうになったら(i)。そういふ(g)。そうして(b 2, c 2, d)。こういって(h)。こういふ(a, f)。さうさう(q)。かう書く(p)。かうした(q)。

「こう」「そう」ともに、彼の歴史的かなづかい時代から、「現代かなづかい」がまじっている。現代かなづかい時代にはいつてからの資料が1つしかないの
で、くわしいことはわからない。

(f) 伝聞と様態の「～そう」

第123表に見られるように、伝聞の場合も様態の場合も、彼の歴史的かなづ
かい時代には、両かなづかいが混在し、現代かなづかい時代には、現代かなづ
かいで、書かれている。しかし、現代かなづかい時代の例が少ないので、結論
を出すことは危険である。

第123表 S氏の歴史的かなづかいと現代かなづかい（伝聞と様態）

年	23	24										25				
月	12	3	3	7	9	9	10	11	11	12		2	3	4	8	8
日	24	9	31	14	9	10	2	1	23	2		28	4	19	5	13
使用回数	歴史			2			1	1								
	現代							3								
注			p			q	ar									

年	26			27								28			
月	4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11	4	6	6	7
日	5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27	2	3	13	24
使用回数	歴史					1									
	現代					1									
注						bs									

年			30						31						
月	7	10	4	5	7	8	11	11	1	3	7	7	7	9	9
日	28	5	19	26	22	2	14	18	1	30	7	20	24	6	21
使用回数	歴史								1	1		1			
	現代														1
注									t	u		v			c

年					32				33	34		35		36
月	9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日	29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用回数	歴史													
	現代				1						1			
注				d							e			

注		歴史的かなづかい	現代かなづかい
歴史的代かなづかい	様態	p 悲しさう、叱られさう。 q 呑気さう。r よささう s つめたさう。t うれしさう。 u なささう。	a なさ <u>そう</u> 、細 <u>そう</u> 。 b つまり <u>そう</u> 。c うれし <u>そう</u> 。
	伝聞	v 勉強ださうで。	a いふ <u>そう</u> です。
現代代かなづかい	様態		e あり <u>そう</u> 。
	伝聞		d 積る <u>そう</u> だ。

(g) 漢字音

漢字音のかな書きの例は、第124表の通りであった。

第124表 S氏の歴史的かなづかいと現代かなづかい（漢字音）

年		23	24										25				
月		12	3	3	7	9	9	10	11	11	12	2	3	4	8	8	
日		24	9	31	14	9	10	2	1	23	2	28	4	19	5	13	
使用回数	歴史			1				1				1					
	現代							3									
注				p				aq				r					

年	26			27								28			
月	4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11	4	6	6	7
日	5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27	2	3	13	24
使用回数	歴史														
	現代	2					1								
注	b						c								

年	30								31						
月	7	10	4	5	7	8	11	11	1	3	7	7	7	9	9
日	28	5	19	26	22	2	14	18	1	30	7	20	24	6	21
使用回数	歴史														
	現代														
注															

年						32				33	34		35		36
月		9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日		29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用 回数	歴史														
	現代				1										
注					d										

注 歴史的かなづかい： p けんくわ。 q ぜうぜつ。 r どのやうな。

現代かなづかい： a とうとう，かように，さようなら。

b 言葉^{ママ}ようで，映るように。 c クチュウを察する。

d そのように。

10例のうち6例までが「よう」であり，残りの4列は，いずれも歴史的かなづかい時代にあり，両かなづかいが2例ずつある。「よう」は6例のうち5例までが歴史的かなづかい時代にあって，そのうちの1例だけが，歴史的かなづかいで書かれている。

副詞「こう」「そう」，様態・伝聞の「そう」，比況の「よう」は，それぞれの例は少ないが，どれもこれも同じような傾向を示しており，これらを一括して，次のようにいえるのではなからうか。

——これらは，彼の歴史的かなづかい時代にすでにかなり現代かなづかい化が進み，現代かなづかい時代にはいて，完全に現代かなづかい化した。

なお，漢字音かどうかわからぬものに，「いちょう」がある。これは，第118表にはいれなかったが，次のようになっていた。

24年11月1日……いてふ 31年11月8日……いちょう（2例）

(3) S氏のかなづかいの変化のまとめ

以上(1)～(2)でのべてきたことをまとめると次のようなことがいえる。

- (i) S氏は昭和31年秋の就職試験を契機として，それまでの歴史的かなづかいを主とする書き方から現代かなづかいを主とする書き方に切りかえた。
- (ii) S氏のかなづかいの切りかえは，一般とくらべてかなり徹底していると思われる。
- (iii) S氏が歴史的かなづかいを主とした時代において現代かなづかいがかなりまじっていたのは，ヂに対するジ，中に対するイ（ただし「ゐる」

を除く), 副詞「こう」「そう」, 様態・伝聞「そう」, 漢字音のかな書きなどの場合である。

(iv) S氏が現代かなづかいを主とするようになってからも歴史的かなづか
いが残ったのは、ズに対するヅ(「まづ」など)である。

(v) 活用に関係の深いもの(ハ行一ワ行, 「いる」など)は, 切り替えはス
ムースにしているが, 使用例の絶対量が多いので, 少数は, 他のかな
づかいの混入しているものが見られた。

3 S氏の漢字字体

(1) 字体はあまり変わらなかった

S氏の手紙の中にあらわれた漢字のうち, 新旧で字体の異なるものは116字であったが, そのうち, 終始旧字体であったものが72字, 終始新字体であったものが31字で, この期間に両様に使われたものは13字あった。その字は, それぞれ次の通りである。

(A) 旧字体ばかりが使われたもの

(A₁) 就職試験以後にも, その字が使われたもの……應・觀・勤・恵・
嚴・産・參・寫・從・暑・諸・緒・條・眞・莊・澤・都・内・難

(A₂) 就職試験以後には, その字が使われなかったもの……爲・隱・
營・榮・櫻・奥・假・覺・歡・謹・輕・缺・驗・權・殘・視・兒・者・
社・收・燒・狀・乘・疊・神・寢・靜・專・祖・裝・續・帶・滯・單・
團・遲・晝・轉・傳・讀・突・腦・惱・拜・賣・福・拂・辨・默・譯・
譽・齡・勞

(B) 新旧両様に使われたもの……画畫・学學・帰歸・急急・経經・県縣
・告告・証證・当當・万萬・予豫・様様・楽楽

(C) 新字体ばかりが使われたもの……惡・囧・会・扌・関・気・器・旧
・強・区・広・号・国・実・弱・囧・数・声・体・対・断・点・麦・負
・並・変・宝・満・余・両・恋

上に見られるように, S氏が, この期間に二様の字体を使った漢字はきわめて少なく, 彼のかなづかいといちじるしい対照を見せている。

二様に使った字を手紙別に見ると第125表の通りである。なお, 数字は, 手紙ごとの異なり字数を示す。

第125表 S氏の新旧字体（二様に使われたもののみ）（手紙ごとの異なり字数）

年	23	24										25				
月	12	3	3	7	9	9	10	11	11	12		2	3	4	8	8
日	24	9	31	14	9	10	2	1	23	2	28	4	19	5	13	
使用回数	旧	2	3	2	4	3	3	4	3	3	2	4	3	3	0	1
	新	1	1	2	2	1	7	3	2	1	0	1	2	2	1	4

年	26			27									28			
月	4	8	9	1	4	6	7	8	11	11	11		4	6	6	7
日	5	24	3	1	6	8	25	28	3	20	27		2	3	13	24
使用回数	旧	2	1	2	1	1	1	0	0	0	1	2	0	3	1	0
	新	2	1	0	0	2	1	1	2	3	2	1	1	2	0	1

年			30							31						
月	7	10	4	5	7	8	11	11		1	3	7	7	7	9	9
日	28	5	19	26	22	2	14	18	1	30	7	20	24	6	21	
使用回数	旧	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
	新	1	2	4	2	0	2	1	2	2	4	1	3	1	2	4

年					32				33	34		35		36
月	9	10	10	11	1	1	2	11	1	1	8	1	8	1
日	29	6	25	8	1	18	10	18	1	1	4	5	8	1
使用回数	旧	1	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	新	0	4	2	1	1	1	1	2	1	2	2	1	1

全般的に見ると次第に新字体になる傾向がある。これを13字の文字別に見ると、第126表のようになる。

この表によって、この時期にS氏の字体が変わった、もしくは変わりつつあったといえるのは、「様」「学」「楽」の三字だけである。そして、その中ではっきりと変わった時期が指摘できるのは、「様」だけで、これは、27～28年の間に、きれいに旧字体から新字体へ変わっているが、他の2字は、このように時期を明確にとらえることができない。

第126表 S氏の手紙に表われた新字体と旧字体（文字別、延べ字数）

S氏が両字体を使った文字（年ごとの延べ字数）

新／旧	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年	33年	34年	35年	36年
画／畫		4 $\frac{1}{2}$							2 $\frac{1}{2}$					
学／學		7 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$		1 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$		1 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{1}{2}$					
帰／歸		9 $\frac{1}{2}$		5 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{1}{2}$		3 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{1}{2}$					
急／急	1 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$						1 $\frac{1}{2}$					
経／經	1 $\frac{1}{2}$	2 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{1}{2}$			1 $\frac{1}{2}$								
県／縣		1 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$										
告／告						1 $\frac{1}{2}$			1 $\frac{1}{2}$					
証／證					1 $\frac{1}{2}$			1 $\frac{1}{2}$	2 $\frac{1}{2}$					
当／當		1 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{1}{2}$	2 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$		1 $\frac{1}{2}$	2 $\frac{1}{2}$					
万／萬		1 $\frac{1}{2}$							1 $\frac{1}{2}$					
予／豫		1 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$			1 $\frac{1}{2}$		2 $\frac{1}{2}$	2 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$				
様／樣		3 $\frac{1}{2}$	10 $\frac{1}{2}$	9 $\frac{1}{2}$	8 $\frac{1}{2}$	4 $\frac{1}{2}$		5 $\frac{1}{2}$	29 $\frac{1}{2}$	19 $\frac{1}{2}$	4 $\frac{1}{2}$	9 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{1}{2}$
楽／樂	1 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$		1 $\frac{1}{2}$				2 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$		2 $\frac{1}{2}$		

(2) S氏が新字体を使ったのは、どんな種類の字か

S氏の使った両字体のあり得る漢字115字を、以前から略体が存在したかどうかという観点から、次にのべる4種の資料と照らしあわせると第127表のようになる。資料(a)は、当用漢字が制定されたとき「簡易字体」が本体として採用された131字（文部省『当用漢字字体表の問題点』21ページ）、資料(b)は、S氏が小学校で習った教科書（サクラ読本）に略体の示されている25字、資料(c)は、21年に旧制高校生20名の書いた感想文集に使われた略字体のうち新字体と一致するもの141字（217ページ「付録」参照）、資料(d)は、大字典に略体などの示されているもの76字である。サクラ読本に略体の示されているものは、次の25文字である。卷五一万・蚕・虫・糸、卷六一画・体・帰・豊・円、卷七一号・礼・卷八一変・台・辺・宝・点・関、卷九一湾・処・尽・旧・塩、卷十一献、卷十一一乱、卷十二一属。略体に関しては、卷五の「編纂趣意書」に、“厳密にいへば、是等の文字は、上の「萬」「蠶」「蟲」「絲」とは別字であるが、世間では普通略字のやうにして用ひてゐるから、特に附記しておいた。”

と書かれている。なお、b欄の※印はサクラ読本に、正字として当用漢字字体ののっているもの、×印は、サクラ読本にはのつていず、それまでの読本のどれかに略字または正字として当用漢字体ののっているものである。）

第127表 S氏の使用した字体と旧略字

(Aの類)

	応観勤恵殿産参写従暑諸緒条真荘沢都内難為隠営榮椽奥仮覚欲謹輕欠									
a にある	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b にある		×	×	×	×					
c にある	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
d にある	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

	驗権残視兇者社収焼状乗疊神寝静専祖装続帶滯団遅軽転伝読突脳惱									
a にある	○	○				○		○		○
b にある		×		×						
c にある	○	○		○					○	○
d にある	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

	拝売福弘弁黙訳嘗齡勞				
a にある		○	○	○	○
b にある					
c にある	○				
d にある	○	○	○	○	

(Bの類)

	画学婦急経県告証当万予様衆				
a にある	○	○	○	○	○
b にある	○	○	×	×	○
c にある	○	○	○	○	○
d にある	○	○	○	○	○

(Cの類)

	悪聞会拡閑気器旧強区広号国実弱図数声体対断点麦負並変宝満余兩恋									
a にある	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b にある		○	※	○	※		○	○	※	○ ×
c にある	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
d にある	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(a)～(d)のうちの何種類の資料に出ている字が(A)～(C)にそれぞれ何字ずつ出ているかを調べたのが次の表である。

第128表 S氏の字体と、当用漢字制定前の略字の存在度との関係

	4種の資料 にあるもの	3種の資料 にあるもの	2種の資料 にあるもの	1種の資料 にあるもの	どの資料に もないもの	計
(A) S氏旧字体	0	6	20	24	22	72
(B) S氏両字体	1	6	2	2	2	13
(C) S氏新字体	5	16	5	4	1	31
計	6	28	27	30	25	116

上の表に見られるように当用漢字制度前から、略字として表われた度の強い字ほど、S氏に新字体を使われる度が強いといえることができる。

S氏が新字体を使った字は(B)と(C)であるが、このうち、(a)(b)(c)(d)のいずれにも属しないのは、「器」「急」「鼎」の3文字だけである。このうち「鼎」はa～cにこそ属しないが、以前から使われる略字であり、それをのぞくと2字。「器」は1字しか使われておらず、それも走り書きのような字であるので、確実に新字体を使ったというには根拠が弱い。結局、字体表が出た後にS氏がおぼえたと推測されるのは「急」の一字だけとなる。しかし、これも「鼎」ほど一般的ではないが「急」は草書体として、以前からあったことはあったので、あるいはS氏の目にふれていたかもしれない。

(A)にも(a)(c)(d)に属する文字がある程度あるが、(b)に属するものはない。このことは、小学校で習った字体というものが、かなりの重みをもってS氏の字体に影響していることを示すものと思われる。

(3) S氏の字体のまとめ

以上(1)～(2)でのべたことから、S氏の字体について、次のようなことが考え

られる。

(i) S氏の字体は、彼のかなづかいのように、変化しなかった。

(ii) S氏は、以前から新字体と同じ旧略体も使っていたし、その後も、新字体と異なる旧字体を使っていた。

(iii) S氏がこの時期に字体をかえたのは、「様」「楽」「学」などきわめて少数の文字だけである。

(iv) S氏は、小学校の教科書に出ていた略字体を中心に、新字体制定前に略字体のあったものをある程度使った。

(v) S氏は、当用漢字制定後、いろいろなきっかけで新字体化への動きを少しは示したが、意識的でなく、そのために、かなづかいのような系統的で急激な変化を示さなかったものと考えられる。

(付録) 昭和21年の旧制高校生の感想文集から

昭和21年秋、ある旧制高校2年生のT氏(昭和2年生まれ)が、ある作品を書き、20人の友人にその作品とノートをまわして、作品に対する感想をノートに書かせた。その感想文に使われた漢字のうち、新旧で字体の異なる141字の各字体について20人の使った度数を示したのが第129表である。なお、T氏は

第129表 昭和21年の旧制高校生の感想文に現れた字体 ()内は使用人数

(A) 新字体と同じ字体の使われなかったもの

	庄栄穩仮壞懷微陥祈婦器偽急拠教曉芸擊權劍頭敵呉誤酷碎産視兎社字収臭従																			
旧	2	1	2	2	2	1	1	1	2	1	1	3	1	1	1	3	1	4	1	1
(1)	(1)	(2)	(1)					(2)			(2)		(4)	(3)						
新	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	状情条譲乗真寝尽青静戦祖争総増続属単胆坦歟昼鉄都闊脳負福仏弁黙訳播来																			
旧	3	1	3	1	1	2	5	1	2	3	2	1	2	4	1	6	2	2	4	2
(2)	(6)	(2)			(9)	(1)	(1)	(4)	(1)	(3)	(2)	(1)	(4)	(2)	(5)			(1)	(1)	(2)
新	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	楽涙礼靈練				合計
旧	1	2	4	2	1
(1)	(2)	(2)			
新	0	0	0	0	0

この資料と S 氏の字体の使い方を照らしあわせると、S 氏は、字体表の影響をほとんど受けなかったといえるのではないだろうかとも考えられる。

要 約 (永野・高橋・渡辺)

われわれが対象にしたのは、長岡市民から抽出（ランダム・サンプリング）した310人をはじめとして、ごく限られた範囲の被調査者であり、調査項目として取りあげた字や語も、限定された範囲のものではあったが、得られた資料にもとづき、個別に分析考察した事項を関連づけてみると、さまざまな傾向が浮かびあがってくるのを認めることができる。以下、次の3つの観点に分け、要約的に述べてみることにする。

- (1) どういう事項が普及しやすいか。
- (2) どういう人に普及しやすいか。
- (3) どういう経路で普及しやすいか。

ここに「普及」というのは、国語施策を進めようとする立場に立って見た場合のものであって、便宜的な観点にすぎない。この観点を裏返せば、“どういう事項は（人には、経路では）普及しにくいのか”ということになる。なお、これまで「影響」または「浸透」という用語によった場合もあるが、もちろん同じことをさすと考えてよい。

I どういう事項が普及しやすいか

1 漢字制限について

漢字制限が行なわれていることは、比較的一般に知られており、当用漢字という名称も半数以上の者が知っている。制限漢字のうち使用度の高いものは使用されることが多く、この点に関しては概して非同調的であると見られる。

2 人名漢字について

学歴によって開きがあるが、人名に使える漢字が制限されていることは、比較的知られており、子どもの名づけの必要にせまられて知った人が多いと考察される。また、人名漢字の制限を「わるい」とする意見は少ないが、「よい」とする意見と「どちらともいえない・わからない」の意見はほぼ同数である。

3 音訓制限について

音訓表に載っていないものを漢字で書く傾向は強い。とくに使用度の高い漢

字や熟字訓は漢字で書かれる度合いが高い。副詞や形式名詞・補助動詞・接頭語などのような形式語はかな書きにされる度合いが相対的に高く、この点は施策の影響かと思われるが、概して音訓制限には非同調的であり、音訓表は社会の実情に対してずれのある部分を含み、したがって全面的には普及しにくいということは、否定できない。

4 字体について

戦前と戦後とで字体の規準が変わったことは、一般的な事からしては、たいていの人が知っており、母親が子どもとの食い違いで困ったことの中では、この字体の問題がいちばん多いくらいである。したがって、字体についての意識は高く、概して新字体に同調的な傾向が強い。

しかし、いわゆる新字体の中には、戦前からの略字体や筆写体の採用されたものと、戦後新しく作られたものがあるので、両者を分けて考察すると、旧略字体がよく使われるのに比べて、新体のほうは使われる度合いがきわめて低いことが認められる。つまり、概して新字体に同調的であるとはいっても、旧略字体が多く使われるためにそのような現象を示すわけで、必ずしも新字体への“切り替え”が行なわれたとのみ見るべきではない。このように旧略字体が多用されるということは、簡略俗体の使用度が比較的高いことと同性質の現象であって、字体表の制定以前から使われていた旧略字体の延長という性質がきわめて濃厚であると考察されるのである。

ところで、一方、母親の場合も、Y氏やS氏の場合も、小学校の読本の字体の影響が根強く残っていることから考えると、文字によっては、旧字体から新字体への“切り替え”も行なわれたものがあることは疑えない。後に述べるように、S氏の場合、かなづかいが一挙に旧かなから新かなに変わったのに、字体が全面的に変わらなかったのは、かなづかいが法則的であるのに対して、字体は個別的な問題だからであると思われる。字体については、旧略字体の延長として使われているものと、新字体への切り換えの行なわれたものとの両者が混じりあっているといわなければならない。

ただし、類型に応じた傾向は見られるわけで、点画の省略されたものは旧字体の使われる度合いが高く、画の併合されたもの、部分の省略されたもの、部分の簡略化されたもの、全体の簡略化されたものなどは、相対的に新字体の使

われる度合いが高い。

以上要するに、新字体への同調という現象の底に働いているものとしては、旧略字体の力がかなり強いものと判断され、新体は既成のものを変更する力がさして強くないということが注目される。換言すれば、字体を簡略にすることはよいが、新規のものや歴史の浅いものは容易に普及しにくいということである。

5 かなづかいについて

かなづかいが変わったことは、たいていの人が知っているが、現代かなづかいという名称はあまり知られておらず、新かな（づかい）の名称で比較的知られている。そして、概して新かなづかいには同調的である。また、かなづかいは法則的なものであるから、たとえばS氏のように、変えようと意識すれば、一挙に変えることができる性質のものである。

もっとも、旧かなづかいの残るものには、類型的な傾向があり、とくに「ぢ・づ」「活用語の未然形に＜う＞のついた＜せう＞＜さう＞＜らう＞」「副詞の＜さう＞」「ハ行動詞の未然形」「○ヶ月」などは、旧かなが残りやすく、「ゑ・ゑ・を」や「ハ行動詞の活用語尾（未然形以外）」などは、新かなに変わりやすい傾向がみられる。

6 送りがなについて

複合動詞の上の動詞の語尾は、動詞からの転成名詞の語尾に比べて、かなを入れることが相対的に多い。

Ⅱ どういう人に普及しやすいか

1 年齢に関して

学歴の低い場合、年齢の高い層は新字体についてあまり知らず、年齢の低い層は漢字制限についてあまり知らないといった対照がものがたるように、概して、年齢の高いほうが旧表記法への傾斜が強く、年齢の低いほうが新表記法への傾斜が強いといえることができる。

ただ、ここで注意すべきことは、母親の場合、年齢が高いほど旧表記法に傾く中で、字体だけは、高い年齢層ほど新字体を用いる傾向が強いということである。

ある。このことは、新聞への投書者が、中堅層において、年齢の高いほど旧字体を使う度合いが少ないことと軌を一にする現象であって、後述するように、子どもを通して新字体を覚えるという経路の存在することを物語るものと解釈できる。

2 長子の学年に関して

長子が小学生（または3年生以下）である母親の層について考察すると、この層の人たちは、“子どもとの食い違いで困った”という意識も強く、“新表記に慣れるように努める”という態度も強い。また、表記のちがいを子どもの教科書で知ったという者が多いなど、総じて、子どもの教育問題との関連から新表記法の問題を意識する傾向がとくに強い。

ところが、実際上は、制限漢字の使用度が低いことを別とすれば、制限音訓もより多く使うし、旧字体・旧かな・旧送りがなを用いるといったふうに、概して旧表記法への傾きが著しいのである。このように、新表記法への意識が高く、関心が強いのに、実際使用面では相対的に旧式であるというのは、子どもからの影響がまだ弱いということを意味すると考えられる。裏返せば、子どもの学年の高い母親は、子ども（の勉強につきあうこと）を通して、新表記の影響を受け、しだいに順応してゆくものと解釈できるのである。

長子が中学生である母親は、戦後の国語施策を“子どものためによいことだ”とする率が最も高い、ということも、子どもの勉強と接触する年月の長いほど、新表記に同調する傾向があることを物語るものといえよう。

3 学歴に関して

学歴の高いほど、概して、戦後の国語施策についての知識も広く、理解も深いという傾向がある。たとえば、母親についていえば、学歴が高いほど、新表記法のことを子どもの入学前から知っているし、子どもとの食い違いに困った経験も多い。そして、横書きの支持の多いことをも含めて、概して新表記法への同調の度合いが高いのである。ただし、制限漢字で使用度の高いものは、学歴の高いほど用いる傾きがある。しかし、これは、漢字をより多く知っていて、それが消えずに残っているというまでのことである。前にも述べたように、かなづかいが法則的だが、漢字は1字1字の問題であるために、そのような現象が起こるものと考えられる。

4 職業に関して

新字体や新かなづかいをより多く用いるのは、教師や事務・技術的職業に従事する層の人たちである。仕事の上で新表記法に順応する必要度のより高い職業層という理由によるものと解釈できる。当然のことながら、学生、生徒は新字体・新かなを用いる度合いが最も高い。

逆に、新字体・新かなを用いる度合いの低いのは、農家の主婦・商家の主婦・一般家庭の主婦・管理的職業層・小企業者といったところで、やはり日常の仕事が文字と必ずしも直接には結びつかない種類の人たちと見ることができる。

なお、同じ教師の中では、小・中学校の先生は高等学校の先生より、高校の先生は大学の先生よりも、新表記法に同調している傾きが強く、このことは、仕事の制約の強さを物語る事実というべきである。また、これは、同年齢の会社員と母親とを比べた場合、後者のほうが子どもと歩調を合わせる傾向が著しいことと同性質のものであると考えられ、“必要から新表記法に順応する”という事実が認められるのである。

5 男女差に関して

一般市民としては、すべての層を通じて、女のほうが施策の知識に弱い。

会社員と母親との同年齢層を比べてみると、前者のほうが、子どもの入学前から新表記法のことを知っている傾向が見られる。ただし、これには、会社員のほうが年がいったから子どもが学校に入学することとか、会社員は仕事の上で新表記法に接触するとかといった問題がからまっているというべきであろう。

これと関連することであるが、男女差で著しいのは、施策についての知識を、男子はより多く、“新聞を見て”獲得し、女子はより多く“子どもを通して”獲得するということである。もう一つ、男子（とくに高学歴・高年齢）は女子（とくに母親）に比べて、子どもに合わせようとしないう傾向が強い、ということが特徴的である。

Ⅲ どういう経路で普及しやすいか

1 学校教育を通して

低い年齢層の被調査者が新表記法を学校で教わったことは当然であるが、中

年齢層以上の成人についても、“小学校で教えられた基礎”というものが、ずっと消えずに残っているということは、施策が国民各層に浸透する経路としては、学校教育が最も強力であることを物語るものである。

一般的に言えば、小学校で習った基礎の上に、教科書以外の社会的影響が積み重ねられて、ひとりひとりの表記の習慣として身につくわけであるが、母親の場合も、Y氏の場合も、S氏の場合も、その“小学校の基礎”が、いかに根強く生きているかを、まざまざと示している。このことは、教育の重要性をあらためて認識させると同時に、国語施策と学校教育との関連の深さをものがたるものである。

2 ジャーナリズムをめぐる

一般に、国語施策や新表記のことを知ったのは、“新聞を通して”というのが圧倒的に多い。これに“雑誌や本で読んだ”などを加えると、この種の知識は、結局ジャーナリズムの力によることが非常に大きいことを認めざるをえない。

そして、週刊誌や雑誌や単行本をより多く読む層、手紙をより多く書き、辞書をより多く引く層、つまり、文字に接することのより多い人たちほど、新字体や新かなに同調的であることを考え合わせると、ジャーナリズムの持つ力が、国語施策の普及に対しては、大きな支えとなるものといえることができる。

3 仕事をめぐって

教師とか、役所の勤め人とか、編集関係文書関係の仕事をしている人とか、タイピストとか、要するに、新しい表記法によって文章を作ることが仕事の中核に関係をもっている職業の人たちが、施策に同調的な傾向を示すのは当然であるが、それと似たケースとして、S氏が就職試験を境として、ガラリと新かなづかいに切り替えたのは、興味ある事実である。

このようなきっかけで国語施策が普及するということは、個々の場合の事情の違いを別として、やはり重要な経路といえよう。

4 子どもの教育をめぐる

低い年齢層が、新表記法を学校で教わったことは当然であるが、国語施策が学校教育に取り入れられたことは、一般社会人も、学校関係の経路で施策の影響を強く受けるという結果を招いたと見られる。

たとえば、親が子どもの教科書や宿題を見て、あるいは質問されて新表記の

ことを知ったり、子どもが親の書く文字を見て食い違いを指摘したりというように、上のがわからなくても下のがわからなくても、問題を意識させることとなった。とくに、母親は、父親がより多く職場や読みものを通して知るのに比べて、より多く子ども（の勉強とのつきあい）を通して知る傾向が強いのである。そして、子どもの入学後に、はじめて表記法の違いを知った母親も、子どもが3年生になるまでにはほとんどがそのことを知るようになっている。また、母親は、PTAの集会に出る機会が少なくなく、母親どうしの知識の伝え合いも行なわれるし、PTAの研究会における講義を聞いて知識を得る機会にも恵まれる。このように、学校を通しての普及ということは、大きな力である。

5 一般社会生活において

一般社会生活において、それまでは、国語施策の事実も知らず、その結果起こった表記の変改にも関心をもちなかった人が、新表記法にいやでも直面させられるということがありうる。出生届を出すとか、登記書類を作成するとかいう場合がそれである。このような経路による浸透も少なくないと思われる。

6 読む場合と書く場合のちがい

新字体を使うか旧字体を使うかを、選択法で調査した結果と、書き取りで調べた結果とでは、62～64%の一致度を示したが、このように、読む場合と書く場合とでは異なるのが実情である。

新表記法も、読むことを通して普及しやすい場合と、書くことを通して普及しやすい場合とがあるものと考えられる。

たとえば、音訓制限については、読むのにはかな書きが読みやすいが、実際に書く時は漢字で書くくせがついてしまうことが多いようであるし、字体については、読むには旧字体でもよいが、書くのには簡略な、画数の少ないほうが好まれる傾向が少なくないようである。つまり制限音訓は読むことを通して普及し、新字体は書くことを通して普及する、ともいえるわけである。

しかしながら、このように、読むことを通して普及しやすい事項と、書くことを通して普及しやすい事項とがあるというのは、一般的傾向であって、読み書きが仕事と強く結びついている職業の場合は、第3項「仕事をめぐって」に述べたように、書くことを通して新表記法に同調することが多いであろう。

昭和41年3月©

国立国語研究所

東京都北区稲付西山町

電話東京(03)900-3111(代表)

UDC 495.6, 40=956

NDC 810.9

169

国立国語研究所刊行書

国立国語研究所年報

1～16 (昭和24年度～昭和39年度)

国立国語研究所報告

- 1 八丈島の言語調査
- 2 言語生活の実態 (秀英出版刊 ¥300.00)
—白河市および付近の農村における—
- 3 現代語の助詞・助動詞
—用法と実例—
- 4 婦人雑誌の用語
—現代語の語彙調査—
- 5 地域社会の言語生活 (秀英出版刊 ¥600.00)
—鶴岡における実態調査—
- 6 少年と新聞
—小学生・中学生の新聞への接近と理解—
- 7 入門期の言語能力
- 8 談話語の実態
- 9 読みの実験的研究
—音読にあらわれた読みあやまりの分析—
- 10 低学年の読み書き能力
- 11 敬語と敬語意識
- 12 総合雑誌の用語 (前編)
—現代語の語彙調査—
- 13 総合雑誌の用語 (後編)
—現代語の語彙調査—
- 14 中学年の読み書き能力
- 15 明治初期の新聞の用語
- 16 日本方言の記述的研究 (明治書院刊 ¥900.00)
- 17 高学年の読み書き能力
- 18 話しことばの文型 (1)
—対話資料による研究—
- 19 総合雑誌の用字
- 20 同音語の研究
- 21 現代雑誌九十種の用語用字
—総記および語彙表—
- 22 現代雑誌九十種の用語用字
—漢字表—
- 23 話しことばの文型 (2)
- 24 横組みの字形に関する研究
- 25 現代雑誌九十種の用語用字
—分析—
- 26 小学生の言語能力の発達 (明治図書刊 ¥2,100.00)
- 27 共通語化の過程
- 28 類義語の研究
- 29 戦後の国民各層の文字生活

国立国語研究所資料集

- 1 国語関係刊行書目(昭和17~24年)
- 2 語彙調査
—現代新聞用語の一例—
- 3 送り仮名法資料集
- 4 明治以降国語関係刊行書目 (秀英出版刊
¥300.00)
- 5 沖縄語辞典 (大蔵省印刷局刊
¥2,500.00)
- 6 分類語彙表 (秀英出版刊
¥900.00)

国立国語研究所論集

- 1 こ と ば の 研 究
- 2 こ と ば の 研 究 第 2 集

国 語 年 鑑

- (昭和 29 年 版) (秀英出版刊
¥450.00)
- (昭和 30 年 版) (秀英出版刊
¥600.00)
- (昭和 31 年 版) (秀英出版刊
¥450.00)
- (昭和 32 年 版) (秀英出版刊
¥480.00)
- (昭和 33 年 版) (秀英出版刊
¥480.00)
- (昭和 34 年 版) (秀英出版刊
¥500.00)
- (昭和 35 年 版) (秀英出版刊
¥550.00)
- (昭和 36 年 版) (秀英出版刊
¥800.00)
- (昭和 37 年 版) (秀英出版刊
¥500.00)
- (昭和 38 年 版) (秀英出版刊
¥950.00)
- (昭和 39 年 版) (秀英出版刊
¥980.00)
- (昭和 40 年 版) (秀英出版刊
¥1,100.00)

高 校 生 と 新 聞 国立国語研究所 共著 (秀英出版刊
日本新聞協会 ¥280.00)

青年とマスメッセージ 日本新聞協会 共著 (金沢書店刊
国立国語研究所 ¥280.00)

RESEARCH ON THE INFLUENCES
OF THE POSTWAR LANGUAGE
REFORM ON THE JAPANESE
PEOPLE'S WRITING
CONTENTS

Foreword

Outline of Research

Results of Research

1. Knowledge, Interest and Opinion of the People on the Postwar Language Reform
2. Trends of the People's Usage of the New Orthography and their Relations to Generation, Business, Educational Course and Sex
3. Variations of Character Usage of Some Persons and their Conditions

Summary

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO

1966